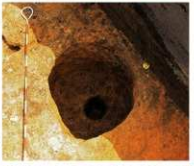
青森県埋蔵文化財調査報告書　第518集

中平遺跡（なかだいいせき）Ⅲ

－県営野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告－

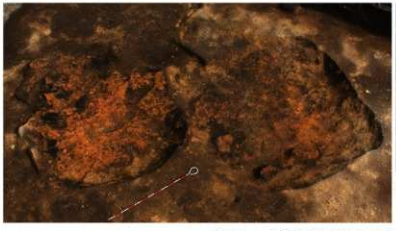
2012年3月

青森県教育委員会



農道 27 号　SI02　貯蔵粘土とロクロピット

農道 27 号　SI07　貯蔵粘土とロクロピット



農道 27 号 SK24・25（左）、SK30（上）
土師器焼成遺構

口絵 1　土師器製作遺構と焼成遺構

口絵２　粘土等材料分析試料（１）　第５章第７節参照

口絵３　粘土等材料分析試料（２）　第５章第７節参照

序

中平遺跡は、津軽平野の南東部に位置する青森市浪岡地区に所在します。当地域では東北自動車道建設を初めとする公共事業に伴う多数の遺跡の発掘調査が行われており、平安時代には史跡高屋敷館遺跡や野尻遺跡群などの大規模集落が存在していました。

青森県埋蔵文化財調査センターでは平成19年度から4年間にわたり、県営野沢地区畑地帯総合整備事業予定地内に所在する中平遺跡の発掘調査を実施してまいりました。これまで縄文時代後期の掘立柱建物跡や貯蔵穴などが環状に巡る遺構群、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などの遺構が多数発見され、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・金属製品などの遺物が大量に出土しました。平安時代の銅製鈴や馬を模した土製品は、県内ではきわめて希少な出土例として注目されています。

本報告書は平成21年度及び22年度の中平遺跡の発掘調査の成果をまとめたもので、新たに平安時代の遺構や遺物が多数見つかりました。特にロクロを設置したピットと土師器の材料となる粘土が見つかった土師器製作遺構、そしてここで作られた土器を焼いたと思われる土師器焼成遺構がセットで見つかったことは特筆すべき成果であります。これらの成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県農林水産部農村整備課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成24年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長　松田守正

例　言

1　本書は、青森県農林水産部農村整備課による県営野沢地区畑地帯総合整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成21年度および22年度に発掘調査を実施した青森市中平遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は平成21年度3,363㎡、平成22年度2,878㎡、合計6,241㎡である。

2　中平遺跡の所在地は、青森県青森市浪岡大字吉野田字平野地内、青森県遺跡番号は201334である。

3　県営野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う発掘調査報告書は既に3冊刊行されていて本書は第4冊目となる。中平遺跡の発掘調査報告書としては3冊目となる。

4　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。

5　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成21年4月23日～同年7月24日
	平成22年5月11日～同年7月23日
整理・報告書作成期間	平成22年4月1日～平成23年3月31日
	平成23年4月1日～平成24年3月31日

6　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター神　康夫文化財保護主幹・工藤　忍文化財保護主査・田中珠美文化財保護主査が担当した。遺構・遺物等の事実記載にあたっては、農道単位で掲載・記述している。工藤は第4章第2節及び第3節の遺構関係と分析と考察の遺物関係、田中は石器の実測図作成及びトレース、神はこれら以外を主として担当し、全体の編集作業は共同で行った。なお依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

7　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

幅杭設置及び水準測量業務	株式会社コンテック東日本
ラジコンヘリによる空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
土器類の写真撮影	シルバーフォト
石器類の写真撮影	フォトショップいなみ、スタジオ・エイト
火山灰の分析	弘前大学　柴　正敏
炭化材の樹種同定	株式会社　パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定	株式会社　加速器分析研究所、株式会社　パレオ・ラボ
土師器等の材料分析	株式会社　パレオ・ラボ

8　発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

9　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

10　発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。

工藤清泰、木村浩一、坂本洋一、株式会社五戸組、株式会社市川土建、有限会社石村興産

11　本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「浪岡」を複写して使用した。

12　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。

13　挿図中の方位は、すべて座標北を示している。

14　地形図及び調査区域図の縮尺は原則として1/1,000、遺構配置図は1/500としたが、長大なものなどは適宜縮尺を変更した。また各挿図ごとにスケール等を示した。

15　遺構には、その種類を示す略号と、農道ごと、検出順に通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりで、整理作業に伴って遺構名等を変更したものについては各節冒頭あるいは各遺構の事実記載文に記している。

ＳＩ－竪穴住居跡　　ＳＫ－土坑　　ＳＤ－溝跡　　ＳＢ－掘立柱建物跡　　ＳＰ－ピット

ＳＮ－焼土遺構　　ＳＶ－溝状土坑　　ＳＸ－性格不明遺構

また火山灰に関して、B-Tmは白頭山苫小牧火山灰、To-aは十和田ａ火山灰の略称として使用している。

16　遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2005年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。

17　遺構実測図の縮尺は原則として、竪穴住居跡のカマド・炉等は1/30、竪穴住居跡・土坑・溝跡・掘立柱建物跡・溝状土坑・柱穴状ピット群等は1/60に統一し、各挿図ごとにスケール等を示した。

18　遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海抜標高を付した。

19　遺構実測図に使用した主な網掛けの指示は以下のとおりで、これら以外のものは各挿図中に示した。

20　遺構内から出土した遺物等､取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を必要に応じて付した。遺物に使用した略号と、遺物出土地点に示した記号の主なものは以下のとおりで、ここにないものは各挿図中に示した。

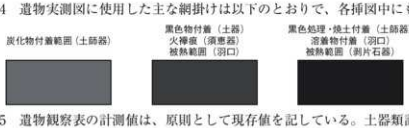
土器－Ｐ・●　　石器－Ｓ・■　　炭化材－Ｃ・(形状を実測)　　金属製品－Ｆ・▲

21　各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載している。調査区域外に延びていたり他遺構・撹乱によって壊されているものは特に（　）を付して本文やＳＰ計測表に記載している。

22　遺物実測図の個別番号には、農道ごとに1から遺物番号を付した。

23　遺物実測図の縮尺は原則として、縄文土器・土師器・礫石器・土製品・鉄製品等は1/3、剥片石器・石製品等は2/3とし、各挿図ごとにスケール等を示した。

24　遺物実測図に使用した主な網掛けは以下のとおりで、各挿図中にも示した。



25　遺物観察表の計測値は、原則として現存値を記している。土器類計測値における（　）内の数値は、口径・底径は推定値、器高は現存値である。土器類の調整技法（文様）は、判別がつくかぎり施文順で観察表に記載してある。

26　遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付し、縮尺は不同である。

目　次

口　絵
序
例　言
目　次
図版・表・写真目次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査方法等…… 3
　　１　発掘作業の方法…… 3
　　２　整理・報告書作成作業の方法 …… 6
　第３節　平成21年度調査分の経過等…… 11
　　１　発掘作業の経過…… 11
　　２　整理・報告書作成作業の経過 …… 12
　第４節　平成22年度調査分の経過等…… 14
　　１　発掘作業の経過…… 14
　　２　整理・報告書作成作業の経過 …… 16

第２章　遺跡周辺の地形と基本層序
　第１節　遺跡周辺の地形…… 18
　第２節　基本層序…… 18

第３章　平成21年度の検出遺構と出土遺物
　第１節　農道２号
　　１　検出遺構…… 20
　　（１）土坑 …… 20
　　（２）ピット …… 20
　　（３）焼土遺構 …… 22
　　２　遺構外の出土遺物…… 23
　　３　遺物観察表…… 23
　第２節　農道26号
　　１　検出遺構…… 24
　　（１）土坑 …… 24
　　（２）ピット …… 24
　　（３）焼土遺構 …… 28
　　２　遺構外の出土遺物…… 28
　　３　遺物観察表…… 28
　第３節　農道27号
　　１　検出遺構…… 29
　　（１）建物跡・竪穴住居跡…… 29
　　（２）土坑 …… 51
　　（３）溝跡 …… 65
　　（４）掘立柱建物跡・ピット…… 73
　　（５）焼土遺構 …… 73
　　２　遺構外の出土遺物…… 74
　　３　遺物観察表…… 77
　第４節　農道28・１号
　　１　検出遺構…… 80
　　（１）竪穴住居跡 …… 80
　　（２）土坑 …… 100
　　（３）溝跡 …… 111
　　（４）ピット …… 115
　　２　遺構外の出土遺物…… 116
　　３　遺物観察表…… 117

第４章　平成22年度の検出遺構と出土遺物
第１節　農道１号
1　検出遺構…… 121
（1）土坑 …… 121
（2）溝跡 …… 121
（3）ピット …… 125
（4）焼土遺構 …… 125
2　遺構外の出土遺物…… 126
3　遺物観察表…… 126
第２節　農道25号
1　検出遺構…… 127
（1）建物跡・竪穴住居跡…… 127
（2）土坑 …… 144
（3）溝跡 …… 147
（4）ピット …… 149
（5）性格不明遺構 …… 150
2　遺構外の出土遺物…… 150
3　遺物観察表…… 152
第３節　農道29号
1　検出遺構…… 155
（1）建物跡・竪穴住居跡…… 155
（2）土坑 …… 163
（3）溝跡 …… 166
（4）ピット …… 167
（5）性格不明遺構 …… 169
2　遺構外の出土遺物…… 169
3　遺物観察表…… 170
第４節　農道30号
1　検出遺構…… 173
（1）建物跡・竪穴住居跡…… 173
（2）土坑 …… 183
（3）溝跡 …… 187
（4）掘立柱建物跡・ピット…… 187
（5）焼土遺構 …… 189
（6）溝状土坑 …… 189
2　遺構外の出土遺物…… 189
3　遺物観察表…… 190

第５章　理化学的分析結果
第１節　青森市中平遺跡出土の火山灰について…… 192
第２節　中平遺跡の火山灰…… 194
第３節　中平遺跡出土炭化材の樹種同定…… 196
第４節　中平遺跡農道25号出土炭化材の樹種同定…… 205
第５節　中平遺跡における放射性炭素年代…… 210
第６節　放射性炭素年代測定…… 216
第７節　中平遺跡出土土師器等の胎土材料…… 222
第６章　分析と考察
第１節　時期別占地状況について…… 241
第２節　平安時代の建物等の変遷について…… 246
第３節　建物跡等出土遺物の時期別様相…… 265

ま　と　め…… 267

引用・参考文献 …… 268
写真図版…… 269
報告書抄録…… 364

図版目次

調査概要・基本層序
図1　中平遺跡　位置図 …… 2
図2　中平遺跡　調査路線と公共座標 …… 4
図3　中平遺跡　農道1・25～30号調査区域図 …… 5
図4　農道1・26～28号遺構配置図 …… 7
図5　農道1・29・30号遺構配置図 …… 9
図6　基本層序 …… 19
農道2号
図7　農道2号地形図・遺構配置図 …… 21
図8　農道2号検出遺構 …… 22
図9　農道2号出土遺物 …… 22
農道26号
図10　農道26号地形図 …… 25
図11　農道26号遺構配置図 …… 26
図12　農道26号検出遺構 …… 27
図13　農道26号出土遺物 …… 27
農道27号
図14　農道27号地形図 …… 30
図15　農道27号遺構配置図(1) …… 31
図16　農道27号遺構配置図(2) …… 32
図17　第1号建物跡(1) …… 33
図18　第1号建物跡(2) …… 34
図19　第1号建物跡　出土遺物(1) …… 35
図20　第1号建物跡　出土遺物(2) …… 36
図21　第2号建物跡(1) …… 39
図22　第2号建物跡(2) …… 40
図23　第2号建物跡　出土遺物 …… 40
図24　第3号竪穴住居跡と出土遺物 …… 42
図25　第4号竪穴住居跡 …… 43
図26　第4号竪穴住居跡　出土遺物 …… 44
図27　第5号竪穴住居跡 …… 46
図28　第5号竪穴住居跡　出土遺物 …… 47
図29　第6号竪穴住居跡 …… 48
図30　第6号竪穴住居跡　出土遺物 …… 49
図31　第7号竪穴住居跡と出土遺物 …… 50
図32　土坑(1) …… 60
図33　土坑(2) …… 61
図34　土坑(3) …… 62
図35　土坑(4) …… 63
図36　土坑　出土遺物(1) …… 63
図37　土坑　出土遺物(2) …… 64
図38　溝跡(1) …… 68
図39　溝跡(2) …… 69
図40　溝跡　出土遺物 …… 69
図41　第1号掘立柱建物跡 …… 70
図42　ピット …… 71
図43　焼土遺構 …… 73
図44　遺構外出土遺物(1) …… 75
図45　遺構外出土遺物(2) …… 76
農道28・1号
図46　農道28・1号地形図 …… 81
図47　農道28・1号遺構配置図 …… 82
図48　第1号竪穴住居跡 …… 83
図49　第1号竪穴住居跡　出土遺物(1) …… 85
図50　第1号竪穴住居跡　出土遺物(2)カマド …… 86
図51　第1号竪穴住居跡　出土遺物(3) …… 87
図52　第1号竪穴住居跡　出土遺物(4) …… 88
図53　第2号竪穴住居跡(1) …… 89
図54　第2号竪穴住居跡(2) …… 90
図55　第2号竪穴住居跡　出土遺物(1) …… 90
図56　第2号竪穴住居跡　出土遺物(2) …… 91
図57　第3号竪穴住居跡と出土遺物 …… 93
図58　第4号竪穴住居跡 …… 94
図59　第4号竪穴住居跡　出土遺物 …… 95
図60　第5号竪穴住居跡 …… 97
図61　第5号竪穴住居跡　出土遺物(1) …… 97
図62　第5号竪穴住居跡　出土遺物(2)床面直上主体 …… 98
図63　第5号竪穴住居跡　出土遺物(3) …… 99
図64　土坑(1) …… 105
図65　土坑(2) …… 106
図66　土坑　出土遺物(1) …… 107
図67　土坑　出土遺物(2) …… 108
図68　土坑　出土遺物(3) …… 109
図69　土坑　出土遺物(4) …… 110
図70　溝跡 …… 113
図71　溝跡・ピット　出土遺物 …… 114
図72　遺構外出土遺物 …… 116
農道1号
図73　農道1号地形図 …… 122
図74　農道1号遺構配置図 …… 123
図75　農道1号検出遺構 …… 124
図76　農道1号出土遺物 …… 126
農道25号
図77　農道25号地形図 …… 128
図78　農道25号遺構配置図 …… 129
図79　第1号竪穴住居跡と出土遺物 …… 130
図80　第2号竪穴住居跡(1) …… 132
図81　第2号竪穴住居跡(2) …… 133
図82　第2号竪穴住居跡　出土遺物 …… 134
図83　第3号竪穴住居跡 …… 136
図84　第3号竪穴住居跡　出土遺物 …… 137
図85　第4号建物跡(1) …… 138
図86　第4号建物跡　出土遺物(1) …… 139
図87　第4号建物跡　出土遺物(2) …… 140
図88　第4号建物跡(2) …… 140
図89　第5号竪穴住居跡 …… 142
図90　第5号竪穴住居跡　出土遺物(1) …… 142
図91　第5号竪穴住居跡　出土遺物(2) …… 143
図92　土坑 …… 145
図93　溝跡・性格不明遺構と遺構出土遺物 …… 148
図94　遺構外出土遺物(1) …… 151
図95　遺構外出土遺物(2) …… 152
農道29号
図96　農道29号地形図 …… 156
図97　農道29号遺構配置図 …… 157
図98　第1号竪穴住居跡 …… 159
図99　第1号竪穴住居跡　出土遺物 …… 160
図100　第2号竪穴住居跡と出土遺物 …… 161
図101　第3号建物跡 …… 162
図102　第3号建物跡　出土遺物 …… 163
図103　土坑と出土遺物 …… 165
図104　溝跡・性格不明遺構と溝跡出土遺物 …… 168
図105　遺構外出土遺物 …… 170
農道30号
図106　農道30号地形図 …… 171

図107　農道30号遺構配置図 …… 172
図108　第１号建物跡（１） …… 174
図109　第１号建物跡（２） …… 175
図110　第１号建物跡　出土遺物 …… 175
図111　第２号竪穴住居跡と出土遺物 …… 177
図112　第３・第５号竪穴住居跡・第２号溝跡 …… 179
図113　第３号竪穴住居跡カマドと出土遺物 …… 180
図114　第２号溝跡　出土遺物 …… 181
図115　第４号竪穴住居跡と出土遺物 …… 182
図116　土坑・・ …… 185
図117　土坑　出土遺物 …… 186
図118　溝跡・焼土遺構・溝状土坑と出土遺物・・・・・ 188
図119　遺構外出土遺物 …… 189
理化学的分析結果
図120　中平遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（１） 202
図121　中平遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（２） 203
図122　中平遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（３） 204
図123　中平遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（１） 208
図124　中平遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（２） 209
図125　暦年較正年代グラフ …… 214
図126　年代測定をおこなった炭化材試料 …… 220
図127　暦年較正結果 …… 221
図128　中平遺跡とその周辺の地質図 …… 233
図129　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（１） 234
図130　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（２） 235
図131　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（３） 236
図132　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（４） 237
図133　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（５） 238
図134　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（６） 239
図135　分析試料の外観写真、断面写真の実体顕微鏡写真、偏光顕微鏡写真（７） 240
分析と考察
図136　縄文時代の遺物散布範囲想定図（１） …… 242
図137　縄文時代の遺物散布範囲想定図（２） …… 242
図138　平安時代の遺構占地状況図 …… 244
図139　平安時代の遺構占地状況横断図 …… 245
図140　柱穴配置模式図 …… 248
図141　火山灰薄層状況からみた竪穴住居等集成図（１）灰１期・灰２期 249
図142　火山灰薄層状況からみた竪穴住居等集成図（２）灰３期 …… 250
図143　火山灰薄層状況からみた竪穴住居等集成図（３）灰４期 …… 251
図144　竪穴住居等群別集成図（１）深A群 …… 256
図145　竪穴住居等群別集成図（２）深A群 …… 257
図146　竪穴住居等群別集成図（３）深B群 …… 258
図147　竪穴住居等群別集成図（４）深B群 …… 259
図148　竪穴住居等群別集成図（５）深B群 …… 260
図149　竪穴住居等群別集成図（６）
やや深A群・やや深B群 …… 261
図150　竪穴住居等群別集成図（７）やや深B群 …… 262
図151　竪穴住居等群別集成図（８）浅A群・浅B群 … 263

表目次

調査概要・基本層序
表１　中平遺跡と周辺の遺跡一覧 …… １
表２　主要点の国土座標値及び標高値一覧 …… ３
農道２号
表３　農道２号SP計測表 …… 22
表４　農道２号出土土器観察表 …… 23
表５　農道２号出土石器観察表 …… 23
農道26号
表６　農道26号SP計測表 …… 24
表７　農道26号出土土器観察表 …… 28
表８　農道26号出土石器観察表 …… 28
農道27号
表９　農道27号SP計測表 …… 72
表10　農道27号出土土器観察表 …… 77
表11　農道27号出土石器・土製品・金属製品観察表 …79
農道28・１号
表12　農道28号SP計測表 …… 115
表13　農道28号出土土器観察表 …… 117
表14　農道28号出土石器・石製品・土製品・金属製品
観察表 …… 120
農道１号
表15　農道１号SP計測表 …… 125
表16　農道１号出土土器観察表 …… 126
表17　農道１号出土石器観察表 …… 126
農道25号
表18　農道25号SP計測表 …… 149
表19　農道25号出土土器観察表 …… 152
表20　農道25号出土石器・金属製品観察表 …… 154
農道29号
表21　農道29号SP計測表 …… 169
表22　農道29号出土土器観察表 …… 170
表23　農道29号出土石器観察表 …… 170
農道30号
表24　農道30号SP計測表 …… 187
表25　農道30号出土土器観察表 …… 190
表26　農道30号出土石器・金属製品観察表 …… 191
理化学的分析結果
表27　中平遺跡出土の火山灰試料 …… 193
表28　中平遺跡の火山灰及び土壌 …… 195
表29　中平遺跡出土炭化材の樹種同定結果 …… 196
表30　各住居跡出土炭化材の樹種と木取り …… 199
表31　中平遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧 … 200
表32　中平遺跡農道25号出土炭化材の樹種同定結果 205
表33　中平遺跡農道25号出土炭化材の樹種同定結果一覧 207
表34　測定試料 …… 212
表35　放射性炭素年代測定結果 …… 213
表36　付表 …… 215
表37　測定試料および処理 …… 217
表38　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 218
表39　材料を検討した遺物の特徴 …… 223
表40　各試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載 224
表41　粘土・土師器・土製品の粘土中の粘土および砂粒の特徴一覧表 229
表42　岩石片の起源と組み合わせ …… 230
表43　種類別の粘土および混和材等の特徴 …… 231
分析と考察
表44　中平遺跡　検出遺構数及び出土遺物量　一覧表 241
表45　火山灰との前後関係がわかる建物・竪穴住居一覧表 248
表46　竪穴住居の群別属性表 …… 252
表47　火山灰との前後関係がわかる建物・竪穴住居の時期区分 252
表48　中平遺跡で検出されたすべての建物・竪穴住居の時期分類 254
表49　火山灰との前後関係が不明な建物・竪穴住居一覧表 … 255

写真図版目次

口絵1　土師器製作道構と焼成道構
口絵2　粘土等材料分析試料(1)
口絵3　粘土等材料分析試料(2)
(扉写真1)平成21年度調査…… 269
写真2　平成21年度調査路線(1)　空中写真 …… 270
写真3　平成21年度調査路線(2)　空中写真・基本層序 271
写真4　農道2号(1)　空中写真・調査区完掘 …… 272
写真5　農道2号(2)　SK・SN・SP・遺物 …… 273
写真6　農道26号(1)　空中写真・調査区完掘 …… 274
写真7　農道26号(2)　SK・SN・遺物 …… 275
写真8　農道27号(1)　空中写真 …… 276
写真9　農道27号(2)　SI01 …… 277
写真10　農道27号(3)　SI02 …… 278
写真11　農道27号(4)　SI02 …… 279
写真12　農道27号(5)　SI03 …… 280
写真13　農道27号(6)　SI04 …… 281
写真14　農道27号(7)　SI05 …… 282
写真15　農道27号(8)　SI05 …… 283
写真16　農道27号(9)　SI06 …… 284
写真17　農道27号(10)　SI07 …… 285
写真18　農道27号(11)　SK …… 286
写真19　農道27号(12)　SK …… 287
写真20　農道27号(13)　SK …… 288
写真21　農道27号(14)　SK …… 289
写真22　農道27号(15)　SK …… 290
写真23　農道27号(16)　SK …… 291
写真24　農道27号(17)　SK …… 292
写真25　農道27号(18)　SK …… 293
写真26　農道27号(19)　SK・SP …… 294
写真27　農道27号(20)　SD …… 295
写真28　農道27号(21)　SD …… 296
写真29　農道27号(22)　SD・SP …… 297
写真30　農道27号(23)　調査区完掘 …… 298
写真31　農道27号(24)　調査区完掘 …… 299
写真32　農道27号(25)　調査区完掘 …… 300
写真33　農道27号(26)　調査区完掘 …… 301
写真34　農道27号(27)　遺物 …… 302
写真35　農道27号(28)　遺物 …… 303
写真36　農道27号(29)　遺物 …… 304
写真37　農道28号(1)　空中写真 …… 305
写真38　農道28号(2)　SI01 …… 306
写真39　農道28号(3)　SI01 …… 307
写真40　農道28号(4)　SI02 …… 308
写真41　農道28号(5)　SI02 …… 309
写真42　農道28号(6)　SI03 …… 310
写真43　農道28号(7)　SI04 …… 311
写真44　農道28号(8)　SI05-02 …… 312
写真45　農道28号(9)　SK・SD04 …… 313
写真46　農道28号(10)　SK …… 314
写真47　農道28号(11)　SK …… 315
写真48　農道28号(12)　SK …… 316
写真49　農道28号(13)　SK …… 317
写真50　農道28号(14)　SD …… 318
写真51　農道28号(15)　調査区完掘 …… 319
写真52　農道28号(16)　調査区完掘 …… 320
写真53　農道28号(17)　遺物 …… 321
写真54　農道28号(18)　遺物 …… 322
写真55　農道28号(19)　遺物 …… 323
写真56　農道28号(20)　遺物 …… 324
写真57　農道28号(21)　遺物 …… 325
写真58　農道1号　調査区完掘 …… 326
(扉写真59)平成22年度調査…… 327
写真60　平成22年度調査路線　空中写真・基本層序 …… 328
写真61　農道1号(1)　空中写真・調査区完掘 …… 329
写真62　農道1号(2)　SK・SD・SN …… 330
写真63　農道1号(3)　SN・SK・遺物 …… 331
写真64　農道25号(1)　空中写真 …… 332
写真65　農道25号(2)　SI01 …… 333
写真66　農道25号(3)　SI01-02 …… 334
写真67　農道25号(4)　SI02 …… 335
写真68　農道25号(5)　SI03 …… 336
写真69　農道25号(6)　SI04 …… 337
写真70　農道25号(7)　SI05 …… 338
写真71　農道25号(8)　SI05 …… 339
写真72　農道25号(9)　SI05・SK …… 340
写真73　農道25号(10)　SK …… 341
写真74　農道25号(11)　SK・SD・SX …… 342
写真75　農道25号(12)　調査区完掘・説明会・遺物 …… 343
写真76　農道25号(13)　遺物 …… 344
写真77　農道25号(14)　遺物 …… 345
写真78　農道29号(1)　空中写真 …… 346
写真79　農道29号(2)　SI01 …… 347
写真80　農道29号(3)　SI02・03・SK・SD …… 348
写真81　農道29号(4)　SI03・SK …… 349
写真82　農道29号(5)　SK・SX・調査区完掘 …… 350
写真83　農道29号(6)　遺物 …… 351
写真84　農道30号(1)　空中写真 …… 352
写真85　農道30号(2)　SI01 …… 353
写真86　農道30号(3)　SI01-02 …… 354
写真87　農道30号(4)　SI03 …… 355
写真88　農道30号(5)　SI03-04 …… 356
写真89　農道30号(6)　SI05・SD02 …… 357
写真90　農道30号(7)　SK …… 358
写真91　農道30号(8)　SK …… 359
写真92　農道30号(9)　SD・SN・SV …… 360
写真93　農道30号(10)　調査区完掘・遺物 …… 361
写真94　農道30号(11)　遺物 …… 362

第1章　調査の概要

第1節　調査に至る経過

平成15年8月、青森県農林水産部農村整備課が計画していた浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業（農道改良事業）予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、当該事業を担当する中南地方農林水産事務所水利防災課（現・中南地域県民局地域農林水産部水利防災課）と青森県教育庁文化財保護課が協議を行った。当該事業予定地内には周知の寺屋敷平遺跡と中平遺跡が所在するため、農道の基本設計完了後、平成16年10月に水利防災課と文化財保護課が現地調査（分布調査）を行った上で再度協議し、翌平成17年6月には文化財保護課が寺屋敷平遺跡の確認調査を実施した。現地調査と確認調査の結果を受けて、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが担当して寺屋敷平遺跡の本発掘調査と中平遺跡の確認調査を実施することになった。中平遺跡の確認調査は平成18年4～5月に行われ、本発掘調査の範囲が確定した。水利防災課と文化財保護課の打合せで、中平遺跡の本発掘調査は当初平成19・20年度の2ヶ年で実施する計画であったが、その後事業者側の要請で平成19～21年度の3ヶ年での実施計画に変更され、さらに平成22年度まで調査期間を繰り延べして4ヶ年での実施計画に再変更された。各年度の発掘調査区域は以下のとおりとなった。

平成19年度の発掘調査では、農道6・7号の全区域と農道9～11号の幹線道路（市道甲浜街道線）より北西側の区域を調査対象区とした。平成20年度の発掘調査では、農道1号の南西半区域、農道2号の東側大部分、農道8号の全区域、農道9～11号の幹線道路（市道甲浜街道線）より南東側の区域を調査対象区とした。平成21年度の発掘調査では、農道1号の一部分、農道2号の西端部分、農道26～28号の全区域を調査対象区とした。平成22年度の発掘調査では、農道1号東側区域、農道25・29・30号の全区域を調査対象区とした。なお農道25号では北西部分の工事設計が変更されたことから、その部分については「工事立会」で対応することとした。

中平遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知書は、平成15年6月に中南地方農林水産事務所長名で提出され、同年8月、青森県教育委員会教育長から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成のための発掘調査の実施が指示されている。また、平成17年4月1日の青森市と浪岡町の合併に伴って、事業名が「県営野沢地区畑地帯総合整備事業」に変更され、東地方農林水産事務所水利防災課（現・東青地域県民局地域農林水産部水利防災課）がこの事業を所管している。

表1　中平遺跡と周辺の遺跡一覧

市	遺跡番号	遺跡名	時代	種別
青森市	201331	下下平遺跡	縄文(後)、平安	散布地
	201332	狼(1)遺跡	平安	散布地
	201333	狼(2)遺跡	平安	散布地
	201334	**中平遺跡**	**縄文(後)、平安**	**散布地**
	201335	浪岡野沢遺跡	縄文(前)	散布地
	201336	横沢館遺跡	平安	散布地
	201337	永原遺跡	縄文(前・後)	散布地
	201338	上野遺跡	縄文(中・後)、平安、中世、近世	散布地、集落跡
	201339	神明田遺跡	縄文(前・晩)、平安	散布地、集落跡
	201340	山神沼遺跡	縄文(晩)	散布地
	201341	兵部館遺跡	縄文(中・後・晩)、弥生、平安、中世	散布地、墳墓
	201342	大林遺跡	縄文、平安	散布地
	201378	銀館遺跡	中世	城館跡
	201385	杉田遺跡	平安	散布地
	201386	寺屋敷平遺跡	平安	散布地
	201387	神沢上野遺跡	縄文、平安	散布地
	201388	郷山前村元遺跡	平安	散布地
	201389	下石川平野遺跡	縄文(中)、平安	散布地
	201411	蔵前田遺跡	平安	散布地
	201412	神沢村元遺跡	縄文、平安	散布地
	201414	岡田遺跡	平安	散布地
	201423	吉野田平野遺跡	平安	散布地
五所川原市	205008	川崎遺跡	縄文(晩)、平安、近世	散布地
	205009	桜ヶ神(1)遺跡	縄文(草・前・中・後・晩)、弥生、平安、近世	散布地、祭祀遺跡
	205010	持子沢館	縄文(後)、平安、中世	散布地、城館跡
	205043	貴月館遺跡	平安	散布地
	205059	桜ヶ神(2)遺跡	縄文、弥生、平安	散布地
	205060	桜ヶ神(3)遺跡	縄文、平安	散布地
	205062	隠川(2)遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、平安、近世	散布地
	205063	隠川(3)遺跡	縄文(早・中・後・晩)、弥生、平安、近世	散布地
	205064	隠川(4)遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、平安、近世	散布地
	205065	隠川(5)遺跡	平安	散布地
	205066	隠川(6)遺跡	縄文、平安	散布地
	205067	隠川(7)遺跡	平安、近世	散布地
	205072	隠川(12)遺跡	縄文(前・中・後・晩)、弥生、平安、近世	集落跡
	205101	広野遺跡	平安	散布地、祭祀遺跡

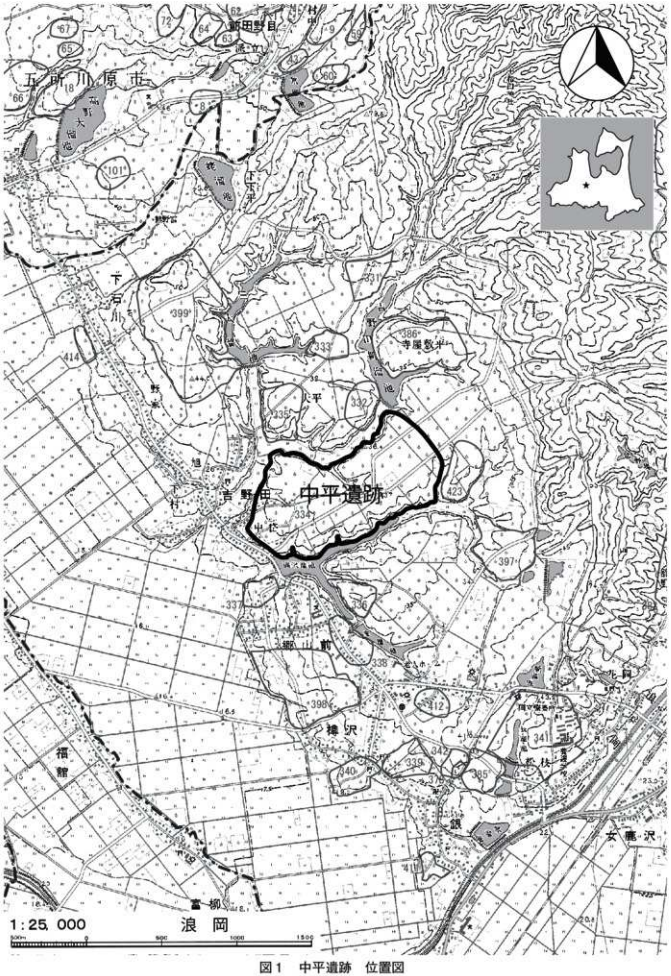


図1　中平遺跡　位置図

第２節　調査方法等

１　発掘作業の方法

平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した確認調査により、縄文時代・古代の遺物と遺構（竪穴住居跡等）が確認されたため、縄文時代・古代の遺構調査に重点をおいて、各集落の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕各路線の測量原点及びレベル原点には工事用の既存成果を利用し、各調査対象区域内に標準の国土座標値と標高値を備えた工事用幅杭や任意の基準杭を設置し、これらを実測基準点として使用した。平成21年度調査での幅杭及び基準杭等設置にあたっては、農道26号は農道工事受注業者に依頼し、農道１・２・27・28号は測量業者株式会社コンテック東日本に業務委託した。平成22年度調査では、農道１号は既設の工事用杭を利用したが、農道29・30号は農道工事受注業者に、農道25号は測量業者株式会社コンテック東日本に業務委託して幅杭及び基準杭等の設置を行った。主な基準点の国土座標値（世界測地系）及び標高値は表２に、各農道と公共座標軸の位置関係、各農道の基準主要点については各農道遺構配置図にそれぞれ示してある。また、必要に応じこれら実測基準点を与点として調査路線周辺に基準杭・ベンチマークを増設して使用した。

遺構・基本土層の精査や遺構外出土遺物の取り上げにあたっては、各農道の中心線を基準に起点から５メートルごとで区切ってグリッドとし、平面的出土位置を記録して取り上げた。例えば農道１号の場合、起点（№０）から５ｍまでは「１－１グリッド」、５～10ｍまでは「１－２グリッド」…、100～105ｍまでは「１－21グリッド」…、農道28号の場合、起点（№０）から５ｍまでは「28－１グリッド」、５～10ｍまでは「28－２グリッド」…、100～105ｍまでは「28－21グリッド」…、というように呼称した。ただし農道26号の流末水路部分及び農道27号の第３号取り付け道路部分では、若干異なった名称を付している。農道26号流末水路部分には工事用センター杭が№０から20ｍ間隔で新たに設置されている。そこで基本的には５ｍピッチでグリッドを設置することには変わりないが、流末水路起点の№０を26－101グリッドとし、20ｍ先にあるセンター杭№１は26－111グリッド、さらに20ｍ先にあるセンター杭№２を26－121グリッド、というようにセ

表２　主要点の国土座標値及び標高値一覧

農道	点名	国土座標値（世界測地系・JGD2000） X	国土座標値（世界測地系・JGD2000） Y	標高値（m）
1号	No1	80313.566	-23340.059	-
	No3+395	80234.914	-23443.574	-
	No3+21.70	80224.164	-23457.684	-
	RA0+28	80329.650	-23324.614	35.909
2号	No7	80325.792	-23786.342	-
	No7+46.2	80355.955	-23821.273	-
	R7+40.430	80355.089	-23814.248	36.493
25号	No1+15.5	80096.102	-23725.272	-
	No2	80066.113	-23708.217	-
	No3	80022.400	-23683.945	-
	Y05	80015.933	-23682.871	31.207
26号	BNo0	80201.311	-23670.234	-
	BNo1	80157.287	-23646.530	-
	流末No1	80103.680	-23616.224	-
	BR.7	80125.807	-23632.646	34.997
27号	No0	80249.904	-23586.416	-
	No2	80163.116	-23536.885	-
	No4	80076.427	-23487.364	-
	取付No0	80101.860	-23502.349	-
	取付No1	80077.223	-23545.858	-
	K286	80101.591	-23507.062	34.330
28号	No0	80297.913	-23497.529	-
	No2	80210.356	-23449.230	-
	No4	80123.941	-23398.907	-
	X.5	80160.193	-23423.953	34.887
29号	No0	80259.266	-23407.046	-
	No1	80223.271	-23372.342	-
	No1+25	80205.273	-23354.911	-
	No.1R	80220.980	-23374.718	35.772
30号	No0	80327.588	-23316.689	-
	No1	80291.428	-23282.157	-
	No2	80255.269	-23247.625	-
	No.1＋14.2R1	80278.811	-23274.808	35.650

※各点の位置は各農道遺構配置図等に示している。

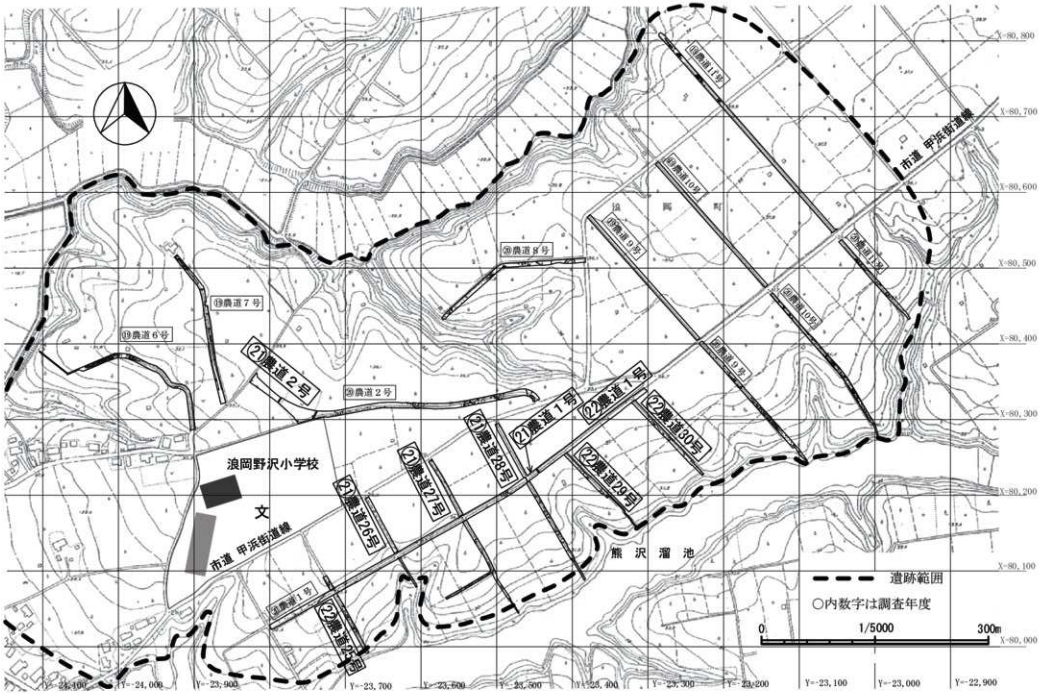


図2　中平遺跡　調査路線と公共座標

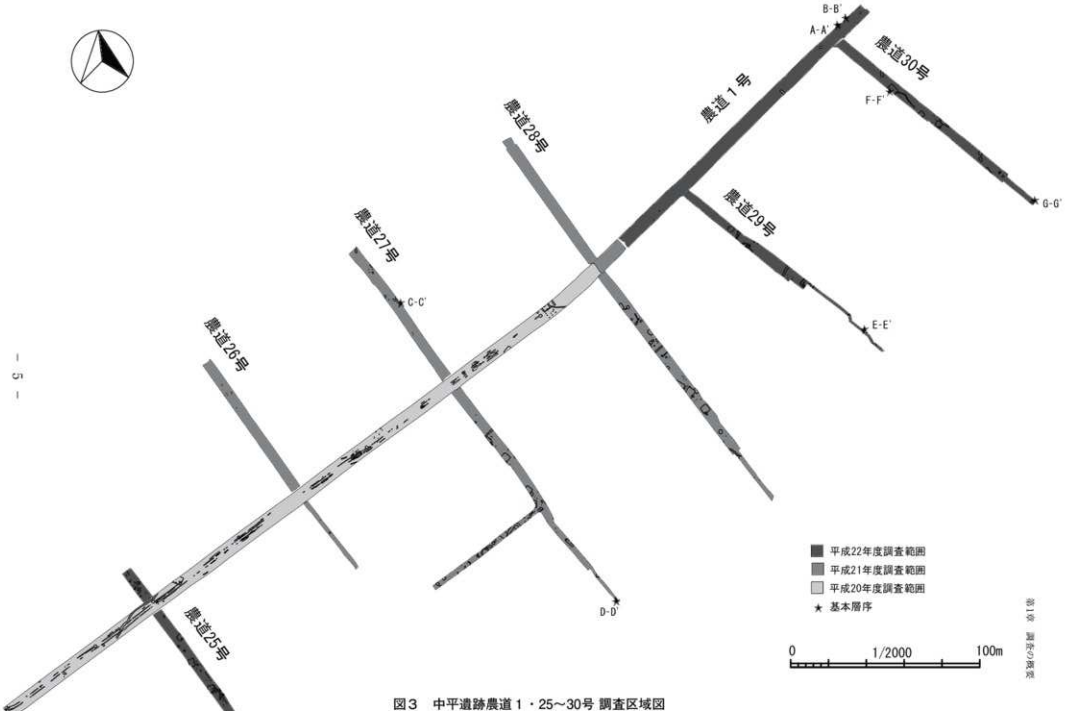


図3　中平遺跡農道1・25～30号 調査区域図

ンター杭を基準とした5進法を採用している。農道27号第3号取り付け道路部分は、工事用センター杭がNo.0から50m間隔で新たに設置されている。そこで、第3号取り付け道路部分起点のNo.0を27－101グリッドとし、そこから5mピッチで27－102グリッド、27－103グリッド…、というように呼称した。なお、グリッドの設置は各農道の遺構配置図に赤字で示している。

〔基本土層〕遺跡の基本土層については表土から順にローマ数字を付けて呼称し、細分が必要な場合は小文字のアルファベットを付した。

〔表土等の調査〕平成18年度の確認調査によって古代及び縄文時代の遺構・遺物が存在することは把握していた。しかし表土から古代の遺構確認面までは畑地造成や砂利道として攪乱されていることも分かっていたので、重機を使用して掘削の省力化を図り、古代の遺構検出・調査、縄文時代の遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることとした。表土から遺構確認面までの土層から出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に（株）CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉・カマド等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物は遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、床面（底面）や炉・カマドの出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

〔遺物包含層の調査〕上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションや簡易遣り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップ図や形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

〔写真撮影〕原則として35㎜モノクローム、35㎜カラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。デジタルカメラは、平成21年度調査では1,220万画素のもの、平成22年度調査では1,790万画素のものを使用した。また、業者に委託してラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

2　整理・報告書作成作業の方法

平成21年度調査の結果、古代の竪穴住居跡13軒を中心に、土坑53基（縄文時代を含む）、溝跡16条、掘立柱建物跡4棟、ピット71基、焼土遺構3基が検出され、縄文時代・古代の土器類19箱、石器類6箱、鉄製品類1箱の合計段ボール箱26箱分が出土した。

平成22年度調査の結果、古代の竪穴住居跡14軒を中心に、土坑24基（縄文時代を含む）、溝跡8条、掘立柱建物跡3棟、ピット47基、焼土遺構1基、溝状土坑1基、性格不明遺構2基が検出され、縄文時代・古代の土器類9箱、石器類1箱、合計段ボール箱10箱分が出土した。

これらの遺構・遺物をもとに、主に古代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじ

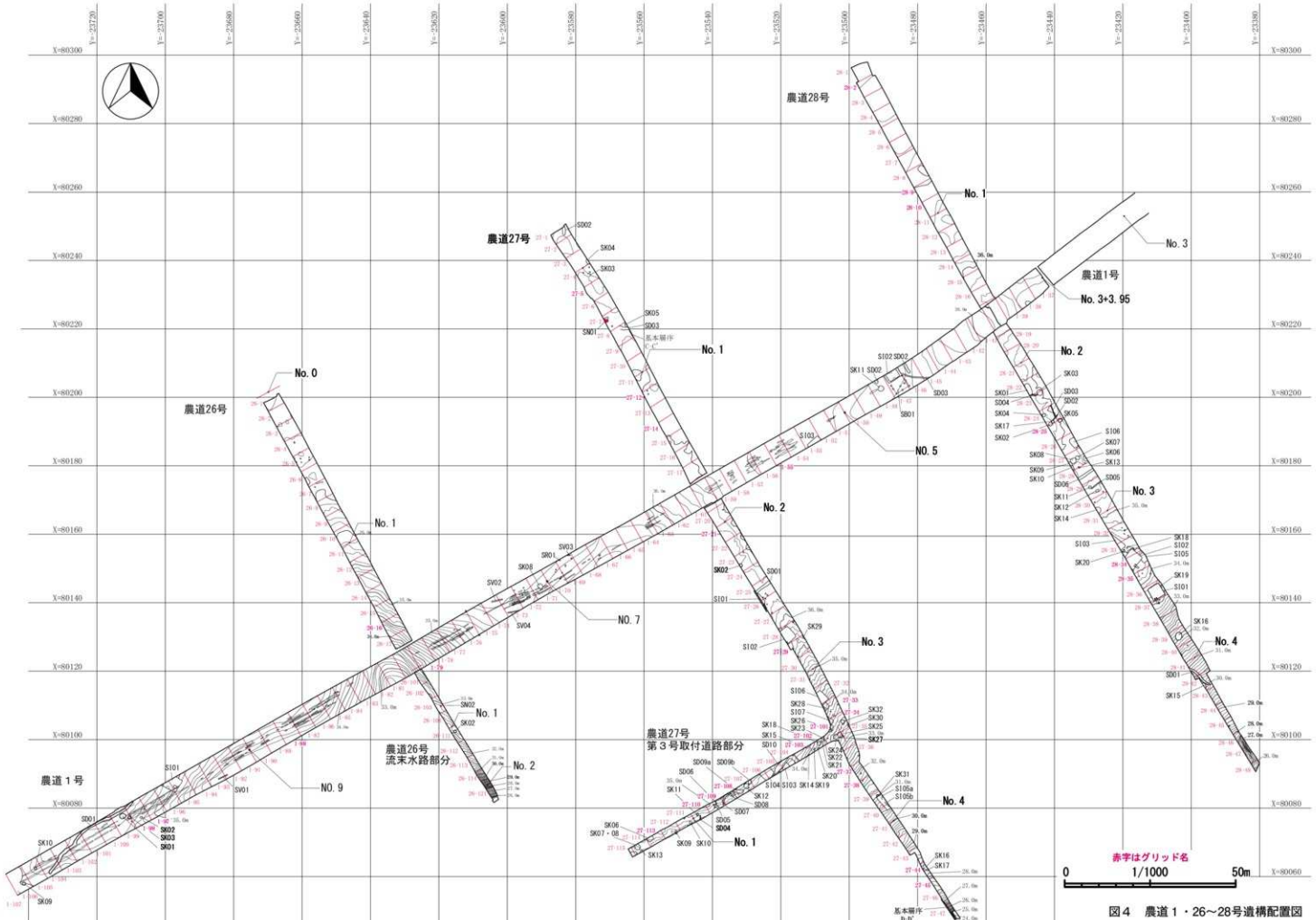


図４　農道１・26～28号道構配置図

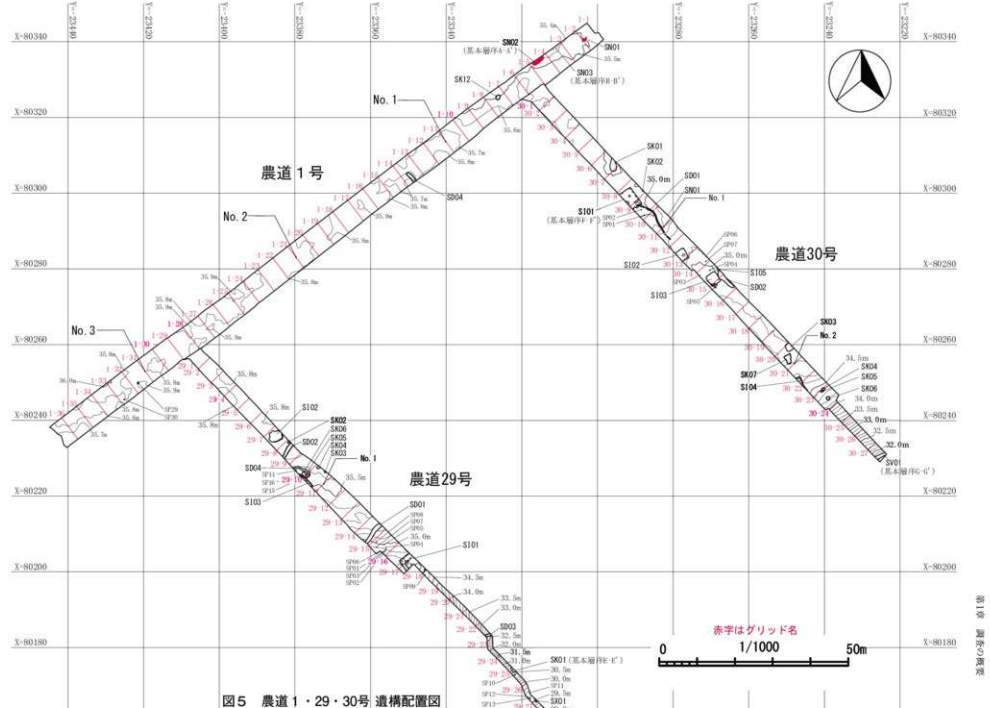


図５　農道１・29・30号 遺構配置図

めとする各遺構の構築時期と集落の変遷等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉・カマド等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕35㎜モノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構ごとの検出・精査状況等に整理して各年度及び各農道ごとにスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35㎜カラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に接合し、復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。特に、縄文土器の復元個体や拓本では表現しきれない隆帯・突起等の凹凸のある遺物については、実測図を作成するように心掛けた。また、種類ごとに遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔理化学的分析〕出土火山灰の噴出源を特定するための火山灰分析、炭化材等の年代を特定するための放射性年代測定、竪穴住居跡の建築材等を特定するための炭化材の樹種同定、土器類の胎土・カマド構築材・本遺跡出土粘土等の異同を分析する材料分析については、研究機関・業者等に委託して行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ロットリングペンによる手作業と（株）CUBIC製「トレースくん」（遺物実測支援システム）を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、紙図版による手作業とパソコンによるデジタルデータ加工作業を併用した。遺構内出土遺物のうち、床面（底面）出土遺物や竪穴住居跡の炉・カマド出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕遺構ごとに種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕遺物を時代・時期・種類ごとに整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代と古代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第３節　平成21年度調査分の経過等

１　発掘作業の経過

平成21年度の中平遺跡発掘調査は、調査委託者の要望により農道２・26号をまずは調査対象とし、調査の進捗状況に応じて順次調査区域を追加していくこととなった。その結果４月23日から７月24日までの発掘作業期間で、さらに農道27・28号と農道１号の一部の調査も実施した。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	新岡　嗣浩（現、青森県総合社会教育センター所長）
次　長	工藤　　大（平成22年３月退職）
総務ＧＭ	木村　繁博
調査第二ＧＭ	畠山　　昇（平成23年３月退職）
文化財保護主幹	神　　康夫（発掘調査担当者）
文化財保護主査	田中　珠美（発掘調査担当者）
調査補助員	梅田　裕哉　　西田　　愛
	三宅　奈央子　　佐々木　隆英

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越　潔	前国立大学法人弘前大学名誉教授・故人（考古学）
調査員	葛西　勵	前青森短期大学教授（考古学）
	山口　義伸	青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成２１年度〕

４月上旬　青森県東青地域県民局地域農林水産部（調査委託者）、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。

４月中旬　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

４月21日　昨年度までの調査結果を踏まえ発掘作業員による遺構確認作業がスムーズに行えるよう、最初に着手する農道２号と農道27号で重機を使用して表土（農道に敷設されている砕石）の掘削及び除去作業を開始した。表土（砕石）の掘削・除去にあたっては、農作業用車両が通行出来る幅員・高低差等を確保した迂回路を敷鉄板で設置した後での作業となった。

４月23日　発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員２名、補助員３名（５月に１名増員）、発掘作業員51名の規模で発掘調査を開始した。環境整備後、農道２号の南東端部から発掘作業員による遺構確認作業に着手した。測量基準点・水準点は工事用のものを使用し、必要に応じて調査区周辺に増設した。

４月下旬　農道２号と併行して、農道１号より北西側の農道27号西半分の遺構確認と精査をすすめる。これ以後は、調査が終了し次第埋め戻す、通路確保のために敷鉄板を移設、重機で砕石等の表土除去作業、人力による遺構の確認・精査、という手順を繰り返すこととなる。

5月中旬　農道2号の調査が5月15日に終了したため、作業員は農道27号に投入し、農道1号より北西側の東半分の調査に入る。さらに次の調査路線となった農道26号の表土（農道に敷設されている砕石）を重機で掘削・除去するなど調査準備を進める。

5月下旬　農道26号にも作業員を投入し、北西側より遺構確認作業を行うが、農道1号付近では沢頭になることから黒色土の堆積が厚くなり、進捗が鈍くなる。農道1号より南側の農道27号の流末水路部分及び南西方向に長く延びる取り付け道路部分の調査準備も開始した。

6月上旬　農道27号北西側の調査を終えたことから、農道27号南東側の遺構確認作業に着手する。併せて農道26号の流末水路部分の調査準備作業を始める。

6月中旬　遺構確認作業を進めていた農道27号からは、竪穴住居跡をはじめ次々と遺構が検出され始める。農道26号では流末水路部分も含めて遺構が少なかったため6月19日に調査を終え、農道1号及び農道28号の調査準備を開始する。

6月下旬　農道1号及び農道28号の北西側では遺構・遺物がほとんどなかったことから6月30日に調査を終える。農道28号南東側の調査を開始すると共に、農道27号の遺構精査を進める。

7月上旬　農道28号南東側でも遺構が次々検出される。

7月中旬　農道27号では遺構精査終了区域に砕石を敷き均して農作業用車両の通路とし、未調査区域の調査を行う。そこでは土坑など若干量の遺構が検出されたにとどまったため、7月15日に調査を終了することができた。農道28号は遺構の全数をほぼ把握し、遺構精査に集中することとなる。

7月22日　空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託し、遺跡全景及び農道27・28号を中心とした遺構群等の空中写真等を撮影する。空中写真の撮影後すぐに農道28号の調査終了区域に砕石を敷き均し、残っていた未調査区域の遺構確認を行う。そこから竪穴住居跡の一部が検出され、遺構精査を行う。これと併せて調査器材等を洗浄・梱包し、撤収の準備と後片付けを行う。

7月24日　調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、調査を終了した。その後、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去、さらにプレハブ用地・駐車場用地・農道迂回路用として敷設していた鉄板も搬出し、7月末にはすべての作業を完了した。

2　整理・報告書作成作業の経過

平成21年度調査の報告書作成事業は平成22年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成21年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成22年4月1日から平成23年3月31日までの期間で行った。中平遺跡は縄文時代と古代の複合遺跡であり、検出遺構の中では古代の竪穴住居跡が多く、出土遺物も古代の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁数は、平成21・22年度の調査成果2ヶ年を合わせて360頁の予定とし、この約7/8を古代の遺構・遺物の記載にあてることにした。

平成22年度の整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　新岡　嗣浩（現、青森県総合社会教育センター所長）

次　長	畠山　昇（平成23年３月退職）
総務ＧＭ	木村　繁博
調査第二ＧＭ	中嶋　友文（現、調査第一ＧＭ）
文化財保護主幹	神　　康夫（報告書作成担当者）
調査補助員	三宅　奈央子　　佐々木　隆英
整理作業員等	工藤　好枝　　小林　　恵
	宇惠野　聡子　　及川　晶子

平成21年度調査に関する整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成２１年度〕

11月　写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。

12月　竪穴住居跡等から出土した炭化材について、株式会社パレオ・ラボへ樹種同定を委託した。

〔平成２２年度〕

４月上旬　発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。図面類は、必要に応じて図面修正を行い、それをもとに個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。出土遺物は、農道ごと、遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。

４月下旬　計測作業の終了後、遺構・グリッド・農道路線ごとに土器類の接合作業を開始した。

６月中旬　接合された土器にボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。

７月上旬　復元作業の終了後、遺物の検討・分類・整理作業を経て、土器類・石器類とも報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には農道ごとの整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。遺物整理一覧表に接合状況や図化手順も記載し、整理作業のスムーズ化を図った。これを基に７月中旬以降、土器類の実測図作成、断面図作成、拓本採りなど本格的な整理作業に入っていった。

７月下旬　柴正敏教授（弘前大学理工学部）に中平遺跡出土火山灰について原稿執筆を依頼した。

８月上旬　竪穴住居跡等から出土した炭化材について、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所へ委託した。

10月中旬　平成21・22年度の調査資料をまとめて、微化石類を中心とした薄片分析法による粘土等材料分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。土器類の整理作業では、拓本採りを行った。

11月中旬　遺構図は報告書の体裁に合わせた図版組み作業に着手した。遺物関係は、拓本採りが終わり中断していた土器類の実測作業に戻ったが、それに加えて石器類の実測図作成作業にも着手した。報告書掲載遺物の写真撮影は、土器類はシルバーフォトに、石器類はスタジオ・エイトにそれぞれ委託して撮影した。

12月中旬　調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。遺物の実測作業も古代の土器の器面調整等本格的な作業に突入していった。

１～２月　粗原稿や仮図版、仮写真図版等を作成し、報告書の内容・ページ数を再確認した。実測が終わった遺物は順次トレース作業を行い、印刷用版下を作成していった。

３月　原稿、遺構図版、遺物観察表、遺構及び遺物写真図版などの精査を繰り返して、原稿・版

下等を完成させた。来年度、印刷業者へスムーズに入稿できるように、割付・編集作業などを詰めていった。

3月30日　出土遺物や記録類の整理作業を行う。最後に記録類・出土品を整理・収納して平成22年度の整理作業は終了した。

第４節　平成22年度調査分の経過等

1　発掘作業の経過

平成22年度の中平遺跡発掘調査では、これまで未着手だった事業対象路線４本を調査し、県営野沢地区畑地帯総合整備事業に関する発掘調査（現地調査）を終了することを委託者より要望されていた。そこでまずは、地理的に離れた地点にあった農道25号に調査着手し、その後の状況に応じて農道１号、農道29号、農道30号の３本の調査へ移行していく方針とした。その結果、５月11日から７月23日までの発掘調査期間内で、事業対象全路線の調査を完了することができた。

平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った確認調査の結果、縄文時代・古代の遺物・遺構が確認されているものの表土から古代の遺構確認面までは畑地造成や砂利道として撹乱されていることが分かっていたので、重機を使用して掘削の省力化を図り、古代の遺構検出・調査、縄文時代の遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	新岡　嗣浩（現、青森県総合社会教育センター所長）
次　長	畠山　　昇（平成23年３月退職）
総務ＧＭ	木村　繁博
調査第二ＧＭ	中嶋　友文（現、調査第一ＧＭ）
文化財保護主幹	神　　康夫（発掘調査担当者）
文化財保護主査	工藤　　忍（発掘調査担当者）
調査補助員	三宅　奈央子　工藤　あすか
	太田　大輔　　秋元　雅貴

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越　潔　　前国立大学法人弘前大学名誉教授・故人（考古学）
調査員	葛西　勵　　前青森短期大学教授（考古学）
	山口　義伸　青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成２２年度〕

4月中旬　青森県東青地域県民局地域農林水産部（調査委託者）、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。

5月上旬　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

5月10日　昨年度までの調査結果を踏まえ発掘作業員による遺構確認作業がスムーズに行えるよう、最初に着手する農道25号で重機を使用して表土（農道に敷設されている砕石）掘削及び除去作業を開始した。表土（砕石）の掘削・除去にあたっては、農作業用車両が通行出来る幅員・高低差等を確保した迂回路を敷鉄板で設置した上での作業となった。

5月11日　発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員２名、補助員４名、発掘作業員43名の規模で発掘調査を開始した。環境整備後、農道25号の北西端部から発掘作業員による遺構確認作業に着手した。測量基準点・水準点は工事用のものを使用し、必要に応じて調査区周辺に増設した。

5月中旬　農道25号では竪穴住居跡や土坑などが検出され、早々に遺構精査へ取り組むこととなった。これと併行して、農道１号にも車両通行用の鉄板敷設作業を行って、重機を使用して表土（砕石）の掘削・除去作業を行う。農道１号は農道隣地（調査区脇の畑地）に鉄板を敷設することができないので、約６ｍの農道幅員の南東半３ｍ分を迂回路、北西半３ｍ分を調査区とした。

5月下旬　農道１号にも作業員を投入して北東側より遺構確認作業を行う。黒色土中で焼土遺構などが検出されるものの遺構密度が薄く、調査は着々と進んだ。長さ約180ｍの農道１号では、測量・写真撮影など記録を取り次第調査区を埋め戻して迂回路とし、未調査の迂回路部分を調査するという行程を繰り返すこととなる。特に農道29号・農道30号と接続するＴ字路部分は土地に余裕がないことから、小範囲で調査区と迂回路の付け替えを繰り返すこととなった。

6月上旬　農道25号で調査が終了した部分を埋め戻して砕石を敷き、未調査部分の調査に着手する。これに伴って農道25号で使用していた鉄板を農道30号へ移設して車両迂回路とし、南東部の流末水路部分から重機を使用して表土除去作業を開始する。

6月中旬　農道25号では竪穴住居跡５棟をはじめとする比較的高密度で検出された遺構の精査、農道１号及び農道30号では遺構確認作業と遺構精査、ということに主眼を置いて調査を進める。６月11日には青森市立浪岡野沢小学校５・６年生（児童36名、教員４名）が遺跡見学に訪れ、野沢地区の古代の生活に思いを巡らせる。

6月下旬　竪穴住居跡５棟が検出された農道25号で遺構の精査に目処が立ってきたことから、最後の調査路線である農道29号の調査準備を始める。農道30号では４棟の竪穴住居跡が確認されたもののカマドが調査区内にないものが多く、出土遺物も少なかったことから遺構精査は比較的スムーズに進んだ。

7月上旬　７月１日に農道25号の調査が終了し、農道29号の遺構確認作業に７月５日から着手する。残り３週間となったことから基本的に農道30号と農道29号の遺構確認と遺構精査に注力することとした。一方、迂回路付け替え等手数を必要とするが遺構が薄いと見込んだ農道１号は、間隙を縫って小区域ごとに調査していくこととした。

7月中旬　天候不順ながら何とか遺構精査を進め、７月14日、株式会社シン技術コンサルに空中写真撮影を委託し、遺跡全景及び遺構群等を撮影する。未調査区域がわずかに残っていた農道29・30号では調査終了区域に砕石を敷き均して迂回路を付け替えて表土を除去し、遺

構確認を行った。その結果、農道29号では第３号建物跡や土坑等、農道30号では第５号竪穴住居跡と第２号溝跡の一部を検出したことから、急ピッチで遺構精査を行った。

７月20日　遺構精査、地形測量、調査区完掘写真撮影等を行い、農道１号の調査を終了した。

７月22日　遺構精査、地形測量、調査区完掘写真撮影等を行い、農道29号の調査を終了した。出土遺物・調査図面等の記録類を整理・収納し、調査器材等を洗浄・梱包した。

７月23日　調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去を始める。その後、プレハブ用地・駐車場用地・農道迂回路用として敷設していた鉄板の搬出作業も順調に進み、７月末にはすべての作業を完了した。

２　整理・報告書作成作業の経過

平成22年度調査の報告書作成事業は平成23年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成22年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成23年４月１日から平成24年３月31日までの期間で行った。中平遺跡は縄文時代と古代の複合遺跡であり、検出遺構の中では古代の竪穴住居跡が多く、出土遺物も古代の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁数は、平成21・22年度の調査成果２ヶ年を合わせて360頁の予定とし、この約7/8を古代の遺構・遺物の記載にあてることにした。

平成23年度の整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	松田　守正
次　長	成田　滋彦
総務ＧＭ	木村　繁博
調査第一ＧＭ	中嶋　友文
文化財保護主幹	神　　康夫（報告書作成担当者）
文化財保護主査	工藤　　忍（報告書作成担当者）
文化財保護主査	田中　珠美（報告書作成担当者）
調査補助員	三宅　奈央子　　太田　大輔
整理作業員等	工藤　好枝　　及川　晶子　　阿部　志穂

平成22年度調査分に関する整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成２２年度〕

11月　　写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。

12月　　竪穴住居跡等から出土した炭化材について、株式会社パレオ・ラボへ樹種同定及びAMS法による放射性炭素年代測定を委託した。

〔平成２３年度〕

４月上旬　発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。遺構図面類は、必要に応じて図面修正を行い、それをもとに個別遺構図や遺構配置図の作成を開始した。出土遺物は、農道ごと、遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。

5月上旬　計測作業の終了後、遺構・グリッド・農道路線ごとに土器類の接合作業を開始した。

6月中旬　接合された土器にボンド・石膏を入れて復元し、実測作業等に耐えられるよう補強した。

6月下旬　柴正敏教授（弘前大学理工学部）に中平遺跡出土火山灰について原稿執筆依頼を行った。

7月上旬　復元作業の終了後、遺物の検討・分類・整理作業を経て、土器類及び石器類の報告書掲載予定遺物を選定した。選定された遺物には農道ごとの整理番号をナンバリングし、遺物整理一覧表を作成した。遺物整理一覧表に接合状況や図化手順も記載し、整理作業のスムーズ化を図った。これを基に7月中旬以降、土器類の拓本採り、断面図作成、実測図作成など本格的な整理作業に入っていった。

8月上旬　拓本採り作業が終了し、土器類の断面図作成、外形実測図作成へと進む。

10月上旬　外形実測が概ね図化できたことから、土器類の器面調整等、詳細な観察・検討を加えながらの図化作業へ移行する。

11月上旬　報告書掲載遺物の写真撮影は、土器類はシルバーフォトに、石器類はフォトショップいなみにそれぞれ委託して撮影した。

11月下旬　石器類・鉄製品等の実測図を作成し、併せて遺構図・遺物図とも報告書の体裁に合わせた図版組み作業に着手した。また調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。

12月中旬　粗原稿や仮図版、仮写真図版等を作成し、報告書の内容・ページ数を再確認した。土器類の実測図最終確認作業を行って、土器類・石器類・鉄製品等のトレース作業に入る。

1月上旬　トレースされた遺物実測図で印刷用版下を作成していき、それを基に遺物観察表の確認、遺物写真の切り抜き作業、写真図版の作成を行っていく。図版を基に原稿執筆をさらに進め、推敲を繰り返す。

1月下旬　原稿、遺構図版、遺物観察表、遺構及び遺物写真図版などの精査を繰り返して、原稿・版下等を完成させる。割付・編集作業では、平成22年度に作成していた原稿・版下等とも組み合わせて全体の体裁を整える必要があり、その作業を経てから印刷業者へ入稿した。

2月　印刷業者との打合せ・調整を繰り返し、3回の校正を行う。併せて出土遺物や記録類の整理作業にも着手する。

3月28日　2ヶ年分の調査内容と中平遺跡を総括する内容を盛り込んだ報告書を刊行した。

第２章　遺跡周辺の地形と基本層序

第１節　遺跡周辺の地形

中平遺跡は梵珠山系の南西麓に広がる扇状地性の低位段丘上で、標高35～40ｍの緩やかな小丘地上に位置している（図１・２、表１）。小丘地の南北には東西に延びる開析谷が存在し、北側の谷上流部と南側の谷が堰き止められ、それぞれ吉野田新溜池、熊沢溜池として現在利用されている。小丘地頂部はりんご園造成のために削平され、ほぼ平坦となっている。遺跡周辺の詳細な地形・地質については青森県埋蔵文化財調査報告書第474集『中平遺跡』（青森県教委2009）を参照されたい。

第２節　基本層序

基本層序はこれまでの調査成果の蓄積があることから、遺構確認及び精査作業に伴って基本層序を再確認してこれまでの調査成果を追認していく手法を採った。基本層序の記録位置は図３に、各土層を図６に示した。第Ⅴ層より上層では各路線の層序に大きな変化は見られないが、上面の削平により欠落する層や傾斜地・谷地形などの地形により細分可能な層があり、その状況は地点によって異なる。したがって第474集及び第490集での基本層序とも若干食い違いがみられる部分もあるが、調査地点が異なっているということでご了承いただきたい。

今回の調査地点での各層の色調及び諸特徴の概要は以下のとおりである。

第Ⅰ層　10YR1.7/1～2/3　黒色～黒褐色土

表土もしくは耕作土で、φ１～２mmのローム粒をわずかに混入する。盛土（造成）が施される地点ではロームが帯状に含まれる暗褐色土や焼土・灰・砕石などが混入する。

第Ⅱ層　10YR1.7/1～3/4　黒色～暗褐色土

平安時代の包含層で、ローム粒や焼土粒をわずかに混入する。基本層序Ｃ・Ｅ・Ｇでは白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）と思われる火山灰を含む。農道29号（基本層序Ｅ）では火山灰を含まない第Ⅱａ層と、火山灰を含みやや明るい色調をなす第Ⅱｂ層に細分された。

第Ⅲ層　10YR1.7/1～2/3　黒色～黒褐色土

縄文時代の包含層で、ローム粒や焼土粒をわずかに混入する。農道１号北東部、農道25～30号の南東端の傾斜地では厚く堆積している。農道27号南東部（基本層序Ｄ）では、ローム粒混入の多寡により第Ⅲａ層と第Ⅲｂ層に細分された。

第Ⅳ層　10YR2/1～4/6　黒褐色～暗褐色～褐色土

漸移層で第Ⅴ層に由来するローム粒・ブロックを中量含む。農道１号北東部や農道27号の一部など部分的に下位のⅤ層が粘土質である地点では、本層下部もやや粘土質を帯びる。

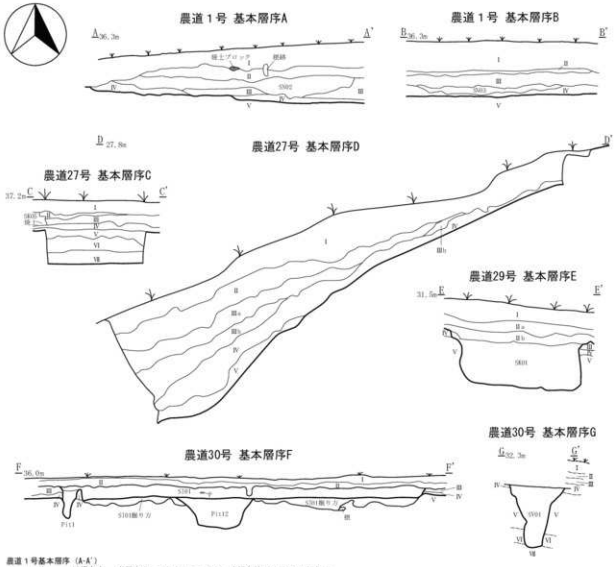
第Ⅴ層　10YR5/4～8/6　にぶい黄褐色～明黄褐色～黄橙色ローム質土

千曳浮石に対比される。φ５mmまでの浮石をわずかに混入する。農道１号北東部や農道27号の一部など、部分的に粘土化する地点もある。

第Ⅵ層　10YR5/6～7.5YR6/6　黄褐色～橙色土

やや粘土質で、酸化鉄が筋状もしくは帯状に混入する。

第Ⅶ層　10YR 7/1～7.5YR 6/8　灰白色～橙色粘土　　緻密で締まりがある粘土層。



農道１号基本層序（A-A'）

I	10YR3/4	暗褐色土　黄褐色ローム粒（φ1～3mm）3%、赤褐色焼土粒（φ1mm以下）3%。
II	10YR2/1	黒　色　土　明赤褐色焼土粒（φ1mm）5%。
III	10YR1.7/1	黒　色　土　黒褐色土との混合土。焼化粒（φ1mm以下）10%。
IV	10YR3/3	暗褐色土　本層下面はV層に漸移し暗灰黄色となっている。
V	10YR6/6	明黄褐色土　ローム粒（φ～1mm）3%。

農道１号基本層序（B-B'）

I	10YR2/2	黒褐色土　明黄褐色ロームブロック（φ50～200mm）将状に20%、ローム粒（φ1～10mm）5%、しまりあり。
II	10YR2/1	黒　色　土　焼土粒（φ1mm以下）1%、B-Tm混入。
III	10YR1.7/1	黒　色　土　ローム粒（φ1mm以下）3%。
IV	10YR3/3	暗褐色土　焼化粒（φ1～10mm）3%、黒色土1%、褐色土1%、赤褐色土1%。

農道27号基本層序（C-C'）

I	5.7Y2/1	黒　色　土　暗褐色土1%未満、B-Tm1%未満混入。
II	10YR2/1	黒　色　土　黒褐色土3%、やや、しまりあり。
III	10YR2/1	黒　色　土　にぶい褐色粘土1%、黒色土7%、黄褐色土2%、赤褐色土（鉄分?）1%、層移層。
IV	7.5YR3/2	黒褐色粘土
V	7.5YR2/1	黒　色　土　黒褐色粘土10%、やや、しまりあり。
VI	10YR5/4	黄褐色土　明黄褐色土7%、暗褐色土3%、暗赤褐色土（鉄分?）2%、やや砂質。
VII	7.5YR7/1	K-Os粘土　明褐色土1.5%、暗褐色土2%、暗赤褐色土（鉄分?）2%、しまりがなり強。

農道27号基本層序（D-D'）

I	10YR1.7/1	黒　色　土　暗褐色土10%、しまり弱。
II	10YR1.7/1	黒　色　土　しまり弱。
IIIa	7.5YR2/1	黒　色　土　しまり弱。
IIIb	10YR2/1	黒　色　土　ローム粒（φ1～3mm）2%、しまり弱。
IV	10YR2/1	黒　色　土　黄褐色ローム粒（φ1～2mm）7%、しまりやや弱。
V	10YR6/4	にぶい黄橙　明褐色ブロック（φ10～20mm）5%、灰色粘土ブロック（φ1～10mm）中2%、しまりあり。

農道29号基本層序（E-E'）

I	10YR2/2	黒褐色土　明黄褐色ローム粒（φ1mm）3%、焼化粒（φ1mm）1%未満。
IIa	10YR2/2	黒褐色土　暗色ローム粒（φ5mm）1%、黄褐色ロームブロック（φ1～20mm）2%。
IIb	10YR3/3	暗褐色土　焼化粒（φ1～5mm）1%、灰白色浮石（φ1～2mm）1%。
		黒褐色土10%、黄褐色ローム粒（φ1～2mm）3%。
		焼化粒（φ1mm）1%、火山灰混入か。
III	10YR2/1	黒　色　土　明黄褐色ローム粒（φ1mm）1%。
IV	10YR2/2	黒褐色土　黄褐色ローム粒（φ1～2mm）2%。
V	10YR5/6	黄褐色土　褐色土30%、焼化粒（φ1mm）1%。

農道30号基本層序（F-F'）

I	10YR3/1	黒褐色土　明赤褐色焼土粒（φ1mm以下）1%未満。
II	10YR2/1	黒　色　土　明黄褐色ローム粒（φ1mm以下）1%未満。
		明黄褐色焼土粒（φ1mm以下）1%未満。
III	10YR2/2	黒褐色土　褐色ローム粒（φ1～2mm）1%。
IV	10YR3/2	暗褐色土　明赤褐色土（鉄分?）（φ1mm以下）1%未満。
V	10YR6/6	明黄褐色土　明赤褐色土（鉄分?）（φ1mm以下）1%未満。

農道30号基本層序（G-G'）

I	10YR2/3	黒褐色土　ややしまりあり。
II	10YR3/4	暗褐色土　火山灰ながら、しまりあり。
III	10YR2/3	黒褐色土　焼化粒（φ1mm以下）1%、しまりあり。
IV	10YR5/8	明黄褐色土　暗褐色土10%、ローム粒（φ1～3mm）1%、しまりあり。
V	10YR7/6	明黄褐色土　焼化粒（φ1mm以下）3%、浮石（φ1～5mm）3%、赤褐（φ1～2mm）1%、しまり強。
VI	7.5YR6/6	橙　色　土　黒色土10%、鉄分VI層土層に帯状に混入。
VII	7.5YR6/8	橙色粘土　にぶい黄橙色粘土5%、ローム粒（φ5～10mm）5%、しまりあり。

図６　基本層序

第３章　平成21年度の検出遺構と出土遺物

第１節　農道２号

農道２号の平成21年度調査区は図７にあるとおり平成20年度調査区の西側、標高約36.5ｍの平坦な台地上に位置している。北西から南東に延びる調査区で、長さ約45ｍ、幅7.5～12ｍの420㎡を調査した。平成21年度の調査において検出された遺構は、土坑１基、ピット１基、焼土遺構１基で、出土した遺物は縄文土器・土師器・石器等、段ボール箱１箱分である。平成20年度の調査では、建物跡５棟、竪穴住居跡１軒、土坑７基、溝跡３条、掘立柱建物跡２棟、溝状土坑１基が調査区東側に偏在して検出されており、今回の調査区は遺構密度が薄い西側地区に隣接する地点で、縄文・平安時代の土器８点、石器が１点、近代の陶磁器１点が出土した。

以下に各遺構の記述を行うが、平成21年度調査で検出された土坑及びピットは前回調査の遺構名と重複することになるため、整理段階で次のとおり改称した。

（調査時名称）SK01　→　SK08（整理時名称）
（調査時名称）SP01　→　SP106（整理時名称）

１検出遺構

(1) 土坑

第８号土坑（SK08（旧SK01）、図８・９）

［位置・確認］調査区北端、２－79グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.0ｍである。第Ⅴ層上面で確認し、他遺構との重複は認められないが一部撹乱によって遺存していない。調査時は第１号土坑（SK01）として精査したが、平成20年度調査成果と遺構番号が重複することから、整理段階で第８号土坑（SK08）と改称した。

［平面形・規模］調査区際にあって、北西側は撹乱によって遺存していない。短軸は0.6ｍを測るが長軸は（0.8）ｍのみ検出され、平面形は楕円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは23㎝で、底面は凹凸があって断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上層は黒色土及び黒褐色土が主体で、下層はブロック状の第Ⅴ層土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］確認面から縄文土器0.13kg、土師器0.01kg、近代以降の陶磁器0.01kgが出土した。そのうち、縄文時代前期から中期の土器（図９－２～４）、土師器片（１）を図示した。本土坑は、古代以降の土坑である可能性が高い。

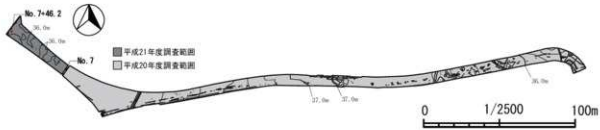
(2) ピット

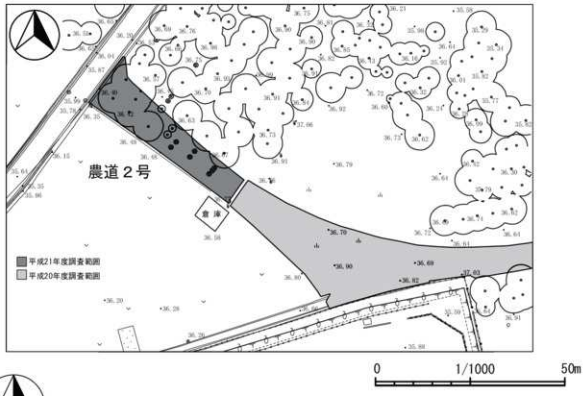
農道２号からは１基のピットが検出された。調査時は第１号ピット（SP01）として精査したが、平成20年度調査成果と重複することから、整理段階で第106号ピット（SP106）と改称した。

第106号ピット（SP106（旧SP01）、図８・９）

［位置・確認］２－75グリッドに位置し、標高は約36.1ｍである。

［平面形・規模・堆積土］規模は長軸14㎝、短軸11cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは５㎝を測る。堆積土は第Ⅴ層土粒を含む黒褐色土であった。





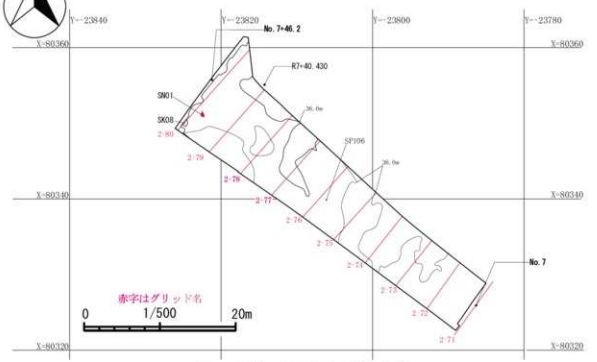


図7　農道２号地形図・遺構配置図

［出土遺物・遺構の時期等］覆土から有茎石鏃１点（図９－６）が出土した。石鏃はピットに混入した可能性もあり、明確な遺構の時期を特定することはできない。

表３　農道２号　SP 計測表

SP番号	掲載図版番号	グリッド	座標値 X	座標値 Y	標高（m）	規模（cm）長軸	規模（cm）短軸	規模（cm）深さ	備考
106	7・8	2-75	80339.9	-23806.1	36.1	14	11	5	Ⅲ SP01。石鏃（図９－６）出土。

（３）焼土遺構

第１号焼土遺構（SN01、図８）

［位置・確認］２－79グリッドに位置し、標高は約36.0ｍである。第Ⅳ・Ⅴ層を掘り込んで堆積した黒色土中に焼土が確認された。

［平面形・規模・堆積土］規模は長軸76cm、短軸39cmの不整形を呈する。黒色土が広がる確認面中央部に焼土が検出され、その下層まで黒色土が堆積している。黒色土と焼土の境界は漸移していることから投げ込まれた焼土ではなく、火を焚いたことによる焼土と判断できる。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土しておらず、時期も不明である。

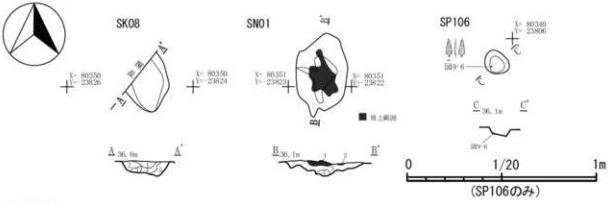


図８　農道２号 検出遺構

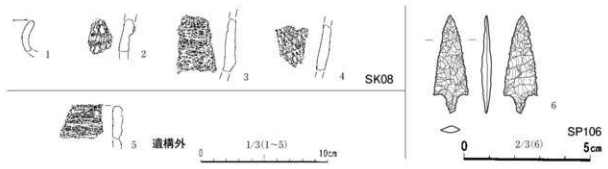


図９　農道２号出土遺物

2　遺構外の出土遺物

遺構外から縄文土器0.01kg、土師器0.01kg、合計0.02kgの土器類が出土し、縄文時代中期から後期のものと思われる土器片１点を、図９－５に示した。

3　遺物観察表

表４　農道２号出土土器類　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
9	1	SK08	旧SK01確認面	土師器	小甕	口縁部	-	-	(2.3)	横ナデ	ナデ	
9	2	SK08	旧SK01確認面	縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(2.5)	結条体側面圧痕、縄端圧痕？、結束第1種（LR・RL）？	ミガキ	前期末～中期初
9	3	SK08	旧SK01確認面	縄文土器	深鉢	頸部？	-	-	(4.1)	（外面調落）	ナデ	植物繊維多量、前期
9	4	SK08	旧SK01確認面	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.5)	多軸結条体（r）	ナデ	植物繊維混入、前期
9	5	遺構外	2-71 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.6)	沈線	ナデ	中期末～後期初

表５　農道２号出土石器　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	石質	計測（mm）			重さ（g）	備考
							長さ	幅	厚さ		
9	6	SP106	覆土S1、2-75	石器	石鏃	頁岩	39	14	4	1.6	

第２節　農道26号

農道26号は遺跡の存在する台地の南側縁辺部に位置し、北西から南東に延びる調査区で本路線の南端は熊沢溜池に落ちていく沢頭につながっている。メインとなる農道26号調査区は、長さ約82ｍ、幅約5.3ｍ、直交する農道１号以南の流末水路部分は長さ約45m、幅約2.2mでさらに狭くなっており、併せて526㎡を調査した。調査前の標高は、北西端で約36.8ｍ、南東の26－113グリッド付近が約31.8ｍで南東側へ傾斜し、26－114グリッドで急激に沢へ落ちていく。

農道26号で検出された遺構は、土坑１基、ピット８基、焼土遺構１基である。遺構の配置状況は、標高36.7ｍの平場である26－４～７グリッド間でピット７基、台地縁辺部にあたる26－103・111・113グリッドで土坑・焼土遺構・ピットが各１基であった。土坑及び焼土遺構は縄文時代の可能性があるが、ピットの帰属時期は不明である。本農道で出土した遺物は、縄文土器が主体をなし、土師器、須恵器、近代以降の陶磁器等も含めて合計段ボール箱１箱分であった。

以下、各遺構について記述していくこととする。なお、第１号土坑（SK01）及び第１号焼土遺構（SN01）は欠番となっている。

１検出遺構

(1) 土坑

第２号土坑（SK02、図12）

［位置・確認］調査区南側、26－111グリッドに位置し、標高は約32.6ｍである。第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は直径約0.8mの歪な円形を呈し、確認面からの深さは28㎝である。底面は概ね平坦で、断面形は壁が垂直に立ち上がるコ字状をなしている。

［堆積土］主として黒褐色土が堆積し、壁際には地山のローム粒を含んだ暗褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったため時期を特定することができないが、堆積土の状況等から、縄文時代の遺構の可能性がある。

(2) ピット

農道26号からは８基のピットが検出された。ピットの位置は図11の遺構配置図に、計測値等は表６に示した。１基のみが台地の縁際である26－113グリッドに位置しているほかは、７基のピットすべて北側の26－５グリッド周辺にまとまるように検出された。これらは掘立柱建物等を構成しないものと思われ、帰属時期も不明である。

表６　農道26号　SP計測表

SP番号	掲載図版番号	グリッド	座標値		標高	規模（cm）			備考
			X	Y	(m)	長軸	短軸	深さ	
1	11	26-4	80186.8	-23662.2	36.7	52	30	74	
2	11	26-5	80182.1	-23660.4	36.2	36	28	34	
3	11	26-5	80181.1	-23661.7	36.8	(26)	28	25	
4	11	26-5	80181.0	-23660.2	36.7	27	24	31	
5	11	26-5	80182.5	-23657.9	36.7	31	27	28	
6	11	26-5	80181.8	-23657.9	36.7	44	26	35	
7	11	26-7	80173.8	-23656.2	36.5	29	26	22	
8	11	26-113	80093.8	-23608.8	31.6	27	(10)	36	

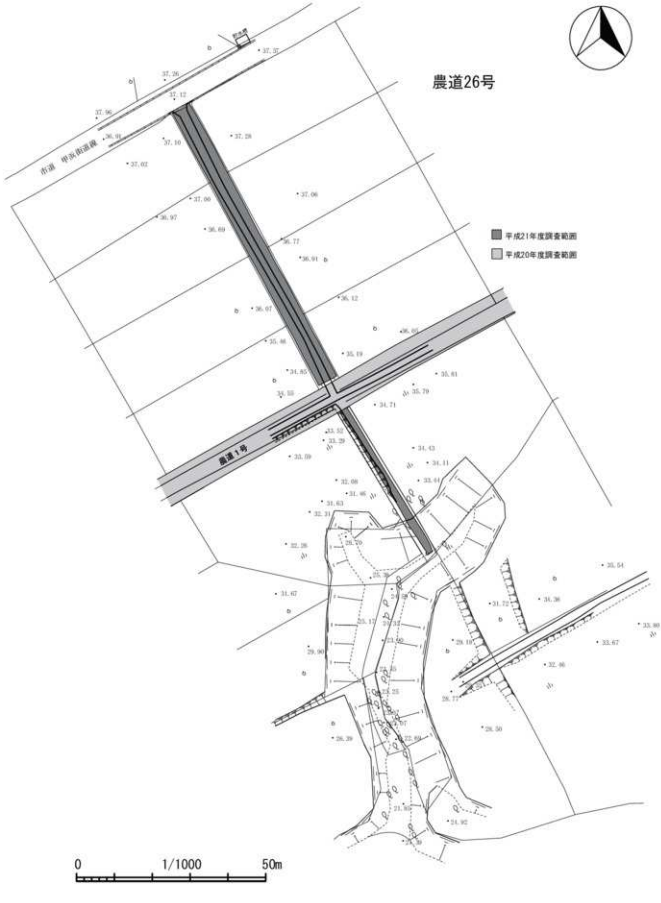


図10　農道26号地形図

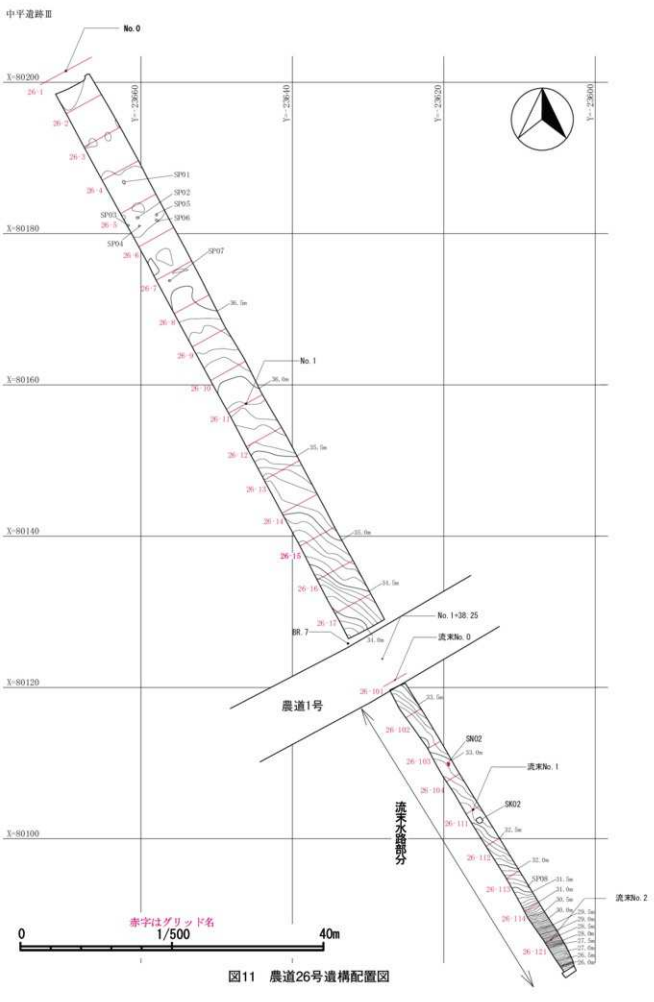
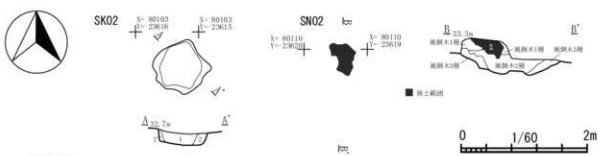


図11　農道26号遺構配置図



SK02（A-A'）

1	10YR2/2	黒褐色土	黒色土30%、ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり弱。
2	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土20%が縞右側に集中している。褐色粒土ブロック(φ30mm)5%、ローム粒(φ1～2mm)3%、しまり弱。

SN02（B-B'）

1	5YR5/8	赤褐色粒	風倒木によって撹乱された地土。黒褐色土20%、暗褐色土15%、焼土粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり中。
風倒木1	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土30%、焼土粒(φ1～2mm)2%、ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりやや中。
風倒木2	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒(φ1～10mm)50%、明黄褐色ロームブロック(φ30～50mm)20%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり中。
風倒木3	7.5YR5/6	明褐色土	暗褐色土30%、ローム粒(φ1～10mm)10%が斑状にみられる。炭化物(φ1～2mm)、しまり中。

図12　農道26号 検出遺構

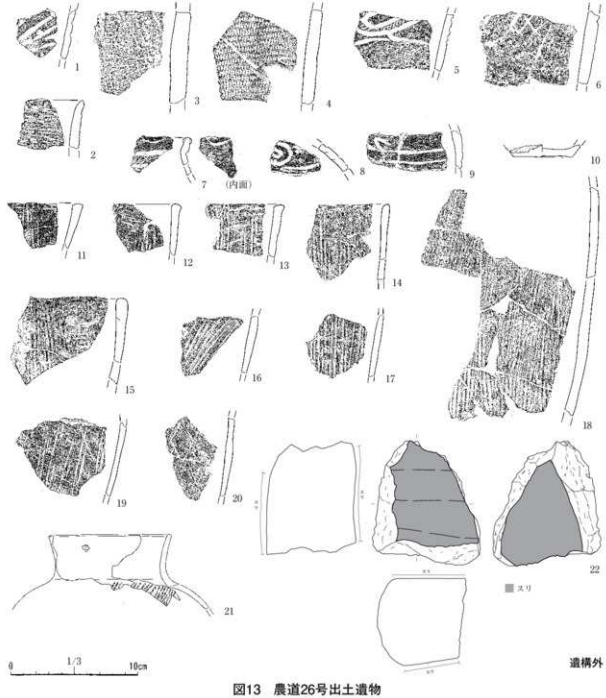


図13　農道26号出土遺物

（3）焼土遺構

第2号焼土遺構（SN02、図12）

［位置・確認］26－103グリッドに位置し、標高は約32.9mである。第Ⅲ層中で確認したが風倒木痕と重複しており、本焼土遺構が風倒木痕に撹乱された可能性がある。

［平面形・規模・堆積土］規模は長軸57cm、短軸32cmの不整形を呈する。堆積土は焼土と黒褐色土の混合土層であって火床面を検出できなかったことから廃棄焼土の可能性が高いが、風倒木によって揉まれて焼土と黒褐色土が撹拌されたとも考えることができる。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土しなかった。第Ⅲ層中で検出されたことから、縄文時代以降と考えられるが、それ以上の時期は特定できない。

2　遺構外の出土遺物（図13）

農道26号の遺構外からは縄文土器1.19kg、土師器0.25kg、須恵器0.04kg、合計1.48kgの土器類、また近代の遺物や礫1.0kgが出土した。そのうち縄文土器（1～21）と石器（22）を図示したが、土師器・須恵器には図示し得る資料はなかった。

縄文土器は、早期（1）、前期（2～4）、後期前葉（5～10）、後期～晩期（11～21）のものがある。1は条痕を地文として沈線が施される早期のムシリⅠ式と思われる土器片である。平成20年度の農道1号の調査でまとまって出土したものと同類と思われる。2～4は前期後半期のもので、胎土に植物繊維を含んでいる。5～10は後期前葉の十腰内Ⅰ式土器で、広口壺（7）や同一個体と思われる壺（8・9）が出土している。11～20はナデ及び条痕で器面を整えた粗製深鉢であるが、20などは格子状に施文した可能性もある。21は晩期の広口壺で、ナデが施される直立する頸部を有している。

石器は、石皿と思われる破片1点（22）を図示した。

3　遺物観察表

表7　農道26号出土土器類　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
13	1	遺構外	26-15 Ⅲ層下部	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.7)	条痕、沈線	ナデ	早期
13	2	遺構外	26-17 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.8)	単軸絡条体第1類（R）回転	ナデ	植物繊維混入。前期・円筒下層c式
13	3	遺構外	26-17 Ⅲ層下部	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(7.3)	RRL?斜回転	平滑なナデ	植物繊維多量。前期後半
13	4	遺構外	26-6 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(7.5)	多軸絡条体（r）	ナデ	植物繊維少量。前期後半
13	5	遺構外	26-4 Ⅰ層	縄文土器	壺?	胴部	-	-	(4.5)	LR横、沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
13	6	遺構外	26-9 Ⅰ層、Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.8)	単軸絡条体第5類（L）回転	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
13	7	遺構外	26-4 Ⅰ層	縄文土器	広口壺	口縁部	-	-	(2.9) (3.0)	粘土紐貼付、LR横、沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
13	8	遺構外	26-10 Ⅱ層	縄文土器	壺	胴部	-	-	(1.7)	沈線	輪積痕、ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
13	9	遺構外	26-9 Ⅰ層、Ⅱ層	縄文土器	壺	胴部	-	-	(2.0)	沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
13	10	遺構外	26-17 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	底部	-	4.6	(1.0)	ナデ	ナデ	底面-上げ底・オサエ。後期・十腰内Ⅰ式
13	11	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.7)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	12	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.1)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	13	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.2)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	14	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.3)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	15	遺構外	26-11 Ⅱ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.8)	ナデ、条痕	輪積痕、ナデ	後期～晩期
13	16	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.5)	条痕	ナデ	後期～晩期
13	17	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.0)	条痕	ナデ	後期～晩期
13	18	遺構外	26-10 Ⅰ層、Ⅱ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(18.0)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	19	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.9)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	20	遺構外	26-7 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.1)	ナデ、条痕	ナデ	後期～晩期
13	21	遺構外	26-13 Ⅱ層	縄文土器	広口壺	口頸部	(9.7)	-	(5.8)	LR横、ナデ	ナデ	後期～晩期

表8　農道26号出土石器　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	石質	計測（mm）			重さ（g）	備考
							長さ	幅	厚さ		
13	22	遺構外	26-9 Ⅰ層	石器	石皿	安山岩	(99)	(85)	(70)	(815.0)	欠損。

第３節　農道27号

農道27号は、遺跡の存在する台地の南側縁辺部に位置し、北西から南東に延びる調査区で本路線の南端は熊沢溜池に落ちていく急崖につながっている。本農道は27－35グリッドで第３号取付道路が南西方向に延伸しており、熊沢溜池に平行する調査区を有している。メインとなる農道27号調査区は長さ約201ｍ、幅約３～5.5ｍ、流末水路部分は長さ約23ｍ、幅約1.4ｍで、併せて985㎡で、第３号取付道路部分は長さ約69ｍ、幅約2.7ｍの185㎡で、農道27号では合計1,170㎡を調査したこととなる。調査前の標高は、農道27号調査区北西端で約36.9ｍ、中ほどの27－28グリッドで約35.9ｍ、南東の27－43グリッドで約28.8ｍと南東方向へ傾斜している。第３号取付道路部分では北東端で標高34.5ｍ、ピークとなる27－109グリッドで標高約35.0ｍである。

農道27号で検出された遺構は竪穴住居跡８軒（建て替え含む）、土坑31基、溝跡10条、掘立柱建物跡４棟、ピット37基、焼土遺構１基である。竪穴住居と掘立柱建物とが組み合わされ、建物跡となることが判明したため、このことを考慮に入れると、建物跡２棟、竪穴住居跡６軒（建て替え含む）、土坑31基、溝跡10条、掘立柱建物跡２棟、ピット37基、焼土遺構１基となる。

平安時代の特筆すべき遺構として、ロクロピット及び粘土貯蔵ピットを有する竪穴住居跡（SI02・SI07）、土師器焼成遺構と思われる土坑（SK24・25・30）を挙げることができる。また、溝跡には円形周溝５基（SD04～07・09）方形周溝１基（SD10）も含まれる。また、縄文時代の遺構は、本農道第３号取付道路部分で比較的多く検出されており、縄文時代・平安時代ともに土地利用の痕跡が認められた地区である。

遺構内外から出土した遺物は、縄文・平安時代の土器類７箱、石器類２箱、鉄製品１箱の計段ボール箱10箱分である。また、土師器製作の材料と思われる粘土塊も出土した。

以下、古代以前の遺構について遺構種ごとに記述を行う。

１　検出遺構

(1) 建物跡・竪穴住居跡

第１号建物跡（SI01、SB03、図17～20）

【概要】調査区南側北部、27－25・26グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.2～36.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。SI01及びSB03で構成される。SI01がSD01と重複し、本建物跡が古い。

【竪穴住居跡－SI01】

［平面形・規模］全体の約４分の３が調査区域外にあるが、平面形は一辺が約3.3ｍ程度の方形と推定される。確認できた壁長及び確認面から床面までの深さは、北西壁（0.6）ｍ・深さ33㎝、北東壁3.25ｍ・深さ15㎝、南東壁（1.1）ｍ・深さ21㎝を測る。壁は開きながら立ち上がる。住居の軸方向はＮ－141°－Ｅである。

［床面・壁溝］床面は部分的に貼り床を施して平坦に整えられている。壁溝は検出されなかった。

［カマド］南東壁で火床面及び煙道の一部を検出した。カマドから煙出し部の範囲は撹乱が激しく、煙道部の底面や天井部などが部分的に確認することができる状況であった。袖部も原形を留めておらず、構築部材であったであろう粘土が散在した状況で検出され、その中から土師器甕（図20－10・

図14　農道27号地形図

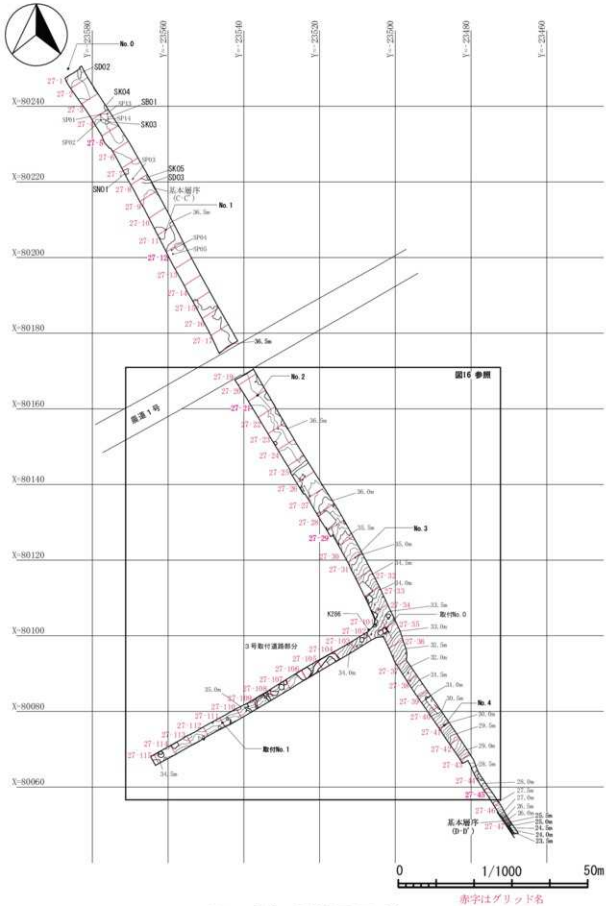


図15　農道27号遺構配置図（1）

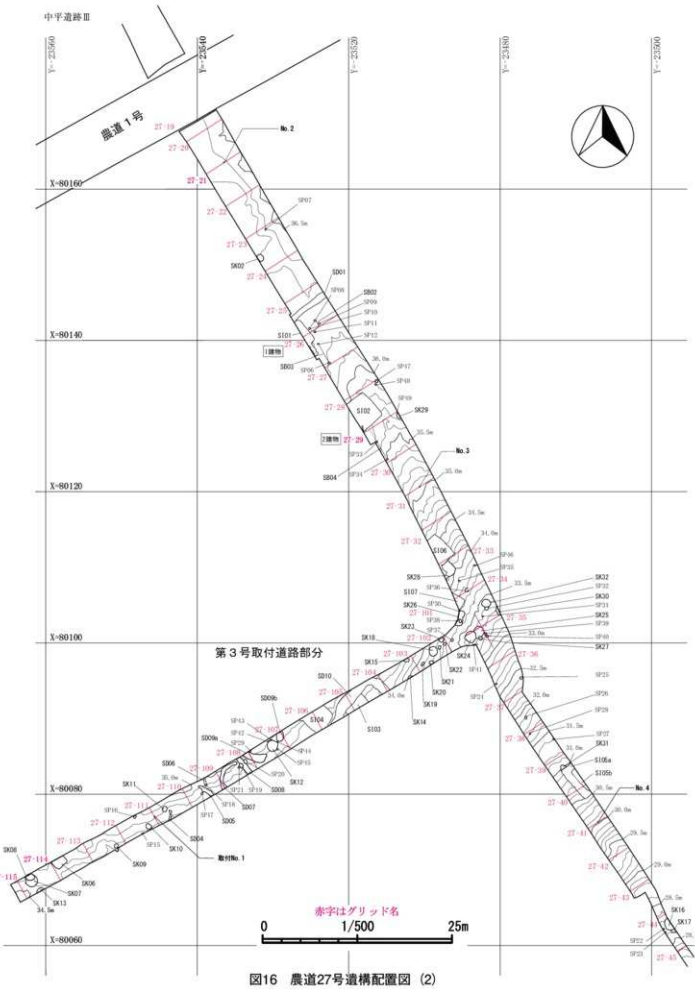
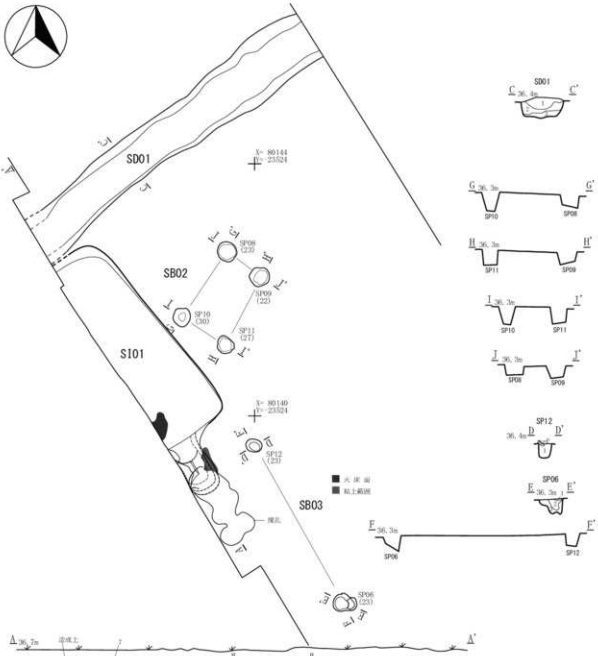


図16　農道27号遺構配置図（2）



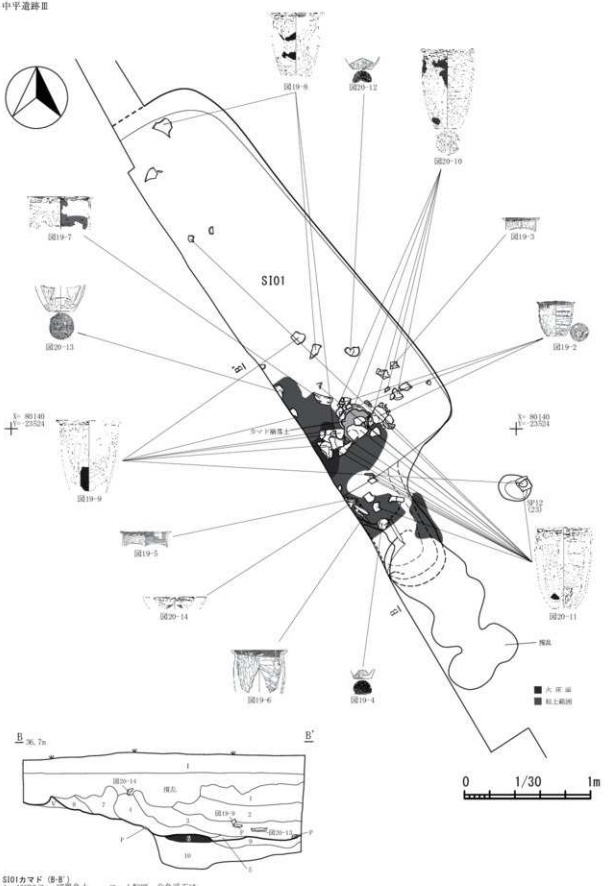
SI01 (A-A')
1　101E2/2　暗褐色土　　ローム粒(φ1～3mm)2%、しまり中。他層に比べて混入物少ない。
2　101E3/4　暗褐色土　　黒褐色土10%(1層近くに集中している)、ローム粒(φ1～10mm)10%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまり中。
3　101E3/3　暗褐色土　　黒褐色土30%(全体にまばらに混在している)、黄褐色ロームブロック(φ20～30mm)7%、ローム粒(φ1～10mm)10%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまり中。他層より黒褐色土多い。
4　101E3/4　暗褐色土　　明黄褐色粘土ブロック(φ20～40mm)10%、にぶい黄褐色粘土ブロック(φ20mm)2%、ローム粒(φ1～10mm)2%、ややしまりあり。
5　101E2/3　黒褐色土　　暗褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりやや強い。
6　101E3/4　暗褐色土　　褐色土20%、ローム粒(φ1～10mm)20%、明黄褐色ロームブロック(φ20～30mm)3%、にぶい黄褐色粘土ブロック(φ20～30mm)3%、炭化粒(φ1～2mm)2%、しまり中。
7　101E4/4　褐　色　土　　暗褐色土40%、ローム粒(φ1～2mm)2%、しまりあり、粘土質土。
8　101E4/6　褐　色　土　　ローム粒(φ1～2mm)1%、しまりあり、粘土質、ガマド袖、壁下部焼土。
9　101E4/4　褐　色　土　　暗褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)、しまりあり、粘土質土。
10　101E3/4　暗褐色土　　黄褐色土20%まばらに混在している)、黒褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)3%、炭化物(φ1～3mm)3%、ややしまりあり。
11　101E4/6　褐　色　土　　層り方、明褐色土30%、にぶい褐色粘土5%、明黄褐色土5%、ローム粒(φ1～5mm)3%、しまりあり。

SD01 (C-C')
1　101E2/2　黒褐色土　　ローム粒(φ1～3mm)3%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり中。B-Tm下土層に均一に混入。
2　101E3/3　暗褐色土　　明黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)10%が、全体に散在している。ローム粒(φ1～5mm)7%、黒褐色土5%、炭化物(φ1～5mm)2%、しまり中。
3　101E3/3　暗褐色土　　黄褐色ロームブロック(φ1～50mm)、しまり中。

SP12 (D-D')
1　101E4/4　褐　色　土　　暗褐色土7%、明黄褐色ローム粒(φ1～10mm)左側に3%、ややしまりあり。

SP06 (E-E')
1　101E4/3　にぶい褐色土　　ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり中。
2　101E4/4　褐　色　土　　ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～3mm)3%、しまり中。
3　101E3/4　暗褐色土　　褐色土10%、明黄褐色ロームブロック(φ5～10mm)2%、ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、小礫がまばらに混在している。しまり中。

図17　第１号建物跡（1）



SI01カマド（B-B'）

1	10YR3/3	暗褐色土	ローム粒2%、白色浮石1%。
2	10YR2/3	黒褐色土	ローム粒5%、炭化物2%。
3	10YR5/6	黄褐色土	ローム粒3%。
4	7.5YR4/6	褐色土	焼土粒7%、7層土の流出土壌含む。
5	10YR3/1	黒褐色土	焼土粒3%、炭化物2%。
6	5YR5/8	明赤褐色土	上面が火床面。
7	10YR6/4	ごふ褐色土	カマド天井崩落土。
8	10YR4/3	ごふ褐色土	炭化物1%、煙道の堆積土。
9	10YR2/1	黒色土	ローム粒20%、貼り床層。
10	10YR6/6	明黄褐色土	掘り方、ローム粒2%。

図18　第1号建物跡（2）

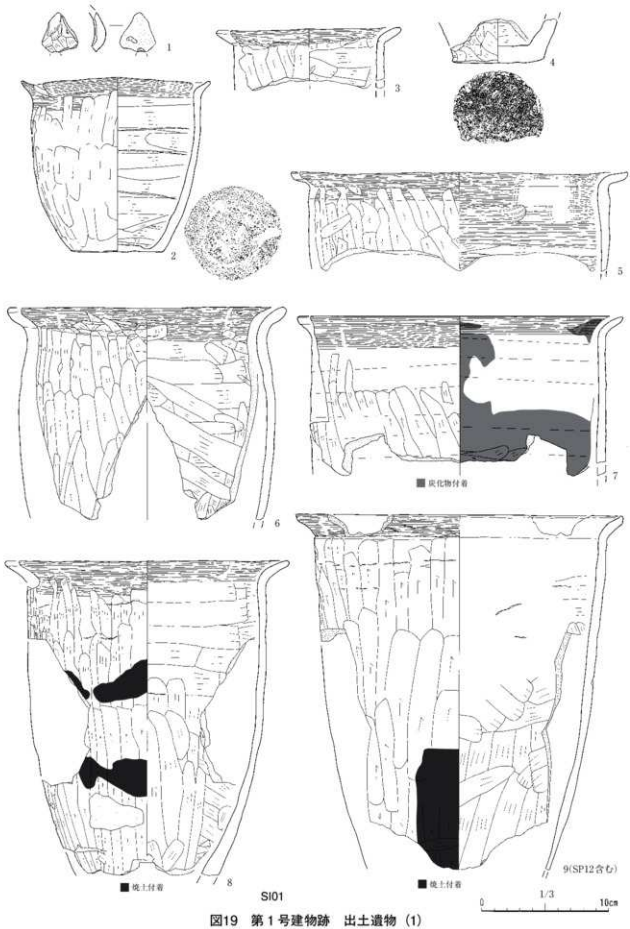


図19　第１号建物跡　出土遺物（1）

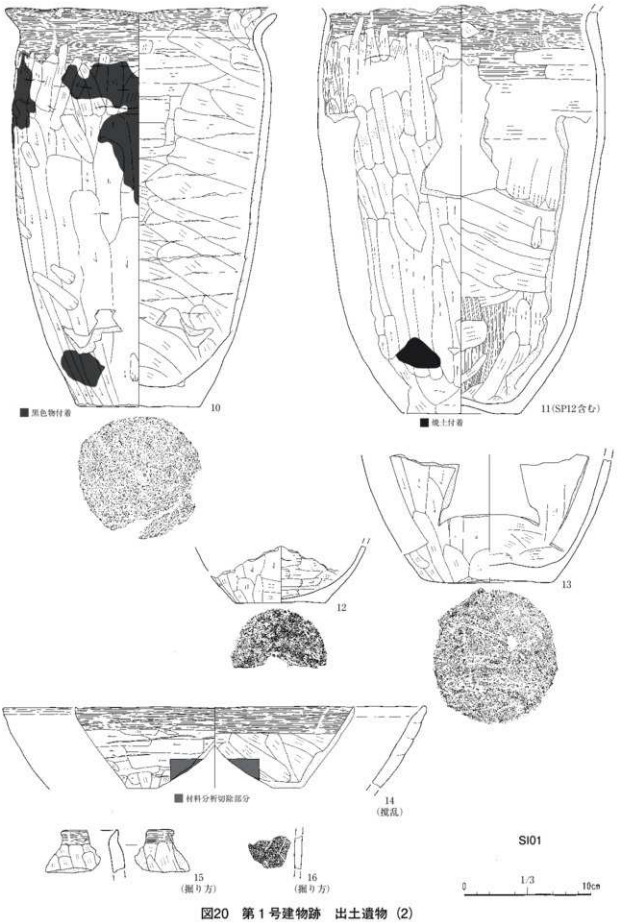


図20　第1号建物跡　出土遺物（2）

11）が出土していることから、これらはカマドの芯材として用いられていた可能性がある。火床面は33×23㎝の不整形で、深さ6㎝まで被熱が及んで赤色化していた。煙道は住居外に約90㎝延びていたものと思われ、煙出し部へ緩やかに立ち上がっていく。煙道の軸方向はN－150°－Eである。

［堆積土］全体的に暗褐色土が堆積しており、下位ほどローム粒や炭化物の混入度合いが強いことから、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物］出土土器の総重量は6.69kgで、内訳は土師器6.67kg、縄文土器0.02kgである。そのうち土師器ミニチュア土器（１）・甕（２～13）を図示したが、坏は図示し得なかった。遺物の出土状況は図18に示したとおり主にカマド周辺に破片が散在した状況で、SB03を構成するSP12出土土器とも接合した甕（11）もある。５・11は、内面に刷毛目調整が残されている。10はカマド左袖付近で倒立して出土した甕である。他に、カマド煙道部周辺の撹乱から土師器塊（14）、掘り方から土師器鉢（15）や縄文土器片（16）も出土した。なお、土師器小甕（２）・甕（10）・塊（14）は粘土等材料分析（それぞれ試料№14・13・15）を行っており、いずれも淡水成粘土を用いている（第５章第７節参照）。

【掘立柱建物跡－SB03】

［平面形・規模］本住居跡南東壁外でSP06・12のピット２基が検出された。西側の調査区域外に延びると思われるが、現状では桁行１間のみの確認で、桁間2.8ｍである。軸方向はN－150°－Eで、竪穴住居跡とは若干ずれるが、煙道の軸方向とは一致している。

［堆積土］褐色土が主として堆積していたが、明確な柱痕は検出されなかった。

［出土遺物］確認面から土師器片が0.17kg出土した。これらはSI01カマド付近から出土した土器と接合し、２個体の土師器甕（９・11）となった。

【小結】出土遺物、堆積土の様相などから、９世紀後半～10世紀前葉頃に廃絶されたものと思われる。

第２号建物跡（SI02、SB04、図21～23）

【概要】調査区南側北部、27－28グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.7～36.0ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

【竪穴住居跡－SI02】

［平面形・規模］住居南西部約４分の１が調査区域外にあるが、平面形は方形と推定される。壁長及び確認面から床面までの深さは、北西壁（2.6）ｍ・深さ20㎝、北東壁3.8ｍ・深さ11㎝、南東壁（3.3）ｍ・深さ6㎝を測る。南東壁では撹乱が深部まで及んでいるため、遺存している壁は低くなっているが、いずれの壁も垂直に近い立ち上がりをみせている。住居の軸方向はN－139°－Eである。

［床面・壁溝］床面は基本的に貼り床によって平坦に整えられているが、地山をそのまま床面としている部分もある。なお、B－B′セクションで掘り方の記録をできなかったが、10～20㎝程度の掘り方を有している。壁溝は幅８～31㎝、深さ17～23㎝で、壁際を全周するように巡らされている。カマド部分でも掘り方が確認できたことから、一旦壁溝を掘削した後、埋め戻してカマドを構築した可能性が高い。

［柱穴］明確な柱穴は検出されなかった。

［カマド］南東壁の南西寄りに検出され、粘土で構築された左袖部を検出した。また、カマド周辺では粘土が散在して検出され、燃焼部及び煙道部にも粘土が使用されていたようである。火床面は25

×13㎝で、深さ5㎝まで被熱が及んで赤色化していた。煙道は住居外に約46㎝延び、煙出し部へ緩やかに立ち上がっていく。煙道の軸方向はN－150°－Eと推測される。

［その他の施設］焼土1基とピット3基が検出された。焼土は62×38㎝の不整楕円形で床面下部（掘り方）まで被熱が及んでいるが、堆積土第4層に含まれる焼土ブロックが床面を熱したことによって焼土化しただけで、付属施設ではない可能性もある。Pit 1は42×39㎝の円形で深さ33㎝の規模である。ピット底面には11×10㎝の円形をなす少ピットが検出され、ピット底面から深さ15㎝で、暗褐色土が堆積していた。底面中央部に小ピットが検出されたことから、Pit 1はロクロを設置していたロクロピットと思われる。Pit 2は65×56㎝の楕円形で深さ24㎝を測り、焼土を含む褐灰色土が堆積していた。本ピットの検出面上部に土器がまとまって出土したことから、本ピットは埋められて住居が使用されていたものと思われる。Pit 3は70×35㎝の楕円形で深さ12㎝を測り、本ピット内から2つの粘土塊が出土した。粘土塊は、北側のものは26.4kg、南側のものは5.3kgの合計31.7kgで、粘土の周囲には褐色土が堆積していた。この粘土について粘土等材料分析（試料№1・2）を行ったところ、両者とも淡水成粘土であることが判明し（第5章第7節）、土師器の材料として貯蔵していたものと考えられる。

［堆積土］上位には黒褐色土もしくは暗褐色土が堆積し、下位には暗褐色土もしくは褐色土が堆積している。第4・5層には焼土及び炭化物が比較的多く含まれる。

［出土遺物］出土土器の総重量は2.24kgで、内訳は土師器2.23kg、縄文土器0.01kgである。覆土から鉄滓の細片も1点出土した。そのうち、床面直上から出土した土師器甕（17・18）・大鉢（19）を図示した。19の大鉢は、塝の器形ではあるが内面をミガキ後黒色処理していることから、煮沸具である「塝」ではなく「大鉢」とした。また18・19ともPit 2検出前の床面直上レベルから出土したものであり、Pit 2覆土から出土したものではない。19は粘土等材料分析（試料№21）を行ったところ、淡水成粘土であることが判明し（第5章第7節）、Pit 3から出土した粘土と同質のものと考えられる。

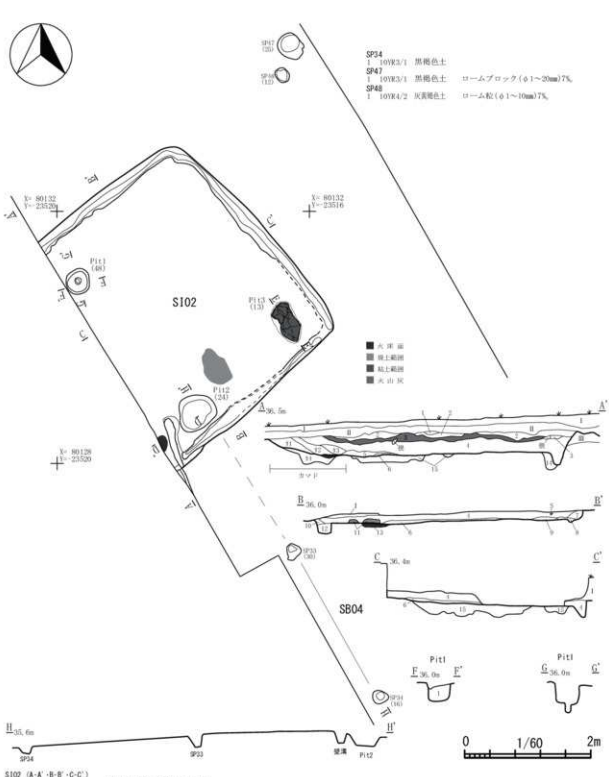
【掘立柱建物跡－SB04】

［平面形・規模］SI02の南東部において、SP33（深さ30㎝）、SP34（同16㎝）のピット2基が検出された。現状では桁行1間、桁間2.7m、軸方向N－151°－Eで、竪穴住居跡のカマド軸方向とほぼ一致していることから、竪穴住居跡に付属する施設である可能性が高いといえる。また、SP33とSI02Pit2の桁間も同じく2.7mを測ることができ、SI02Pit2を含めた3基で建物を構成する可能性も考えられる。また竪穴住居北東壁の延長線上にはピットが検出されなかったが、この周辺では撹乱（轍痕など）が遺構確認面以下の深部まで及んでいるためピットが壊されてしまった可能性が高い。

［堆積土］SP34は黒褐色土が堆積していたが、両ピットとも柱痕は検出されなかった。

［出土遺物］ピットから遺物は出土しなかった。

【小結】出土遺物、堆積土の様相などから、9世紀中葉～9世紀末葉頃に廃絶されたものと思われる。またロクロピット（Pit 1）の検出と粘土貯蔵ピット（Pit 3）の検出から、本遺構は土師器製作遺構であったと考えられる。



SI02 (A-A'・B-B'・C-C')

1	10YR3/2	黒褐色土
2	10YR2/2	黒褐色土
3	10YR3/4	暗褐色土
4	10YR3/4	暗褐色土
5	10YR3/4	暗褐色土
6	10YR4/6	褐　色　土
7	10YR4/4	褐　色　土
8	10YR3/4	暗褐色土
9	10YR4/6	褐　色　土
10	10YR4/6	褐　色　土
11	10YR4/6	褐　色　土
12	10YR4/6	褐　色　土
13	2.5YR3/6	暗赤褐色土
14	10YR2/3	黒褐色土
15	10YR4/6	褐色土

暗褐色土40%、ややしまりあり。
暗褐色土30%、褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)2%、しまりや。
褐色土40%、赤色土5%入、ローム粒(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。
褐色土20%、焼土粒(φ1～5mm)、明赤褐色焼土、ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ1～5mm)2%、しまりや。
明赤褐色焼土粒(φ1～5mm)3%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。
ローム粒(1～10mm)5%、しまりや。
ローム粒(φ1～10mm)7%、炭化物(1～2mm)2%、しまり強。
ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～5mm)2%、しまりやや強。
ローム粒(φ1～5mm)7%、しまり強。
ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり強。
焼土粒(φ1～20mm)10%、粒子5%、ローム粒(φ1～5mm)2%。
ローム粒(φ1～10mm)5%、焼土粒(φ1～5mm)5%、明赤褐色焼土2%、炭化物(φ1～3mm)2%、しまりやや強。
褐色土30%、ローム粒(φ1～10mm)7%、しまりや。
暗り方、黄褐色土30%、にぶい黄褐色粒120%、ローム粒(φ1～5mm)20%、炭化物(φ1～3mm)10%。
壁面やローム粒が全体的に混在している。固くしまっている。
褐色ロームブロック(φ30～50mm)2%、ローム粒(φ1～10mm)7%、ややしまりあり。

SI02 P#P1 t1 (F-F')

1	10YR3/3	暗褐色土

SI02 P#P1 t2

1	10YR4/1	褐灰色土

焼土7%、ローム3%、炭化物3%混入。

図21　第2号建物跡（1）

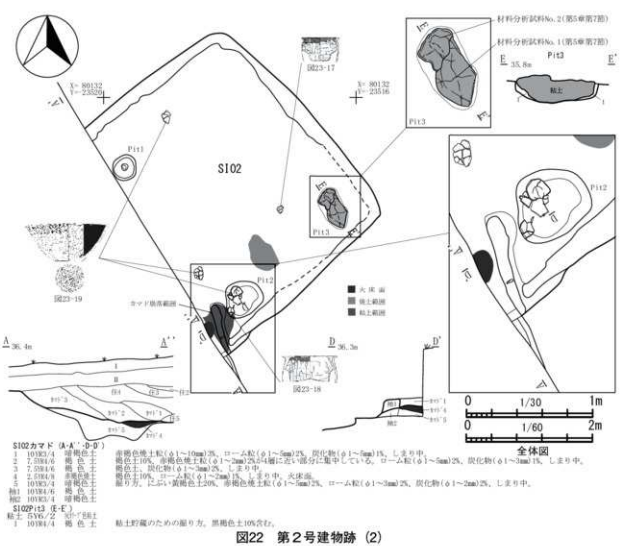


図22　第２号建物跡 (2)

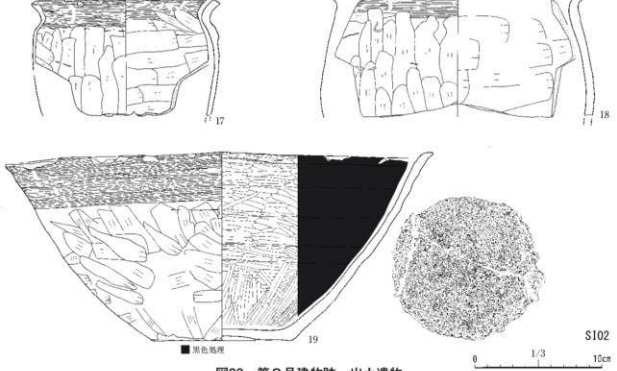


図23　第２号建物跡　出土遺物

第３号竪穴住居跡（SI03、図24）

［位置・確認］第３号取付道路東側、27－104・105グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.4～34.7m、第Ⅳ層で確認した。SD10と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］南東側約４分の１程度が調査区域外にあるが、平面形は方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁2.6m・深さ43cm、北東壁（2.8）m・深さ38cm、南西壁（2.0）m・深さ51cmを測る。いずれの壁も床面付近では丸みを帯びて立ち上がり、確認面付近ではやや外反する。住居の軸方向はN－140°－Eである。

［床面・壁溝］床面は基本的に貼り床を施して平坦に整えられているが、一部は地山をそのまま床面としている。壁溝は検出されなかった。

［柱穴］柱穴は検出されなかった。

［カマド］調査区域内では明確なカマドは検出されなかったが、南側調査区域境界部分で、深さ3cmまで被熱が及んで赤色化した25×8cmの火床面が検出されたことから、ここにカマドが存在する可能性がある。

［その他の施設］ピット１基と地床炉１基が検出された。Pit１は西隅付近で検出され、103×79cmの東西にやや長い楕円形を呈する。床面からの深さは14cmで、ロームブロックや灰黄褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。Pit１からは土師器破片が数点出土し、接合したところ土師器小甕（図24－20）となった。地床炉は住居中央部分から検出され、規模は36×26cm、深さ4cmまで被熱が及んで赤色化していた。

［堆積土］上位は暗褐色土が主体で自然堆積の様相を呈しているが、下位や壁際にはブロック状のロームが混入していることから、廃棄直後にある程度、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物］出土土器の総重量は0.58kgで、内訳は土師器0.56kg、縄文土器0.02kgである。そのうち土師器甕（20・21）を図示した。20はPit１覆土から出土した小甕で、被熱を強く受けている。

［遺構の時期等］出土遺物、堆積土の様相に加え、重複関係にあるSD10にはB-Tmが堆積していてそれより本遺構が古いことを考慮に入れると、９世紀前葉～中葉頃には廃絶されていたものと考えられる。

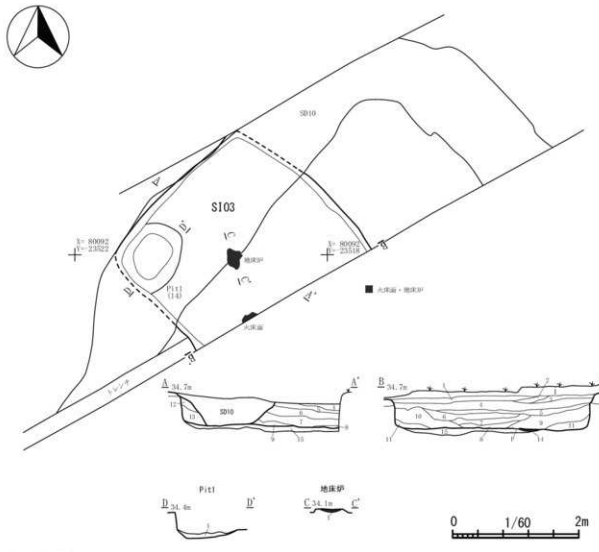
第４号竪穴住居跡（SI04、図25・26）

［位置・確認］第３号取付道路東側、27－105・106グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.6～34.8m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］北側約４分の１程度と南西隅が調査区域外に延びていると思われるが、平面形は方形をなすものと推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北東壁（1.8）m・深さ15～32cm、南東壁（1.3）m・深さ19～32cm、南西壁（2.6）m・深さ9～13cmを測る。いずれの壁もやや開きながら立ち上がっているが、北西の調査区壁セクションでの土層観察では段状をなしている。住居の軸方向はN－134°－Eである。

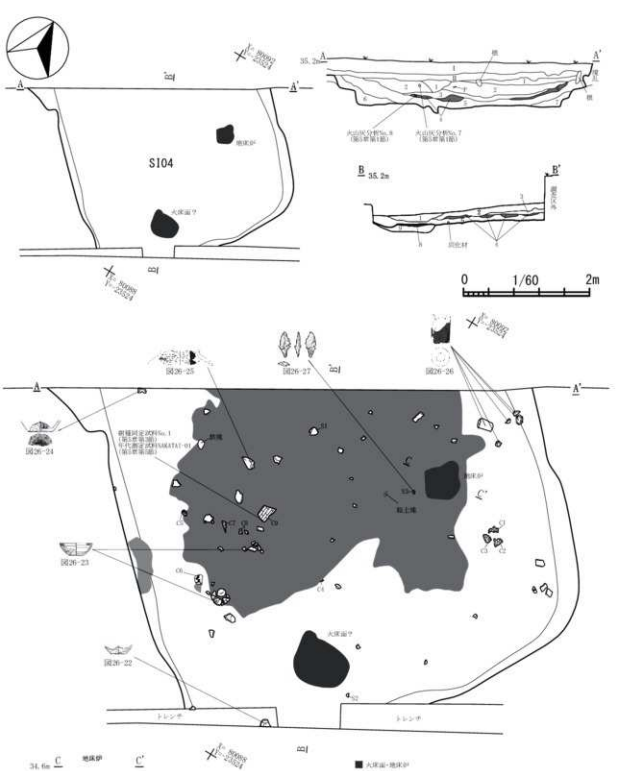
［床面・壁溝］床面は基本的に地山をそのまま床面としているが、火床面周辺では掘り方を有している。壁溝は検出されなかった。

［カマド］調査区域内では明確なカマドは検出されなかったが、南側調査区域境界部分で、深さ３cm



S103 (A-A'・B-B')			
1	10YR2/3	黒褐色土	暗褐色土30%、ローム粒(φ1mm以下)7%、炭化物(φ1～2mm)5%、しまり強。
2	10YR4/4	褐 色 土	ローム粒(φ1～2mm)10%、炭化物(φ1～3mm)5%、しまりあり。
3	10YR4/6	老ｵﾚﾝｼﾞﾊﾟﾐｽ	褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)5%、炭化物(φ1～3mm)3%、しまり強、粘りあり。
4	10YR3/4	暗褐色土	褐色土20%、ローム粒(φ1～3mm)7%、炭化物(φ1～3mm)7%、しまり強。
5	10YR4/4	褐 色 土	にぶい黄褐色灰の塊(φ5～30mm)15%、ローム粒(φ1～2mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまりあり。
6	10YR3/4	暗褐色土	褐色土20%、褐色ロームブロック(φ10～30mm)20%、炭化物(φ1～2mm)3%、ローム粒3%、しまりあり。
7	10YR4/4	褐 色 土	褐色土30%、黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)15%、炭化物(φ1～5mm)3%、浮石(φ1～2mm)1%。
8	10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(φ1～2mm)5%、炭化物(φ1～2mm)2%、浮石(φ1～3mm)1%、しまりあり。
9	10YR4/4	褐 色 土	褐色ロームブロック(φ10～40mm)30%、暗褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)7%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまりあり。
10	10YR4/6	褐 色 土	黄褐色ロームブロック(φ10～40mm)10%、ローム粒(φ1～5mm)10%、炭化物(φ1～2mm)5%、しまり強。
11	10YR4/6	褐 色 土	黄褐色ロームブロック(φ10～50mm)30%、炭化物(φ1～3mm)2%、小礫(φ1～3mm)1%、しまりあり。
12	10YR4/6	褐 色 土	黒褐色土地状(φ20mm)に10%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)2%、ややしまりあり。
13	10YR4/6	褐 色 土	ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)5%、小礫(φ1～5mm)3%、上層より粘性あり、しまりあり。
14	5YR4/8	赤褐色地土	炭化物(φ1～2mm)1%、ややしまりあり、火床面。
15	10YR5/6	黄褐ｵﾚﾝｼﾞﾊﾟﾐｽ	脱り方、褐色土15%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまり強、粘りあり。
S103内地床炉 (C-C')			
1	5YR3/6	赤褐色地土	褐色土20%、炭化物(φ1mm以下)5%、しまりあり。
S103内Pit1 (D-D')			
1	10YR4/6	老ｵﾚﾝｼﾞﾊﾟﾐｽ	黄褐色ロームブロック20%、灰黄褐色土10%、小礫(φ1～5mm)1%、しまりあり、粘りあり。

図24　第３号竪穴住居跡と出土遺物



SI04 (A-A'・B-B')
1　10YR2/1　黒　色　土　黒褐色土30%、暗褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)3%、炭化物(φ1～3mm)1%、しまりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　火山灰混入？　褐色土15%、黒褐色土5%、ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～3mm)1%、しまりあり。
3　10YR2/2　黒褐色土　暗褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、やや、しまりあり。
4　10YR4/4　粘土ほぼ9ヌ　暗褐色土20%、明黄褐色ﾛｰﾑ20%、ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～5mm)1%、しまり強。
5　10YR4/6　褐　色　土　暗褐色土30%、褐色土15%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～10mm)3%、しまりあり。
6　10YR3/4　暗褐色土　褐色土30%、明黄褐色ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ(φ20～30mm)5%、ローム粒(φ1～3mm)5%、炭化物(φ1～10mm)3%、しまりあり。
7　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土15%、ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
8　7.5YR3/3　暗赤褐色土　本層上面が火床面。黒褐色土30%、褐色土5%、炭化物(φ1mm以下)1%加遍。
9　10YR3/3　暗褐色土　掘り方。明褐色地土15%、明赤褐色地土5%、炭化物(φ1～5mm)1%加遍。
SI04内地床炉 (C-C')
1　7.5YR4/4　褐　色　土　赤褐色土45%、炭化物(φ1mm以下)1%。

図25　第４号竪穴住居跡

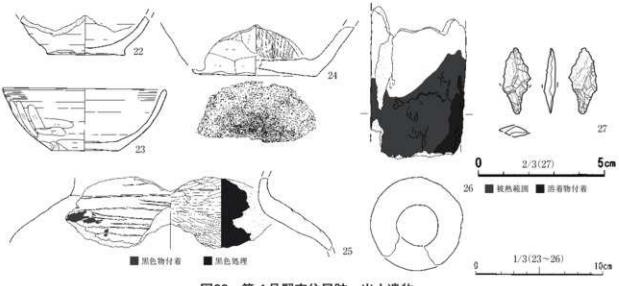


図26　第４号竪穴住居跡　出土遺物

まで被熱が及んで赤色化していた36×43cmの火床面が検出され、住居南東壁に近接していることから、ここにカマドがあった可能性がある。

［その他の施設］北東壁付近で、深さ２cmまで被熱が及んで赤色化した地床炉が検出された。平面形は35×30cmの不整形である。

［堆積土］全体的に暗褐色土が自然堆積し、覆土には火山灰が面的に検出された。この火山灰を分析したところ、第２・４層ともB-Tmと、再堆積した十和田八戸火山灰（To-H）が含まれていることが判明した（第５章第１節）。

［出土遺物］出土土器の総重量は約1.10kgで、内訳は土師器1.1kg、須恵器0.002kgである。また、礫が0.31kg出土した。そのうち土師器坏（22・23）・甕（24）・壺（25）、羽口（26）、石鏃（27）を図示した。24は内面に刷毛目調整がある甕底部で、25は外面に輪積痕、内面にミガキと黒色処理を施す壺である。26の羽口は、溶損角度が20度と30度の２方向が観察されることから、複数回操業の可能性がある。27の石鏃は、両面に被熱による火バネと思われる剥落が見られる。23・25・26は粘土等材料分析（試料№16・17・32）を行った（第５章第７節）。なお26の胎土にはスサが混入しており、高密度の籾痕が観察できる。また床面から覆土にかけて炭化物が散発的に出土したことから、そのうち床面直上から出土した１点について樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った。樹種同定の結果、モクレン属であることが判明し（第５章第３節）、放射性炭素年代測定結果は第５章第５節に示してある。

［遺構の時期等］出土遺物、堆積土の様相、B-Tmの堆積状況などから、B-Tm降下以前９世紀中葉～10世紀初頭には廃絶されていたものと思われる。

第５号ａ竪穴住居跡（SI05a、図27・28）

［位置・確認］調査区南側南部、27－39・40グリッドに位置し、遺構確認面の標高は30.5～31.0m、第Ⅳ層で確認した。調査の結果、第５号竪穴住居跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI05a、貼り床下層から検出された古期の住居跡をSI05bとした。またSK31と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区域外に約３分の２程度があるものと思われるが、平面形は方形と推定される。

南東方向に傾斜する地形上に立地していることから、北西壁は深いが、南東壁はほとんど遺存していない状況である。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁（1.6）m・深さ35㎝、南東壁（1.1）m・深さ26～34㎝、南西壁4.8m・深さ17～21㎝を測る。いずれの壁も開きながら立ち上がる。カマドは検出されていないが、南東方向にカマドが存在するとすれば住居の軸方向はN－139°－Eである。

［床面・壁溝］本住居跡はSI05bを埋めて平坦な床としており、拡張されている部分には鋤等の痕跡が確認できる。壁溝は幅9～30㎝、深さ14～22㎝で、壁際を全周するように巡らされるようである。

［柱穴］柱穴は検出されなかった。

［カマド］調査区域内では検出されなかったが、調査区壁の南東部で焼土を含む土層（第９・10層）が層厚を増しながら堆積しており、この付近（南東壁）の調査区域外にあるものと推定される。

［その他の施設］床下からPit 1が検出された。規模は118×90㎝の不整な円形を呈し、床面からの深さは45㎝である。上位には暗褐色土、下位には黒褐色土が堆積し、いずれもローム粒を含んでいることから人為的に埋め戻されたものである。Pit 1からは土師器甕底部（図28－30）と、鉄滓片（0.002kg）が出土した。

［堆積土］上位には暗褐色土が主体的に堆積し、下位には焼土ブロック及び炭化物を多量に含んだ黒褐色土が堆積している。

［出土遺物］出土土器の総重量は0.61kgで、内訳は土師器0.6kg、須恵器0.01kgである。また礫が1.11kg出土した。住居中央やや西寄り部分から被熱によって破裂した礫がまとまって出土し、これらは写真35に示したとおり接合したが、石器としての使用痕跡が認められなかったことから図化していない。実測図を図示したのは土師器甕（29）、須恵器壺（31）である。

焼土は住居南隅部分を除くほぼ全面から検出されたが、焼土のない南隅部分には被熱していないロームが検出されている。炭化材は、壁の遺存状態が良好な住居西側で特に多く出土した。特に北西壁際では、炭化材が壁溝に直立した状態のものもあった。これらのうち９点を樹種同定、１点を放射性炭素年代測定したところ、樹種同定では８点がクリ、１点がブナ属であることが判明した（第５章第３節）。放射性炭素年代測定結果は第５章第５節に示してある。

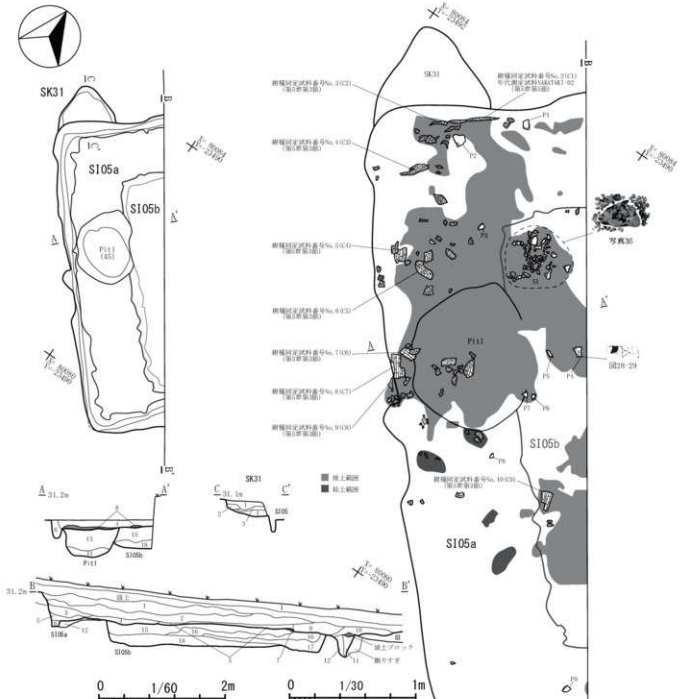
［遺構の時期等］本住居跡は焼失家屋であり、出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、９世紀後葉～10世紀初頭頃に廃絶されたものと思われる。放射性炭素年代測定結果ではやや古い年代が示されており、古木効果の可能性がある。

第５号ｂ竪穴住居跡（SI05b、図27・28）

［位置・確認］調査区南側南部、27－39・40グリッドに位置する。当初１軒の竪穴住居跡とみていた第５号竪穴住居跡は、調査の結果、造り替えられていることが判明したことから、新期をSI05a、貼り床下層から検出された古期の住居跡をSI05bとした。

［平面形・規模］調査区域外に約５分の４程度があるものと思われるが、平面形は方形と推定される。壁長及びSI05a床面からの床面の深さは、北西壁（0.6）m・深さ36㎝、南東壁（0.1）m・深さ15㎝、南西壁3.4m・深さ22～44㎝を測る。いずれの壁もやや開きながら立ち上がっており、住居の軸方向はN－137°－Eである。

［床面・壁溝］地山をそのまま床面としており、平坦である。壁溝は検出されなかった。



S105a遺物等出土状況図

S105 (A-A'-B-B')			
1	10YR2/3	暗褐色土	黒褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～5mm)2%、しまりあり。
2	10YR2/3	暗褐色土	黒褐色土20%、明黄褐色ローム ブロック(φ10～30mm)10%、ローム粒(φ1～5mm)15%、炭化物(φ1～10mm)2%、しまりあり。
3	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～10mm)3%、炭化(φ30mm)1%、やや しまりあり。
4	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～10mm)10%、やや しまりあり。
5	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土10%、褐色粒土ブロック(φ10～40mm)20%、ローム粒(φ1～10mm)7%、炭化物(φ1～30mm)7%、やや しまりあり。
6	10YR4/4	褐色土	ローム粒(φ1～10mm)25%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまり弱。 壁溝。
7	2.5YR4/8	赤褐色土	明赤褐色土(燃移している)、しまり強。
8	5YR5/8	明赤褐色ローム ブロック、しまり強。	
9	10YR3/4	暗褐色土	褐色土5%、暗褐色ローム ブロック(φ5～30mm)25%、ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～10mm)3%、やや しまりあり。
10	10YR2/3	黒褐色土	黒褐色土20%、ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～5mm)3%、やや しまりあり。
11	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土20%、褐色ローム ブロック(φ100mm)7%、赤褐色焼土粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～5mm)1%、壁溝。
12	10YR2/3	黒褐色土	褐色焼土20%、黄褐色ローム ブロック(φ10～20mm)3%、ローム粒(φ1～3mm)2%、炭化物(φ1～5mm)1%、やや しまりあり。 壁溝。
13	10YR3/3	暗褐色土	P11埋土 黒褐色土10%、黄褐色ローム ブロック(φ20～30mm)10%、ローム粒(φ1～10mm)10%、炭化物(φ1～3mm)7%、しまりあり。
14	10YR2/3	黒褐色土	P11埋土 黒褐色土20%、ローム ブロック(φ10～50mm)7%、黒褐色土3%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
15	10YR3/4	暗褐色土	S105a埋土 黒褐色土25%、黄褐色ローム ブロック(φ10～70mm)25%、にぶい黄褐色ローム ブロック(φ10～30mm)3%、炭化物(φ1～5mm)3%、しまりあり。
16	10YR3/4	暗褐色土	S105a埋土 黒褐色土30%、明黄褐色ローム ブロック(φ10～30mm)10%、ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～2mm)2%、しまり弱。
17	10YR4/4	褐色土	S105a埋土 明黄褐色ローム ブロック(φ30～150mm)30%、明褐色焼土ブロック7%、炭化物(φ1～5mm)5%、やや しまりあり。
18	10YR2/2	黒褐色土	S105a埋土 黒褐色土10%、黄褐色ローム ブロック(φ10～50mm)35%、ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
SK31 (C-C')			
1	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土5%ローム粒(φ1～3mm)3%。
2	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土20%、黄褐色土10%、ローム粒(φ1～3mm)5%。
3	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土30%、ローム粒(φ1～3mm)3%。
4	10YR2/2	黒褐色土	黒褐色土10%、黄褐色土5%、ローム粒(φ1～2mm)2%。

図27 第5号竪穴住居跡

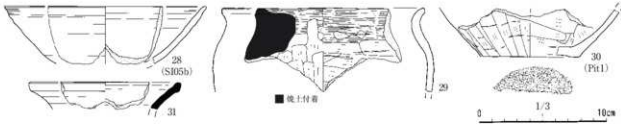
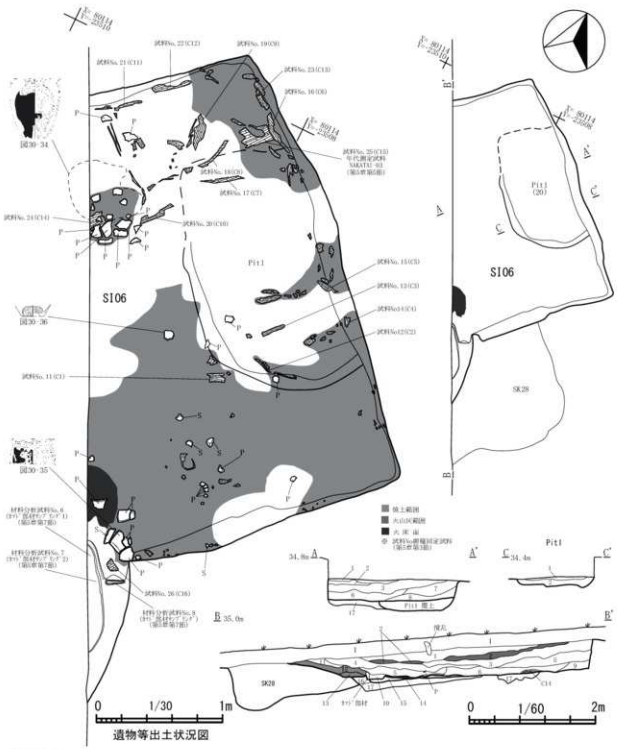


図28　第５号竪穴住居跡　出土遺物

［柱穴・カマド等］調査区域内ではいずれも検出されなかった。
［堆積土］上位はSI05aの貼り床とするためか、ロームをやや多く含む暗褐色土で埋め戻されている。下位はロームがやや少ない黒褐色及び褐色土で埋め戻されている。
［出土遺物］土師器が0.11kg出土し、28が覆土から出土した土師器坏である。
［遺構の時期等］出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相などから、９世紀中葉～９世紀末葉頃に廃絶されたものと思われる。

第６号竪穴住居跡（SI06、図29・30）
［位置・確認］調査区南側第３号取付道路との分岐点北、27－32・33グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.1～34.6m、第Ⅳ層で確認した。SK28と重複し、本遺構が新しい。
［平面形・規模］調査区域外に約３分の１程度があるものと思われるが、平面形は方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁（1.3）m・深さ43cm、北東壁3.7m・深さ20～45cm、南東壁（2.3）m・深さ18cmを測る。いずれの壁も垂直に近いしっかりした立ち上がりをみせ、住居の軸方向はN－134°－Eである。
［床面・壁溝］床面の大半は貼り床を施して平坦に整えられている。壁溝は検出されなかった。
［柱穴］柱穴は検出されなかった。
［カマド］南東壁の南西寄りに検出された。周辺では焼土が密に検出されており、カマド構築材の粘土が焼土化した状態で出土している。土層観察によると火床面の下部を黒褐色土で埋めており、旧床面に充填したものと思われる。また、その下部の住居掘り方にも焼土が混入していることから、カマドの位置をずらして作り直しているものと推察される。今回検出した新期カマドの火床面は23×40cmで、被熱が及んで赤色化していたのは深さ４cmである。煙道は煙出し部へ緩やかに立ち上がっていき、住居外に100cm以上延びている。煙道の軸方向はN－173°－Eである。古期カマドの火床面は調査区域内では検出されなかった。

カマドから出土したカマド部材の粘土等材料分析（試料№６・７・８）を行った。カマド部材は被熱により硬化した粘土で、数cmほどの狭い土手状に検出された。これの火床面に近い部分をサンプリング１、煙道側をサンプリング２、住居の壁に貼り付けてある部分をサンプリング３として採取したものである。分析の結果、海成粘土であることが判明した（第５章第７節）。
［その他の施設］Pit１が検出された。194×127cmの北西から南東に長い楕円形を呈し、床面からの深さは20cmでやや起伏がある。北西半の立ち上がりが不明瞭なため掘り方の可能性も考えられるが、



SI06 (A-A'・B-B')

1	10YR3/2	黒褐色土	黒褐色土40%、炭化物(φ1～3mm)1%未満、黄褐色土1%未満、地土粒(φ1mm以下)1%未満。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	黄褐色土1%未満、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
3	10YR3/3	暗褐色土	黄褐色土1%、明黄褐色土1%、炭化物(φ1～5mm)1%、炭化粒土1%未満。
4	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土3%、黄褐色土3%、地土粒(φ1～3mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%未満。
5	7.5YR3/4	暗褐色土	黒褐色土20%、赤褐色粒土10%、炭化材(φ10～15mm)1%、明赤褐色粒土1%、炭化物(φ1mm)1%。
6	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土10%、赤褐色土5%、明赤褐色粒土3%、炭化材(φ10～30mm)3%、炭化物(φ1～5mm)2%。
7	10YR3/3	暗褐色土	暗褐色土15%、赤褐色土5%、炭化材(φ10～40mm)3%、黒褐色土1%、炭化物(φ1mm)1%、地土粒(φ1mm以下)1%未満。
8	10YR2/3	黒褐色土	黄褐色土7%、黒色土5%、炭化材(φ30mm)2%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
9	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土10%、黒色土5%、炭化物(φ1～10mm)3%、赤褐色粒土1%未満。
10	7.5YR3/4	暗褐色土	黒褐色土20%、暗褐色土10%、黄褐色土5%、赤褐色粒土5%、炭化物(φ1～5mm)3%。
11	10YR3/3	暗褐色土	大谷の崩落土、暗色土30%、褐色粒土5%、炭化材(φ20～30mm)2%。
12	7.5YR4/4	褐色土	大谷の崩落土、暗褐色土20%、褐色土10%、明褐色土3%、明黄褐色土2%、地土粒(φ1mm以下)1%未満、炭化物(φ1mm)1%未満。
13	7.5YR4/6	褐色粘土	大谷の崩落土、暗褐色土10%、明赤褐色粒土3%、明黄褐色土3%、黒褐色土1%、炭化物(φ1～2mm)1%未満。
14	7.5YR4/6	褐色粘土	本層上面が火床面、赤褐色粒土40%、暗褐色土10%。
15	10YR2/2	黒褐色土	本層上面が炭化面で炭化物と焼土を含む層、黄褐色土5%、明黄褐色土3%、赤褐色粒土1%、炭化物(φ1mm)1%未満。
16	10YR2/3	黒褐色土	黒土ブロック20%、黄褐色土10%、暗赤褐色粒土1%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
17	10YR4/4	褐色土	黒土ブロック、黄褐色土7%、黄褐色土3%、褐灰色土1%、炭化物(φ1mm)1%未満。

SI06PP・Pit (C-C')

1	10YR4/3	にぶい褐色土	明黄褐色土10%、明褐色土5%、炭化物(φ3～5mm)1%。
2	10YR3/4	暗褐色土	にぶい褐色土7%、黄褐色土5%、浅黄褐色土2%、炭化物(φ5～15mm)1%。

図29 第6号竪穴住居跡

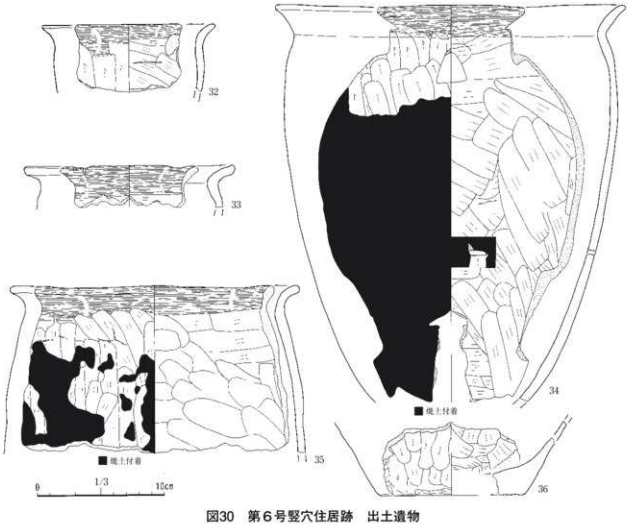


図30　第６号竪穴住居跡　出土遺物

底面と覆土の境界が明瞭で、覆土下位はローム粒の少ない暗褐色土で埋められ覆土上位はローム粒を多く含む貼り床層と考えられることから住居の施設であろうと判断した。遺物は出土していない。

［堆積土］全体的に暗褐色土が自然堆積し、中位の第２層にはB-Tmが含まれていてやや明るい色調を呈する。下位には焼土や炭化物が多く含まれていて焼失住居跡であることが判明した。特に南東半では焼土が、北西半では炭化物が多く検出されている。

［出土遺物］出土土器の総重量は2.88kgで、内訳は土師器2.79kg、須恵器0.01kg、縄文土器0.08kgである。そのうち土師器甕５点（32～36）を図示した。カマド周辺から土師器破片が少量出土し、調査区域壁付近でも甕（34）が出土した。34は粘土等材料分析（試料№18）を行ったところ、淡水成粘土を用いていることが判明した（第５章第７節）。

出土した炭化材のうち16点を樹種同定、１点を放射性炭素年代測定した。樹種同定では、クリ13点、アサダ・オニグルミ・アスナロ１点という結果を得た（第５章第３節）。放射性炭素年代測定結果は第５章第５節に示してある。

［遺構の時期等］本住居跡は焼失家屋であり、出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の様相、B-Tmの堆積状況などから、９世紀中葉～10世紀初頭頃には廃絶されていたものと思われる。

第７号竪穴住居跡（SI07、図31）

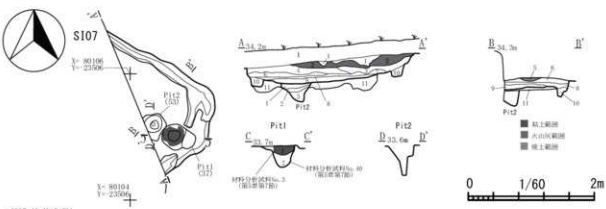
［位置・確認］調査区南側第３号取付道路との分岐点付近、27－33・34グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.7～34.0ｍ、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

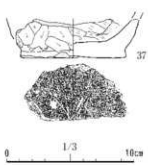
［平面形・規模］調査区域外に全体の約５分の４があるものと思われ、平面形は方形をなす東隅付近を検出したものと推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北東壁（1.9）ｍ・深さ13～16㎝、南東壁（1.4）ｍ・深さ7㎝を測る。検出された壁は浅いが、いずれの壁も垂直に近い立ち上がりをなすようである。住居の軸方向はＮ－123°－Ｅである。

［床面・壁溝］床面は貼り床によって平坦に整えられている。壁溝は幅13～38㎝、深さ10～19㎝で、一部途切れているが、壁際を巡っている。

［柱穴・カマド］柱穴及びカマドは調査区域内では検出されなかった。

［その他の施設］ピットが２基検出された。Pit１は53×41㎝の楕円形、深さ37㎝で、覆土上部に粘土が充填され、下位は黒褐色土で埋められていた。Pit２は直径43㎝の円形、深さ23㎝で、Pit２底面には直径14㎝で深さ30㎝を測る小ピットが検出された。覆土上位及び下位にはローム粒を多く含む褐色土が、中位には黒褐色土が堆積している。Pit２は底面に小ピットが検出されたことから、ロクロを設置した、いわゆるロクロピットである。Pit１・２とも土器などの遺物は出土しておらず、Pit２覆土から図示していないが、0.21kgの礫が出土した。Pit１から出土した粘土について粘土等材料分析（試料№３）を行ったところ、淡水成粘土であることが判明し（第５章第７節）、土師器の材料として貯蔵していたものと考えられる。





SI07（A-A'・B-B'）			
1	10YR2/1	黒色土	黒褐色土15%、ローム粒（φ1～2mm）3%、炭化物（φ1～2mm）3%、しまり弱。
2	10YR3/4	暗褐色土	B-Tm混入。黒褐色土10%、ローム粒（φ1～5mm）5%、炭化物（φ1～5mm）3%、明黄褐色ロームブロック（φ10～25mm）1%、しまりあり。
3	10YR3/4	暗褐色土	褐色土30%、黄橙色ロームブロック（φ10～30mm）3%、ローム粒（φ1～5mm）7%、炭化物（φ1～2mm）3%、しまりあり。
4	10YR3/3	暗褐色土	暗褐色土20%、ローム粒（1～5mm）7%、黒褐色土5%、炭化物（φ1～10mm）5%、明黄褐色ロームブロック（φ10～20mm）2%、焼土粒（φ1～2mm）1%。
5	10YR7/6	明黄褐色焼土	明赤褐色焼土ローム25%、しまり強。
6	10YR4/4	褐色土	褐色焼土ブロック20%、ローム粒（φ1～5mm）7%、黄橙色ロームブロック（φ10～50mm）5%、暗褐色土5%、炭化物（φ1～2mm）5%、焼土粒（φ1～2mm）1%、しまりあり。
7	10YR5/6	黄褐色土	褐色土30%、明黄褐色ロームブロック（φ10～20mm）15%、ローム粒（φ1～5mm）3%、炭化物（φ1～2mm）1%、しまり弱い。
8	10YR3/4	暗褐色土	明黄褐色ロームブロック（φ10～30mm）3%、ローム粒（1～5mm）3%、炭化物（φ1～2mm）3%、焼土粒（φ1～5mm）1%、ややしまりあり。
9	10YR2/3	黒褐色土	暗褐色土15%、炭化物（φ1～3mm）2%、ローム粒（φ1～2mm）1%、ややしまりあり。
10	10YR4/6	褐色土	明黄褐色ロームブロック（φ10～30mm）20%、暗褐色土10%、ローム粒（φ1～5mm）10%、炭化物（φ1～2mm）2%、しまりあり。壁溝覆土。
11	10YR4/4	褐色土	掘り方。ローム粒（φ1～10mm）10%、炭化物（φ1～3mm）2%、しまりあり。
SI07内Pit1（C-C'）			
1	2.5Y6/3	にぶい黄色粘土	暗褐色土10%、黄褐色土3%、にぶい黄褐色粘土1%、橙色粘土1%。
2	10YR2/3	黒褐色土	黄褐色土10%、炭化物（φ1～5mm）1%。
SI07内Pit2（A-A'）			
1	10YR4/4	褐色土	黄褐色土25%、黒褐色土20%、炭化物（φ1mm以下）1%未満。
2	10YR2/2	黒褐色土	明黄褐色土5%、炭化物（φ5mm）1%、明赤褐色焼土1%未満。
3	10YR4/6	褐色土	褐色粘土5%、炭化物（φ1～2mm）1%未満。

図31　第７号竪穴住居跡と出土遺物

［堆積土］上位には暗褐色土が、床面付近では黒褐色土が自然堆積している。上位の第２層にはB-Tmが含まれており、やや明るい色調を呈している。

［出土遺物］出土した遺物は土師器0.13kgで、そのうち土師器甕底部片（37）を図示した。

［遺構の時期等］出土遺物、堆積土の様相、B-Tmの堆積状況などから、B-Tm降下以前の９世紀中葉～９世紀末葉頃には廃絶されていたものと思われる。またロクロピット（Pit２）の検出と粘土貯蔵ピット（Pit１）の検出から、本遺構は土師器製作遺構であったと考えられる。

(2) 土坑

土坑は31基検出され、縄文時代９基（SK02・03・04・07～11・13）、近世以降１基（SK05）で、これら以外の21基は平安時代の土坑と考えられる。縄文時代の土坑は27－４グリッド周辺と第３号取付道路の27－110～115に占地し、平安時代の土坑は農道本線と第３号取付道路のT字路付近に比較的まとまって占地している。なお、SK01は欠番である。

第２号土坑（SK02、図32）

［位置・確認］調査区南側北端、27－23グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.0m、短軸0.8ｍのやや歪な楕円形を呈し、確認面からの深さは28㎝である。底面はやや起伏があるものの概ね平坦で、第Ⅴ層まで掘り込まれている。断面形は壁が直立する浅いコ字状をなしている。

［堆積土］上位は暗褐色土が、下位はロームブロックが主体で、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。遺構の形態及び堆積土の状況から、平安時代のものである可能性がある。

第３号土坑（SK03、図32・36）

［位置・確認］調査区北側北部、27－４グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸（1.0）ｍ、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは21㎝で、遺構上部が大きく削平を受けていることから、本来はもっと深さを有していたものと思われる。第Ⅴ層を平坦な底面としており、断面形は壁が丸みを帯びながら立ち上がる皿状をなしている。

［堆積土］黒色土が堆積し、底面付近はわずかにローム粒を含んでいる。

［出土遺物と遺構の時期等］縄文土器0.45kgが出土し、そのうち３点（図36－38～40）を図示した。これらは縄文時代後期初頭の同一個体と思われる十腰内Ⅰ式の壺形土器で、底面から浮いた状態で出土している。したがって遺構の埋没過程中に混入した可能性が考えられ、十腰内Ⅰ式以前に廃絶された遺構と考えられる。38は粘土等材料分析（試料№30）を行い、淡水成粘土を用いていることが判明した（第５章第７節）。

第４号土坑（SK04、図32・36）

［位置・確認］調査区北側北部、27－３グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.8ｍ、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置し、南西半のみ検出された。長軸1.7mの楕円形を呈すると考えられ、

短軸は約１ｍ程度と思われる。確認面からの深さは55㎝で、第Ⅵ層を平坦な底面として使用しており、断面形はフラスコ状をなすが、南西部ではオーバーハングしない部分もある。

［堆積土］黒色土を主体とし、底面壁際には壁崩落土と思われるロームがブロック状に堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］土器は出土しなかったが、底面から0.49kgの凹石（図36－41）が出土した。扁平な安山岩の４面に各２個ずつ凹みがある。出土遺物と遺構の形状から、縄文時代のフラスコ状土坑と思われる。

第５号土坑（SK05、図32）

［位置・確認］調査区北側中央、27－８グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.7ｍである。焼土を検出したためその周辺を精査したところ、黒色土の落ち込みを確認した。SD03と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区際に位置するため、（1.6）ｍ×（0.6）ｍの南西半のみ検出された。平面形は円形または楕円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは37㎝、土層観察によると本来は80cm程度あったものと思われる。底面は第Ⅵ層まで掘り込まれていて平坦で、断面形は底面付近では皿状をなすが、上部が大きく開いている。また本土坑の南側から西側に隣接して焼土が2.6×1.8ｍの範囲で検出され、本土坑を取り巻くように調査区域外まで延びている。

［堆積土］上位は黒色土が、中位は黒褐色土が自然堆積しており、下位は焼土粒を含んだ褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は、焼土層から縄文時代中期頃と思われる土器片0.01kgが出土したが、摩耗が激しく図示し得なかった。土層観察によると第Ⅱ層上面から掘り込まれているようで、平安時代以降のものと考えられ、SD03よりも新しい。

第６号土坑（SK06、図32・36）

［位置・確認］第３号取付道路西端、27－113グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置し、北西側は調査区域外に延びている。南東壁が1.8ｍを測ることから、おそらく1.8ｍ四方の隅丸方形を呈する可能性が高い。確認面からの深さは24㎝、底面は平坦で地山第Ⅴ層をそのまま使用している。断面形は底面付近で丸みを帯びながら立ち上がる皿状をなしている。

［その他の施設］南隅付近で、深さ４㎝まで被熱が及んで赤色化した焼土が検出された。平面形は27×14㎝の不整形である。

［堆積土］暗褐色土が主体で、黒褐色土との互層となっている。中位には火山灰が層状に堆積しており、自然堆積であったと思われる。この火山灰を分析したところ、B-TmとTo-aが含まれていることが判明した（第５章第１節）。

［出土遺物と遺構の時期等］出土土器の総重量は1.0kg、内訳は土師器0.79kg、縄文土器0.21kgで、礫が0.08kg出土した。そのうち土師器甕（図36－42・43）、縄文土器片（44～47）を図示した。42は焼土部分から出土した中甕、43は土層観察用ベルト部分から出土した中甕で、43の底部片にはB-Tmが直接堆積していた。42・43は粘土等材料分析（試料№20・19）を行い、淡水成粘土を用いていることが判明した（第５章第７節）。また底面直上から出土した炭化材１点について樹種同定及び放射性

炭素年代測定を行ったところ、樹種はモクレン属と判明し（第５章第３節）、年代測定結果は第５章第５節に示してある。

覆土中位でB-Tmと思われる火山灰が検出され、出土遺物、堆積土の様相などから９世紀後葉～10世紀初頭頃には廃絶されていたものと考えられる。床面から地床炉の可能性が高い焼土が検出されていて「竪穴遺構」である可能性もあるが、規模が小さいことから「土坑」とした。

第７号土坑（SK07、図33・37）

［位置・確認］第３号取付道路西端、27－114グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.6ｍ、第Ⅴ層で確認した。SK08と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は長軸1.8m、短軸1.7ｍの不整円形を呈し、確認面からの深さは61㎝である。底面はやや平坦ではあるが、断面形は擂り鉢状をなしており、壁は大きく開いている。

［堆積土］下位は黒褐色土、中位はローム粒を多く含む褐色土で埋め戻されており、確認面付近の第２層では粘土が検出された。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器の総重量は0.32kgで、縄文時代中期から後期のものであった。また覆土から剥片石器１点、0.04kgも出土し、これらのうち縄文時代中期土器片（図37－48・49）と削器（50）を図示した。48は底面直上に相当する第４層から出土した円筒上層ｂ式土器で、粘土等材料分析（試料№31）を行ったところ、淡水成粘土を用いていることが判明した（第５章第７節）。49も縄文時代中期前半の土器と思われる単節縄文が施文された深鉢土器の胴部破片で、50は覆土から出土した珪質頁岩製の削器である。

本土坑からは縄文時代の遺物が出土しているが、これらは第７号土坑を掘った際に重複する第８号土坑に含まれていた遺物を掘り上げ、第７号土坑に混入したものと思われる。確認面で粘土が検出され、堆積土に炭化物が含まれていることなど、堆積土の様相は平安時代のものと思われることから、本土坑は平安時代の遺構である可能性が高い。

第８号土坑（SK08、図33）

［位置・確認］第３号取付道路西端、27－114グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.6ｍ、第Ⅴ層で確認した。SK07と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］遺構上部は重複しているSK07で壊されていて、確認面における平面形及び規模は不明である。確認できるSK08の中端、つまりSK07底面での規模は、長軸1.1m、短軸0.9ｍの楕円形である。底面は直径約1.3ｍの円形をなし、確認面からの深さは119㎝、断面形はフラスコ状をなしている。第Ⅵ層を平坦な底面とし、中央部分に長軸42cm、短軸33cmの楕円形で深さが19cmのピットが検出された。

［堆積土］ローム粒を多く含む黒褐色土もしくは暗褐色土が主体となっており、フラスコの肩部分では地山第Ⅴ層の崩落土が多量にみられる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器の総重量は0.02kgで、後期のものであったが図示し得なかった。また、礫が0.03kg出土した。遺構の形状、堆積状況、出土遺物、遺構の重複関係などから縄文時代後期頃の遺構と考えられ、いわゆるフラスコ状土坑である。

第９号土坑（SK09、図33）

［位置・確認］第３号取付道路西側、27－112グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.6ｍ、第Ⅳ

層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.7m、短軸0.6ｍの歪な円形を呈し、確認面からの深さは44㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで若干凹凸があり、断面形は底面付近に丸みを帯びたコ字状で、全体の形状は円筒状をなしている。

［堆積土］暗褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器の総重量は0.01kgで、図示し得なかったが縄文時代後期頃の破片と思われる。出土遺物と堆積土の様相から縄文時代後期の遺構である可能性がある。

第10号土坑（SK10、図33）

［位置・確認］第３号取付道路西側、27－111グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.8m、短軸0.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは32㎝である。底面は第Ⅴ層を掘り込み、やや凹凸があるものの概ね平坦である。断面形はコ字状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から縄文時代の遺構である可能性がある。

第11号土坑（SK11、図33）

［位置・確認］第３号取付道路中央西寄り、27－110グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.8m、短軸0.7ｍの円形を呈し、確認面からの深さは59㎝である。底面は第Ⅵ層まで掘り込んで平坦に仕上げており、断面形はわずかに内湾するフラスコ状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積しており、人為的に埋められたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、遺構の形状から縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。

第12号土坑（SK12、図33・37）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－107グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。SP42・43・44・45と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は直径1.5mの円形を呈し、確認面からの深さは31㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいてやや起伏があるものの概ね平坦で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］底面直上では黒色土が堆積するが、全体的に暗褐色土が堆積しており、底面付近ではローム粒を比較的多く含む。壁際では、少量の炭化物の散布範囲が３カ所確認できた。

［出土遺物と遺構の時期等］出土土器の総重量は約0.13kgで、内訳は土師器0.017kg、須恵器0.117kgであった。図37－52は底面出土の須恵器壺の底部片である。出土遺物と堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。また、位置的にSD09の開口部分に位置するが、SD09との関係性は不明である。

第13号土坑（SK13、図33・37）

［位置・確認］第３号取付道路西端、27－114グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.5ｍ、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置し、全体の約２分の１、（1.2）×（0.4）ｍの北西半のみ検出された。

直径約1.5ｍ程度の円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは31㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで平坦にしており、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］暗褐色土及び褐色土が堆積しており、底面壁際では黄褐色ロームが堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土縄文土器の総重量は0.13kgで、礫が0.003kg出土した。図示したのは縄文時代中期の土器片（図37－53～55）である。縄文土器片は混入した可能性があり、堆積土の様相から平安時代の遺構である可能性が高いと思われる。

第14号土坑（SK14、図33）

［位置・確認］第３号取付道路東側、27－103グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.0ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置し、全体の約２分の１、北西半のみ検出された。円形もしくは楕円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは18㎝である。底面は第Ⅳ層まで掘り込んでいて概ね平坦で、断面形は上部が開く皿状をなしている。

［堆積土］上位には黒褐色土が、下位は暗褐色土が堆積し、人為的に埋め戻された可能性がある。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構である可能性が高い。

第15号土坑（SK15、図33・37）

［位置・確認］第３号取付道路東側、27－103グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.2ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため、全体の約２分の１、(0.8)×(0.4)ｍの南東半のみ検出された。隅丸長方形を呈するものと思われ、確認面からの深さは34㎝であるが、土層観察によると本来は60㎝程度以上の深さを有していたものと思われる。底面は第Ⅳ層まで掘り込んでいて、断面形は上部が開くＵ字状をなしている。

［堆積土］上位に第Ⅱ層由来の黒色土、下位には黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器の総重量は0.08kgで、坏の体部下半（図37－55）である。堆積土の様相と出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

第16号土坑（SK16、図33・37）

［位置・確認］調査区南側南端、27－44グリッドに位置し、遺構確認面の標高は28.2ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK17と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区際に位置し、全体の約２分の１、(1.7)×(1.0)ｍの南西半のみ検出された。平面形は直径約1.8ｍのやや歪な円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは65㎝である。底面は第Ⅵ層まで掘り込まれて平坦で、断面形はコ字状であるが、北西部ではオーバーハングしている部分もある。

［堆積土］黒色土が主体で、底面付近では黄褐色ロームが流入している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土土器の総重量は0.11kg、内訳は土師器0.04kg、縄文土器0.07kgである。そのうち土師器甕胴部片（図37－56）と縄文土器片（57～59）を図示した。縄文土器片は後期前葉の十腰内Ⅰ式土器で、偶然混入したものと考えられる。出土遺物と堆積土の様相などから、平安時代の遺構と考えられる。

第17号土坑（SK17、図33・37）

［位置・確認］調査区南側南端、27－44グリッドに位置し、遺構確認面の標高は28.1ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK16と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］調査区際に位置し、SK16とも重複していることから全体の約４分の１、（0.6）×（0.5）ｍの範囲で南西の四半部のみ検出された。平面形は円形もしくは楕円形をなすものと思われるが、全体の規模は不明である。確認面からの深さは12㎝であるが、土層観察によると本来は40㎝ほどあったものと思われる。底面は第Ⅴ層まで掘り込まれてやや丸底状に仕上げ、断面形は上部が開くＵ字状をなすものと思われる。

［堆積土］第Ⅱ層由来の黒色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器の総重量は0.11kgで、縄文後期土器片（図37－60～63）を図示した。縄文時代後期の土器片が出土しているが、第Ⅱ層由来黒色土が堆積している状況と、遺構の重複関係から平安時代の遺構と考えられる。

第18号土坑（SK18、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.2m、短軸1.1ｍの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは27㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでやや凹凸があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む暗褐色土が堆積し、底面付近は特に粒径が大きいものが含まれる。

［出土遺物と遺構の時期等］土器は出土しなかったが、覆土から剥片が１点（0.002kg）出土した。堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第19号土坑（SK19、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.6m、短軸0.3ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは34㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで凹凸があり、断面形はＵ字状、全体の形状は短い溝状をなしている。

［堆積土］黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器の重量は0.03kgだが、図示し得るものはなかった。出土遺物と堆積土の様相から、平安時代の遺構と考えられる。

第20号土坑（SK20、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため南東の一部は確認できなかったが、平面形はおおよそ直径0.6mの円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは21㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んだ起伏のある底面で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器の重量は0.004kgだが、図示し得る遺物はなかった。縄文土器のみの出土だが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第21号土坑（SK21、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.5m、短軸0.4ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで起伏があり、断面形は擂り鉢状をなしている。

［堆積土］黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第22号土坑（SK22、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.5m、短軸0.4ｍの円形を呈し、確認面からの深さは26㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで凹凸があり、断面形は壁がしっかりと立ち上がる皿状をなしている。

［堆積土］上位は黒褐色土が、下位はにぶい黄褐色土が堆積していて、SK23と類似した堆積土の様相を示している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第23号土坑（SK23、図34）

［位置・確認］第３号取付道路東端、27－102グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため、北西の一部は検出されなかった。長軸80㎝程度、短軸66㎝の楕円形を呈するものと考えられ、確認面からの深さは31㎝である。底面は第Ⅵ層上面まで掘り込んでいて、断面形は狭小な底面から大きく開きながら立ち上がる擂り鉢状をなしている。

［堆積土］上位は黒褐色土が、下位はにぶい黄褐色土が堆積していて、SK22と類似した堆積土の様相を示している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第24号土坑（SK24、図34）

［位置・確認］調査区南側第３号取付道路との分岐点付近、27－35（27－101）グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK25と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は直径1.5×1.4ｍの歪な隅丸方形を呈し、確認面からの深さは26㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいて平坦に仕上げており、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上位に暗褐色土、中位に黒褐色土、下位に黒色土が堆積している。底面付近では焼土が散布しており、底面自体も被熱によって橙色化した部分が確認できた。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.03kgで、甕の破片が数点出土したがいずれも図示し得なかった。堆積土の様相、重複関係などから平安時代の遺構と考えられ、９世紀中葉～９世紀末葉頃の可能性が高い。また底面の被熱状況、遺構の形態等から、その機能は土師器の焼成遺構であると考えられる。

第25号土坑（SK25、図34）

［位置・確認］調査区南側、第３号取付道路との分岐点付近、27－35（27－101）グリッドに位置し、

遺構確認面の標高は33.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK24・27と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］他遺構との重複によって規模は明確ではないが、長軸1.5m程度、短軸1.35ｍの隅丸長方形を呈するものと考えられ、確認面からの深さは21㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいて平坦で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上位はローム粒を含む暗褐色土、底面付近は黒褐色土が堆積し、底面には焼土が全面的に検出されている。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.06kgであるが、図示し得なかった。焼土上及び焼土中から出土した炭化材２点について樹種同定を行ったところ、２点ともクリであった（第５章第３節）。そのうち焼土中から出土した１点について放射性炭素年代測定を行い、その結果は第５章第５節に示してある。堆積土の様相、重複関係などから９世紀中葉～９世紀末葉頃の遺構と考えられる。底面の被熱状況、遺構の形態等から、その機能は土師器の焼成遺構であると考えられる。

第26号土坑（SK26、図34）

［位置・確認］調査区南側、第３号取付道路との分岐点付近、27－35（27－101）グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。SP30・38と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区際に位置し、2.0ｍ×（1.0）ｍを確認したが、西側は調査区域外に延びている。東壁が2.0mを測ることから、おそらく2.0ｍ四方の隅丸方形を呈する可能性が高い。確認面からの深さは25㎝で、底面は第Ⅴ層まで掘り込んでやや起伏がある。

［その他の施設］底面にはピットが検出された。調査区際に位置するため正確な平面形・規模は不明だが、直径45㎝程度の円形をなす可能性が高い。底面からの深さは19cm、断面形はU字状をなしている。実測図を作成していないが、焼土ブロック及びロームブロックを含む褐色土が堆積しており、柱を立てるための柱穴ではないと思われる。

［堆積土］焼土ブロック及びロームブロックを含む褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.11kgだが、図示し得なかった。堆積土の様相と出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

第27号土坑（SK27、図34）

［位置・確認］調査区南側、第３号取付道路との分岐点付近、27－35グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK25と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は直径0.5mの円形を呈し、確認面からの深さは17㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいて概ね平坦で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ローム粒・焼土粒・炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.01kgで、図示し得なかった。堆積土の様相と出土遺物、遺構の重複関係などから、平安時代の遺構と考えられる。

第28号土坑（SK28、図34・37）

［位置・確認］調査区南側、第３号取付道路との分岐点付近北、27－33グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.1ｍ、第Ⅳ層で確認した。重複するSI06カマドの精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。SI06より本遺構が古い。

［平面形・規模］調査区際に位置し、SI06とも重複していることから全体の約４分の１、南西の四半

部のみ検出された。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形をなす可能性が高いが、規模は不明である。壁長は北東壁（1.4）m、南東壁（1.9）mで、確認面からの深さは57㎝である。壁は垂直に近い立ち上がりで、北東壁ではオーバーハングしている部分もある。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいて起伏がある。

［堆積土］上位は暗褐色土が、下位は第Ⅴ層由来のロームブロックが主体となっている。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した縄文土器は0.04kgで、縄文時代後期土器片（図37－64）を図示した。SI06より古いことから平安時代以前のものではあるものの、出土した十腰内Ⅰ式土器も混入した可能性が考えられ、堆積土の様相などから平安時代の遺構である可能性が高い。

第29号土坑（SK29、図34）

［位置・確認］調査区南側北部、27－29グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.7m、第Ⅳ層で確認した。SP49と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区際に位置し、全体の約２分の１、（1.0）×（0.4）mの南西半のみ検出された。直径約1.0mの円形を呈すると考えられ、確認面からの深さは26㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでおり、湾曲しながら壁が立ち上がり、断面形は丸底状に仕上げている。

［堆積土］黒褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.04kgだが、図示し得なかった。堆積土の様相と出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。

第30号土坑（SK30、図35・37）

［位置・確認］調査区南側、第３号取付道路との分岐点付近、27－34グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.3m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置し、全体の約３分の１程度、（1.4）×（0.4）mの南西半が検出された。楕円形もしくは隅丸方形を呈するものと思われ、確認面からの深さは15㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで平坦に仕上げており、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］焼土や炭化物が底面付近で密に検出され、北東部の底面は被熱により赤色化している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.23kgで、図37－65は土師器甕口縁部片、66は土師器甕胴部である。底面から出土した炭化材２点について樹種同定を行ったところ、アサダとブナ属との結果を得た（第５章第３節）。そのうちブナ属とされた炭化材（C2）について放射性炭素年代測定を行い、その結果は第５章第５節に示してある。

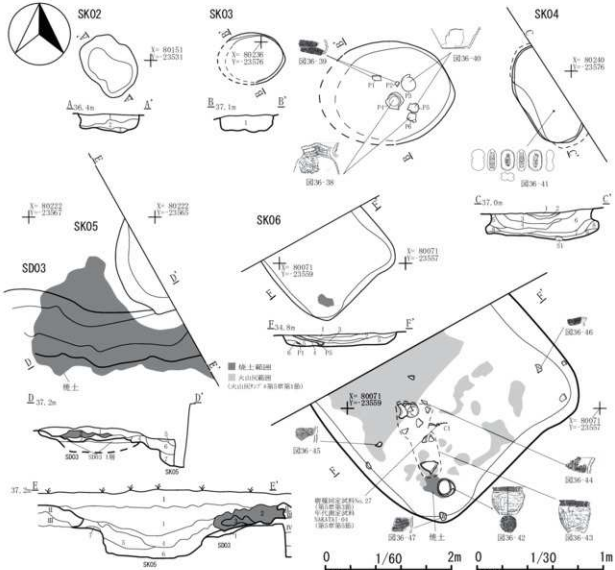
出土遺物と堆積土の様相などから９世紀中葉～９世紀末葉頃の遺構と考えられるが、放射性炭素年代測定では古い年代が出ており、古木効果の可能性がある。また、遺構の形態と焼土の検出状況から土師器焼成遺構であると考えられる。

第31号土坑（SK31、図27）

［位置・確認］調査区南側南部、27－39グリッドに位置し、遺構確認面の標高は31.0m、第Ⅳ層で確認した。SI05と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］重複により全体の平面形・規模は不明だが、88×55㎝の三角形、確認面からの深さ29㎝を確認した。底面は概ね平坦で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］全体的に黒褐色土が堆積し、下位はローム粒が混じる。



遺物等出土状況図

SK02 (A-A')

1	10YR3/4	暗褐色土
2	10YR5/8	黄褐色土と10YR4/6黄褐色土の混合層
3	10YR5/8	明褐色土

黒色土20%、ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。
暗褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)7%、しまり中。
褐色土、褐色土ブロック(φ10～20mm)15%、しまり中。

SK03 (B-B')

1	2.5YR2/1	黒 色 土

ローム粒(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。

SK04 (C-C')

1	2.5YR2/1	黒 色 土
2	7.5YR2/2	黒褐色土
3	10YR2/1	黒 色 土
4	10YR2/2	黒褐色土
5	10YR2/2	黒 色 土
6	10YR2/1	黒 色 土
7	10YR2/1	黒 色 土
8	10YR5/6	黄褐色土
9	10YR2/2	黒褐色土

ローム粒(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。
明褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)7%、ややしまりあり。暗より明るい。
にぶい黄褐色砂質ロームブロック(φ1～2mm)7%、ローム粒(φ1～5mm)3%、ややしまりあり。
黒褐色土30%、にぶい黄褐色砂質ロームブロック(φ2～10mm)5%、ローム粒(φ1～10mm)2%、ややしまりあり。
黒褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
明褐色ロームブロック(φ1～30mm)2%、ややしまりあり。
黒褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)3%、ややしまりあり。6層より明るい。
黒褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)3%、ややしまりあり。
黒褐色土5%、ややしまりあり。8層より明るい。

SK05 (D-D')

1	10YR2/3	暗褐色土
2	7.5YR5/8	明褐色土
3	10YR2/3	黒褐色土
4	10YR2/1	黒 色 土
5	10YR2/1	黒 色 土
6	10YR2/2	黒褐色土
7	10YR2/2	黒褐色土

黒褐色土30%がまばらに混在。明褐色地土ブロック(φ20～50mm)10%、地土粒(φ1～2mm)10%、炭化物(φ1～2mm)5%、ややしまりあり。
黒褐色土20%、地土粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、ややしまりあり。
黒褐色土30%、地土粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、ややしまりあり。
黒褐色土ブロック(φ10～20mm)10%、地土粒(φ1～7mm)7%、やや固い。
暗褐色土30%、ややしまりあり。
ややしまりあり。
ややしまりあり。
黒褐色ロームブロック(φ20～50mm)30%、地土粒(φ1～5mm)1%、ややしまりあり。
にぶい黄褐色ローム(φ10～20mm)20%、しまりあり。

SK05 (E-E')

1	10YR2/1	黒 色 土
2	7.5YR4/6	褐色土
3	5YR4/6	赤褐色土
4	10YR2/1	黒 色 土
5	2.5YR3/3	黒褐色土
6	2.5YR3/3	黒褐色土
7	2.5YR3/3	黒褐色土
8	2.5YR3/3	黒褐色土
9	2.5YR3/3	黒褐色土
10	10YR2/2	黒 色 土

黒褐色土30%、ややしまりあり。1層と同様に炭粒多、黒人物少ない。
褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
赤褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
黒褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまりあり。
黒褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)5%、やや固まりあり。
黒褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)5%、地土粒(φ1～5mm)3%、しまりあり。他層に比べてやや粘土質。
ローム粒(φ1～2mm)1%、しまりあり。

SD03 (D-D')

1	10YR2/2	黒褐色土

黒褐色土20%、地土粒(φ1～4mm)3%、ややしまりあり。鹿類相当。

SD03 (E-E')

1	10YR2/1	黒 色 土

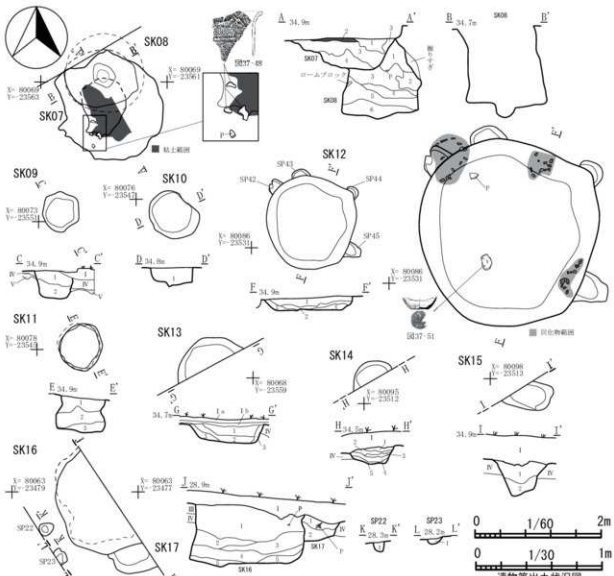
黒褐色土40%、ローム粒(φ1～2mm)3%。

SK06 (F-F')

1	10YR2/2	黒褐色土
2	10YR3/3	暗褐色土
3	10YR3/3	暗褐色土
4	10YR2/2	黒褐色土
5	10YR3/4	暗褐色土
6	10YR3/3	暗褐色土

暗褐色土35%、褐色土7%、炭化物(φ1～3mm)1%未満。
褐色土10%、地土粒5%、炭化物(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
暗褐色土25%、黒色土20%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
暗褐色土30%、黄褐色土(10YR5/6)5%、黒色土10%、炭化物(φ1mm)1%未満。
炭化物(φ1～5mm)1%、地土粒(φ1mm以下)1%未満。
炭化物(φ1mm以下)1%未満。

図32 土坑 (1)



SK07 (A-A')
1 10YR4/2 灰黄褐色土　黒褐色土20%、暗褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)15%、炭化物(φ1～5mm)2%、しまり中。
2 10YR7/4 にぶい黄橙色土　にぶい黄橙色土20%、炭化物(φ1～5mm)2%、ローム粒(φ1～5mm)1%、やや粘性あり。
3 7.5YR4/3 褐 色 土　暗褐色土20%、ローム粒(φ1～10mm)15%、炭化物(φ5～15mm)7%、明黄褐色土5%、やや粘性あり。
4 10YR2/3 黒褐色土　暗褐色土10%、褐色土3%、ローム粒(φ1～5mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまり中。

SK08 (A-A')
1 7.5YR4/4 褐 色 土　暗褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、やや粘性あり。
2 7.5YR5/8 明褐色土　褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～3mm)2%、しまり中。
3 10YR3/4 暗褐色土　黒褐色土20%、炭化物(φ1～3mm)2%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
4 10YR4/6 褐 色 土　黒褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)2%、しまり中。
5 10YR2/2 黒褐色土　暗褐色土20%、炭化物(φ1～5mm)3%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
6 10YR2/3 黒褐色土　黒褐色土20%、ローム粒(φ1～10mm)3%、しまり中。

SK09 (C-C')
1 10YR3/4 暗褐色土　褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)3%、しまり中。
2 10YR3/3 暗褐色土　にぶい黄褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)2%、しまり中。

SK10 (D-D')
1 10YR2/3 黒褐色土　暗褐色土10%、明黄褐色砂質ローム(φ5～25mm)7%、ローム粒(φ1～3mm)7%。

SK11 (E-E')
1 10YR2/3 黒褐色土　褐色土20%、ローム粒(φ1～10mm)5%、しまりあり。
2 10YR2/2 黒褐色土　褐色土20%、ローム粒(φ1～5mm)3%、やや粘性あり。
3 10YR5/4 にぶい黄橙土　褐色土20%、暗褐色土5%、しまり弱。

SK12 (F-F')
1 10YR3/3 暗褐色土　にぶい黄褐色土7%、明黄褐色土3%、炭化物(φ1mm以下)1%未満、暗褐色土20%、明黄褐色土1%、
2 10YR2/1 黒 色 土　炭化物(φ1mm)1%未満、炭化物(φ10mm)1%未満。
3 10YR3/3 暗褐色土　黒褐色土7%、赤褐色焼土3%、黄褐色土3%、
4 10YR4/4 褐 色 土　暗褐色土40%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。

SK13 (G-G')
1 10YR4/4 褐 色 土　暗褐色土35%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
2 10YR3/4 暗褐色土　褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
3 10YR5/6 黄褐色土　ローム粒(φ1～3mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。

SK14 (H-H')
1 10YR2/2 黒褐色土　暗褐色土3%、焼土粒(φ1mm以下)1%未満、炭化物(φ1mm以下)1%未満、
2 10YR2/3 黒褐色土　暗褐色土7%、炭化物(φ1～2mm)1%、焼土粒(φ1mm以下)1%未満。
3 10YR3/4 暗褐色土　にぶい黄褐色土10%、焼土粒(φ2mm)1%、炭化物(φ1mm以下)1%未満、
4 10YR3/3 暗褐色土　黒褐色土30%、褐色土1%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
5 10YR4/4 褐 色 土　黒褐色土7%、炭化物(φ1mm)1%未満。

SK15 (I-I')
1 10YR2/1 黒 色 土　黒褐色土10%、
2 10YR2/2 黒褐色土　黒褐色土10%、褐色土3%。

SK16 (J-J')
1 10YR1.7/1 黒 色 土　ローム粒(φ1～10mm)3%、しまりあり。
2 10YR2/1 黒 色 土　黒色土20%、ローム粒(φ1～2mm)5%、明黄褐色ローム(φ10～40mm)2%、しまりあり。
3 10YR2/1 黒 色 土　明黄褐色ローム(φ10～30mm)10%、暗褐色ローム(φ5～20mm)7%、しまりあり。ローム(φ2×20cm程の帯状に一括入る。
4 10YR2/1 黒 色 土　明黄褐色ローム(φ2×20cm程の帯状に一括入る。しまりあり。やや粘性あり。
5 10YR6/4 にぶい黄橙土　黒色土20%帯状に混入。しまり強。粘性あり。

SK17 (J-J')
1 10YR1.7/1 黒 色 土　ローム粒(φ1mm以下)2%、炭化物(φ1～3mm)2%、しまりあり。
2 10YR1.7/1 黒 色 土　ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～20mm)3%、しまりあり。

SP22 (K-K')
1 10YR1.7/1 黒 色 土　明黄褐色ローム(φ10～20mm)5%、やや粘性あり。

SP23 (L-L')
1 10YR2/1 黒 色 土　黒褐色土5%、黄褐色土10%、やや粘性あり。

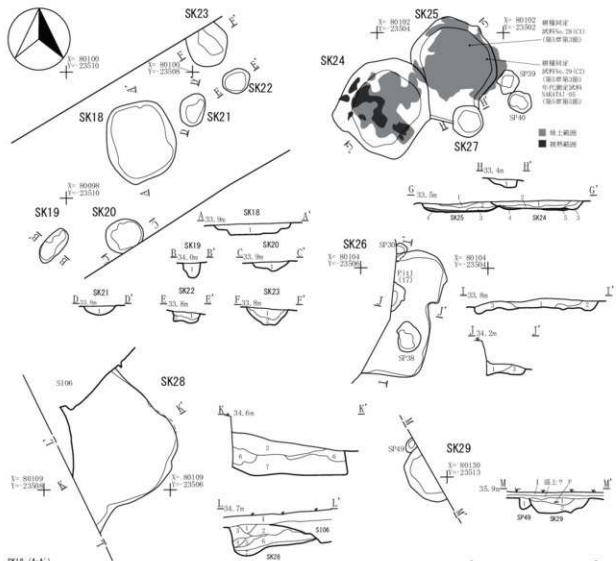
SP42
1 10YR2/2 黒褐色土　炭少量。

SP43
1 10YR3/2 黒褐色土　炭多量。

SP44
1 10YR3/2 黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)1%。

SP45
1 10YR3/1 黒褐色土　ロームブロック(φ1～20mm)7%。

図33 土坑 (2)



SK18 (A-A')
1 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土30%、明黄褐色ローム ブロック(φ1~30mm)7%、炭化物(φ1~2mm)1%、やや しまりあり。

SK19 (B-B')
1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土30%(まばらに混在している)、やや しまりあり。

SK20 (C-C')
1 10YR2/3 黒褐色土 褐色土10%(下部を中心に混在している)、ローム粒(φ1~10mm)5%、しまり中。

SK21 (D-D')
1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土20%(右中心に混在している)、ローム粒(φ1~10mm)5%、しまり中。

SK22 (E-E')
1 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(φ1~3mm)2%、炭化物(φ1~2mm)2%、しまり中。
2 10YR4/3 にぶい黄褐土 黒褐色土10%、ローム粒(φ1~10mm)10%、炭化物(φ1~2mm)3%、しまり中。

SK23 (F-F')
1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土30%(全体にまばらに混在している)、ローム粒(φ1~3mm)2%、しまり中。
2 10YR4/3 にぶい黄褐土 ローム粒(φ1~10mm)25%、しまり中。

SK25 (G-G')
1 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、明黄褐色ローム ブロック(φ1~20mm)3%、ローム粒(φ1~3mm)2%、炭化物(φ1~3mm)1%、しまりあり。
2 7.5YR4/6 褐色土 暗褐色土10%、明黄褐色ローム ブロック(φ1~30mm)10%、焼土粒(φ1~2mm)2%、炭化物(φ1~3mm)2%、しまりあり。
3 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土10%、ローム粒(φ1~5mm)3%、炭化物(φ1~2mm) 1%、焼土粒 (φ1~2mm) 1%、しまりあり。
4 5YR5/8 明赤褐色土 暗褐色土20%、黄褐色土10%、黒褐色土10%、炭化材(φ70mm)5%、ローム粒(φ1~2mm)2%、焼土粒(φ1~3mm)2%、しまりあり。
5 5YR6/8 橙 色 土 被熱によって橙色化した地山。

SK24 (G-G')
1 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、明黄褐色ローム ブロック(φ10~40mm)7%、ローム粒(φ1~3mm)5%、炭化物(φ1~2mm)2%、しまりあり。
2 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土20%、ローム粒(φ1~5mm)3%、炭化物 (φ1~5mm) 3%、焼土粒(φ1~2mm)1%、しまりあり。
3 10YR2/1 黒 色 土 黒褐色土10%、炭化物(φ1~10mm)7%、ローム粒(φ1~3mm)2%、焼土粒(φ1mm)1%、しまりあり。
4 7.5YR5/8 明褐色土 暗褐色土10%、黒褐色土5%、ローム粒(φ1~2mm)1%、焼土粒(φ1~2mm)1%、しまりあり。

SK26 (I-I'・J-J')
1 10YR4/4 褐 色 土 暗褐色土20%、明赤褐色焼土ブロック(φ2~20mm)5%、黄褐色のローム ブロック(φ10~30mm)2%、ローム粒(φ1~3mm)5%、炭化物(φ1~3mm)3%、しまりあり。
2 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土10%、ローム粒(φ1~2mm)3%、黄褐色のローム ブロック(φ10~20mm)2%、焼土粒(φ1~2mm)1%、しまりあり。
3 10YR4/6 褐 色 土 暗褐色土20%、明黄褐色ローム ブロック(φ1~50mm)10%、炭化物(φ1~3mm)2%、しまりあり。

SK27 (H-H')
1 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土20%、ローム粒(φ1~5mm)5%、焼土粒(φ1~5mm)3%、炭化物(φ2~5mm)2%、しまりあり。

SK28 (K-K'・L-L')
1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土25%、明黄褐色土7%、明褐色焼土(φ2mm)1%未満。
2 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土30%、炭化物(φ1~2mm)1%未満。
3 10YR3/4 暗褐色土 褐色土40%、黄褐色土3%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
4 ローム ブロック層。
5 10YR2/3 黒褐色土 黒褐色土7%、黄褐色土5%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
6 ローム ブロック層。黒褐色土15%、暗褐色土10%。
7 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土30%、ローム ブロック5%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。

SK29 (M-M')
1 10YR2/3 黒褐色土 黒褐色土35%、明黄褐色土1%、炭化物(φ1~5mm)1%。
2 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土30%、褐色土7%、明黄褐色土2%、炭化物(φ1~6mm)1%。

SP49 (M-M')
1 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土15%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。

図34 土坑 (3)

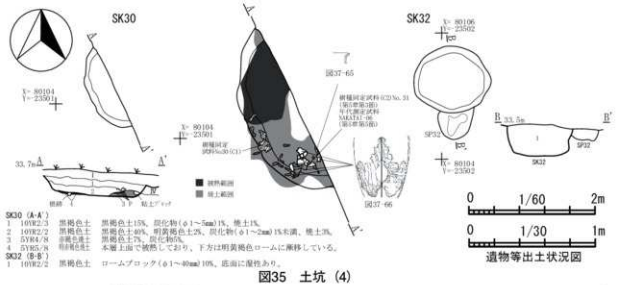
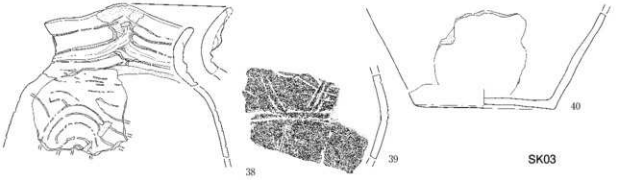
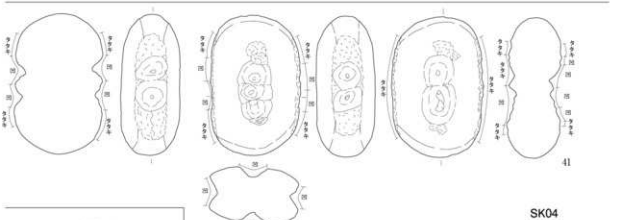


図35　土坑（4）





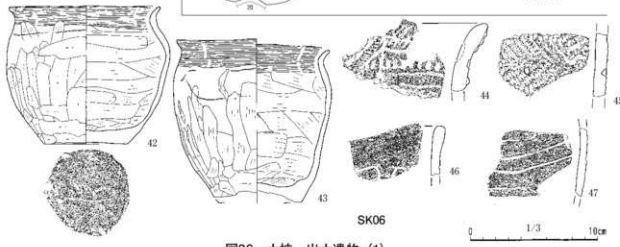


図36　土坑　出土遺物（1）

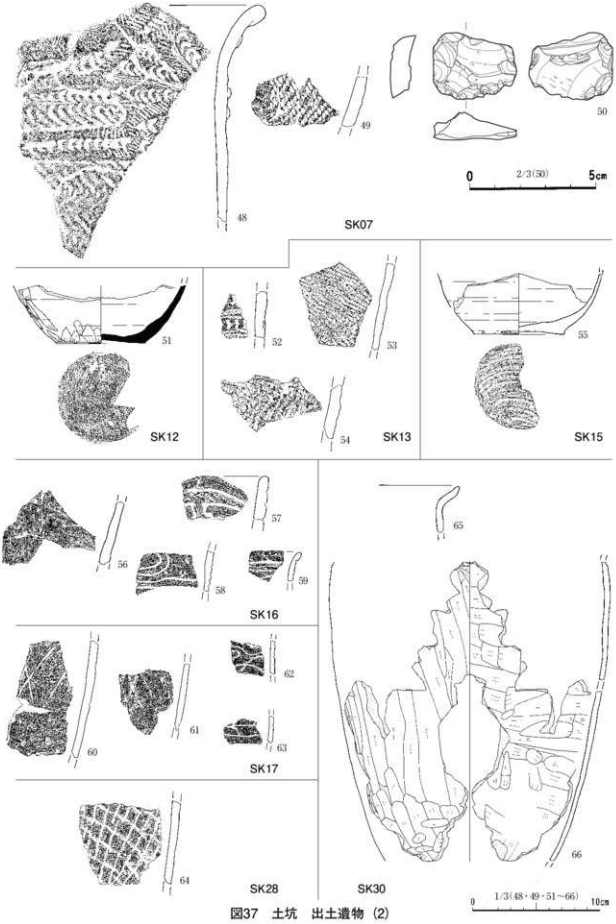

48
49
50
0 2/3(50) 5cm
SK07
51
SK12
52
53
54
SK13
55
SK15
56
57
58
59
SK16
60
61
62
63
SK17
64
SK28
65
66
SK30
0 1/3(48・49・51～66) 10cm

図37 土坑 出土遺物 (2)

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

第32号土坑（SK32、図35）

［位置・確認］調査区南側第３号取付道路との分岐点付近、27－34グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。SP32と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は長軸1.2m、短軸1.0ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは49㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでいて平坦に仕上げている。断面形は上部がわずかに開くコ字状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土で人為的に埋め戻されている。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構と考えられる。

（３）溝跡

第１号溝跡（SD01、図17・40）

［位置・確認］調査区南側北部、27－25グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。SI01と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模・底面］調査区を南西－北東方向に横切る直線状の溝跡で、遺構の全容は不明である。検出された長さは（5.4）ｍで、幅は63～93㎝、確認面からの深さは20～30㎝である。断面形は上部が開くコ字状もしくは逆台形をなしており、底面は第Ⅴ層を掘り込みやや凹凸が見られる。南西端と北東端との比高差は6㎝で、底面は北東方向にやや傾斜している。

［堆積土］堆積土上位は黒褐色土、中位は暗褐色土、下位はローム粒を多く含む暗褐色土が堆積している。下半は人為的に埋め戻されたものと思われるが、上位は自然堆積の可能性がある。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.43kgで、そのうち土師器坏（図40－67・68）と甕（69）を図示した。時期はSI01との重複関係から10世紀中葉以降と考えられるが、出土遺物や堆積土の様相から平安時代に属するものと思われる。その機能は土地境界や区画の明示、排水などが想定される。

第２号溝跡（SD02、図38）

［位置・確認］調査区北側北端、27－1グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置することから遺構の全容は不明であるが、やや直線的な溝跡である。検出できた長さは（2.4）ｍで、幅87㎝、確認面からの深さは13～17㎝である。断面形は丸底の皿状をなし、底面は第Ⅴ層を掘り込み起伏が少ない。北端と南端との比高差は5㎝で、底面は南方向にやや傾斜している。

［堆積土］堆積土は第Ⅱ層由来の黒色土が自然堆積している。

［出土遺物・遺構の時期と用途］遺物は出土せず時期は不明であるが、堆積土の様相から平安時代以降の溝跡と思われる。その機能は不明である。

第３号溝跡（SD03、図32）

［位置・確認］調査区北側中央、27－8グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.6ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK05と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模・底面］調査区を東西方向に横切るやや直線的な溝である。検出できた長さは（2.6）mで、幅80～97㎝、確認面からの深さは12～22㎝である。断面形は丸底の皿状をなしており、底面は第Ⅴ層を掘り込み起伏が少ない。東端と西端との比高差は4㎝で、底面は西方向にやや傾斜している。

［堆積土］上部大半がSK05によって壊されているが、第Ⅱ層由来の黒色土が自然堆積している。

［出土遺物・遺構の時期と用途］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代以降の遺構であると考えられ、SK05より古い。その機能は不明である。

第４号溝跡（SD04、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央やや西寄り、27－110グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.7m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置するため遺構の全容は不明であるが、緩やかに湾曲した弧状の溝跡である。検出できた長さは（1.4）m、幅24～27㎝、確認面からの深さは6～18㎝である。断面形はU字状をなしており、底面は第Ⅴ層を掘り込みやや凹凸が見られる。北端と南端との比高差は6㎝で、底面は南方向にやや傾斜している。

［堆積土］堆積土にはローム粒を含む暗褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物・遺構の時期と用途］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構であると考えられる。その形態や周辺遺構の状況から、墓として造られた円形周溝の一部である可能性がある。

第５号溝跡（SD05、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－109グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.7～34.9m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置するため遺構の全容は不明であるが、やや湾曲する弧状の溝跡である。検出できた長さは（2.3）mで、幅30～54㎝、確認面からの深さは10～17㎝である。断面形は上部が開くU字状をなし、底面は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。北西端と南東端との比高差は20㎝で、南東方向に底面はやや傾斜している。

［堆積土］上位には暗褐色土が、下位、特に弧状の内径部分にはローム粒を含む褐色土が堆積している。

［出土遺物・遺構の時期と用途］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相から平安時代の遺構であると考えられる。その形態や周辺遺構の状況から、墓として造られた円形周溝の一部である可能性がある。

第６号溝跡（SD06、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－109グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.9～35.0m、第Ⅳ層で確認した。SP18と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置し、北側調査区域外へ延びている可能性がある。検出できた長さは（0.9）mで、幅15～29㎝のやや弧状を呈する。確認面からの深さは7～10㎝で、断面形は上部が開く皿状をなしている。底面は第Ⅴ層を掘り込みやや比較的平坦である。北端と南端との比高差は7㎝で、南方向に底面はやや傾斜している。

［堆積土］堆積土は暗褐色土が主体となっており、自然堆積の可能性がある。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した縄文土器は0.01kgで、図示し得なかった。縄文土器は本遺

構に流入したものと考えられ、堆積土の様相と遺構の形態から平安時代の遺構であると考えられる。その形態や周辺遺構の状況から、墓として造られた円形周溝の一部である可能性がある。

第７号溝跡（SD07、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－108・109グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.8～35.0ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置し、弧状の溝跡として検出したが、南側は調査区域外に延びていることから本来は半円状をなす可能性が高い。検出できた長さは（4.6）ｍ、幅33～75㎝、確認面からの深さは3～13㎝である。断面形は上部が開くU字状をなし、底面は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。この凹凸は掘り方である可能性があり、ロームブロックが掘り方に充填されている。北東端と南西端との比高差は20㎝で、南東方向に底面は傾斜している。

［堆積土］堆積土上位は黒褐色土、中位には暗褐色土、下位にはロームブロックを含む褐色土が主体となっており、下位は掘り方充填土と思われる。中位以上は自然堆積と考えられる。北側ではB-Tmが部分的に検出されている。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.001kgだが、図示し得なかった。B-Tmの検出、出土遺物、堆積土の様相などから平安時代10世紀初頭には開口していたものと思われる。その形態や周辺遺構の状況から、墓として造られた円形周溝の一部である可能性がある。

第８号溝跡（SD08、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－108グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.7～34.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。SP19・20と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模・底面］調査区を北西－南東方向に横切る直線状の溝跡で、遺構の全容は不明である。検出できた長さは（2.6）ｍで、幅65～77㎝、確認面からの深さは6～14㎝である。断面形は上部が開くU字状、もしくは逆台形状をなしている。底面は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。北西端と南東端との比高差は11㎝で、南東方向に底面は傾斜している。

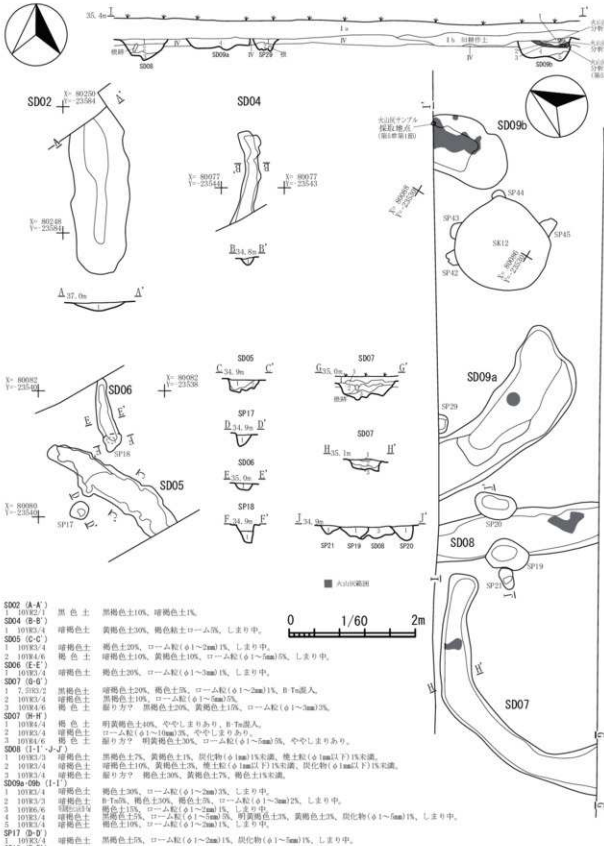
［堆積土］堆積土は暗褐色土が主体で自然堆積と思われるが、下位はロームを多く含むことから掘り方と考えられる。確認面ではB-Tmと思われる火山灰が部分的に検出されている。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.004kgだが、図示し得なかった。B-Tmの検出、出土遺物、堆積土の様相などから平安時代10世紀初頭には開口していたものと思われる。本遺構の周辺で検出された溝跡は円形周溝である可能性が高いが、本遺構は直線的な溝であってコ字状を形成する平行する溝跡も周辺で検出されていないことから、周辺の円形周溝とは異なった機能（区画・排水等）を有していた可能性が高い。

第９号溝跡（SD09a・SD09b、図38）

［位置・確認］第３号取付道路中央、27－106～108グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.8～34.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。本溝跡は２条の溝跡として検出したが同一の遺構と考えられることから、西側をSD09a、東側をSD09bとして調査・記録した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置し遺構の大半は調査区域外にあるものと思われるが、おそらく南東部が開口するC字状を呈する円形周溝と考えられる。検出できた規模は、SD09aが長さ（2.8）ｍ、幅88～105㎝、深さ1～9㎝で、SD09bが長さ（1.3）ｍ、幅69㎝、深さ12～20㎝である。断面形は



SD02 (A-A')
1 10YR2/1 黒 色 土 黒褐色土10%、暗褐色土1%。
SD04 (B-B')
1 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土30%、褐色粘土ローム5%、しまり中。
SD05 (C-C')
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
2 10YR4/6 褐 色 土 暗褐色土10%、黄褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)5%、しまり中。
SD06 (E-E')
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土20%、ローム粒(φ1～3mm)1%、しまり中。
SD07 (G-G')
1 7.5YR3/2 黒褐色土 暗褐色土20%、褐色土5%、ローム粒(φ1～2mm)1%、B-Tm混入。
2 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)5%。
3 10YR4/6 褐 色 土 腐り方? 黒褐色土20%、黄褐色土10%、ローム粒(φ1～3mm)3%。
SD07 (H-H')
1 10YR4/4 褐 色 土 明黄褐色土40%、ややしまりあり、B-Tm混入。
2 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ1～10mm)3%、ややしまりあり。
3 10YR4/6 褐 色 土 腐り方? 明黄褐色土30%、ローム粒(φ1～5mm)5%、ややしまりあり。
SD08 (I-I'-J-J')
1 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土7%、黄褐色土1%、炭化物(φ1mm)1%未満、焼土粒(φ1mm以下)1%未満。
2 10YR3/4 暗褐色土 暗褐色土10%、黄褐色土3%、焼土粒(φ1mm以下)1%未満、炭化物(φ1mm以下)1%未満。
3 10YR3/4 暗褐色土 腐り方? 褐色土30%、黄褐色土7%、褐色土1%未満。
SD09a-09b (I-I')
1 10YR3/4 暗褐色土 褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)3%、しまり中。
2 10YR3/3 暗褐色土 B-Tm5%、褐色土30%、褐色土5%、ローム粒(φ1～3mm)2%、しまり中。
3 10YR6/6 明黄色土10% 褐色土15%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
4 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土5%、ローム粒(φ1～5mm)5%、明黄褐色土3%、黄褐色土3%、炭化物(φ1～5mm)1%、しまり中。
5 10YR3/4 暗褐色土 褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
SP17 (D-D')
1 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土5%、ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～5mm)1%、しまり中。
SP18 (F-F')
1 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ1～2mm)1%、しまり中。
SP19 (J-J')
1 10YR4/3 ニル褐粘土 暗褐色土7%、黄褐色土3%。
SP20 (J-J')
1 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土30%、明黄褐色土1%。
SP21 (J-J')
1 10YR3/4 暗褐色土 明黄褐色土7%。

図38 溝跡 (1)

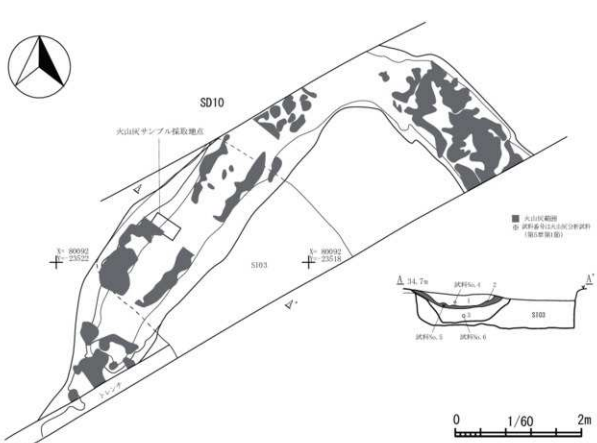


図39　溝跡（2）

図40　溝跡　出土遺物

逆台形状をなしており、底面は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。SD09aの西端と東端との比高差は16㎝で、東方向に底面は傾斜している。

［堆積土］堆積土には暗褐色土が主体となっており、SD09a・SD09b両溝の堆積土上位にはB-Tmが薄層をなして自然堆積しているのが部分的に検出された。SD09bのセクション部分で採取した火山灰を分析・同定したところ、B-Tmと再堆積した十和田八戸火山灰（To-H）であるとの結果を得た（第５章第１節）。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.01kgで、図示し得なかった。上位でB-Tmが検出されたことと、出土遺物、堆積土の様相から10世紀初頭には開口していたものと思われる。本遺構は南東部が途切れる円形をなしており、その形態から墓として造られた円形周溝であるものと考えられる。なお、本溝跡の南東部、途切れている部分に位置するSK12との関係性は不明である。

第10号溝跡（SD10、図39・40）

［位置・確認］第3号取付道路東側、27－103～105グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.2～34.7m、第Ⅳ層で確認したSI03と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置し遺構の大半は調査区域外にあるが、コ字状を呈するものと考えられる。検出された長さは（9.8）mで、幅120～150cm、確認面からの深さは10～50cmである。断面形は逆台形をなし、底面は第Ⅴ層を掘り込みやや起伏が見られる。北西辺全体から南東方向に傾斜しており、その比高差は28cmである。

［堆積土］堆積土は上位に暗褐色土、下位に褐色土が堆積しており、中位には全面的にB-Tmと思われる火山灰が薄層をなして自然堆積している。セクション部分で採取した火山灰を分析・同定したところ、第1層ではB-Tm、第2層ではB-TmとTo-a、第3層ではTo-aが検出された（第5章第1節）。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土土器の総重量は0.27kg、内訳は土師器0.24kg、縄文土器0.03kgで、そのうち土師器坏（図40－70）・甕（71）、鉄鎌の柄部と思われる鉄製品（72）を図示した。出土遺物と堆積土の様相から、To-a降下前の9世紀末葉頃には開口していた。本遺構の機能は、その形態や周辺遺構の状況から、墓として造られた方形周溝と思われる。

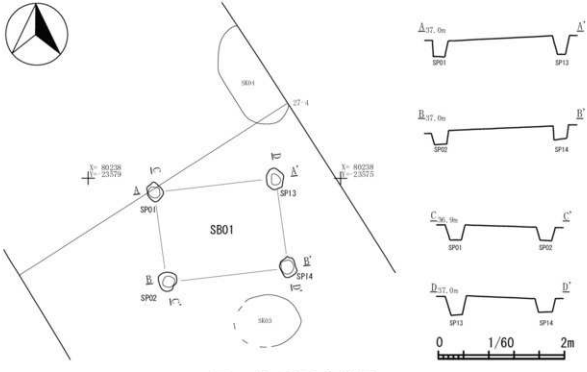
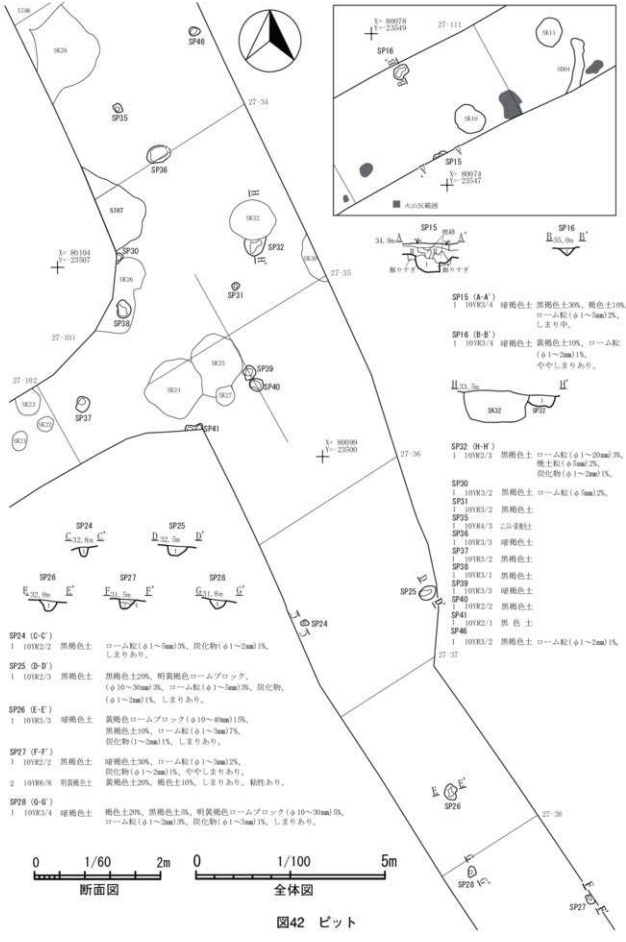


図41　第1号掘立柱建物跡



SP15 (A-A')
1　10YR3/4　暗褐色土　黒褐色土30%、褐色土10%、ローム粒(φ1～5mm)2%、しまり中。
SP16 (B-B')
1　10YR3/4　暗褐色土　黄褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
SP32 (H-H')
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒(φ1～20mm)3%、焼土粒(φ5mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%。
SP30
1　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒(φ5mm)2%。
SP31
1　10YR3/2　黒褐色土
SP35
1　10YR4/3　ニ凡黄褐土
SP36
1　10YR3/3　暗褐色土
SP37
1　10YR3/2　黒褐色土
SP38
1　10YR3/3　黒褐色土
SP39
1　10YR3/3　暗褐色土
SP40
1　10YR2/2　黒褐色土
SP41
1　10YR2/1　黒　色　土
SP46
1　10YR3/2　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)1%。
SP24 (C-C')
1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～2mm)1%、しまりあり。
SP25 (D-D')
1　10YR2/3　黒褐色土　黒褐色土20%、明黄褐色ロームブロック、(φ10～30mm)3%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物、(φ1～2mm)1%、しまりあり。
SP26 (E-E')
1　10YR3/3　暗褐色土　黄褐色ロームブロック(φ10～40mm)15%、黒褐色土10%、ローム粒(φ1～3mm)7%、炭化物(1～2mm)1%、しまりあり。
SP27 (F-F')
1　10YR2/2　黒褐色土　暗褐色土30%、ローム粒(φ1～3mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
2　10YR6/8　明黄褐色土　黄褐色土20%、褐色土10%、しまりあり。粘性あり。
SP28 (G-G')
1　10YR3/4　暗褐色土　褐色土20%、黒褐色土5%、明黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)5%、ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～3mm)1%、しまりあり。
0　1/60　2m
断面図
0　1/100　5m
全体図

図42　ピット

表9　農道27号　SP計測表

SP番号	掲載図版番号	グリッド	座標値 X	座標値 Y	標高 (m)	規模（cm） 長軸	規模（cm） 短軸	規模（cm） 深さ	備考
1	15-41	27-3・4	80237.8	-23577.9	36.8	31	26	27	SB01の一部。
2	15-41	27-4	80236.4	-23577.7	36.8	31	29	24	SB01の一部。
3	15-43	27-7	80220.8	-23569.3	36.6	38	34	21	
4	15	27-12	80201.9	-23559.0	36.4	33	31	8	
5	15	27-12	80200.9	-23558.7	36.5	37	31	14	
6	16-17	27-26	80137.0	-23522.6	36.2	38	30	26	SD1付属SB03の一部。
7	16	27-23	80154.7	-23531.0	36.3	30	23	12	
8	16-17	27-25	80142.6	-23524.4	36.2	33	30	23	SB02の一部。
9	16-17	27-25	80142.2	-23523.9	36.2	33	32	22	SB02の一部。
10	16-17	27-25	80141.6	-23525.1	36.3	30	27	30	SB02の一部。
11	16-17	27-26	80141.1	-23524.5	36.2	29	25	27	SB02の一部。
12	16-17	27-26	80139.5	-23524.0	36.2	27	22	23	SD1付属SB03の一部。土師器壺（図19-9，図20-11）の一部出土。
13	15-41	27-4	80238.0	-23576.0	36.9	34	28	33	SB01の一部。
14	15-41	27-4	80236.6	-23575.8	36.9	34	27	24	SB01の一部。
15	16-42	27-111	80071.8	-23547.2	36.4	41	(10)	20	
16	16-42	27-111	80077.0	-23548.2	34.9	44	31	12	
17	16-38	27-109	80080.1	-23539.3	34.8	32	28	22	
18	16-38	27-109	80081.2	-23538.8	34.9	34	(26)	30	SD06より古い。
19	16-38	27-108	80083.8	-23534.2	34.9	69	49	25	SD08より新しい。
20	16-38	27-108	80084.3	-23533.6	34.8	68	40	24	SD08より新しい。
21	16-38	27-108	80083.6	-23534.5	34.8	36	20	20	
22	16-33	27-44	80062.2	-23478.4	28.2	24	21	18	
23	16-33	27-44	80061.7	-23478.1	28.1	27	(16)	12	
24	16-42	27-36	80094.6	-23500.5	32.7	21	15	18	
25	16-42	27-36	80095.4	-23497.2	32.4	47	35	19	
26	16-42	27-37	80090.1	-23496.6	31.9	44	35	20	
27	16-42	27-38	80087.3	-23492.9	31.4	28	(21)	17	
28	16-42	27-38	80088.0	-23496.0	31.7	30	23	22	
29	16-38	27-107	80085.8	-23533.0	34.9	29	12	23	
30	16-34・42	27-34	80104.3	-23505.4	33.6	(28)	(17)	21	SK26より古い。堆積土－黒褐色土（10YR3/2）。
31	16	27-34	80103.5	-23502.3	33.4	22	20	25	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、ローム（φ5㎜）2％。
32	16-35・42	27-34	80104.6	-23501.8	33.9	(50)	54	22	
33	16-21	27-29	80126.6	-23516.3	35.7	27	22	30	SI02付属SB04の一部。堆積土－黒褐色土（10YR3/1）。
34	16-21	27-29	80124.3	-23514.9	35.5	36	21	16	SI02付属SB04の一部。堆積土－黒褐色土（10YR3/2）。
35	16-42	27-33	80108.2	-23505.4	33.9	29	23	31	堆積土－にぶい黄褐色土（10YR4/3）。
36	16-42	27-33・34	80107.0	-23505.4	33.8	56	46	25	堆積土－暗褐色土（10YR3/3）。
37	16-42	27-34（101）	80100.4	-23506.3	33.6	41	38	34	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）。
38	16-34・42	27-35（101）	80102.9	-23505.2	33.4	49	38	19	SK26より古い。堆積土－黒褐色土（10YR3/1）。
39	16-34・42	27-35	80101.2	-23501.9	33.2	39	34	25	堆積土－暗褐色土（10YR3/3）。
40	16-34・42	27-35	80100.9	-23501.7	33.2	38	33	21	堆積土－黒褐色土（10YR2/2）。
41	16	27-35（101）	80099.7	-23503.4	33.3	49	16	30	堆積土－黒色土（10YR2/1）。
42	16-33・38	27-107	80086.9	-23530.6	34.9	29	(22)	11	SK12より古い。堆積土－黒色土（10YR2/1）、炭化物多量。
43	16-33・38	27-107	80087.1	-23530.2	34.9	30	(10)	9	SK12より古い。堆積土－黒褐色土（10YR2/2）、炭化物少量。
44	16-33・38	27-107	80086.9	-23529.4	34.8	23	(8)	13	SK12より古い。堆積土－黒褐色土（10YR2/2）、炭化物少量。
45	16-33・38	27-107	80086.0	-23529.4	34.8	(24)	(23)	11	SK12より古い。堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、炭化物多量。
46	16-42	27-33	80110.2	-23503.4	33.8	30	24	22	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、ローム（φ1～2㎜）1％。
47	16-21	27-27・28	80134.6	-23516.3	35.9	44	39	25	堆積土－黒褐色土（10YR3/1）、ローム（φ1～20㎜）7％。
48	16-21	27-28	80134.2	-23516.4	35.9	25	20	12	堆積土－灰黄褐色土（10YR4/2）、ローム（φ1～10㎜）7％。
49	16-21	27-29	80130.5	-23513.6	35.7	(20)	(16)	17	SK29より古い。

（４）掘立柱建物跡・ピット

農道27号からは49基のピットが検出された。各ピットの計測値等は表９に、位置は図15・16遺構配置図や図42ピット、各遺構図等に示した。精査の結果、49基のピットのうち12基は４棟の掘立柱建物跡を構成するもので、第１・２号掘立柱建物跡は単独の掘立柱建物跡、第３・４号掘立柱建物跡は竪穴住居跡と組み合わさって建物跡を構成するものである。第１・２号掘立柱建物跡は以下に記述するが、第３・４号建物跡は第１・２号建物跡の項にて記載した。残り37基のピットは概ね平安時代のものが多いが、それ以降のものも一部含まれると思われる。

第１号掘立柱建物跡（SB01（SP01・02・13・14）、図41）

［位置・確認］27－４グリッドに位置し、他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］構成されるピットはSP01・02・13・14の４基で、現状では梁行１間×桁行１間の長方形の掘立柱建物跡であるが、東側に延びる可能性もある。軸方向はN－83°－Eで、柱間は梁間1.4m、桁間1.9mである。柱痕は検出されていない。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、平安時代以降の掘立柱建物跡と考えられる。

第２号掘立柱建物跡（SB 02（SP08～SP11）、図17）

［位置・確認］27－25・26グリッドに位置し、SI01の東側に位置する。他遺構との重複関係は認められなかった。

［平面形・規模］構成されるのは、SP08～SP11の４基の柱穴で、現状では梁行１間×桁行１間の長方形の掘立柱建物跡と推定されるが、西側に延びる可能性もある。軸方向はN－151°－Eである。柱間は梁間0.8m、桁間1.3mである。柱痕は検出されなかった。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、平安時代以降の掘立柱建物跡と考えられる。

（５）焼土遺構

第１号焼土遺構（SN01、図43）

［位置・確認］調査区北側中央、27－７グリッドに位置し、標高は約36.7ｍである。第Ⅳ層で確認した。

［平面形・規模・堆積土］調査区域外に延びているが、確認できた規模は長軸156cm、短軸110cmの

図43　焼土遺構

不整形の掘り方を有し、95×130㎝の範囲に焼土が散布している。堆積土は厚さ13㎝の焼土の上部に黒色土が自然堆積している。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土していないが、土層観察から縄文時代の焼土遺構である可能性がある。

2　遺構外の出土遺物（図44・45）

農道27号の遺構外からは縄文土器4.12kg、土師器5.75kg、須恵器0.29kg、合計10.16kgの土器類と近代の遺物が出土し、礫が0.38kg出土した。遺物量は、農道１号より南側からの出土が大半である。縄文土器は農道本線部分と第３号取付道路部分とほぼ同量（それぞれ約２kg程度）であるが、土師器は第３号取付道路部分（約1.8kg）の約２倍の量が農道本線部分から出土（約4.0kg）しており、時代によって土地利用のあり方が異なっていることが垣間見られる。以下、縄文時代の遺物（73～106）と平安時代の遺物（107～119）について記述する。

縄文時代の遺物は、土器27点（73～99）と石器７点（100～106）を図示した。土器は、前期（73～91）、中期（92～97）、後期（98・99）がある。前期は円筒下層ｄ式のものが主体で、縄の側面圧痕や刺突、結節回転文、結束羽状縄文、単軸絡条体回転文、多軸絡条体回転文など多彩な文様施文がなされている。中期は少量だが各時期の土器が出土している。92は円筒上層ｂ式の弁状突起で、93は頸部以下全面に刺突文を施しており、口縁部には単軸絡条体回転文を施文している。器形や口縁の施文技法から円筒上層ｃ式頃と思われる。94・95は中期後葉のものと思われ、95は円筒上層ｅ式である。後期は十腰内Ⅰ式（98）と後半期の上げ底の底部片（99）がある。

石器は、尖頭器（100）、削器（101～103）、石錐（104）、磨製石斧（105）、凹石（106）がある。尖頭器（100）は未製品と思われる。102・103の削器には連続した剥離によって刃部が形成されている。104は石錐で、使用頻度が高かったものと思われ、刃部には摩滅と微細な剥離が見られる。

平安時代の遺物には、土師器（107～115）、須恵器（116）、土製品（117・118）、鉄製品（119）がある。土師器はミニチュア土器（107）・鉢（108）・坏（109）・甕（110～113）・広口壺（114）・瓶（115）がある。109は底面も含め内外面にミガキ調整を施す坏で、内面は黒色処理が滅失した可能性がある。114は内面にミガキが施されているが、黒色処理を施しているかどうかは不明である。須恵器は坏(116)を図示したが、底外面にヘラケズリを施している。土製品は、土錘（117）と土鈴紐部（118）がある。鉄製品（119）はSK24・25周辺で出土したもので、これらの遺構と関連する可能性がある。

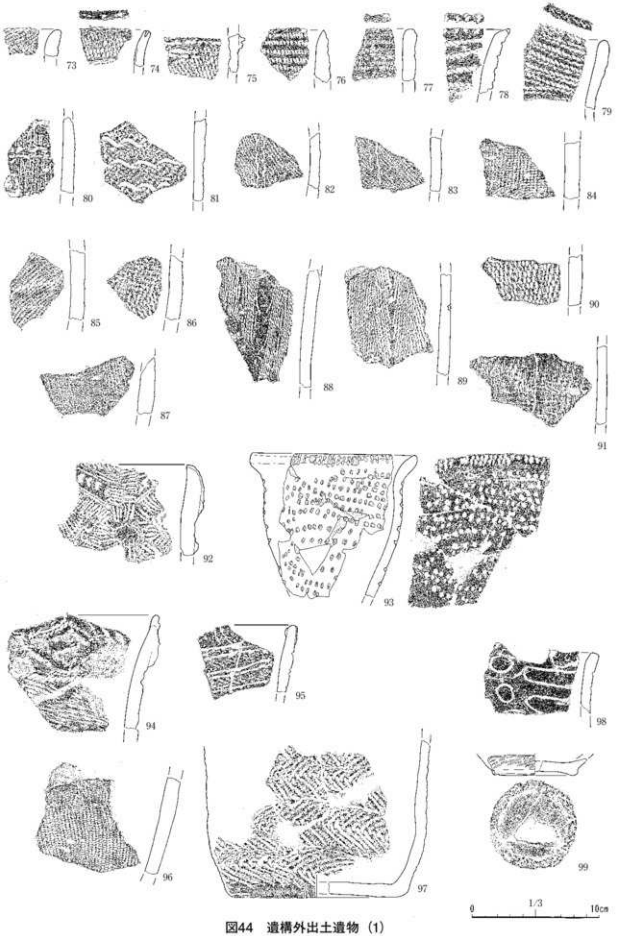


図44　遺構外出土遺物（1）

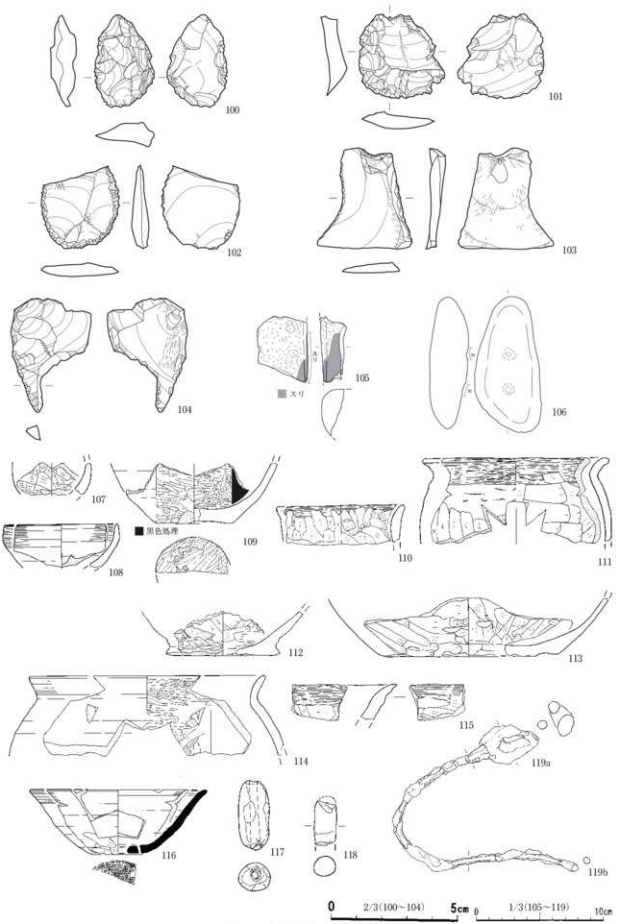


図45　遺構外出土遺物（2）

3　遺物観察表

表10　農道27号出土土器類　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
19	1	S001	覆土	土師器	ミニチュア土器	胴部	-	-	(3.15)	輪積痕、ナデ	ナデ（剥落）	穿孔？あり。
19	2	S001	床面P14・15・-3、8層P5、カマド床面P28、カマド覆土	土師器	中甕	略完形	(14.9)	7.2	13.8	横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ（被熱、磨耗により不明瞭）	輪積痕、ナデ、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ（被熱、磨耗により不明瞭）、指ナデ	底面・オサエ、材料分析試料№14。
19	3	S001	8層P5	土師器	小甕	口縁部	(14.6)	-	(4.8)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ、横ナデ	
19	4	S001	床面P41	土師器	甕	底部	-	(7.2)	(3.5)	ヘラナデ	指ナデ（剥落）	底面・ヘラナデ。
19	5	S001	カマド床面P19、カマド覆土	土師器	甕	口縁部	(26.6)	-	(7.8)	横ナデ、ヘラケズリ	ナデ、刷毛目、横ナデ	
19	6	S001	カマド床面P44	土師器	甕	体部上半	(22.0)	-	(16.8)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ、横ナデ	
19	7	S001	カマド床面P16、27-26 1層	土師器	甕	口縁部	(25.6)	-	(12.6)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ロクロナデ、横ナデ、炭化物付着	
19	8	S001	カマド覆土P24、カマド床面、カマド床面P2、覆土P40、覆土、27-26 1層	土師器	甕	略完形	(22.6)	-	(24.8)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、焼土付着	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、指ナデ	
19	9	S001	覆土、カマド覆土、カマド覆土P32、カマド床面P47・50・51、床面P1、SP12P1確認面、27-26 1層	土師器	甕	体部上半	(25.8)	-	(28.1)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、焼土付着	輪積痕、ナデ（上部摩滅により不明瞭）	
20	10	S001	床面P6・30・31・54、8層P8・9、カマド床面P19、27-26覆土、27-26 1層	土師器	甕	略完形	(21.4)	9.8	31.7	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、指ナデ	底面・砂底、材料分析試料№13。黒色物付着。
20	11	S001	床面P17・20～22・27・42・48・49・53、床面P39・36・52・55・56、覆土、27-26覆盆・1層、SP12下層遺構、カマド覆土	土師器	甕	略完形	-	(9.2)	(32.3)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、焼土付着	刷毛目、横ナデ、ヘラナデ、指ナデ	底面・上げ底、オサエ、ヘラナデ。
20	12	S001	床面P3	土師器	小甕	底部	-	(7.0)	(4.5)	ヘラナデ、ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ	底面・ヘラナデ。
20	13	S001	カマド覆土P34、27-26	土師器	甕	体部下半	-	(10.2)	(10.2)	ヘラナデ、ヘラケズリ	指ナデ、ナデ（摩滅）	底面・ヘラナデ。
20	14	S001	カマド覆盆P18	土師器	鉢	口縁部	(33.4)	-	(6.4)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、ナデ	ナデ、横ナデ	材料分析試料№15。
20	15	S001	掘り方	土師器	鉢	口縁部	-	-	(3.4)	ナデ、横ナデ	ナデ、横ナデ	
20	16	S001	掘り方	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(2.5)	単軸絡条体第5類（R）、ナデ	（磨耗）	図27-61と同一個体？後期？
23	17	S002	床面直上P7	土師器	中甕	口縁部	(15.0)	-	(9.2)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、ナデ	横ナデ、ヘラナデ、ナデ	
23	18	S002	床面直上P2	土師器	小甕	口縁部	(21.6)	-	(10.1)	輪積痕、オサエ、横ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ（摩滅）	
23	19	S002	覆土・床面直上P4～6	土師器	大鉢	略完形	(33.8)	11.0	14.9	輪積痕、オサエ、横ナデ、ナデ	ミガキ、黒色処理	底面・上げ底、オサエ、材料分析試料№21。
24	20	S003	P(p1覆土、床面	土師器	小甕	体部上半	(12.4)	-	(10.8)	ロクロ、ナデ?（摩滅）	横ナデ、ナデ（摩滅）	
24	21	S003	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.6)	(5.5)	輪積痕、ヘラナデ、ヘラケズリ	指ナデ	底面・砂底。
26	22	S004	覆土P11	土師器	坏	体部下半	-	6.0	(3.1)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
26	23	S004	床面直上P4・37、覆土	土師器	坏	略完形	12.9	5.2	4.9	ロクロ、ナデ	ロクロ	底面・回転糸切。材料分析試料№16。
26	24	S004	覆土P9、SP27覆土	土師器	甕	底部	-	(9.6)	(4.0)	ヘラケズリ	指ナデ、刷毛目	底面・上げ底、砂底。
26	25	S004	覆土P8	土師器	壺	胴部	-	-	(5.7)	輪積痕、ロクロ、黒色物付着	ミガキ、黒色処理	材料分析試料№17。
28	28	S005b	覆土	土師器	坏	体部上半	(16.0)	-	(4.6)	ロクロ	ロクロ	
28	29	S005	覆土P4	土師器	小甕	口縁部	(16.0)	-	(6.6)	横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、焼土付着	輪積痕、ナデ、横ナデ	
28	30	S005	P(p1覆土	土師器	小甕	底部	-	(7.8)	(3.8)	輪積痕、ヘラナデ	ナデ	底面・砂底。
28	31	S005	覆土	須恵器	壺	口縁部	(12.0)	-	(2.2)	ロクロ	ロクロ	
30	32	S006	覆土	土師器	甕	口縁部	(13.6)	-	(5.4)	横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ、横ナデ	
30	33	S006	覆土	土師器	甕	口縁部	(16.6)	-	(3.4)	横ナデ	ナデ、横ナデ	
30	34	S006	覆土、覆土P11～13・14・16～23・25～27	土師器	甕	体部上半	(27.6)	-	(31.4)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、焼土付着	輪積痕、ナデ、ヘラナデ	底面・穿孔あり。材料分析試料№18。
30	35	S006	カマド5層P1	土師器	甕	体部上半	(22.8)	-	(13.2)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、焼土付着	輪積痕、ナデ、横ナデ、指ナデ	
30	36	S006	覆土P10	土師器	甕	底部	-	(11.8)	(5.8)	オサエ、ナデ、ヘラケズリ	ナデ	底面・ナデ。
31	37	S007	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.4)	(3.1)	オサエ、ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ	底面・木葉痕？
36	38	SK03	1層P4-6	縄文土器	壺	体部上半	(11.8)	-	(12.0)	粘土紐貼付、沈線、ミガキ	ミガキ	材料分析試料№30。図36-40・36-39と同一個体、施期・十腰内1式
36	39	SK03	1層P1-2、27-4 風倒木	縄文土器	壺	胴部	-	-	(6.4)	沈線、ミガキ	ミガキ	図36-38・36-40と同一個体、施期・十腰内1式
36	40	SK03	1層P3-5	縄文土器	壺	底部	-	(11.1)	(7.7)	沈線、ミガキ	ミガキ	図36-38・36-39と同一個体、施期・十腰内1式

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm） 口径	底径	器高	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
36	42	SK06	底面直上・P8	土師器	中甕	完形	11.9	6.6	10.9	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ、横ナデ	底面-ヘラナデ。材料分析試料No.20。
36	43	SK06	3層P6、4層P2～4、底面直上P5・11・12	土師器	中甕	略完形	12.0	-	13.0	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ、指ナデ、横ナデ	材料分析試料No.19。底外面剥落。歪みあり。
36	44	SK06	1層P7、27-113 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.4)	粘土紐貼付、単軸絡条体第1類（L）側面圧痕、刺突	ミガキ（磨耗）	中期・円筒上層c式
36	45	SK06	6層P1	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.1)	結束第1種（RL・LR）?	ナデ	混和材（豆類の可能性有り）の脱落痕？あり。植物繊維少量。前期～中期
36	46	SK06	覆土P13	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.9)	沈線	ミガキ	後期・十腰内I式
36	47	SK06	底面直上P10	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.4)	沈線	平滑なナデ	後期・十腰内I式
37	48	SK07	覆土、2層P1、4層P2～4	縄文土器	深鉢	体部上半	-	-	(17.2)	粘土紐貼付、口唇－単軸絡条体第1類（L）回転、口縁－馬蹄状圧痕（L）・縄側面圧痕（L・R・L）、胴部－結束第1種（RL（0段多条）・一方不明）	ナデ（磨耗）	材料分析試料No.31。中期・円筒上層b式
37	49	SK07	確認面	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.1)	LR横	平滑なナデ	植物繊維微量。中期前半
37	51	SK12	底面P1、27-109 I層	須恵器	壺	底部	-	7.0	(4.6)	ロクロ、ナデ	ロクロ	底面-ヘラナデ。
37	52	SK13	覆土	縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(3.7)	R・L・L側面圧痕、刺突	平滑なナデ	中期・円筒上層b式
37	53	SK13	2層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.9)	結束第1種（RL・LR）	ミガキ	中期前半
37	54	SK13	覆土、27-114 I層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.3)	結束第1種（RL・LR、いずれも0段多条）	平滑なナデ	中期前半
37	55	SK15	2層上部	土師器	坏	体部下半	-	(7.0)	(4.8)	ロクロ	ロクロ	底面-静止糸切。
37	56	SK16	覆土	土師器	甕	胴部	-	-	(5.1)	ヘラナデ	刷毛目、ナデ	
37	57	SK16	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.4)	沈線、RL横	ミガキ	後期・十腰内I式
37	58	SK16	覆土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.2)	沈線	ミガキ	後期・十腰内I式
37	59	SK16	覆土	縄文土器	ミニチュア深鉢	口縁部	-	-	(2.3)	口縁肥厚、沈線	ミガキ	図37-62・37-63と同一個体。後期・十腰内I式
37	60	SK17	覆土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(9.4)	沈線	平滑なナデ	後期・十腰内I式
37	61	SK17	覆土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.2)	単軸絡条体第5類（L）回転	ミガキ	図20-16と同一個体？後期？
37	62	SK17	覆土	縄文土器	ミニチュア深鉢	胴部	-	-	(2.6)	沈線	ミガキ	図37-59・37-63と同一個体。後期・十腰内I式
37	63	SK17	覆土	縄文土器	ミニチュア深鉢	胴部	-	-	(2.1)	沈線	ミガキ	図37-59・37-62と同一個体。後期・十腰内I式
37	64	SK28	覆土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.6)	単軸絡条体第5類（r）回転	平滑なナデ	後期・十腰内I式
37	65	SK30	底面P4	土師器	甕	口縁部	-	-	(3.7)	ロクロ?	ナデ、横ナデ	
37	66	SK30	覆土、底面P1～5	土師器	甕	胴部	-	-	(23.7)	輪積痕、ヘラナデ、ヘラケズリ、指ナデ	ナデ、ヘラナデ	
40	67	SD01	1層	土師器	坏	口縁部	(11.6)	-	(3.2)	ロクロ	ロクロ	
40	68	SD01	覆土	土師器	坏	底部	-	(5.8)	(3.5)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	底面-回転糸切。
40	69	SD01	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.2)	(3.5)	輪積痕、ヘラナデ?（摩滅?）	指ナデ	底面-砂底。
40	70	SD10	覆土	土師器	坏	底部	-	(5.6)	(2.1)	ロクロ	ロクロ	底面-回転糸切。
40	71	SD10	覆土、1層	土師器	甕	底部	-	(8.6)	(2.0)	ヘラナデ	指ナデ	底面-ヘラナデ。
44	73	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.2)	結束第1種（LR・RL）	平滑なナデ	植物繊維少量。前期後半・円筒下層d2式
44	74	遺構外	27-21 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.9)	口唇－刺突、口縁－単軸絡条体第1類（L）回転	ナデ？（剥落）	植物繊維中量。図44-75と同一個体。前期後半・円筒下層d2式
44	75	遺構外	27-20 I層	縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(3.0)	隆帯－粘土紐貼付・刺突、胴部－単軸絡条体第1類（L）回転	ナデ？（剥落）	植物繊維中量。図44-74と同一個体。前期後半・円筒下層d2式
44	76	遺構外	27-112 風倒木	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.0)	口縁－単軸絡条体第1類（R）側面圧痕、口唇－LR横	ミガキ	植物繊維少量。前期後半・円筒下層d2式
44	77	遺構外	27-15 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.0)	口唇－LR側面圧痕、口縁－単軸絡条体第1類（R）側面圧痕、LR側面圧痕	ミガキ	植物繊維中量。前期後半・円筒下層d2式
44	78	遺構外	27-23 Ⅳ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.0)	口唇－LR側面圧痕、口縁－LR側面圧痕	ミガキ	植物繊維微量。前期後半・円筒下層d2式
44	79	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.5)	LR・RL側面圧痕	ミガキ	植物繊維少量。前期後半・円筒下層d2式
44	80	遺構外	27-45 I層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.9)	単軸絡条体第1類（R）回転、結節回転文（R）	ミガキ	植物繊維多量。前期後半
44	81	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.4)	結束第1種（LR・LR）、結節回転文（LR）	平滑なナデ	植物繊維少量。前期後半
44	82	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.4)	LR縦回転、結節回転文（R）、縄端閉塞他条縄の回転文（r）?	平滑なナデ	植物繊維少量。図44-83と同一個体。前期後半
44	83	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.3)	LR縦回転、結節回転文（R）	平滑なナデ	植物繊維微量。図44-82と同一個体。前期後半
44	84	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.4)	RL斜回転	ミガキ	植物繊維多量。前期後半

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
44	85	遺構外	27-112 風倒木	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.6)	結束第1種（LR·RL）	ミガキ	植物繊維少量。前期後半
44	86	遺構外	27-45 I層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.1)	結束第1種（LR·RL）、多軸絡条体（r）回転	ミガキ	植物繊維微量。前期後半
44	87	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(4.2)	単軸絡条体第1類（R）回転	ミガキ	植物繊維中量。前期後半
44	88	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(9.2)	単軸絡条体第1A類（R）回転	ミガキ	植物繊維少量。前期後半
44	89	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(8.1)	単軸絡条体第1A類（L）回転、縄端による刺突？	ミガキ	植物繊維少量。前期後半
44	90	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.9)	多軸絡条体（r）	ミガキ	植物繊維少量。前期後半
44	91	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.1)	直前段合撚 R（L（r r）、R（r r））	ミガキ	植物繊維多量。前期後半
44	92	遺構外	27-113 Ⅳ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(7.1)	口縁－粘土紐貼付・側面圧痕（R·L·R）・馬蹄状圧痕（L）・単軸絡条体第1類（R）回転、口唇－単軸絡条体第1類（R）回転	ミガキ	弁状突起。中期・円筒上層b式
44	93	遺構外	（注記なし）	縄文土器	深鉢	体部上半	(12.8)	-	(11.3)	口縁－単軸絡条体第1類（R）回転、胴部－刺突	オサエ、ミガキ	中期・円筒上層c式前後？
44	94	遺構外	27-110 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(9.0)	粘土貼付、口唇－RL側面圧痕、口縁・胴部－RL側面圧痕・RL横、剥落あり	ミガキ	中期後葉
44	95	遺構外	27-111 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.3)	口唇－粘土紐貼付・LR横？、口縁－沈線、LR縦回転	ナデ	中期・円筒上層e式
44	96	遺構外	27-47 表採	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(7.7)	RL斜回転	平滑なナデ	植物繊維少量。中期前葉？
44	97	遺構外	27-113 Ⅳ層	縄文土器	深鉢	体部下半	-	(14.0)	(12.4)	結束羽状縄文（RL·LR（共に0段多条））、縄端回転文（撚り方向不明）、ミガキ	ナデ、ミガキ	底外面-ミガキ。中期
44	98	遺構外	27-112 風倒木	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.9)	沈線	ミガキ	後期・十腰内I式
44	99	遺構外	27-106 I層	縄文土器	深鉢	底部	-	(6.8)	(1.6)	LR横	ナデ	上げ底。後期後半？
45	107	遺構外	27-105 I層	土師器	ミニチュア土器	底部	-	-	(2.6)	ナデ	指ナデ	
45	108	遺構外	27-35 I層	土師器	鉢	体部上半	(8.8)	-	(3.5)			
45	109	遺構外	27-37 I層	土師器	坏	体部下半	-	(6.0)	(4.8)	ロクロ、ミガキ、（黒色処理なし）	ナデ、ミガキ、（黒色処理はとんでる可能性あり）	底面-ミガキ。
45	110	遺構外	27-39 I層	土師器	甕	口縁部	(10.2)	-	(3.1)	横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ、横ナデ	
45	111	遺構外	27-23 I層	土師器	甕	口縁部	(14.7)	-	(6.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、横ナデ	
45	112	遺構外	27-29 I層	土師器	甕	底部	-	(8.8)	(3.5)	輪積痕、ヘラナデ	ナデ	底面-砂底、ナデ。
45	113	遺構外	27-33 I層、II層	土師器	甕	底部	-	(14.0)	(4.6)	ヘラナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ	底面-オサエ。
45	114	遺構外	27-101 I層、27-34·35 I層	土師器	広口壺	口縁部	(18.6)	-	(6.3)	ロクロ	ナデ、ミガキ	内面黒色処理なし？
45	115	遺構外	27-37 I層	土師器	堝	口縁部	-	-	(2.9)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、ナデ	輪積痕、ナデ、横ナデ	
45	116	遺構外	27-106 I層、27-105 I層	須恵器	坏	略完形	(14.0)	(4.8)	(5.0)	ロクロ、指ナデ	ロクロ	底面-ヘラケズリ。

表11　農道27号出土石器・土製品・金属製品　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	石質	計測（mm）			重さ（g）		備考
							長さ	幅	厚さ	処理前	処理後	
26	26	SI04	覆土P27～31	土製品	羽口	-	121	75	(12.1)	316.6		材料分析試料No.32。籾、植物繊維等多量混入。高さ69㎜、外径73㎜、内径32㎜。溶損角度20・30度、複数回操業の可能性あり。
26	27	SI04	覆土S3	石器	石鏃	珪質頁岩	(26)	(11)	(45)	(0.7)		欠損。火バネあり。
36	41	SK04	底面S1	石器	凹石	安山岩	112	73	48	492.1		
37	50	SK07	覆土	石器	削器	珪質頁岩	32	33	11	5.7		
40	72	SD10	覆土1層	鉄製品	鎌の柄部？	-	(59)	(13)	(11)	(6.4)	(4.3)	欠損。
45	100	遺構外	27-113 Ⅳ層	石器	尖頭器	珪質頁岩	38	25	11	7.3		未製品。
45	101	遺構外	27-110 I層	石器	削器	珪質頁岩	34	34	11	8.0		
45	102	遺構外	27-22 I層	石器	削器	珪質頁岩	34	31	7	6.9		
45	103	遺構外	27-16 II層	石器	削器	珪質頁岩	41	38	8	6.6		
45	104	遺構外	27-20 I層	石器	石錐	珪質頁岩	46	33	15	12.3		
45	105	遺構外	27-7 I層	石器	磨製石斧	緑色片岩	(52)	(41)	(22)	(58.3)		欠損。
45	106	遺構外	27-11 I層	石器	凹石	安山岩	53	107	31	191.0		欠損。大半タタキ、スリ、擦痕あり。
45	117	遺構外	27-34 攪乱	土製品	土錘	-	5.6	2.5	2.2	27.8		完形。オサエ。貫通孔φ6mm。
45	118	遺構外	27-114 I層	土製品	土鈴	-	(3.6)	(1.8)	(1.6)	(8.9)		紐部。粘土積痕。
45	119	遺構外	27-35 I層？	鉄製品	弧状？	-	a (59)	(31)	(18)	(1072.3)	(35.1)	欠損。土壌ごと取り上げ（処理前重量には土壌・容器重量含む）。
							b (251)	(10)	(10)			
写真35	－	SI05	覆土	石器	破裂礫	凝灰岩	200	128	51	(906.5)		破片数71点。

第４節　農道28・１号

農道28号は、遺跡の存在する台地の南側縁辺部に位置し、本路線の南端は熊沢溜池に落ちていく段丘崖となっている。調査前の標高は、北西端で約36.7ｍ、南東の28－37グリッドで約33.5ｍである。メインとなる農道28号調査区は長さ約197ｍ、幅約5.2ｍ、流末水路部分は長さ約31ｍ、幅約2.0ｍ、合計1,114㎡を調査した。

調査の結果、28－21グリッド以北では農道１号を含め、遺構・遺物とも皆無であった。比較的平坦な28－22グリッドから28－37グリッドに遺構は密に検出され、斜度が強くなる28－37グリッド以南ではまた遺構は疎に分布する。農道28号で検出された遺構は、竪穴住居跡５軒、土坑20基、溝跡６条、ピット25基で、これらの多くが平安時代の遺構と思われる。遺物は、縄文・平安時代の土器類11箱、石器類３箱、鉄製品１箱の計段ボール箱14箱分が出土した。縄文時代の遺物はごく少量で、土師器製作の材料と思われる粘土塊も出土した。

併せて調査を行った農道１号は、農道28号の中央やや北寄り部分、28－17グリッド付近で直交する農道である。平成20年度に南西半の調査を行っており、平成21年度はそれに隣接する区間、工事用中心杭№3+3.95～№3+21.70間、長さ約18ｍ、幅約7.3ｍの133㎡の調査を行った。その結果、遺構・遺物とも皆無であったため調査区を図47に示すのみとする。農道１号の遺構確認面の標高は、約35.7ｍであった。

以下、農道28号で検出された古代以前の遺構について、遺構種ごとに記述を行う。

１検出遺構

（１）竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（SI01、図48～52）

［位置・確認］調査区南側中央南寄り、28－36・37グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.5～33.8ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK19と重複し、本遺構が新しい。カマド煙出し部でSP24とも重複するが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は一辺が約3.7ｍの方形を呈する。壁長及び確認面から床面までの深さは、北西壁3.7ｍ・深さ45㎝、北東壁3.7ｍ・深さ33㎝、南東壁3.8ｍ・深さ37㎝、南西壁3.7ｍ・深さ39㎝を測る。いずれの壁もしっかりした立ち上がりをみせ、住居の軸方向はＮ－149°－Ｅである。

［床面・壁溝］床面は基本的に地山をそのまま床面としているが、東側などでは部分的に貼り床を施して平坦に整えている。壁溝は検出されなかった。

［柱穴］５基検出されたピットのうち、Pit２・３・４・５の４基が柱穴と思われる。各Pitの規模は、Pit２が28×21㎝で深さ24㎝、Pit３が21×17㎝で深さ27㎝、Pit４が21×15㎝で深さ15㎝、Pit５が20×14㎝で深さ６㎝を測る。これらは住居のコーナー部分で検出されたが、カマドと反対側のピット（Pit２・３）は深さを有しているものの、カマド側のピット（Pit４・５）は浅いという特徴がある。いずれも柱痕は確認されなかった。

［カマド］南東壁の南寄りに検出された。袖部は粘土で構築されており、燃焼部内側は被熱により赤色化・硬化していた。41×33㎝の火床面が検出され、深さ８㎝まで被熱が及んで赤色化・硬化して

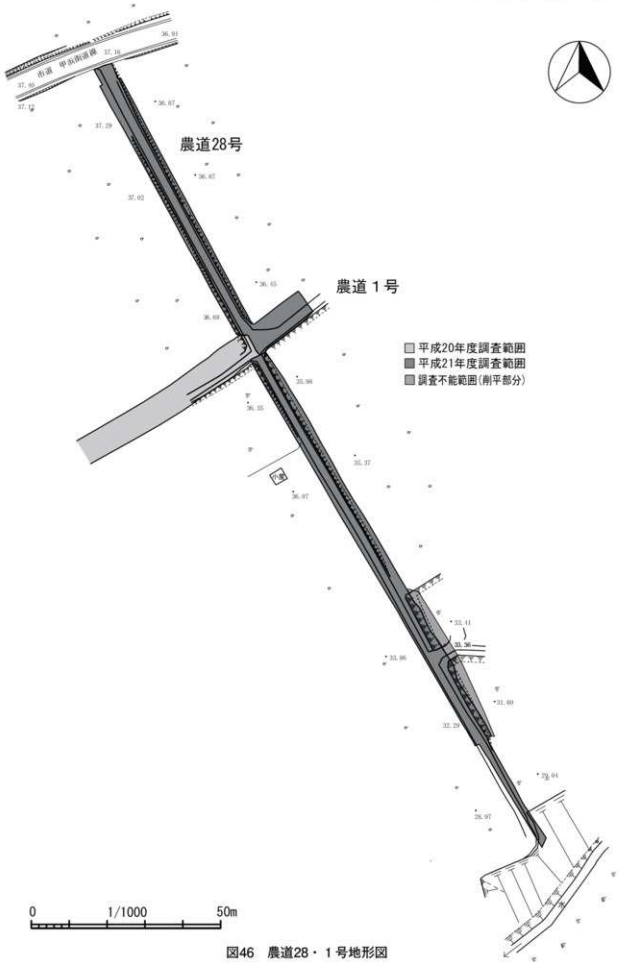


図46　農道28・１号地形図

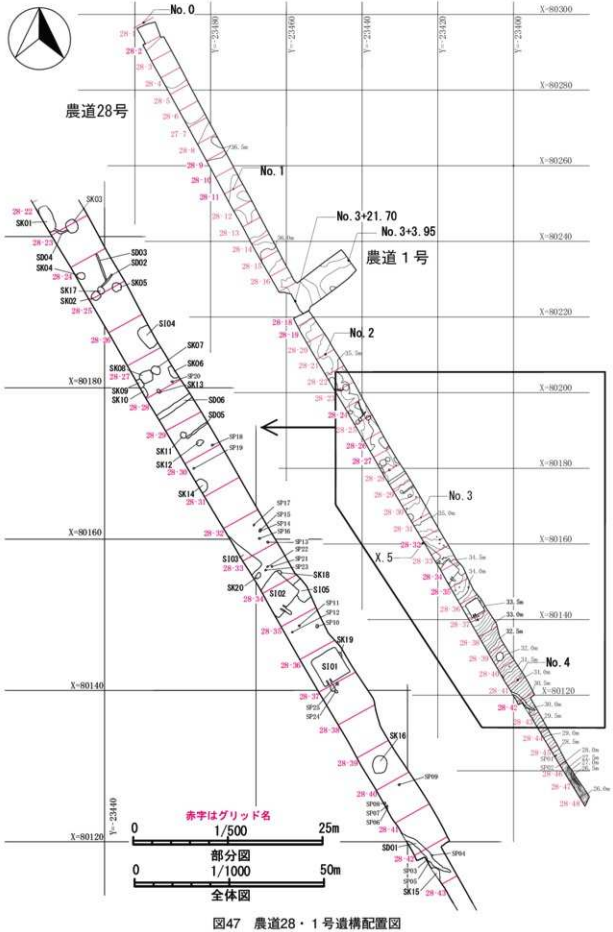
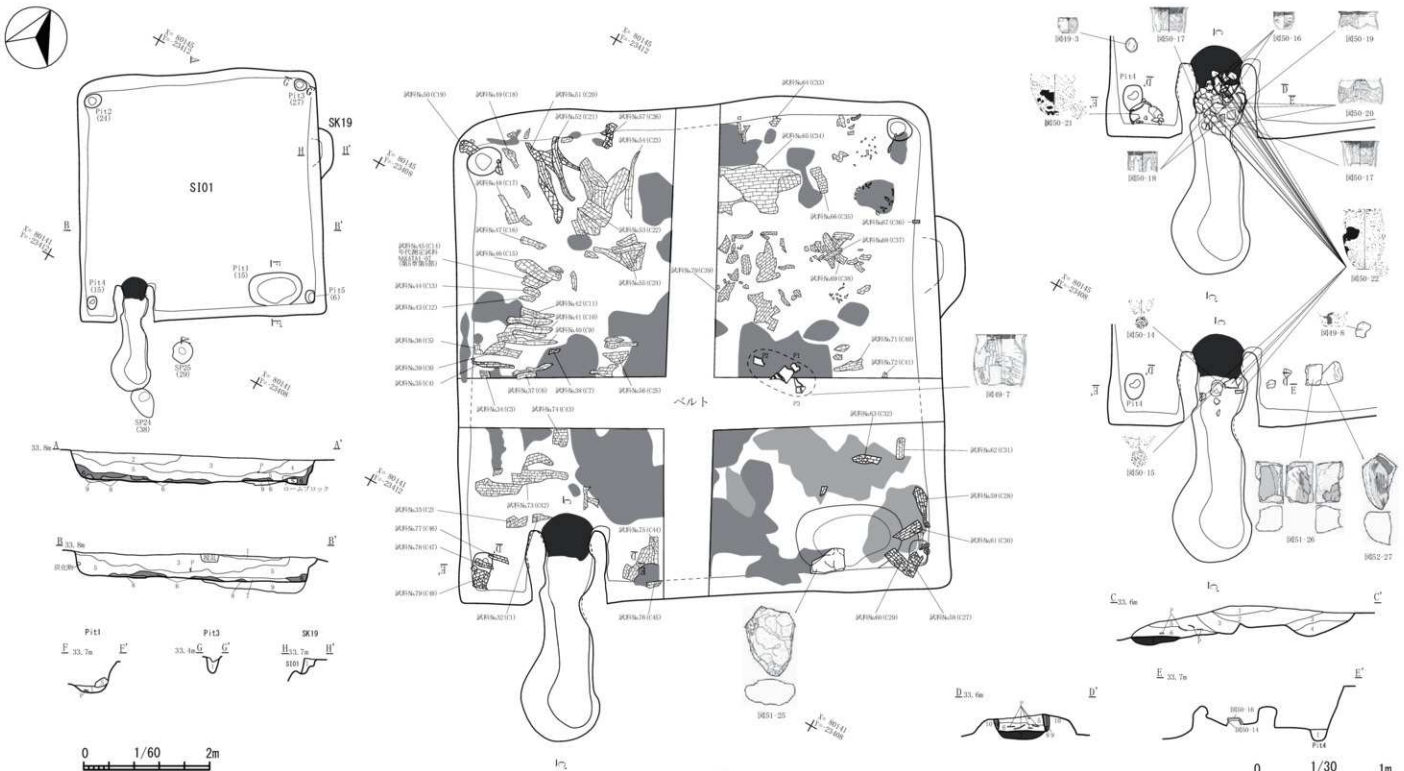


図47　農道28・１号遺構配置図



SI01 (A-A'・B-B')
1 10YR2/1 黒 色 土 焼土粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～5mm)1%、泥石(φ3mm)1%
2 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒(φ1～5mm)1%、ローム粒(φ1～10mm)2%、炭化物(φ1mm)1%、
3 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒(φ1～5mm)1%、ローム粒(φ1～5mm)5%、
4 10YR3/1 黒 色 土 焼土粒(φ1～5mm)1%、炭化物(φ1mm)1%、
5 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒(φ5～10mm)2%、炭化物(φ1～10mm)3%、ローム粒(φ1～30mm)5%、
6 2.5YR4/6 赤褐色土 ローム。
7 10YR4/4 褐 色 土 炭化物主体層。
8 10YR4/6 褐 色 土 焼ロラ)、黄褐色土20%、褐色焼土10%、明黄褐色土7%、炭化物(φ1mm)5%、
SI01Pit1 (F-F')
1 10YR3/4 暗褐色土 明赤褐色焼土粒(φ1～10mm)7%、炭化物(φ1～10mm)10%、ややしまりあり。
SI01Pit3 (G-G')
1 10YR1/6 褐 色 土 黄褐色土15%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～3mm)1%、しまり中。
SK19 (H-H')
1 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒(φ1～2mm)3%、ややしまりあり、根が多い。

■ 火 床 面
■ 焼土範囲
■ 炭化物範囲
※ 試料No.断面図と試料番号（第2平面図）

SI01カマド (C-C'・D-D')
1 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土15%、赤褐色焼土粒(φ1～3mm)3%、明赤褐色焼土粒(φ5mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、浅黄橙色土1%、
2 10YR4/4 褐 色 土 暗褐色土30%、焼褐色土10%、赤褐色焼土粒(φ1～10mm)1%、炭オレープ色土1%、
3 10YR3/3 暗褐色土 暗褐色土20%、赤褐色焼土2%、炭化材(φ20mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%未満、
4 10YR3/3 暗褐色土 褐色土10%、赤褐色焼土粒(φ1mm)1%未満、
5 10YR3/4 暗褐色土 赤褐色土25%、褐色土20%、にぶい黄橙色土7%、暗褐色1.5%、暗赤褐色焼土3%、炭化物(φ1～5mm)2%、
6 2.5YR4/6 暗 色 土 褐暗褐色土40%、褐色土10%、赤褐色焼土2%、炭化物(φ1～2mm)1%、
7 2.5YR4/8 赤褐色土 本層上面が火床面。上面は明赤褐色を呈する、非常に固くしまっている。
8 2.5YR5/8 明赤褐色土 袖の芯り付け材
9 5YR5/8 明赤褐色土 袖の構築材。被熱部分は内側ほど赤色強い、外側は橙色化している。
10 10YR5/4 にぶい黄橙土 袖の構築材。内側は橙色化に機移している。
SI01ﾋﾟｯﾄ4 (E-E')
1 10YR4/4 褐 色 土 炭化物(φ1～3mm)2%、しまり弱。

図48 第1号竪穴住居跡

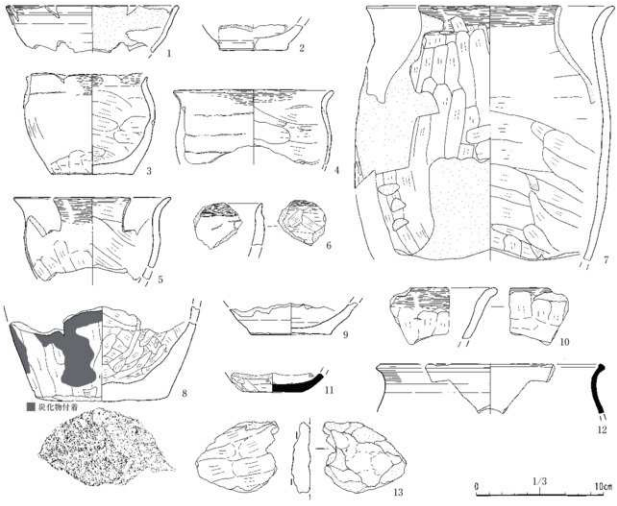


図49　第1号竪穴住居跡　出土遺物（1）

いた。煙道は住居外に113㎝延び、煙出し部へ緩やかに立ち上がっていく。煙道の軸方向はN－149°－Eである。土師器甕底部2点（図50－14・15）を火床面奥に倒立して重ね置き、支脚として使用していたものと思われる。14が下で、その上に15を重ね乗せている。

［その他の施設］Pit 1が検出され、規模は85×52㎝で深さ15㎝を測る。焼土・炭化物が多く含まれる暗褐色土が堆積し、Pit 1確認面で台石（図51－25）が出土した。底面から出土した土師器甕の破片は、支脚として使用されていた15と接合している。

［堆積土］全体的に褐色土から暗褐色土が主体となっている。床面付近では、住居全面から焼土及び炭化物が密に検出された焼失家屋であり、床面も焼土化している部分がある。

［出土遺物］遺物は南東壁及びカマドの周辺から多く出土した。出土土器の総重量は7.23kgで、内訳は土師器7.16kg、縄文土器0.07kgである。また、礫1.44kg、鉄滓0.02kgも出土した。そのうち土師器坏（1・2）・鉢（6）・甕（3～5・7～9・13～22）・塝（10）、須恵器坏（11）・鉢（12）、凹石（23）・敲・凹石（24）・台石（25）・台石？（26・27）を図示した。カマド燃焼部から重なるように土器類が出土し、それらは図50に一括して掲載したとおり土師器甕のみであった。13は通常の甕とは異なり、器厚が厚く器面に凹凸がみられるもので、植物繊維が混和材として混入されている。3・16は粘土等材料分析（試料№22・23）を行ったところ、淡水成粘土を用いていることが判明した（第

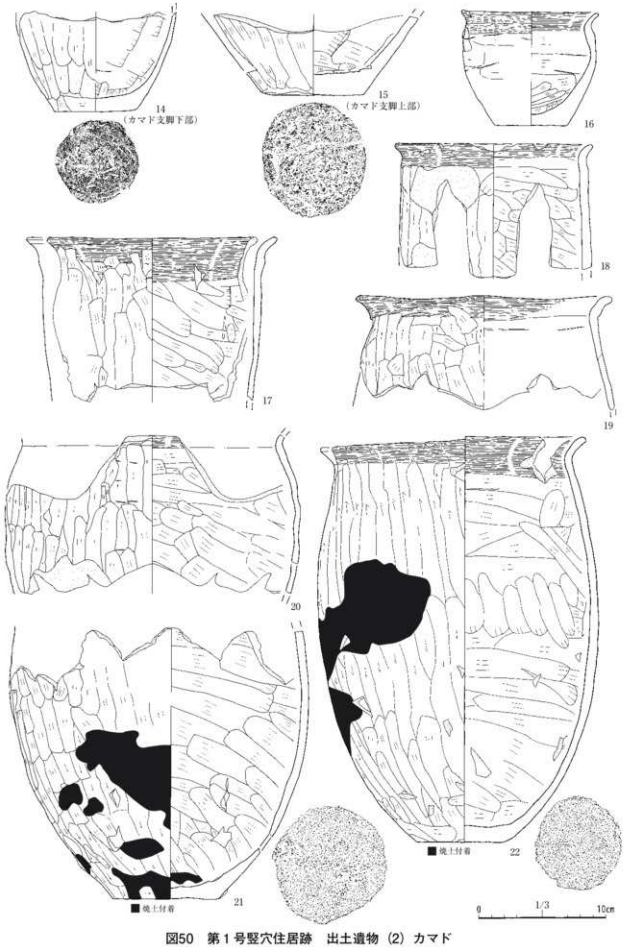


図50　第１号竪穴住居跡　出土遺物（2）カマド

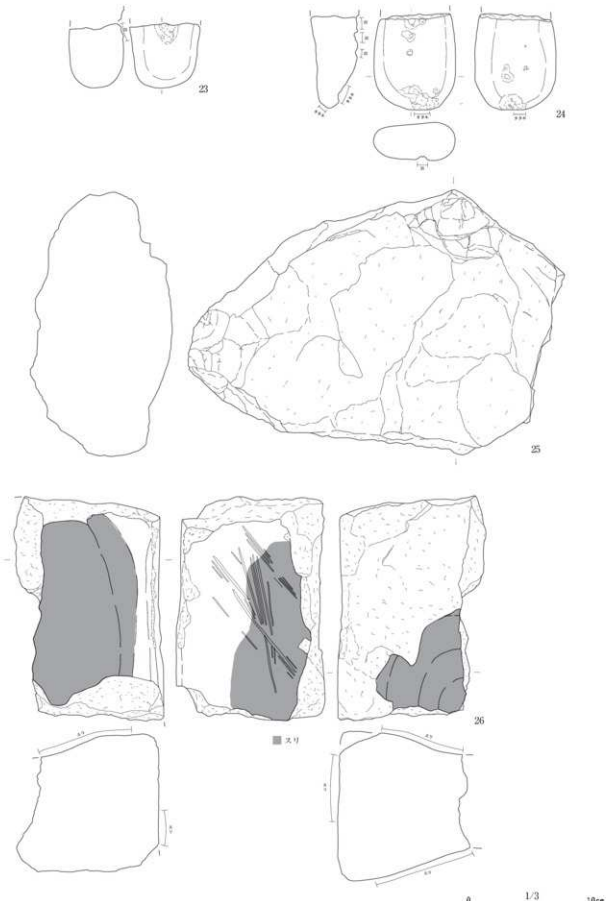


図51　第1号竪穴住居跡　出土遺物（3）

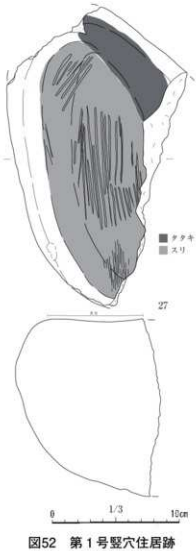


図52　第１号竪穴住居跡 出土遺物（4）

５章第７節）。23・24は縄文時代の石器とみられるが、25～27は平安時代に使用された台石と思われる。25は敲きによると思われる剥落が面的に広がっている。カマド左側から並んで出土した26・27は、大きく欠損しているものの磨り及び擦痕が顕著にみられ、丁寧に使い込まれたものと思われる。

また、住居全体から多量の炭化材が出土した。炭化材は住居の西半から特に多く出土し、特に南西壁付近では遺存状況が良好な上屋の部材と思われる炭化材が住居内に倒れ込んだような状態で検出された。これらのうち48点について樹種同定を行ったところ、クリ41点、モクレン属４点、トネリコ属シオジ節２点、ハンノキ属ハンノキ亜属１点であった（第５章第３節）。また１点の炭化クリ材（C14）について放射性炭素年代測定を行っている（第５章第５節）。

［遺構の時期等］本住居跡は焼失家屋であり、出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の状況などから、９世紀後葉～10世紀初頭頃に廃絶されたものと思われる。

第２号竪穴住居跡（SI02、図53～56）

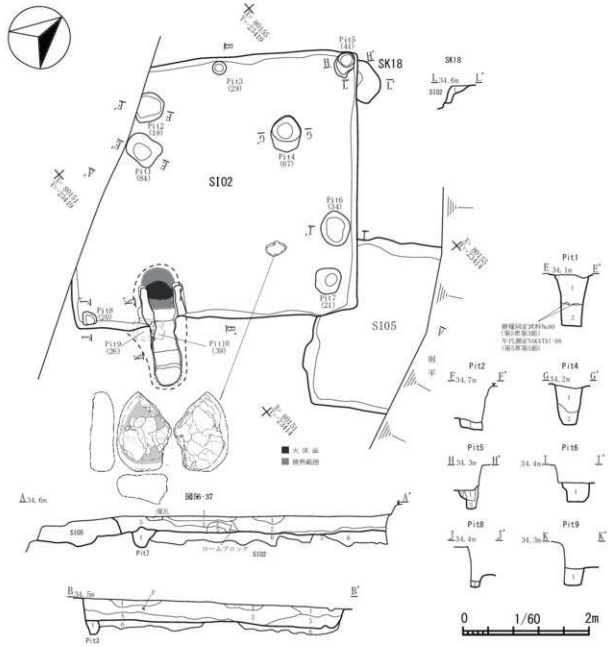
［位置・確認］調査区南側中央、28－33・34グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.3～34.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。SI05・SK18と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区域外に約５分の１程度があるものと思われるが、平面形は4.4×4.0ｍの長方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁（3.3）ｍ・深さ37㎝、北東壁4.0ｍ・深さ25～37㎝、南東壁4.4ｍ・深さ26～37㎝、南西壁（0.8）ｍ・深さ37㎝を測る。いずれの壁もしっかりと立ち上がっており、住居の軸方向はN－131°－Eである。

［床面・壁溝］床面は貼り床によって平坦に整えられている。壁溝は検出されなかった。

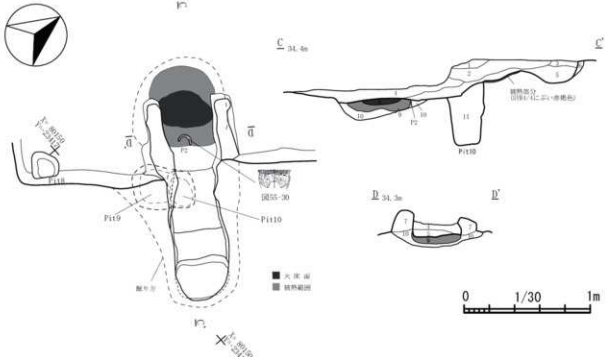
［柱穴］10基検出されたピットのうち、Pit１・４が主柱穴でPit５・７・８が隅柱穴と思われる。Pit３は北西壁のおおよそ中間地点にあることから壁柱穴と考えられる。主柱穴のPit１・４には柱痕が確認されていないことから、柱材を抜き取った後、埋め戻したものと考えられる。Pit９・10は、カマド掘り方の精査中に検出されたことから、古い時期の柱穴もしくは別遺構の可能性がある。各Pitの規模は、Pit１が53×44㎝で深さ84㎝、Pit２が52×40㎝で深さ18㎝、Pit３が22×20㎝で深さ29㎝、Pit４が58×49㎝で深さ67㎝、Pit５が41×31㎝で深さ41㎝、Pit６が56×47㎝で深さ34㎝、Pit７が44×44㎝で深さ21㎝、Pit８が22×21㎝で深さ20㎝、Pit９が（30）×35㎝で深さ26㎝、Pit10が30×（21）㎝で深さ30㎝以上を測る。Pit２・６は形態から柱穴の可能性が高いが、断定できるものではない。

［カマド］南東壁の南寄りに検出された。天井部は遺存していないものの、粘土で構築された袖部はしっ



SI02 (A-A' -B-B')
1　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土30%、にぶい黄褐色土20%、焼土粒(φ1～3mm)1%、ローム粒(φ1～4mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、やや粘性あり、小礫(φ1～2mm)3%。
2　10YR3/4　暗 色 土　ロームブロック(φ10～50mm)10%、ローム粒(φ1～5mm)7%、焼土粒(φ1～3mm)1%、炭化物(φ1～5mm)3%、しまり中、小礫(φ1～3mm)2%。
3　10YR4/6　暗 色 土　ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～5mm)3%、小礫(φ1～3mm)1%、しまりあり。
4　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土20%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)2%、小礫(φ1～3mm)2%、しまりあり。
5　10YR3/4　暗 色 土　暗色土70%、焼土粒(φ1～3mm)1%、ロームブロック(φ10～70mm)20%、ローム粒(φ1～10mm)10%、炭化物(φ1～5mm)5%、小礫(φ1～3mm)1%、しまり中。
6　7.5YR5/6　明褐色土　掘り方。暗色土30%、にぶい黄橙色土10%、褐色土10%、明黄褐色土7%、炭化物(φ1～5mm)1%。
SI02内Pit1 (E-E')
1　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック(φ5～40mm)30%、黒色土10%、焼土粒(φ5～10mm)2%。
2　10YR5/6　黄褐色土　砂質土。
SI02内Pit2 (F-F')
1　10YR4/6　褐 色 土　粘土質土。
SI02内Pit3 (B-B')
1　10YR4/4　褐 色 土　ローム粒(φ1～3mm)7%、ややしまりあり。
SI02内Pit4 (G-G')
1　10YR4/3　にぶい褐色土　ローム粒(φ1～20mm)7%。
2　10YR5/6　黄褐色土　掘り方。粘土ブロック主体土。
SI02内Pit5 (H-H')
1　10YR2/2　黒褐色土
2　10YR3/4　暗褐色土
3　10YR4/4　褐 色 土
SI02内Pit6 (I-I')
1　10YR5/3　にぶい褐色土　ロームブロック(φ10～30mm)10%。
SI02内Pit7 (A-A')
1　7.5YR4/4　褐 色 土　褐色ロームブロック(φ10～30mm)25%、焼土ブロック(φ10～20mm)5%、炭化物(φ1～10mm)2%、ややしまりあり。
SI02内Pit8 (J-J')
1　10YR4/4　暗 色 土　暗褐色土30%。
SI02内Pit9 (K-K')
1　10YR4/4　褐 色 土　褐色土15%、暗色焼土3%、黒褐色土1%。
SK18 (L-L')
1　10YR3/4　暗褐色土　ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%。

図53　第２号竪穴住居跡（1）



SI02カマド (C-C'-D-D')

1	10YR6/3	浅黄色土	褐色土20%、焼化物(φ1～2mm)1%、しまり非常にかたい。
2	10YR4/6	褐 色 土	黒褐色土(φ20～60mm)2%、ブロックで混入、焼化物(φ1～2mm)5%、ローム粒(φ1～5mm)3%、焼土粒(φ1～3mm)1%、しまりあり。
3	10YR4/6	褐 色 土	暗褐色土20%、ローム粒(φ1～20mm)3%、焼化物(φ1～2mm)3%、焼土粒(φ1～5mm)3%、小礫(φ1～5mm)3%。
4	10YR4/6	褐 色 土	明黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)3%、焼土粒(φ5～20mm)3%、しまりあり。
5	7.5YR4/6	褐 色 土	黒褐色土30%、焼化物(φ1～2mm)1%、焼土粒(φ1～4mm)1%、しまりあり。
6	10YR7/4	にぶい黄色	掘り方、砂質土で、堆出し層。
7	2.5Y5/3	黄褐色土	地盤、粘土ブロック土体、左袖内面は被熱し、明赤褐色を呈する。
8	2.5YR4/6	赤褐色土	本層上面が火床面、非常に堅緻。
9	5YR3/6	暗赤褐色土	火床面下層、被熱部分。
10	10YR3/4	暗褐色土	カマド掘り方。
11	10YR4/4	褐 色 土	Pit110覆土。

図54 第２号竪穴住居跡 (2)

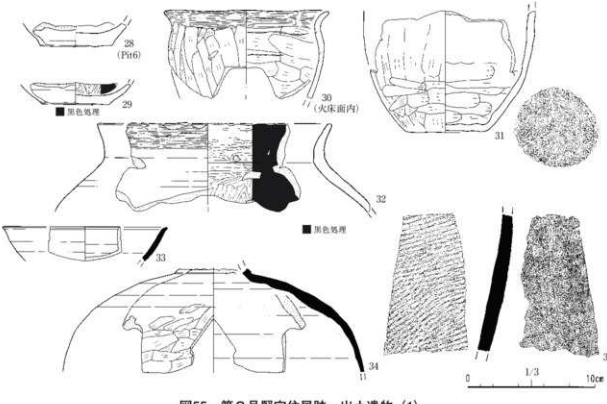


図55 第２号竪穴住居跡 出土遺物 (1)

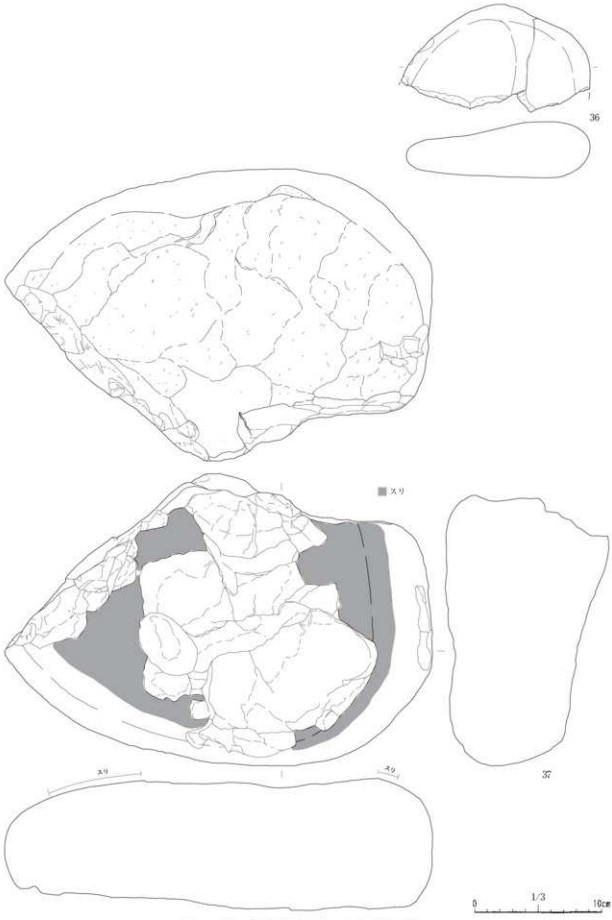


図56　第２号竪穴住居跡　出土遺物（2）

かり遺存していた。40×29㎝の非常に堅緻な火床面が検出され、その手前20㎝と奥行き15㎝の部分も被熱により暗赤褐色を呈している。火床面は深さ5㎝まで硬化しており、さらにその下部5㎝程度にも被熱が及んで赤色化していた。煙道は住居外に102㎝延び、煙出し部へ緩やかに立ち上がっていき、煙出し部の手前40㎝で10㎝ほど落ち込んでピット状をなしている。煙道の軸方向はN－126°－Eである。燃焼部付近には掘り方が認められ、火床面下部から倒立した土師器甕（図55－30）が出土した。火床面からそのレベル下位まで被熱が及んで焼土化しており、この土師器甕の下面が短期的な火床面であった可能性が考えられる。また、カマドの下部からPit 9・10が検出されたことも考慮に入れると、Pit 9もしくはPit10の脇に一度カマドを造作して短期的に使用したものの何らかの支障が生じ、ピットを埋めて柱を移設してカマドを作り直したことが考えられる。この時に土を充填して火床面のレベルが若干上げられたものの、平面的位置はほとんど変わらなかったものと思われる。

［堆積土］褐色土が主体となって埋め戻されており、掘り方は明褐色土が主体である。

［出土遺物］出土土器の総重量は1.63kgで、内訳は土師器1.44kg、須恵器0.18kg、縄文土器0.01kgである。また、礫0.27kg、鉄滓0.02kgが出土した。そのうち土師器坏（28・29）・甕（30・31）・壺（32）、須恵器坏（33）・壺（34）・甕（35）、礫（36）、台石（37）を図示した。26はPit 6覆土から出土した土師器坏底部、31は住居床面とPit 2覆土から出土した遺物が接合した土師器小甕底部で、粘土等材料分析（試料№24）を行ったところ、淡水成粘土を使用していることが判明した（第5章第7節）。32はSI02覆土とSI05覆土出土の土器片が接合した土師器壺口縁部で、内面にミガキ及び黒色処理を施している。37は中央西寄りの床面から出土した台石である。また、Pit 1覆土中位から出土した炭化材1点について樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った。その結果、樹種はクリであることが判明し（第5章第3節）、年代は第5章第5節にその結果を示してある。本試料は、Pit 1から柱材を抜き取った後に入り込んだ炭化材と考えられ、柱材の一部か、埋め戻し時に混入した柱材とは異なる炭化材か不明である。したがって年代測定結果については、本試料が柱材の一部であるならば構築時期に近い年代を、柱材と異なる部材であれば住居の廃絶時、もしくは廃絶後のいずれかの時期に近い年代を示している可能性が高い。

［遺構の時期等］出土遺物や遺構の重複関係、堆積土の様相などから、9世紀後葉～10世紀初頭頃に廃絶されたものと思われる。

第3号竪穴住居跡（SI03、図57）

［位置・確認］調査区南側中央、28－32・33グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.5～34.7m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区域外に約5分の4程度があるものと思われ、平面形は方形と推定されるがその規模は不明である。確認できた壁長及び確認面から床面の深さは、北東壁（5.5）m・深さ28㎝、南東壁（2.0）m・深さ23㎝を測る。いずれの壁も垂直に近いしっかりした立ち上がりをみせている。住居の軸方向はN－127°－Eである。

［床面・壁溝］床面の大半には貼り床が施されて平坦に整えられている。壁溝は幅5～18㎝、深さ3～10㎝で、壁際を全周するように巡らされるようだが、南東付近で確認できない部分があった。

［柱穴］柱穴は5基検出され、Pit 1が主柱穴でPit 2～5は壁柱穴と考えられる。各Pitの規模は、Pit

１は大半が調査区域外にあるためその規模は不明だが、直径60㎝程度と思われ、深さ33㎝であることは確認できた。Pit２が51×38㎝で深さ68㎝、Pit３が65×47㎝で深さ53㎝、Pit４が44×42㎝で深さ48㎝、Pit５が平面規模不明で深さ49㎝を測る。いずれも柱痕は確認できなかった。

［カマド］調査区域内では検出されず、調査区域外にあるものと思われる。

［堆積土］暗褐色土が堆積し、埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物］出土した土師器は0.75kgで、礫が0.44kg出土した。そのうち土師器坏（38・39）・甕（40～42）を図示した。

［遺構の時期等］出土遺物、堆積土の様相などから、９世紀後葉～10世紀前半頃に廃絶された住居と思われる。

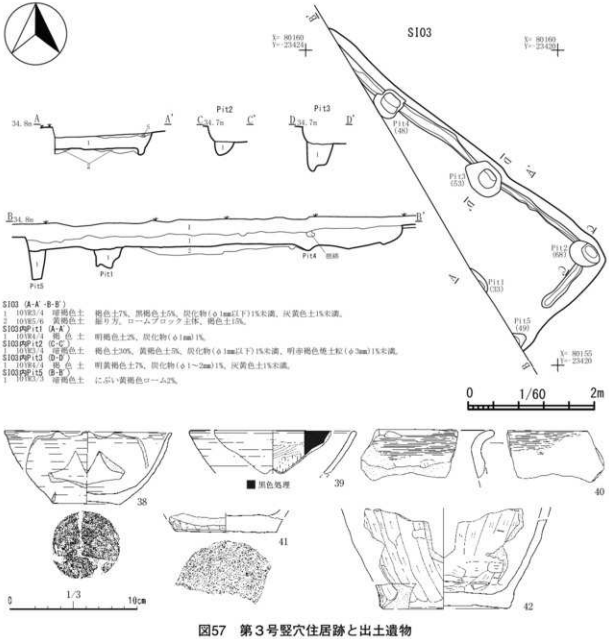


図57　第３号竪穴住居跡と出土遺物

第４号竪穴住居跡（SI04、図58・59）

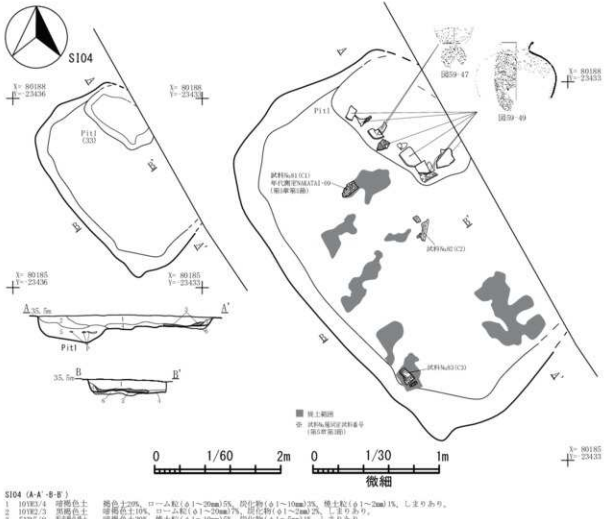
［位置・確認］調査区南側北寄り、28－26グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区域外に約２分の１程度があるものと思われ、平面形は1.8ｍ四方の隅丸方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁（1.5）ｍ・深さ12～19㎝、南東壁（1.1）ｍ・深さ21㎝、南西壁2.7ｍ・深さ17～22㎝を測る。いずれの壁も外に開きながら緩やかに立ち上がる。住居の軸方向はＮ－143°－Ｅである。

［床面・壁溝］床面は基本的に地山をそのまま床面としているが、一部は貼り床を施し平坦に整えている。壁溝は検出されなかった。

［柱穴・カマド］いずれも検出されなかった。

［その他の施設］Pit１が検出された。調査区域外に延びていて全容は不明だが、規模は1.2×0.8ｍの楕円形を呈するものと思われる。床面からの深さは22㎝である。褐色土が堆積し、住居使用時は開口していたものと思われる。ピット西側壁面上部に張り付くように土師器甕（図59－47）・須恵器大甕（49）の破片が出土した。



SI04（A-A'-B-B'）

1	10YR3/4	暗褐色土	褐色土20%、ローム粒（φ1～20mm）5%、炭化物（φ1～10mm）3%、焼土粒（φ1～2mm）1%、しまりあり。
2	10YR2/3	黒褐色土	暗褐色土10%、ローム粒（φ1～20mm）7%、炭化物（φ1～2mm）2%、しまりあり。
3	5YR5/8	明赤褐色土	暗褐色土30%、焼土粒（φ1～10mm）5%、炭化物（φ1～5mm）1%、しまりあり。
4	10YR7/1	黒色土	黒褐色土20%、炭化物（φ1～5mm）7%、焼土粒（φ1～3mm）1%、しまりあり。
5	10YR4/4	褐色土	白口壁土、暗褐色土15%、ローム粒（φ1～20mm）5%、炭化物（φ1～3mm）2%、焼土粒（φ1～2mm）1%、しまりあり。やや粘りあり。
6	10YR4/3	ニュウ黒褐色土	掘り方、ローム粒（φ1～5mm）2%。

図58　第４号竪穴住居跡

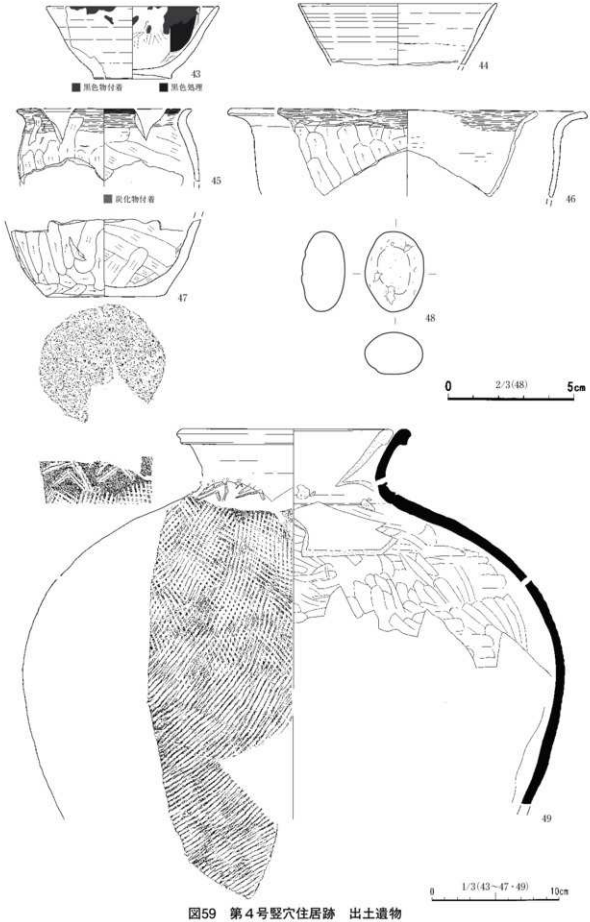


図59　第４号竪穴住居跡　出土遺物

［堆積土］上位には暗褐色土が堆積し、床面付近では焼土及び炭化物が散在して検出された。
［出土遺物］出土土器の総重量は2.50kgで、内訳は土師器1.16kg、須恵器1.34kgである。また、礫が0.03kg出土した。そのうち土師器坏（43・44）・甕（45～47）、須恵器大甕（49）、軽石製品（48）を図示した。49の須恵器大甕は、頸部に刻書が認められる。

堆積土から出土した炭化材３点について樹種同定を行ったところ、２点はカツラ属で、１点はクリであることが判明した（第５章第３節）。そのうちカツラ属１点（C1）について年代測定を行い、第５章第５節にその結果を示してある。
［遺構の時期等］本住居跡は焼失家屋と思われ、出土遺物や、堆積土の様相などから、９世紀後葉～10世紀前半頃に廃絶されたものと思われる。

第５号竪穴住居跡（SI05、図60～63）
［位置・確認］調査区南側中央、28－34グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.1～34.3ｍで、第Ⅳ層で確認した。SI02と重複し、本遺構が古い。
［平面形・規模］北から南東部分は削平を受けており、約３分の１程度が遺存していない。おそらく平面形は、一辺が2.7ｍ程度の方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁（1.4）ｍ・深さ30㎝、南東壁（1.2）ｍ・深さ19～28㎝、南西壁（1.4）ｍ・深さ25㎝を測る。いずれの壁も床面から丸みを帯びながらも、垂直に近いしっかりした立ち上がりをみせている。カマドが遺存していないが、南東方向にあったとすれば、住居の軸方向はＮ－135°－Ｅと考えられる。
［床面・壁溝］床面は部分的に貼り床が施されて平坦に整えられている。壁溝は検出されなかった。
［柱穴・カマド］いずれも検出されなかったが、カマドは削平された住居東側にあったものと思われる。
［堆積土］暗褐色土が主体となっており、中位ではロームブロックをやや多く含んでいる。
［出土遺物］出土土器の総重量は10.72kgで、内訳は土師器10.16kg、須恵器0.56kgである。また、礫0.15kg、鉄製品２点（0.003kg）、鉄滓0.24kgも出土した。遺物は南西壁に沿うようにまとまって出土しており、重複しているSI02によって壊されていなければ、そこにも遺物が密集していたものと思われる。図示したのは土師器坏（50～53）・甕（54～70）・鍋（71）、須恵器坏（72・73）・壺（74・75）・甕（76）、鉄製品（77・78）である。このうち床面直上から出土したものは図62にまとめ、図61・63は覆土出土のものである。土師器坏はいわゆる切りっぱなしのもの（50～52）が主体で、ミガキ・内面黒色処理を施すものがわずかにある（53）。甕はロクロ成形と輪積み成形の双方があり、いずれも短めの口縁が屈曲して外反する個体が多いことが特徴といえる（55・58～60・65・67など）。土師器の50・52・57は粘土等材料分析（試料№26・27・25）を行い、いずれも淡水成粘土を用いていることが判明した（第５章第７節）。須恵器坏の72・73には刻書が施されている。須恵器壺は、肩部片の74には明瞭な凸帯はなく、高台付き底部の75底外面には菊花状調整がなされている。鉄製品の77は鉄鏃柄部、78は刀子破片と思われる。
［遺構の時期等］出土遺物、遺構の重複関係、堆積土の堆積状況などから、９世紀中葉～９世紀末葉頃に廃絶されたものと思われる。

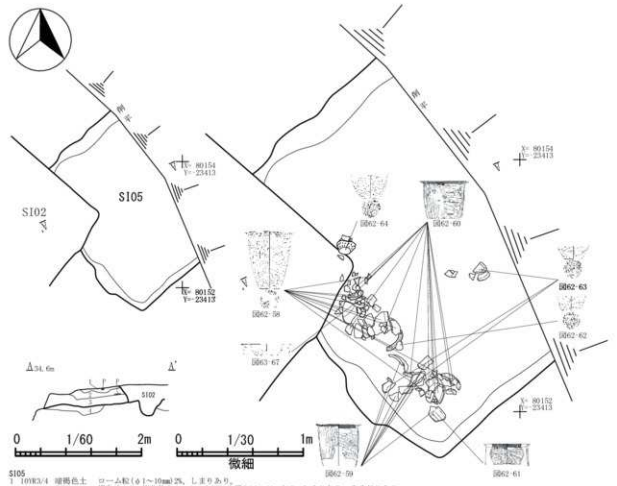


図60　第５号竪穴住居跡

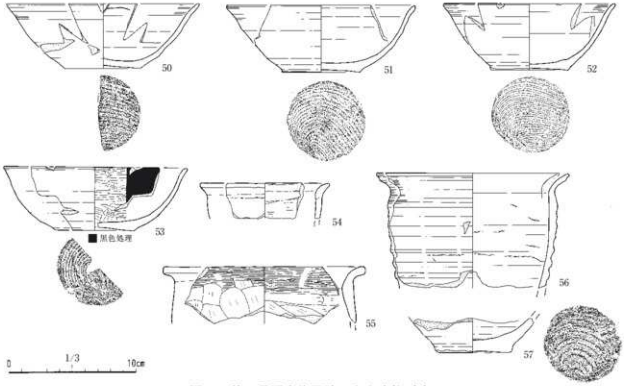


図61　第５号竪穴住居跡　出土遺物（1）

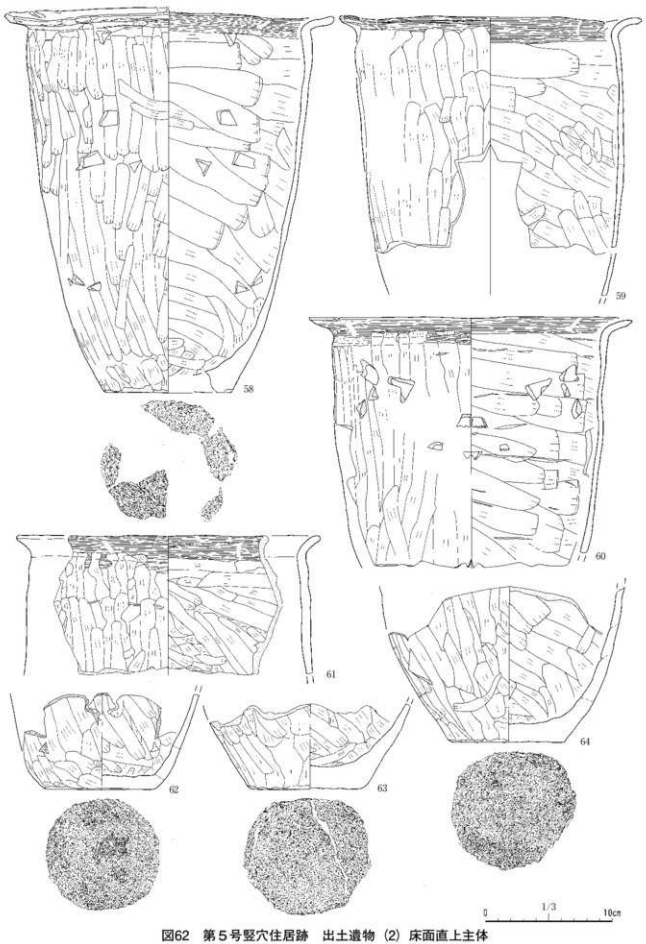


図62　第５号竪穴住居跡　出土遺物（2）床面直上主体

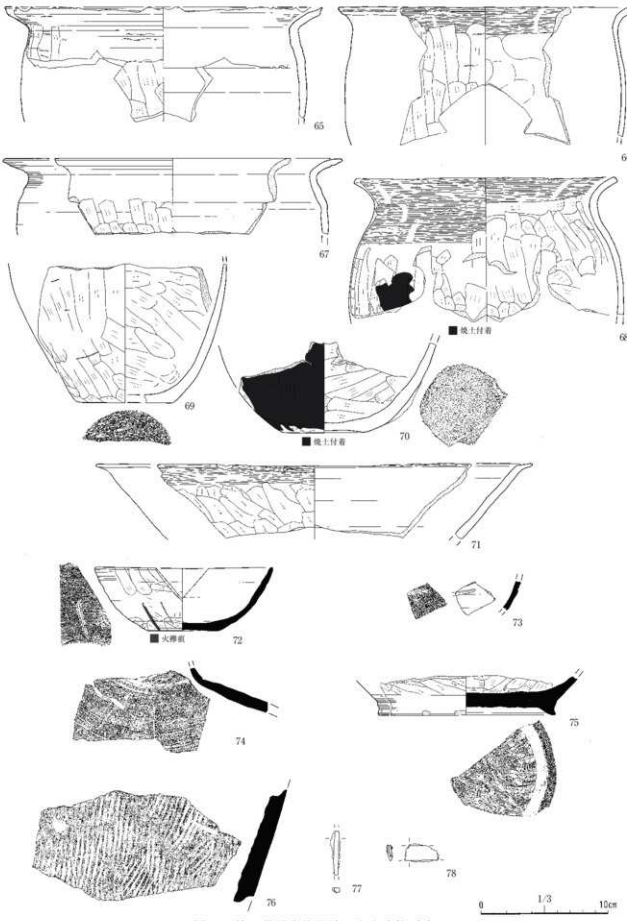


図63　第５号竪穴住居跡　出土遺物（3）

（2）土坑

第1号土坑（SK01、図64・66）

［位置・確認］調査区南側北端、28－22グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.6m、第Ⅳ層で確認した。SD04と重複し、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］調査区際に位置するため、南西部は検出されなかった。楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は3.6m、確認面からの深さは45㎝である。第Ⅴ層まで掘り込んだ底面にはやや起伏があり、断面形は上部が開く皿状をなしている。

［堆積土］全体的に黒色土が主体となっており、中位には粘土・焼土粒・ローム粒・炭化物が混在した土層が検出された。本層は主に南側で検出され、これに含まれる粘土について粘土等材料分析（試料№4）を行ったところ、淡水成粘土であることが判明した（第5章第7節）。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は1.32kgで、そのうち土師器坏（図66－79・80）・鉢（81）・甕（82～85）を図示した。また、鉄滓0.005kgも出土した。出土遺物及び堆積土の様相から9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第2号土坑（SK02、図64・66・67）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24・25グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.6m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は一辺1.1mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。第Ⅴ層まで掘り込んだ底面はやや凹凸があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］堆積土の大半は焼土粒・炭化物・ローム粒を含む黒色土である。確認面では土師器が多量に包含され、北隅では粘土が比較的密に検出された。これらは一括して廃棄されたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は6.98kgで、坏（図66－86）・甕（図66－87～図67－100）を図示した。器種は少量の坏が含まれるがほとんどが甕で、短い口縁部が比較的強い屈曲をもって外反し、砂底を有する特徴がある。96は粘土等材料分析（試料№28）を行ったところ、淡水成粘土を用いていることが判明した（第5章第7節）。

底面から出土した炭化材8点について樹種同定を行ったところ、クリ6点、モクレン属1点、トネリコ属シオジ節1点であった（第5章第3節）。そのうち炭化クリ材の1点（C1）を年代測定しており、その結果は第5章第5節に示してある。

出土遺物と堆積土の様相などから、9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第3号土坑（SK03、図64・68）

［位置・確認］調査区南側北端、28－22・23グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.5m、第Ⅳ層で確認した。SD04と重複し、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は長軸1.8m、短軸1.5mの楕円形に近い隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは23㎝である。第Ⅴ層まで掘り込んだ底面は部分的に掘り方を有し、概ね平坦で断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上位は粘土・ローム粒・焼土粒を含んだ黒褐色土が、下位は炭化物・焼土粒を含んだ黒色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は1.08kgで、ミニチュア鉢（図68－101）・甕（102～

105）を図示した。103～105は胎土・色調・焼成状況などから同一個体と思われるが、接合しなかったものである。短い口縁部から寸胴気味に底部へ徐々にすぼまる器形と思われ、103に示したように頸部直下に貫通孔が２個縦方向にあけられている。出土遺物と堆積土の様相などから９世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第４号土坑（SK04、図64・68）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24グリッドに位置し、遺構確認面の標高は36.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.2m、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは19㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでやや凹凸があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］炭化物や遺物を含んだ黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.15kgで、土師器鉢（図68－106）・塝（107・108、同一個体と思われる）を図示した。出土遺物と堆積土の様相から、９世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第５号土坑（SK05、図64）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24・25グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.3m、短軸1.2ｍの歪な円形を呈し、確認面からの深さは９㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでやや起伏があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されている。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.01kgで、図示し得なかった。出土遺物と堆積土の様相から、平安時代の遺構と考えられる。

第６号土坑（SK06、図64）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため遺構の全容は不明だが、南西半が検出されたと思われる。平面形は円形または楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は1.7m、確認面からの深さは22㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで丸底状を呈しており、起伏は少ない。また調査区際の底面からPit１が検出されたが、大半は調査区域外にあるものと思われ、底面からの深さ23㎝を測るものの平面形・規模は不明である。Pit１の全体の形状は円筒状をなすものと思われる。

［堆積土］ローム粒・焼土粒などを含む黒褐色土が堆積していることから人為的に埋め戻されたものである。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.11kgで、図示し得なかった。出土遺物と堆積土の状況から、平安時代の遺構と考えられる。

第７号土坑（SK07、図65・68）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.3m、短軸1.2ｍの歪な楕円形を呈し、確認面からの深さは20㎝である。

底面は第Ⅴ層まで掘り込んで凹凸があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上位は暗褐色土が、下位はロームブロックが主体となっている。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.18kgで、甕底部（図68－109）を図示した。出土遺物と堆積土の様相から9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第8号土坑（SK08、図65・68）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4m、第Ⅳ層で確認した。SK09と接するように位置し、新旧関係は不明である。

［平面形・規模］平面形は長軸1.8m、短軸1.5mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは19㎝である。第Ⅴ層まで掘り込んだ底面は若干起伏があるものの概ね平坦で、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］上位は黒色土、下位は黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は1.6kg、縄文土器0.006kgで、そのうち土師器甕（図68－110～113）、平安時代の焼成粘土（114～116）、縄文土器片（117）を図示した。114・115は土器製作で余った粘土が押し潰され、意図的か偶発的かは分からないが、そのまま焼成されたものと思われる。116は土師器甕の砂底部分と思われるもので、砂粒が付着した粘土がゆるく巻かれて焼成されている。117は縄文時代前期末の円筒下層ｄ2式土器の口縁部片が剥落したものである。出土遺物と堆積土の様相から、9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第9号土坑（SK09、図65）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4m、第Ⅳ層で確認した。SK08と接するように位置し、SK10と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］調査区際に位置するため遺構の全容は不明だが、北東半が検出されたと思われる。平面形は隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈すると考えられ、検出された長軸は1.2m、短軸（0.7）m、確認面からの深さは30㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで凹凸があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ロームブロックを含んだ黒褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されている。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.08kgで、図示し得なかった。出土遺物と堆積土の様相、遺構との重複関係などから10世紀前半以降の遺構と考えられる。

第10号土坑（SK10、図65・69）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4m、第Ⅳ層で確認した。SK09と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］調査区際に位置することとSK09との重複によって遺構の全容は不明だが、平面形は方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、確認面からの深さは30㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んだ凹凸のある掘り方に灰黄褐色土を充填し平坦に仕上げている。断面形は上部が開く皿状をなしている。

［堆積土］上位に暗褐色土、下位に黒褐色土が堆積し、底面付近には焼土が薄層をなして検出された。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は1.6kgで、土師器坏（図69－118）・甕（119～122）を図示した。また、礫は0.01kg出土した。出土遺物と堆積土の様相から、9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

第11号土坑（SK11、図65）

［位置・確認］調査区南側中央北寄り、28－29グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.3ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は直径0.8ｍのやや歪な円形を呈し、確認面からの深さは25㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで丸底気味で、断面形は上部が開く擂り鉢状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。遺構の時期は、堆積土の様相から平安時代の遺構である可能性がある。

第12号土坑（SK12、図65・69）

［位置・確認］調査区南側中央北寄り、28－29グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.2ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍのやや歪な楕円形を呈し、確認面からの深さは15㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んでやや起伏があり、断面形は皿状をなしている。

［堆積土］ロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土土器の総重量は約0.01kg、内訳は土師器0.003kg、縄文土器0.01kgで、縄文時代前期末葉期と思われる土器片（図69－123）を図示した。出土遺物と堆積土の様相から平安時代の遺構である可能性がある。

第13号土坑（SK13、図65）

［位置・確認］調査区南側北部、28－27・28グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは19㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んだ丸底気味で、断面形は上部がやや開く擂り鉢状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。堆積土の様相から、本遺構は平安時代の遺構である可能性がある。

第14号土坑（SK14、図65・69）

［位置・確認］調査区南側中央北寄り、28－30グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.1ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため遺構の全容は不明だが、北東半が検出されたと思われる。円形または楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は1.8ｍ、確認面からの深さは45㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込み平坦で、壁は底面から丸みを帯びながら大きく外に開きながら立ち上がる。断面形は鍋底状をなしている。

［堆積土］全体的に黒褐色土が堆積するが、部分的にロームを多く含むことから人為的に埋め戻されたものである。

［出土遺物と遺構の時期等］出土土器の総重量は2.33kg、内訳は土師器2.21kg、須恵器0.12kgで、土師器坏（図69－124・125）・甕（126～131）、須恵器甕（132）を図示した。これらの遺物は覆土からの出土で、ロームとともに廃棄されたものと考えられる。また礫は0.01kg出土した。出土遺物と

堆積土の様相から９世紀後半頃の遺構と考えられる。

第15号土坑（SK15、図65）

［位置・確認］調査区南側南部、28－42グリッドに位置し、遺構確認面の標高は30.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］調査区際に位置するため遺構の全容は不明だが、北東半が検出されたと思われる。円形または楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は（1.8）ｍ、確認面からの深さは45㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで起伏があり、断面形は擂り鉢状をなしている。

［堆積土］第Ⅱ層由来の黒褐色土が主として堆積しており、確認面付近ではロームが多く含まれる。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。堆積土の様相などから、平安時代以降の遺構である可能性がある。

第16号土坑（SK16、図65）

［位置・確認］調査区南側南部、28－39グリッドに位置し、遺構確認面の標高は32.9ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸2.5m、短軸1.9ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは39㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで地山をそのまま平坦な底面としており、断面形は壁がしっかりと立ち上がる皿状をなしている。

［堆積土］上位ほど第Ⅱ層由来の黒色が強く、下位ほど暗褐色が強い堆積土で、自然堆積と思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかったが、堆積土の様相などから平安時代以降の遺構である可能性がある。

第17号土坑（SK17、図64）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.6ｍ、第Ⅳ層で確認した。SD02と重複し、本遺構が新しい。

［平面形・規模］平面形は長軸1.1m、短軸0.8ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは18㎝である。第Ⅴ層まで掘り込んだ底面は概ね平坦で、断面形は壁がしっかり立ち上がる皿状をなしている。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.03kgだが、図示し得なかった。出土遺物と堆積土の様相から、平安時代の遺構と考えられる。

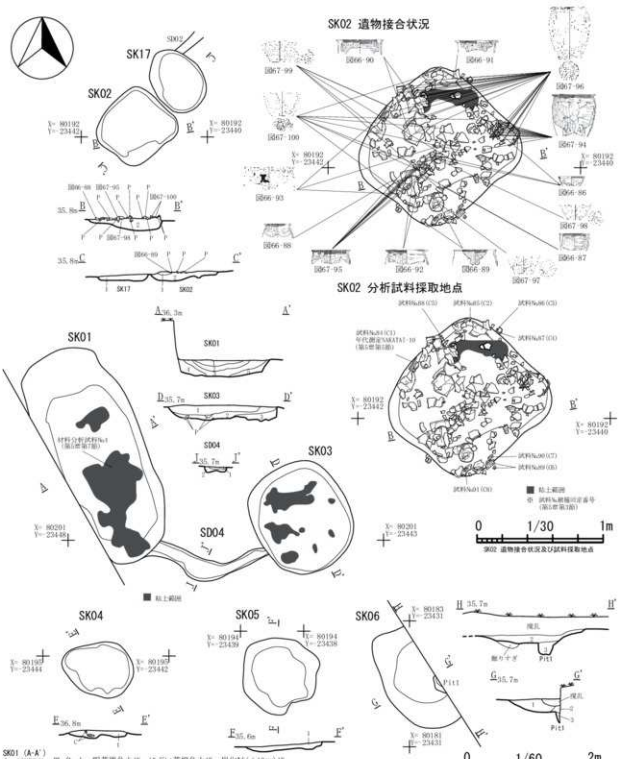
第18号土坑（SK8、図53）

［位置・確認］調査区南側中央、28－33グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。SI02と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］SI02との重複によって本遺構の大半は壊されているが、0.7×0.5ｍ程度の楕円形もしくは円形をなすものと思われ、確認面からの深さは29㎝を測る。底面は平坦であるか明確ではないが第Ⅴ層まで掘り込んでいて、断面形が擂り鉢状をなす可能性があり、部分的に壁の中程で段差がついている。

［堆積土］ローム粒・炭化物を含む暗褐色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。SI02との重複関係と堆積土の様相などから、10世紀初頭以前の平安時代の遺構と考えられる。



SK01 (A-A')
1　10YR2/1　黒色土　明黄褐色土1%、にぶい黄褐色土1%、炭化材(φ10mm)1%、炭化物(φ1～5mm)1%、焼土粒(φ5mm)1%未満。
2　10YR2/2　黒褐色土　褐灰色粘土5%、明黄褐色土3%、明赤褐色焼土3%、にぶい黄褐色土3%、炭化物(φ1～3mm)1%。
3　10YR2/1　黒色土　黒褐色土40%、明黄褐色土1%、焼土粒(φ1～2mm)1%、炭化物(1～2mm)1%未満。
4　10YR2/1　黒色土　明黄褐色土7%、黒色土3%、明褐色土1%、炭化物(φ1mm)1%未満。
5　10YR2/2　黒褐色土　明黄褐色土25%、炭化物(φ1mm以下)1%未満。

SK02 (C-C')
1　10YR6/1　褐灰色土　粘土混入土、粘土ブロック(φ50mm)1ヶ。焼土ブロック(φ1～30mm)3%、炭化物(φ1～10mm)5%。
2　10YR2/1　黒色土　ローム粒(φ1～30mm)2%。

SK03 (D-D')
1　10YR2/3　黒褐色土　黄褐色ロームブロック(φ10～50mm)7%、ローム粒(φ1～5mm)5%、にぶい黄褐色粘土ブロック(φ60mm)1%、褐色焼土ブロック(φ5～20mm)1%。
2　10YR2/1　黒色土　黒褐色土20%、炭化物(φ1～30mm)7%、明褐色焼土2%、ローム粒(φ1～5mm)1%、ややしまりあり。
3　10YR4/4　褐色土　細り方平　暗褐色土10%、黄褐色ロームブロック(φ10～40mm)5%、ローム粒(φ1～5mm)2%、炭化物(φ20mm)1%、ややしまりあり。

SK04 (E-E')
1　10YR2/2　黒褐色土　黒褐色土30%、炭化物7%、ローム粒(φ1～10mm)3%、焼土粒(φ2～3mm)1%、ややしまりあり。

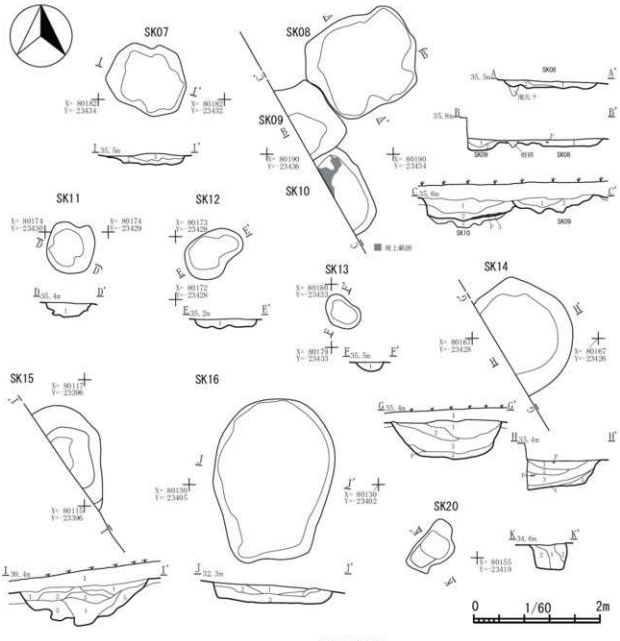
SK05 (F-F')
1　10YR2/2　黒褐色土　黄褐色土10%、炭化物(φ1mm)1%未満。

SK06 (G-G'・H-H')
1　10YR3/2　黒褐色土　暗褐色土30%、にぶい黄褐色土10%、黄褐色土7%、明赤褐色焼土3%、炭化物(φ1～10mm)2%、暗赤褐色焼土1%。
2　10YR2/3　黒褐色土　黒褐色土10%、褐色土7%、褐色焼土7%、炭化材(φ10～20mm)5%、炭化物(φ1～3mm)2%。
3　10YR2/2　黒褐色土　P11種土、黒褐色土20%、炭化物(φ5mm)1%未満。

SK17 (C-C')
1　10YR2/2　黒褐色土　ローム粒(φ1～15mm)7%、炭化物(φ1～10mm)3%。

SD04 (J-J')
1　10YR2/3　黒褐色土　暗褐色土10%、黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)10%、ローム粒(φ1～3mm)5%、ややしまりあり。
2　10YR4/6　褐色土　黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)5%、ローム粒(φ1～2mm)3%、ややしまりあり。

図64　土坑 (1)



SK07 (I-I')

1	10YR2/2	黒褐色土
2	10YR5/8	明黄褐色ローム

暗褐色土20%、ローム粒(φ1～15mm)7%、
炭化物(φ1～2mm)3%、しまりあり。
褐色土20%、暗褐色土10%、炭化物(φ1～2mm)1%、
しまりあり。

SK08 (A-A'・B-B')

1	10YR2/1	黒 色 土
2	10YR2/2	黒褐色土

黒褐色土10%、炭化物(φ1～3mm)5%、
明黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)3%、
ローム粒(φ1～5mm)3%、しまりあり。
暗褐色土30%、ローム粒(φ1～10mm)2%、
炭化物(φ1～2mm)2%、しまりあり。

SK09 (B-B'・C-C')

1	10YR2/1	黒 色 土
2	10YR5/8	明黄褐色ローム
3	10YR5/8	明黄褐色ローム
4	10YR4/2	灰黄褐色土

暗褐色土30%、ローム粒(φ1～10mm)7%、
明黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)5%、
炭化物(φ1～10mm)1%、しまりあり。
褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)10%、しまり弱。

SK10 (C-C')

1	10YR3/3	暗褐色土
2	10YR2/2	黒褐色土
3	5YR5/8	明赤褐色土
4	10YR4/2	灰黄褐色土

褐色土30%、黒褐色土10%、ローム粒(φ1～10mm)10%、
炭化物(φ1～3mm)3%、しまりあり。
暗褐色土20%、炭化物(φ1～10mm)7%、
ローム粒(φ1～10mm)3%、焼土粒(φ1～3mm)2%、
細り方、ロームブロック(φ1～20mm)7%。

SK11 (D-D')

1	10YR2/3	黒褐色土

暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック(φ10～40mm)5%、
ローム粒(φ1～3mm)2%、炭化物(φ1～3mm)1%、
ややしまりあり。

SK12 (E-E')

1	10YR2/3	黒褐色土

暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック(φ20～50mm)15%、
ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～5mm)1%、
ややしまりあり。

SK13 (F-F')

1	10YR2/2	黒褐色土

暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)3%、
ローム粒(φ1～3mm)2%、炭化物(φ1～3mm)2%、
ややしまりあり。

SK14 (G-G'・H-H')

1	10YR2/3	黒褐色土
2	10YR4/6	褐 色 土
3	10YR2/3	黒褐色土
4	10YR2/3	黒褐色土
5	10YR3/4	暗褐色土

暗褐色土30%、褐色ロームブロック(φ10～20mm)7%、
ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1～5mm)7%、
ややしまりあり。
暗褐色土20%、明黄褐色ロームブロック(φ10～50mm)5%、
黒褐色土5%、ローム粒(φ1～5mm)5%、
炭化物(φ1～3mm)2%、ややしまりあり。
暗褐色土30%、黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)3%、
ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、
ややしまりあり。
暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック(φ10～80mm)15%、
ローム粒(φ1～2mm)5%、炭化物(φ1～2mm)2%、
ややしまりあり。
黒褐色土20%、黄褐色ロームブロック(φ10～30mm)5%、
ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1～3mm)1%、
ややしまりあり。

SK15 (I-I')

1	10YR3/3	暗褐色土
2	10YR2/3	黒褐色土
3	10YR2/3	黒褐色土
4	10YR2/3	黒褐色土
5	10YR2/2	黒褐色土

黒褐色土35%、明黄褐色土3%、炭化物(φ1～2mm)1%、
黒褐色土30%、黄褐色土10%、黄褐色土7%、
明黄褐色土7%、炭化物(φ1mm)1%、
黒褐色土20%、黄褐色土1%、
黒褐色土35%、暗褐色土2%、
褐色土30%、暗褐色土25%、炭化物(φ1mm以下)1%、

SK16 (J-J')

1	10YR1/1	黒 色 土
2	10YR2/2	黒褐色土
3	10YR3/4	暗褐色土

黒色土35%、黒褐色土7%、明黄褐色土1%、
炭化物(φ1mm以下)1%、
明赤褐色焼土粒(φ1mm)1%炭粒。
にぶい黄褐色土40%、黒色土5%、
にぶい黄褐色土30%、黒褐色土5%、黒色土5%。

SK20 (K-K')

1	10YR3/4	暗褐色土
2	10YR4/6	褐 色 土

黄褐色ロームブロック(φ30mm)3%、
ローム粒(φ1～3mm)1%、ややしまりあり。
黄褐色ロームブロック(φ1～10mm)30%、
ローム粒(φ1～5mm)5%、ややしまりあり。

図65 土坑 (2)

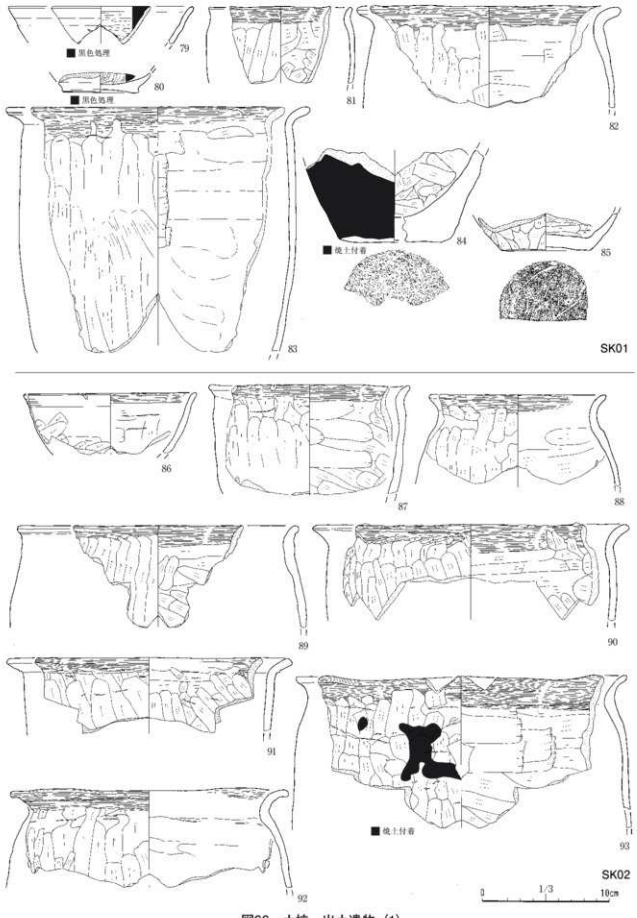

■ 黒色処理
79
80
■ 黒色処理
81
82
83
■ 焼土付着
84
85
SK01
86
87
88
89
90
91
92
■ 焼土付着
93
SK02
0
1/3
10cm

図66　土坑　出土遺物（1）

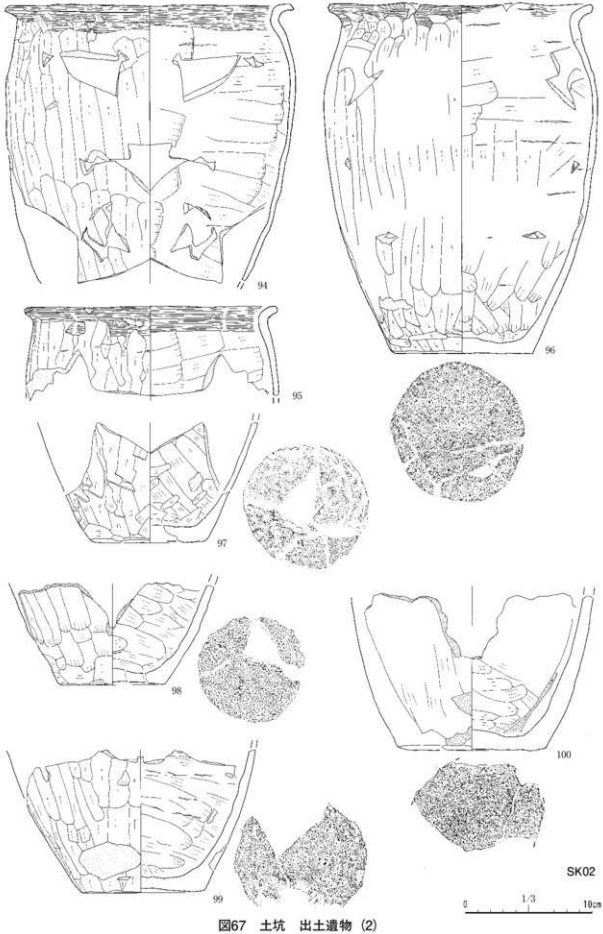


図67　土坑　出土遺物（2）

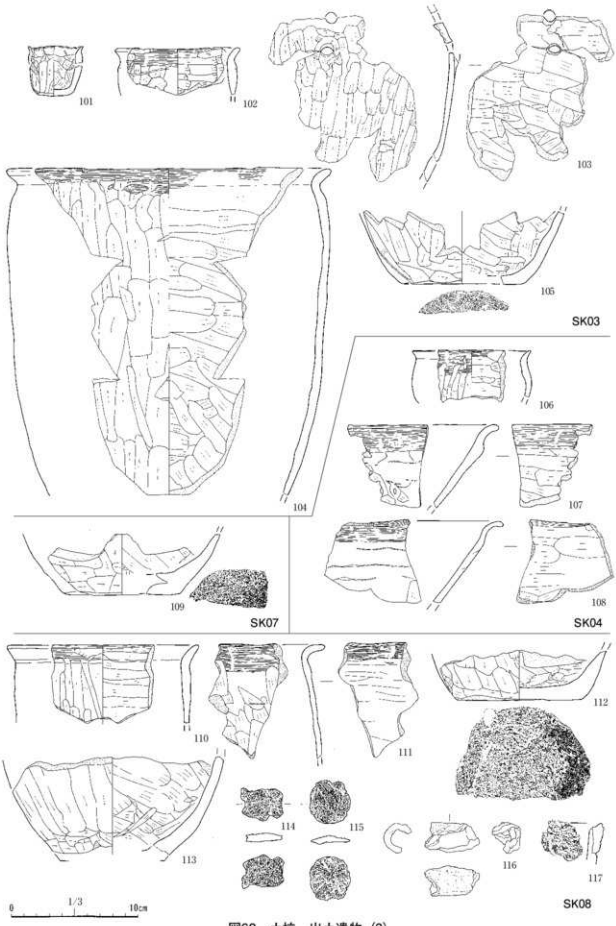

101
102
103
104
105
SK03
106
107
108
SK04
109
SK07
110
111
112
113
114
115
116
117
SK08
0
1/3
10cm

図68　土坑　出土遺物（3）

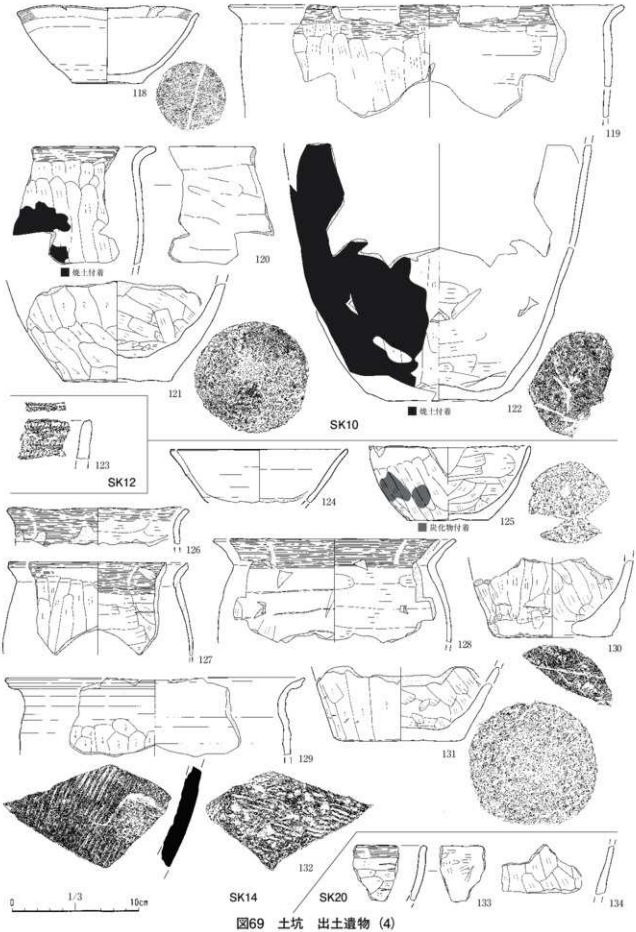

118
119
120
■ 焼土付着
121
SK10
■ 焼土付着
122
123
SK12
124
■ 炭化物付着
125
126
127
128
130
129
131
132
SK14
SK20
133
134
0
1/3
10cm

図69　土坑　出土遺物（4）

第19号土坑（SK19、図48）

［位置・確認］調査区南側中央南寄り、28－36グリッドに位置し、遺構確認面の標高は33.6ｍ、第Ⅳ層で確認した。SI01と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］SI01との重複によって本遺構の大半は壊されているが、0.9×0.8ｍ程度の円形もしくは楕円形をなす可能性があり、確認面からの深さは27㎝を測る。底面は平坦であるか明確ではないが第Ⅴ層まで掘り込んでいて、断面形が擂り鉢状をなす可能性がある。

［堆積土］ローム粒を含む黒褐色土が堆積している。

［出土遺物と遺構の時期等］遺物は出土しなかった。SI01との重複関係と堆積土の様相などから、10世紀初頭以前の平安時代の遺構と考えられる。

第20号土坑（SK20、図65・69）

［位置・確認］調査区南側中央、28－33グリッドに位置し、遺構確認面の標高は34.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模］平面形は長軸0.9m、短軸0.5ｍの不整長方形を呈し、確認面からの深さは49㎝である。底面は第Ⅴ層まで掘り込んで地山をそのまま底面として使用し、断面形は壁が直立するコ字状をなしている。

［堆積土］暗褐色土もしくは褐色土が堆積し、ローム粒を含み人為的に埋め戻されたものと思われる。

［出土遺物と遺構の時期等］出土した土師器は0.02kgで、土師器坏（図69－133）・甕（134）を図示した。いずれも覆土からの出土で、出土遺物と堆積土の様相等から、9世紀後半～10世紀前半頃の遺構と考えられる。

（3）溝跡

第１号溝跡（SD01、図70・71）

［位置・確認］調査区南側南部、28－41・42グリッドに位置し、遺構確認面の標高は29.9～31.0ｍ、第Ⅳ層で確認した。SP03・04・05と重複するが、新旧関係は不明である。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置するため遺構の全容は不明で、東部のみが検出されたと思われる。確認できた長さは（7.6）ｍ、幅51～68㎝の緩やかに蛇行した溝跡で、確認面からの深さは10～21㎝である。断面形は皿状をなし、底面は第Ⅴ層まで掘り込み、やや凹凸が見られる。北西端底面と南東端底面との比高差は約100㎝で、南東方向に底面は傾斜している。

［堆積土］黒褐色土が主として堆積し、下位にはロームが多く含まれる。自然堆積の可能性が高い。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土土器の総重量は1.05kg、内訳は土師器0.85kg、須恵器0.2kgで、土師器鉢（図71－135）・甕（136～139）、須恵器甕（140）を図示した。140はSP01出土遺物と接合したもので、内外面ともに被熱による剥落が見られる。遺物は覆土上位から散発的に出土し、礫0.002kgも出土している。出土遺物や堆積土の様相等から9世紀後半～10世紀前半頃の遺構であると考えられ、本遺構はその形状や走行方向から建物跡の外周溝となる可能性がある。

第２号溝跡（SD02、図70）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。SK17・SD03と重複し、本遺構はSD03より新しく、SK17より古い。

［平面形・規模・底面］SK17との重複によって全体の規模は不明だが、確認できた長さは（2.1）m、幅13～23cmの直線状の溝跡で、確認面からの深さは2～4cmである。断面形はU字状をなし、底面は第Ⅳ層で収まり、やや凹凸が見られる。北東端と南西端との比高差はほとんどない。

［堆積土］黒褐色土が堆積し、自然堆積と思われる。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.002kgだが、図示し得なかった。堆積土の様相と遺構の重複関係から、平安時代の遺構であると考えられるが、本遺構の機能は不明である。

第３号溝跡（SD03、図70・71）

［位置・確認］調査区南側北部、28－24グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.5m、第Ⅳ層で確認した。SD02と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模・底面］SD02との重複によって全体の規模は不明だが、確認できた長さは（3.7）m、幅16～20cmの直線状の溝跡で、確認面からの深さは3～12cmである。断面形はU字状をなし、第Ⅳ層で収まるように底面は掘り込まれている。北西端と南東端との比高差はほとんどない。

［堆積土］黒褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.02kgで図示し得なかったが、鉄製品が１点（0.07g）出土し、錆落としたところ鎌先（図71－141）であった。出土遺物や堆積土の様相等から平安時代の遺構であると考えられるが、本遺構の機能は不明である。

第４号溝跡（SD04、図64・71）

［位置・確認］調査区南側北端、28－22・23グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.6m、第Ⅳ層で確認した。SK01・03と重複し、新旧関係は不明である。

［平面形・規模・底面］重複により全体の規模は不明だが、確認できた長さは（1.9）m、幅13～36cmの湾曲した溝跡で、確認面からの深さは2～8cmである。断面形はU字状をなし、底面は第Ⅴ層を掘り込みわずかな凹凸が見られる。東端と西端との比高差はほとんどない。

［堆積土］堆積土上位には黒褐色土、下位には褐色土が堆積し、いずれもロームを含んでいる。

［出土遺物・遺構の時期と用途］出土した土師器は0.07kg、甕口縁部片（図71－142）である。出土遺物及び堆積土の様相などから平安時代の溝跡と思われるが、その機能やSK01・03との関連性は不明である。

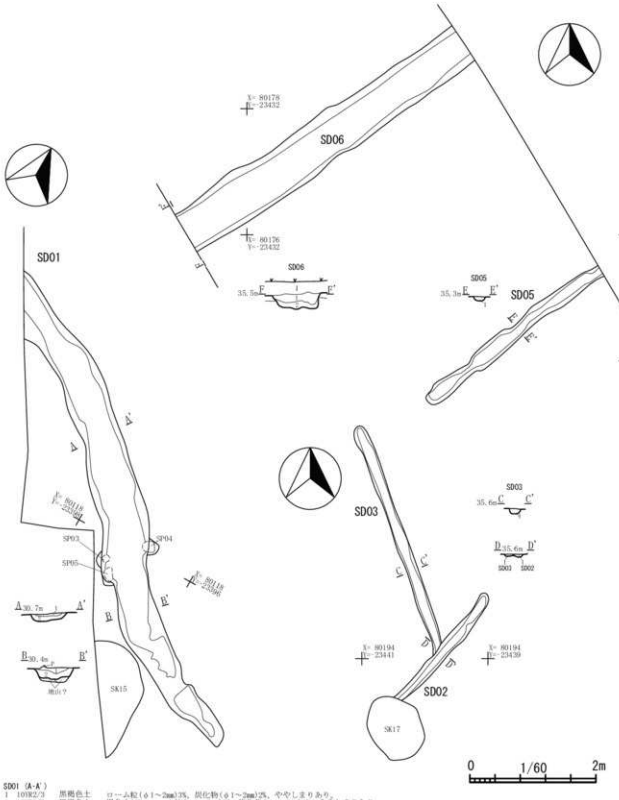
第５号溝跡（SD05、図70）

［位置・確認］調査区南側中央北寄り、28－29グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.2m、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区際に位置するため遺構全体の規模は不明だが、確認できた長さは（3.4）m、幅15～30cmの直線状の溝跡で、確認面からの深さは6～12cmである。断面形はU字状をなし、第Ⅴ層を部分的に掘り込む底面には若干の起伏が見られる。北東端と南西端との比高差はほとんどない。

［堆積土］ローム粒を含む暗褐色土が堆積している。

［出土遺物・遺構の時期と用途］遺物は出土しなかった。堆積土の様相等から平安時代の遺構であると考えられるが、その機能は不明である。



SD01 (A-A')
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～2mm)2%、ややしまりあり。
2　10YR2/3　黒褐色土30%、ローム粒(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
SD01 (B-B')
1　10YR3/3　暗褐色土　ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%、ややしまりあり。
2　10YR3/4　暗褐色土　褐色土30%、明褐色土20%、ローム粒(φ1～5mm)3%、炭化物(φ1～6mm)2%、しまり中。
SD02 (D-D')
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒(φ1～5mm)2%、ややしまりあり。
SD03 (C-C')
1　10YR2/3　黒褐色土　褐色土10%、ローム粒(φ1～2mm)2%、ややしまりあり。
SD03 (D-D')
1　10YR2/3　黒褐色土　ローム粒(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～3mm)1%、ややしまりあり。
SD05 (E-E')
1　10YR3/4　暗褐色土　褐色土10%、明黄褐色ロームブロック(φ20mm)3%、ローム粒(φ1～3mm)1%。
SD06 (F-F')
1　10YR2/3　黒褐色土　黄褐色ロームブロック(φ10～70mm)7%、ローム粒(φ1～3mm)2%、しまりあり。
2　10YR3/3　暗褐色土　黄褐色ロームブロック(φ40～80mm)25%、ローム粒(φ1～5mm)5%、しまりあり。

図70　溝跡

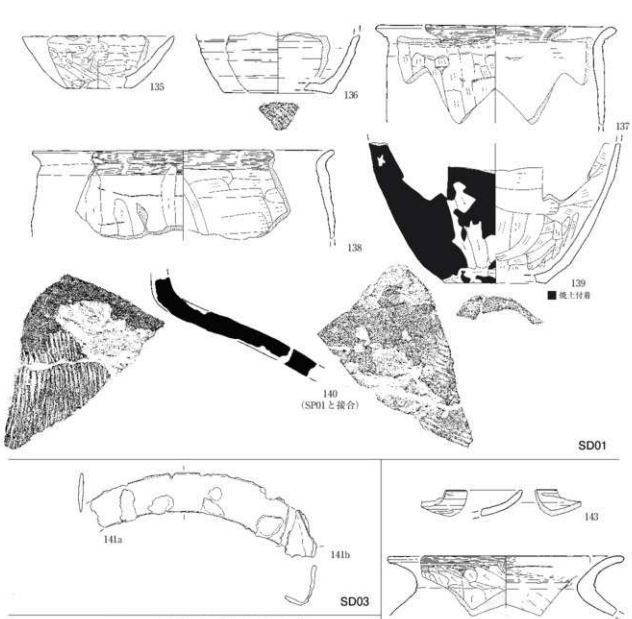


図71　溝跡・ピット　出土遺物

第６号溝跡（SD06、図70）

［位置・確認］調査区南側北部、28－28グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.3～35.4ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・底面］調査区を南西－北東方向に横切る直線状の溝跡で、確認できた長さは（5.3）ｍ、幅67～80㎝、確認面からの深さは10～20㎝である。断面形は上部が開くコ字状をなし、第Ⅴ層を掘

り込む底面は若干凹凸が見られるが、概ね平坦である。北東端と南西端との比高差は約10㎝で、底面は北東方向にわずかに傾斜している。

［堆積土］　上位は黒褐色土が、下位はロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積している。

［出土遺物・遺構の時期と用途］　遺物は出土しなかった。堆積土の様相から平安時代の遺構であると思われ、その機能として土地の区画や排水などが考えられる。

（4）ピット

農道28号からは25基のピットが検出されたが、それらが組み合わされて掘立柱建物跡や柵等の構造物をなすと思われるものは確認できなかった。いずれも平安時代のものと思われる。ピットの位置は図47の遺構配置図に、計測値や堆積土等は表12に示すにとどめることとする。28－45グリッドで検出されたSP01からは土師器皿片（143）・壺片（144）とともに、SD01出土遺物と接合した須恵器甕片（140）が出土した。

表12　農道28号　SP計測表

SP番号	地区	グリッド	座標値		標高	規模（cm）			備考
	図版番号		X	Y	（m）	長軸	短軸	深さ	
1	47	28-45	80104.0	-23388.8	27.9	36	42	38	土師器（図71-143・144）、須恵器（図7-140）出土。 堆積土－黒色土（10YR2/1）、ローム15%。
2	47	28-45・46	80102.3	-23386.3	29.0	43	20	23	堆積土－黒褐色土（10YR2/2）。
3	47-70	28-42	80117.7	-23397.3	30.3	(24)	(12)	26	SD01との新旧関係不明。堆積土－黒褐色土（10YR3/1）、ローム（φ1～40㎜）20%。
4	47-70	28-42	80118.2	-23396.8	30.3	26	(17)	27	SD01との新旧関係不明。堆積土－黒褐色土（10YR3/1）、ローム（φ1～20㎜）7%。
5	47-70	28-42	80177.5	-23397.2	30.3	(17)	(7)	24	SD01との新旧関係不明。堆積土－黒色土（10YR2/1）。
6	47	28-40	80124.4	-23402.8	31.5	24	(13)	23	堆積土－黒褐色土（10YR3/1）、ローム（φ1～30㎜）20%。
7	47	28-24	80214.7	-23402.7	31.5	27	25	25	堆積土－黒色土（10YR2/1）、ローム（φ1～5㎜）5%。
8	47	28-40	80125.1	-23403.0	31.5	28	25	20	堆積土－黒褐色土（10YR2/2）、ローム（φ1～10㎜）3%。
9	47	28-40	80127.5	-23401.1	31.6	28	27	15	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、ローム（φ1～5㎜）2%。
10	47	28-35	80148.5	-23411.9	34.0	48	40	49	上位20㎝の堆積土－褐色土（10YR4/4）、 下位29㎝の堆積土－暗褐色土（10YR3/3）、ローム（φ1～10㎜）7%。
11	47	28-35	80148.6	-23414.3	34.2	27	23	32	堆積土－褐色粘土質土（10YR4/4）、炭化物（φ1～15㎜）2%。
12	47	28-35	80147.7	-23415.2	34.2	23	22	24	柱痕（確認面で径10㎝）堆積土－黒色土（10YR2/1）、粘土ブロック（φ1～5㎜）5%。 掘り方堆積土－にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土ブロック（φ1～20㎜）主体。
13	47	28-32	80159.6	-23418.4	34.6	31	31	24	堆積土－にぶい黄褐色土（10YR4/3）。
14	47	28-32	80161.1	-23419.5	34.8	26	22	28	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、ローム（φ1～30㎜）5%。
15	47	28-31	80161.3	-23419.4	34.7	30	28	29	堆積土不明。
16	47	28-32	80160.1	-23419.5	34.8	28	25	17	上位10㎝の堆積土－褐色土（10YR4/4）、ローム（φ5～10㎜）1%。 下位7㎝の堆積土－黒褐色土（10YR3/2）。
17	47	28-31	80161.9	-23420.3	34.8	25	21	16	堆積土－暗褐色土（10YR3/3）、炭化物（φ1～5㎜）1%、焼土粒（φ1～5㎜）1%。
18	47	28-29	80172.4	-23425.8	34.8	32	26	31	堆積土－黒褐色土（10YR3/2）、ローム（φ5～20㎜）7%。
19	47	28-30	80169.4	-23428.2	35.1	28	25	16	堆積土－黒色土（10YR2/1）、ローム（φ1～30㎜）10%。
20	47	28-27	80180.8	-23431.1	35.4	31	25	29	堆積土－黒色土（10YR2/1）、ローム（φ1～5㎜）5%、白色粘土粒（φ5～15㎜）2%。
21	47	28-33	80156.4	-23417.9	34.6	27	20	31	堆積土－暗褐色土（10YR3/4）。
22	47	28-33	80156.4	-23418.5	34.6	27	18	29	堆積土－にぶい黄褐色土（10YR4/3）。
23	47	28-33	80155.9	-23418.7	34.6	24	23	21	堆積土－暗褐色土（10YR3/4）。
24	47-48	28-37	80139.9	-23409.4	33.5	(50)	32	38	SI01カマドとの新旧関係不明。堆積土－にぶい黄褐色土（10YR4/3）。
25	47-48	28-37	80140.9	-23409.3	33.6	35	32	28	SI01カマド付近。上位堆積土－灰黄褐色土（10YR4/2）、焼土（φ5㎜）3%。 下位堆積土－灰黄褐色粘土質土（10YR6/2）。

2　遺構外の出土遺物（図72）

農道28号の遺構外からは縄文土器0.65kg、土師器12.19kg、須恵器0.99kg、合計13.83kgの土器類と近代の遺物が出土した。そのうち縄文時代（145～153）と平安時代（154～159）の遺物を図示した。また、礫は0.03kg、鉄は0.07kg出土した。

以下、縄文時代の遺物（145～153）と平安時代の遺物（154～159）について記述する。

縄文時代の遺物には、前期末葉の土器（145）、後期前葉の十腰内Ⅰ式土器（146～148）、晩期前葉の大洞B式土器（150・151）、粗製土器（152）、石器（使用痕剥片・153）がある。

平安時代の遺物には、土師器坏（154･155）･鉢（156～158）･ミニチュア甕（159）、須恵器坏（160･161）を図示した。須恵器坏の２点には刻書が施されている。

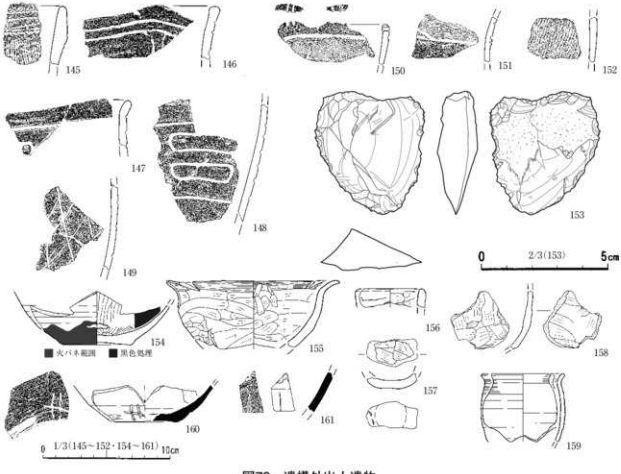


図72　遺構外出土遺物

3　遺物観察表

表13　農道28号出土土器類　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm） 口径	底径	器高	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
49	1	S801	覆土、床面	土師器	坏	口縁部	(13.6)	-	(3.7)	ロクロ	ロクロ（大部分剥落）	
49	2	S801	覆土	土師器	坏	底部	-	(5.4)	(2.1)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
49	3	S801	床面P5	土師器	小甕	略完形	(9.6)	6.4	8.0	輪積痕、磨耗のため調整不明瞭（横ナデ、ヘラナデ?、ヘラケズリ?）	磨耗のため調整不明瞭（指ナデ、横ナデ?）	底面・摩耗のため調整不明瞭（ヘラナデ?）。材料分析試料№22。歪みあり。
49	4	S801	覆土	土師器	小甕	口縁部	(12.6)	-	(5.9)	輪積痕、横ナデ、表面剥落のため不明	輪積痕、ナデ、横ナデ	
49	5	S801	覆土	土師器	小甕	口縁部	(12.4)	-	(6.5)	横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	
49	6	S801	覆土	土師器	鉢	口縁部	-	-	(3.7)	輪積痕、横ナデ	ナデ、横ナデ	
49	7	S801	床面P1～3、覆土	土師器	甕	体部上半	(19.6)	-	(20.1)	横ナデ、ヘラナデ、（被熱により剥落）	ナデ、横ナデ	歪みあり。
49	8	S801	床面直上P45	土師器	甕	底部	-	(10.4)	(7.5)	ヘラケズリ、炭化物付着	指ナデ	底面・砂底、剥落あり。
49	9	S801	覆土	土師器	甕	底部	-	(6.3)	(2.5)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
49	10	S801	覆土	土師器	壺	口縁部	-	-	(4.0)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	横ナデ、ナデ	
49	11	S801	覆土	須恵器	坏	底部	-	(4.6)	(1.5)	ロクロ、ナデ、火襷痕	ロクロ、火襷痕	底面・回転糸切。
49	12	S801	覆土	須恵器	鉢	口縁部	(18.0)	-	(3.9)	ロクロ	ロクロ	
49	13	S801	覆土	土師器	甕?	胴部	-	-	(5.6)	指ナデ	オサエ、剥落?	植物繊維中星。
50	14	S801	カマド（支脚下部）、カマド床面P44	土師器	甕	体部下半	-	(6.4)	(7.9)	ヘラナデ	輪積痕、ヘラナデ、指ナデ	底面・ヘラナデ。
50	15	S801	P64底面、カマド（支脚上部）床面P36。一部注記不明	土師器	甕	体部下半	-	(8.0)	(6.4)	オサエ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ（磨耗により不明瞭、焼土塊付着あり）	底面・砂底。
50	16	S801	カマド覆土、カマド覆土P19・25・31、覆土	土師器	小甕	略完形	10.8	5.6	9.3	輪積痕、磨耗のため調整不明瞭（横ナデ、ヘラケズリ?）	輪積痕、指ナデ、ナデ、横ナデ	底面・摩耗のため調整不明瞭（ヘラナデ?）。材料分析試料№23。
50	17	S801	覆土、カマド覆土P13・35	土師器	甕	口縁部	(19.8)	-	(13.0)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、焼土付着	輪積痕、ナデ、横ナデ	
50	18	S801	覆土、カマド覆土P9・12、28-36-1層	土師器	甕	口縁部	(15.6)	-	(10.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、剥落あり	指ナデ、横ナデ	歪みあり。
50	19	S801	カマド覆土P11、カマド覆土	土師器	甕	口縁部	(20.2)	-	(9.0)	横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	輪積痕、横ナデ（磨耗により調整不明瞭）	
50	20	S801	カマド覆土P6・16	土師器	甕	胴部	-	-	(12.5)	輪積痕、ヘラケズリ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	
50	21	S801	床面P4	土師器	甕	体部下半	-	(8.3)	(21.4)	ヘラナデ、ヘラケズリ、焼土付着	ヘラナデ、指ナデ	底面・砂底。内外面とも化粧粘土。歪みあり。
50	22	S801	カマド覆土P8・13・15・17・18・20・21・24・27～30・32～34・37～39・42、覆土	土師器	甕	略完形	(20.9)	(6.9)	(32.0)	横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ、焼土付着	輪積痕、指ナデ、ナデ、横ナデ	底面・砂底。
55	28	S802	P46覆土	土師器	坏	底部	-	(5.4)	(1.9)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
55	29	S802	覆土	土師器	坏	底部	-	(5.2)	(1.8)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	底面・回転糸切。
55	30	S802	カマド火床面P2、カマド覆土	土師器	甕	口縁部	(13.0)	-	(7.0)	横ナデ、ヘラナデ	輪積痕、指ナデ、横ナデ	
55	31	S802	床面、床面P1、P42覆土	土師器	小甕	体部下半	-	(6.4)	(9.6)	ヘラナデ	指ナデ、ナデ	底面・オサエ。
55	32	S802 S805	覆土 覆土	土師器	壺	口縁部	(17.6)	-	(7.0)	輪積痕、ロクロ、横ナデ	ミガキ、黒色処理	材料分析試料№24。
55	33	S802	覆土	須恵器	坏	口縁部	(13.0)	-	(2.7)	ロクロ	ロクロ	
55	34	S802	床面、28-33-1層	須恵器	壺	肩部	-	-	(8.2)	ロクロ、ヘラナデ	ロクロ	
55	35	S802	覆土	須恵器	甕	胴部	-	-	(10.8)	叩き目	ナデ	
57	38	S803 S805	覆土 覆土	土師器	坏	略完形	(13.1)	(5.3)	(5.7)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
57	39	S803	覆土	土師器	坏	口縁部	(13.2)	-	(3.4)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	
57	40	S803	覆土	土師器	甕	口縁部	-	-	(3.8)	横ナデ、ヘラナデ、（磨耗）	横ナデ、（磨耗）	
57	41	S803	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.0)	(1.4)	ヘラナデ	ナデ	底面・砂底。
57	42	S803	覆土、28-33-1層	土師器	甕	底部	-	10.2	(7.9)	ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ、ナデ	底面・平滑なナデ。
59	43	S804	覆土、28-26-28-27-1層	土師器	坏	略完形	(13.6)	(6.1)	5.7	ロクロ	ミガキ、黒色処理、摩滅顕著	底面・回転糸切。内外面に黒色物付着、灯明皿として使用。
59	44	S804	覆土	土師器	坏	体部上半	(15.6)	-	(4.9)	ロクロ	輪積痕、ロクロ	
59	45	S804	覆土	土師器	甕	口縁部	(13.8)	-	(6.1)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	ナデ?、横ナデ、炭化物付着	
59	46	S804	覆土	土師器	甕	口縁部	(28.4)	-	(6.8)	横ナデ、ヘラケズリ	ナデ、横ナデ	
59	47	S804	覆土、覆土P3-4、28-26-28-27-1層	土師器	甕	底部	-	(9.5)	(6.1)	ヘラケズリ	指ナデ、ナデ	底面・砂底。

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm） 口径	底径	器高	外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
59	49	S804	覆土 P1・2・5・8・10・11、覆土、28-25 1層、28-26 1層	須恵器	大甕	体部上半	(17.6)	-	(29.5)	ロクロ、叩き目、刻書	ロクロ、あて具痕、ナデ	
61	50	S805	覆土	土師器	坏	略完形	(15.2)	(6.0)	5.1	ロクロ	輪積痕、ロクロ	底面・静止糸切?
61	51	S805	覆土	土師器	坏	略完形	(14.9)	6.2	5.3	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。材料分析試料№26。
61	52	S805	覆土	土師器	坏	略完形	(13.6)	6.0	5.3	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。
61	53	S805 S802	覆土、28-34 1層、28-24 1層 覆土、確認面	土師器	坏	略完形	(14.4)	(6.4)	(5.0)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	底面・回転糸切。材料分析試料№27。
61	54	S805	覆土	土師器	小甕	口縁部	(10.2)	-	(2.8)	輪積痕、（磨耗）	輪積痕、ナデ、（磨耗）	
61	55	S805	覆土	土師器	甕	口縁部	(16.0)	-	(4.5)	横ナデ、ヘラナデ	輪積痕、ヘラナデ、ナデ、横ナデ	
61	56	S805 S802	覆土 覆土	土師器	甕	口縁部	(15.2)	-	(9.1)	輪積痕、ロクロ	輪積痕、ロクロ、（磨耗）	図61-57と同一個体?
61	57	S805	覆土	土師器	小甕	底部	-	(6.0)	(2.7)	ロクロ	ロクロ	底面・回転糸切。図61-56と同一個体?
62	58	S805	床面直上P2・6・17・18・20・21・25・26・28・31、覆土、ベルト	土師器	甕	略完形	26.0	10.0	31.0	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、（被熱により一部不明瞭）	指ナデ、ヘラナデ、横ナデ	底面・砂底。材料分析試料№25。歪みあり。口縁は22.7×25.8cmの楕円形。
62	59	S805	床面直上P1・8～10・12～15、覆土、ベルト	土師器	甕	体部上半	(23.8)	-	(22.0)	横ナデ、ヘラナデ、（磨耗）	ナデ、横ナデ	
62	60	S805 S808	床面直上P2～6・11・19・23・26・28・30・33、覆土 覆土	土師器	甕	体部上半	(25.5)	-	(19.8)	輪積痕、横ナデ、ナデ、（磨耗）	輪積痕、ヘラナデ、ナデ	
62	61	S805	床面直上P1	土師器	甕	口縁部	(24.0)	-	(11.1)	輪積痕、オサエ、横ナデ、ナデ	指ナデ、ナデ、横ナデ、（剥落）	
62	62	S805	床面直上P16、覆土、床面	土師器	甕	底部	-	(8.9)	(7.6)	ヘラナデ	指ナデ	底面・オサエ、砂底。
62	63	S805	床面直上P12・14・37	土師器	甕	底部	-	(9.4)	(6.8)	ヘラケズリ、ヘラナデ	指ナデ	底面・砂底。
62	64	S805	床面直上P35、覆土	土師器	甕	体部下半	-	9.3	(12.3)	ヘラケズリ、ヘラナデ	輪積痕、指ナデ	底面・砂底。
63	65	S805	覆土	土師器	甕	口縁部	(25.0)	-	(9.1)	輪積痕、ロクロ、ヘラナデ、（磨耗）	ロクロ、（磨耗）	
63	66	S805	覆土	土師器	甕	口縁部	(23.2)	-	(10.9)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	ナデ?、横ナデ、（磨耗）	
63	67	S805	覆土、ベルト、覆土P24	土師器	甕	口縁部	(26.8)	-	(6.0)	ロクロ、ヘラナデ	ロクロ	
63	68	S805	覆土	土師器	甕	口縁部	(20.8)	-	(11.4)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、焼土付着	ナデ、横ナデ	
63	69	S805	覆土、ベルト	土師器	甕	体部下半	-	(7.5)	(10.9)	輪積痕、ヘラナデ、（磨耗）	指ナデ、（磨耗）	底面・ヘラナデ。
63	70	S805	覆土、28-34 1層	土師器	甕	底部	-	(6.4)	(7.1)	ヘラナデ、ヘラケズリ、全体的に焼土付着	指ナデ	底面・上げ底風砂底。
63	71	S805	覆土	土師器	鉢	口縁部	(34.4)	-	(5.9)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	ロクロ	
63	72	S805	覆土	須恵器	坏	略完形	(14.0)	5.4	5.0	ロクロ、ナデ、刻書、火襷痕	ロクロ、火襷痕	
63	73	S805	覆土	須恵器	坏	胴部	-	-	(2.3)	ロクロ、刻書	ロクロ	
63	74	S805	覆土、28-34 1層	須恵器	壺	肩部	-	-	(3.3)	輪積痕、タタキ、ロクロ	輪積痕、ロクロ	
63	75	S805	覆土	須恵器	壺	底部	-	(14.0)	(3.1)	ヘラケズリ、ロクロ	指ナデ、ヘラナデ	底面、オサエ、菊花状調整、高台。
63	76	S805	覆土	須恵器	甕	胴部	-	-	(9.0)	タタキ	タタキ、（消滅）	図49-132と同一個体?
66	79	SK01	覆土	土師器	坏	口縁部	(14.6)	-	(3.0)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	
66	80	SK01	覆土	土師器	坏	底部	-	(6.0)	(1.6)	ロクロ	ミガキ、黒色処理	底面・回転糸切。
66	81	SK01	覆土	土師器	鉢	口縁部	(11.2)	-	(6.0)	横ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ、ナデ、横ナデ	
66	82	SK01	覆土	土師器	甕	口縁部	(20.8)	-	(8.1)	横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	図71-142と同一個体?
66	83	SK01	底面直上	土師器	甕	体部上半	(24.0)	-	(19.4)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	ナデ?、横ナデ?	
66	84	SK01	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.8)	(7.4)	全面的に焼土付着のため調整不明	ナデ	底面・砂底。
66	85	SK01	覆土	土師器	小甕	底部	-	(7.0)	(2.9)	ヘラナデ	磨毛目、指ナデ	底面・ヘラナデ。
66	86	SK02	底面下67・228・229	土師器	坏	体部上半	(13.6)	-	(4.8)	横ナデ、ヘラケズリ?、（磨耗）	輪積痕、ナデ、横ナデ	
66	87	SK02	底面下180・217	土師器	甕	口縁部	(15.8)	-	(8.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ?	ナデ、横ナデ	
66	88	SK02	底面P211、28-24 1層	土師器	甕	口縁部	(13.9)	-	(7.0)	横ナデ、ヘラナデ	ヘラナデ、ナデ、横ナデ、（磨耗）	
66	89	SK02	底面下173・178・192	土師器	甕	口縁部	(22.2)	-	(8.1)	横ナデ、ヘラケズリ	ナデ、横ナデ	
66	90	SK02	底面P28・51、覆土、底面	土師器	甕	口縁部	(25.0)	-	(7.5)	横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備　考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
66	91	SK02	底面P41、28-24 Ⅰ層	土師器	甕	口縁部	(22.5)	-	(6.0)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ、横ナデ、ナデ	
66	92	SK02	底面P201・205	土師器	甕	口縁部	(21.9)	-	(7.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ	輪積痕、横ナデ?、(磨耗)	胴部に貫通孔？
66	93	SK02	底面P17・144・209	土師器	甕	口縁部	(26.1)	-	(12.0)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、焼土付着	輪積痕、ヘラナデ、ナデ、横ナデ	
67	94	SK02	覆土、底面、底面P74・92～96・98・100・101・104・108・116・226、28-24 Ⅰ層	土師器	甕	体部上半	22.3	-	(22.0)	横ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、横ナデ	
67	95	SK02	底面P212・219・228・232～234・241	土師器	甕	口縁部	(19.9)	-	(7.4)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、横ナデ	図67-97と同一個体。
67	96	SK02	覆土、底面P10・11・14・15・17・18・20・22・26・27・32・33・36～38・42・47・52～54・73・76・78・79・99・100・105・110・107・108、28-24 Ⅰ層	土師器	甕	略完形	20.6	11.0	27.7	横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ、指ナデ、(磨耗により不明瞭)	輪積痕、指ナデ、ナデ、横ナデ、(磨耗により不明瞭)	底面-砂底。材料分析試料No.28。
67	97	SK02	底面P242、覆土	土師器	甕	体部下半	-	(9.1)	(9.5)	ヘラケズリ、ヘラナデ	指ナデ、ナデ	底面-砂底。図67-95と同一個体。
67	98	SK02	覆土、底面、底面P222	土師器	甕	体部下半	-	(8.4)	(8.0)	ヘラナデ、(磨耗)	輪積痕、指ナデ?、(磨耗)	底面-砂底。
67	99	SK02	底面P-4・12・11・155・175、28-24 Ⅰ層	土師器	甕	体部下半	-	(9.9)	(11.3)	ヘラケズリ	輪積痕、指ナデ?、(磨耗)	底面-砂底。
67	100	SK02	底面P39・61・84・139・218・210、28-24 Ⅰ層	土師器	甕	体部下半	-	(11.1)	(12.5)	ヘラナデ、(磨耗)	指ナデ、ナデ、(磨耗)	底面-砂底。
68	101	SK03	覆土	土師器	ミニチュア鉢	略完形	(4.4)	-	(4.0)	オサエ、ヘラケズリ	指ナデ	底面-ヘラナデ。
68	102	SK03	覆土	土師器	小甕	口縁部	(9.8)	-	(3.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	
68	103	SK03	覆土、底面	土師器	甕	胴部	-	-	(13.1)	ヘラケズリ、ヘラナデ	ナデ	貫通孔2つ。図68-104・68-105と同一個体の可能性あり。
68	104	SK03	覆土、底面	土師器	甕	体部上半	(25.6)	-	(25.9)	横ナデ、ヘラケズリ	指ナデ、横ナデ、(磨耗)	図68-103・68-105と同一個体の可能性あり。
68	105	SK03	覆土、底面	土師器	甕	底部	-	(9.8)	(5.8)	ヘラケズリ、ヘラナデ	指ナデ	底面-ヘラナデ。図68-104・68-103と同一個体の可能性あり。
68	106	SK04	覆土	土師器	鉢	口縁部	(9.2)	-	(4.1)	横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	
68	107	SK04	覆土	土師器	堝	口縁部	-	-	(6.5)	輪積痕、オサエ、横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	図68-108と同一個体。
68	108	SK04	覆土	土師器	堝	口縁部	-	-	(6.4)	輪積痕、オサエ、横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ、(磨耗)	口縁歪み。図68-107と同一個体。
68	109	SK07	覆土	土師器	甕	底部	-	(9.2)	(4.8)	ヘラケズリ	ナデ	底面-砂底、ヘラナデ。
68	110	SK08 SK07	覆土 覆土	土師器	甕	口縁部	(15.0)	-	(6.2)	横ナデ、ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ	
68	111	SK08	覆土	土師器	甕	口縁部	-	-	(9.1)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ、	輪積痕、ヘラナデ?	底面-横ナデ?、(摩耗)。
68	112	SK08	覆土	土師器	甕	底部	-	(9.8)	(3.4)	ヘラケズリ、ヘラナデ	ナデ	底面-砂底、ヘラナデ。
68	113	SK08	覆土	土師器	甕	胴部下半	-	-	(7.6)	ヘラケズリ、ヘラナデ	指ナデ、ヘラナデ、横ナデ、(磨耗)	
68	117	SK08	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(2.4)	縦位－RL側面圧痕、横位－L側面圧痕	(剥落)	植物繊維多量。前期末葉・円筒下層d2式
69	118	SK10	覆土	土師器	坏	略完形	(14.4)	(5.6)	(6.2)	ロクロ	ロクロ	底面-回転糸切。歪みあり。
69	119	SK10	覆土	土師器	甕	口縁部	(31.3)	-	(8.9)	横ナデ、ヘラナデ、(磨耗)		
69	120	SK10	覆土	土師器	甕	口縁部	-	-	(9.3)	横ナデ、ヘラナデ、焼土付着	ナデ?、横ナデ?、(磨耗)	
69	121	SK10	覆土	土師器	甕	底部	-	(8.6)	(8.0)	ヘラケズリ	指ナデ	底面-砂底。
69	122	SK10	覆土	土師器	甕	体部下半	-	(8.4)	(20.3)	ヘラケズリ、ヘラナデ、焼土付着	ナデ、(磨耗)	底面-ナデ。
69	123	SK12	Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.05)	口唇－単軸絡条体第1類（R）回転、口縁－単軸絡条体第1類（R）側面圧痕		植物繊維微量。前期末葉・円筒下層d2式
69	124	SK14	覆土	土師器	坏	体部上半	(14.0)	-	(4.2)	ロクロ、(磨耗)	ロクロ、(磨耗)	
69	125	SK14	覆土	土師器	坏	略完形	(12.7)	6.4	5.9	ヘラナデ（磨耗）、炭化物付着	指ナデ（磨耗）	底面-砂底?(剥落?)。
69	126	SK14	覆土	土師器	甕	口縁部	(14.4)	-	(3.1)	横ナデ	ナデ、横ナデ	
69	127	SK14	覆土	土師器	甕	口縁部	(14.1)	-	(7.3)	横ナデ?、ヘラナデ、(磨耗)	輪積痕、ヘラナデ、ナデ、横ナデ	
69	128	SK14	覆土、28-30 Ⅰ層	土師器	甕	口縁部	(19.2)	-	(8.2)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ?、(磨耗)	ヘラナデ、指ナデ、横ナデ	
69	129	SK14	覆土	土師器	甕	口縁部	(23.6)	-	(6.2)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ?、(磨耗)	
69	130	SK14	覆土	土師器	甕	底部	-	(9.4)	(6.2)	輪積痕、オサエ、ヘラナデ	指ナデ	底面-木葉痕。
69	131	SK14	覆土	土師器	甕	底部	-	(10.0)	(5.9)	輪積痕、ヘラケズリ	指ナデ	底面-砂底。

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
69	132	SK14	覆土	須恵器	甕	胴部	-	-	(8.1)	叩き目	当て具痕（剥落あり）	図63-76と同一個体?
69	133	SK20	覆土	土師器	坏	体部上半	-	-	(4.4)	輪積痕、横ナデ、ナデ	ミガキ?(不明瞭)	
69	134	SK20	覆土	土師器	甕	胴部	-	-	(3.8)	ヘラナデ	ヘラナデ?(磨耗)	
71	135	SD01	覆土	土師器	鉢	体部上半	(12.0)	(5.2)	(4.1)	輪積痕、ナデ、ヘラナデ	ナデ	底面-蓆編痕?
71	136	SD01	覆土	土師器	小甕	底部	-	(8.4)	(4.8)	ロクロ	ロクロ	底面-回転糸切。
71	137	SD01	覆土	土師器	甕	口縁部	(19.0)	-	(7.8)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	輪積痕、横ナデ、ナデ?、(磨耗)	
71	138	SD01	覆土	土師器	甕	口縁部	(23.8)	-	(7.1)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ、ナデ、横ナデ	
71	139	SD01	覆土	土師器	甕	体部下半	-	(8.0)	(11.1)	ヘラケズリ、焼土付着	ヘラナデ	底面-砂底。
71	140	SD01	覆土、SP01底面	須恵器	甕	肩部	-	-	(7.6)	叩き目、ナデ、火バネ	叩き目、ナデ	
71	142	SD04	覆土	土師器	甕	口縁部	-	-	(8.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラナデ	ナデ、横ナデ、火バネ	図66-82と同一個体?
71	143	SP01	底面	土師器	皿	体部上半	-	-	(2.1)	ロクロ	ロクロ	
71	144	SP01	底面	土師器	壺	口縁部	(18.6)	-	(4.7)	輪積痕、横ナデ、ヘラケズリ	輪積痕、ナデ?、横ナデ?(磨耗)	
72	145	遺構外	28-23 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.7)	口縁－LR横・LR側面圧痕、胴部－単軸絡条体第1類（L）回転・結節回転文（L）	ミガキ	植物繊維少量。前期・円筒下層d1式
72	146	遺構外	28-48 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.15)	沈線、ミガキ	ミガキ	後期・十腰内Ⅰ式
72	147	遺構外	28-24 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.6)	沈線	平滑なナデ	後期・十腰内Ⅰ式
72	148	遺構外	28-24 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(9.4)	沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
72	149	遺構外	28-46 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(6.75)	沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅰ式
72	150	遺構外	28-47 Ⅲ層、28-42 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.1)	口唇－突起上に刺突、口縁－沈線・L横	ナデ	図72-151と同一個体。晩期・大洞B式
72	151	遺構外	28-47 Ⅲ層	縄文土器	深鉢	頸部	-	-	(3.5)	沈線、L横	ナデ	図72-150と同一個体。晩期・大洞B式
72	152	遺構外	28-46 Ⅰ層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(3.5)	LR横、炭化物付着	ナデ	晩期
72	154	遺構外	28-33 Ⅰ層、28-34 Ⅰ層、28-38 Ⅰ層、28-39 Ⅰ層	土師器	坏	体部下半	-	(5.4)	(4.2)	ロクロ(火バネ顕著)	ミガキ、黒色処理	底面-回転糸切。
72	155	遺構外	28-27 Ⅰ層	土師器	坏	体部上半	(13.6)	-	(5.4)	指ナデ、横ナデ、ヘラケズリ	指ナデ、横ナデ	
72	156	遺構外	28-26 Ⅰ層	土師器	鉢	口縁部	(5.4)	-	(1.5)	輪積痕、オサエ	ナデ	
72	157	遺構外	28-26 Ⅰ層	土師器	鉢	底部	-	-	(1.3)	オサエ	指ナデ	底面-オサエ。
72	158	遺構外	28-27 Ⅰ層	土師器	鉢?	胴部	-	-	(4.6)	ヘラナデ	指ナデ	
72	159	遺構外	28-23 Ⅰ層	土師器	ミニチュア甕	体部上半	(6.6)	-	(5.4)	ロクロ	ロクロ	
72	160	遺構外	28-42 攪乱	須恵器	坏	体部下半	-	(5.2)	(2.9)	ロクロ、刻書	ロクロ	底面-回転糸切。
72	161	遺構外	28-27 Ⅰ層	須恵器	坏	胴部	-	-	(3.0)	ロクロ、刻書	ロクロ	

表14　農道28号出土石器・石製品・土製品・金属製品　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	石質	計測（mm）			重さ（g）		備考
							長さ	幅	厚さ	処理前	処理後	
51	23	SI01	覆土一括	石器	凹石	安山岩	(53)	55	45	(182.7)		欠損。
51	24	SI01	床面	石器	敲・凹石	安山岩	(76)	64	43	(277.4)		欠損。
51	25	SI01	覆土S1	石器	台石	流紋岩	(299)	(209)	(113)	(7,750.0)		欠損。敲きによる?剥落。
51	26	SI01	床面S4	石器	台石?	安山岩	(178)	(117)	(117)	(4,000.0)		欠損。磨り・擦痕あり。
52	27	SI01	床面S5	石器	台石?	安山岩	(236)	(153)	(158)	(5,550.0)		欠損。磨り・擦痕・敲き?あり。
56	36	SI02	カマド覆土、カマド火床面	石器	礫	安山岩	(95)	(148)	44	(637.0)		欠損。
56	37	SI02	床面S1	石器	台石	安山岩	(340)	(231)	(134)	(1,325.0)		欠損。
59	48	SI04	覆土	石製品	軽石製品	軽石	(32)	23	17	4.6		
63	77	SI05	覆土	鉄製品	鎌の柄部?	-	(35)	80	5	(2.4)	(1.2)	欠損。
63	78	SI05	覆土	鉄製品	刀子	-	(27)	14	6	(6.2)	(2.0)	欠損。
68	114	SK08	覆土	土製品	焼成粘土	-	26	33	7	-	4.6	上面－植物繊維痕? 下面－オサエ。
68	115	SK08	覆土	土製品	焼成粘土	-	84	32	7	-	6.1	上面－植物繊維痕（笹痕?）。 下面－植物繊維痕。
68	116	SK08	覆土	土製品	焼成粘土	-	24	43	6	-	8.9	上面－オサエ。 下面－砂付着。輪積痕あり。
71	141	SD03	覆土	鉄製品	鎌	-	a (156) b (40)	34 26	6 4	(66.5)	(39.8)	欠損。処理前重量に土壌は含まない。
72	153	遺構外	28-45 Ⅳ層	石器	使用痕剥片	頁岩	49	43	16	26.6		裏面は節理面で剥離されており、不純物付着。

第４章　平成22年度の検出遺構と出土遺物

第１節　農道１号

農道１号の平成22年度調査区は、遺跡の存在する台地ほぼ中央部の平坦面にある。北側には農道２号と農道８号が抉り台地中央部に大きく抉り込む沢があって、その沢頭部分に農道１号の起点がある。調査前の標高は、起点のある北東端部約35.7ｍ、平成22年度調査区南西端約36.4ｍで、南西から北東方向へごくわずかに傾斜する。

農道１号は平成20年度と21年度にも調査を行っていて、平成22年度調査区はそれに隣接する北東部約３分の１の区間である。平成22年度は長さ約177ｍ、幅約７ｍの1,228㎡を調査し、１－１～13グリッドと１－21グリッド周辺で土坑１基、溝跡１条、ピット２基、焼土遺構３基が散発的に検出された。遺物は、縄文・平安時代のものが段ボール箱１箱分出土した。これらに以前の調査結果をまとめると、農道１号では建物跡（溝跡・掘立柱建物跡・土坑を含む、建て替え含む）２棟、竪穴住居跡２軒、土坑11基、溝跡２条、ピット22基、焼土遺構３基、溝状土坑４基、埋設土器１基が検出され、計段ボール箱８箱分の遺物が出土したことになる。焼土遺構、溝状土坑、埋設土器などを除き、多くの遺構が平安時代のものであると思われる。なお３ヶ年にわたる調査であることから、遺構名についてはそれまでの調査で検出された遺構名の続き番号を付している。

以下、個々の遺構や出土遺物について記述していく。

１検出遺構

(1) 土坑

第12号土坑（SK12、図75）

[位置・確認] 調査区北東、１－７グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.5ｍ、第Ⅳ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は長軸1.4ｍ、短軸1.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは35㎝である。底面は第Ⅴ層まで地山を掘り込んで掘り方を有している。断面形は上部が開く皿状をなす。

[堆積土] 黒褐色土もしくは黒色土が堆積しており、覆土中位では炭化物層が検出された。底面は掘り方を有し、ロームと黒褐色土で床面を整えている。

[出土遺物・遺構の時期等] 炭化物は出土したものの、土器などの遺物は出土しなかった。帰属時期は不明だが、堆積の状況とその様相等から平安時代以降の可能性があるが、時期は特定できない。

(2) 溝跡

第４号溝跡（SD04、図75・76）

[位置・確認] 調査区北東寄り、１－13グリッドに位置し、遺構確認面の標高は35.7ｍ、第Ⅳ層で確認した。しかし調査区壁で土層観察を行った結果、第Ⅲ層の上位から掘り込まれていることがわかった。他遺構との重複は認められなかった。

[平面形・規模・底面] 調査区際に位置するため遺構全体の規模は不明だが、確認できた長さは（3.1）ｍ、幅88～103㎝の溝状を呈し、確認面からの深さは７～10㎝である。平面形は湾曲する弧状をなし、

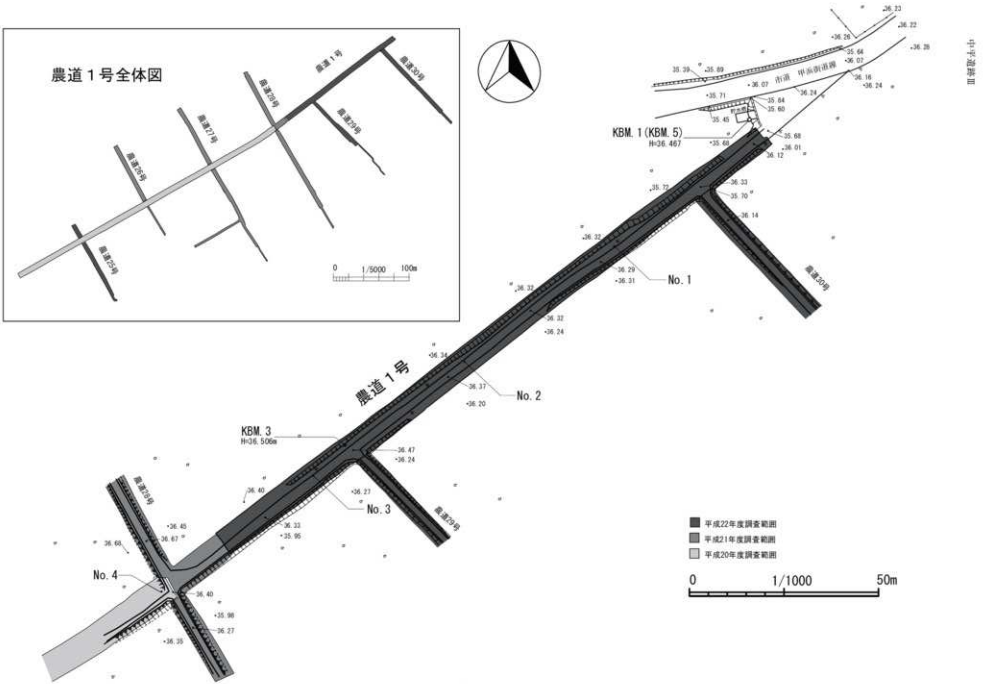

農道1号全体図
農道1号
農道30号
農道29号
農道27号
農道26号
農道25号
0 1/5000 100m
KBM. 1 (KBM. 5)
H=36.467
KBM. 3
H=36.506m
No. 1
No. 2
No. 3
No. 4
平成22年度調査範囲
平成21年度調査範囲
平成20年度調査範囲
0 1/1000 50m

図73 農道1号地形図

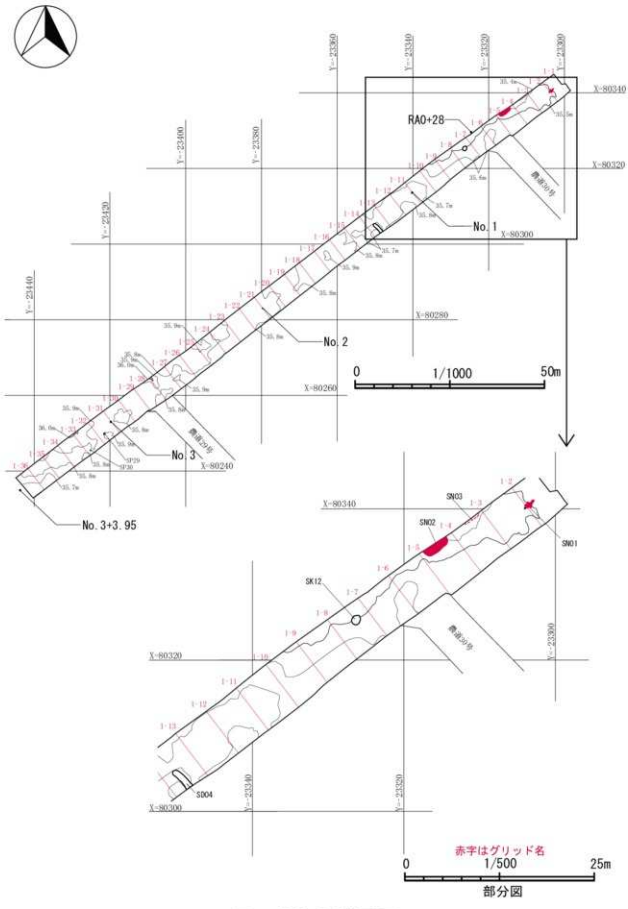
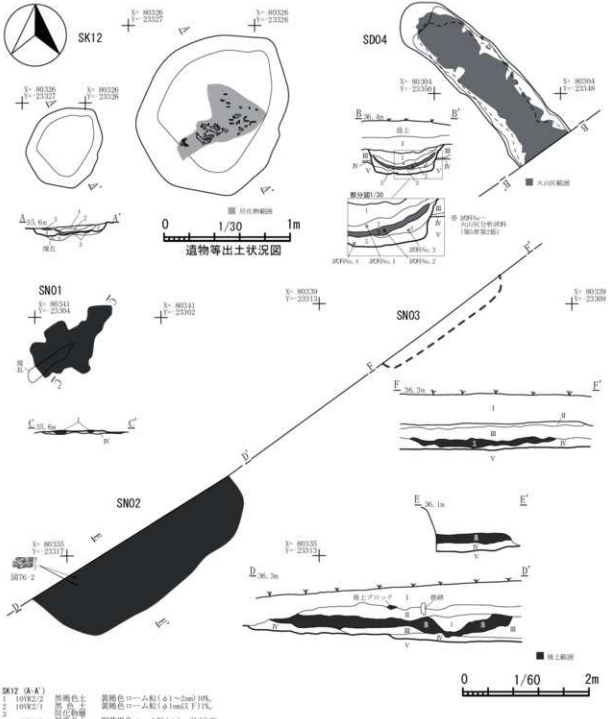


図74　農道１号遺構配置図



SK12 (A-A')

1	10YR2/2	黒褐色土	黄褐色ローム粒(φ1～2mm)10%。
2	10YR2/1	黒 色 土	黄褐色ローム粒(φ1mm以下)1%。
3		炭化物層	
4	10YR2/2	黒褐色土	明黄褐色ローム粒(φ1mm以下)3%。
5	10YR6/6	明黄褐色土	掘り方。黒褐色土塊(φ50mm)が層左側にあり、明褐色土(φ1mm以下)2%。

SD04 (B-B')

1	10YR2/1	黒 色 土	ローム粒(φ1mm以下)1%。しまりあり、ビニールなし。
1	10YR1.7/1	黒 色 土	ローム粒(φ1～3mm)1%。やや、しまりあり。
2	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒(φ1～3mm)3%。しまりあり。B-Tmの2次堆積層?。
3	10YR5/4	黒褐色土	黒褐色土20%。しまり強。B-Tm層。
4	10YR2/1	黒 色 土	掘り方。火山灰5%(To-a?)。しまりあり。
5	10YR6/4	黒褐色土	掘り方。黒色土10%。褐灰色粘土ブロック(φ1～50mm)5%。しまり強。

SN01 (C-C')

1	10YR3/3	暗褐色土	にぶい赤褐色焼土30%。炭化物(φ1mm以下)微量。しまりあり。
2	10YR2/3	黒褐色土	赤褐色焼土粒(φ1mm以下)微量。炭化物(φ1mm以下)微量。しまりあり。

SN02 (D-D'・E-E')

1	10YR2/1	黒 色 土	にぶい黄褐色ローム ブロック(φ20mm)層左側にあり。明赤褐色ローム粒(φ1mm以下)3%。炭化物(φ1mm以下)2%。しまりあり。
2	5YR5/8	明赤褐色土と10YR2/2黒褐色土の混合土	
3	10YR2/2	黒褐色土	にぶい黄褐色土10%。赤褐色焼土粒(φ1mm以下)微量。

SN03 (F-F')

1	5YR3/4	暗赤褐色土	暗褐色土30%。ローム粒(φ1mm以下)1%。焼土粒(φ1mm以下)1%。

図75 農道1号 検出遺構

断面形は上部が開くコ字状をなしている。底面は掘り方を有し、凹凸を敷き均すように塊状の第Ⅴ層土と第Ⅱ層由来の黒色土が掘り方に充填されている。掘り方下部は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。

［堆積土］堆積土中位（第３層）には火山灰が薄層をなして堆積しており、その上位には第Ⅱ層由来の黒色土が堆積する。第３層で検出された火山灰に関して、その上下及び掘り方（第５層）の土壌に含まれる火山灰４点の分析を行ったところ、堆積土の３点ではB-Tmが主体的であるが、掘り方（第５層）ではB-Tmは含まれず、To-aが含まれることが判明した（第５章第２節）。To-a降下直後に構築されてTo-aが掘り方に混入、溝機能時に黒色土が三角状に堆積、そこにB-Tmがレンズ状に降下・堆積したものと考えられる。

［出土遺物・遺構の時期等］出土土器は須恵器0.03kgで、須恵器坏（図76－１）１点を図示した。底外面には２条の線刻のようなものが割れ口部分に認められ、刻書である可能性がある。この須恵器坏は火山灰の上層から出土したもので、埋没途中に流入したものと考えられる。

掘り方及び堆積土から検出された火山灰の状況から、To-a降下直後に構築され、B-Tmが降下する時点では初期堆積が進んだ状況であったことがわかった。したがって、10世紀中葉（915年もしくは916年頃）の遺構であると考えられる。また、底面に明瞭な高低差はみられず、底面付近で砂等流水作用による堆積状況もみられないことから水を流すための溝ではないと判断できるが、本遺構の直接的な機能は不明である。

(3) ピット

農道１号からは２基のピットが検出されたが、掘立柱建物を構成するものであるかどうかは不明である。ピットの位置は図74の遺構配置図に、計測値等は表15に示した。いずれも遺物は出土しておらず、構築時期も不明である。

表15　農道１号　SP計測表

SP番号	掲載図版番号	グリッド	座標値 X	座標値 Y	標高 (m)	規模（cm） 長軸	規模（cm） 短軸	規模（cm） 深さ	備考
29	74	1-31	80249.8	-23421.5	35.9	57	47	40	
30	74	1-32	80245.5	-23425.1	35.9	33	29	24	

（4）焼土遺構

第１号焼土遺構（SN01、図75）

［位置・確認］１－１・２グリッドに位置し、標高は約35.6ｍである。第Ⅳ層上面で確認し、他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・堆積土］規模は長軸1.4ｍ、短軸0.9ｍの不整形を呈する。堆積土はにぶい赤褐色焼土と暗褐色土の混合土層である。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土しなかったが土層観察から縄文時代に帰属する可能性がある。

第２号焼土遺構（SN02、図75・76）

［位置・確認］１－４グリッドに位置し、標高は約35.7ｍである。第Ⅱ層下面で確認し、他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・堆積土］調査区際に位置するため遺構の全容は不明だが、南東半が検出されたと思われる。検出された長軸は3.7m、隅丸方形を呈する。堆積土は明赤褐色焼土が主体である。

［出土遺物・遺構の時期等］３片の縄文土器0.04kgが出土し、接合したのが図76－２の縄文時代後期、十腰内Ⅱ式の土器片である。出土遺物と検出土層から縄文時代後期の焼土遺構の可能性がある。

第３号焼土遺構（SN03、図75）

［位置・確認］１－３グリッドに位置し、標高は約35.5ｍである。第Ⅲ層下面で確認し、他遺構との重複は認められなかった。

［平面形・規模・堆積土］調査区壁の土層観察によって本遺構を検出したため、平面形は不明であるが、長軸2.3ｍ以上の規模を有する。堆積土は暗赤褐色焼土が主体である。

［出土遺物・遺構の時期等］遺物は出土していないが土層観察によって縄文時代の焼土遺構と思われる。

２　遺構外の出土遺物（図76）

農道１号の遺構外からは縄文土器0.02kg、土師器0.06kg、合計約0.1kgの土器類と石器、近代の遺物が出土した。そのうち縄文時代（５）と平安時代（３・４）の遺物を図示した。

縄文時代の石器と思われる削器１点を図示した。三角形の剥片側縁部１辺に刃部を形成しており、刃部の対角にある頂部を打ち欠き、鈍化させている。平安時代の遺物は、土師器の坏口縁部片（３）と甕底部片（４）を図示した。３はロクロ整形の坏で、４の底外面にはヘラケズリが施されている。

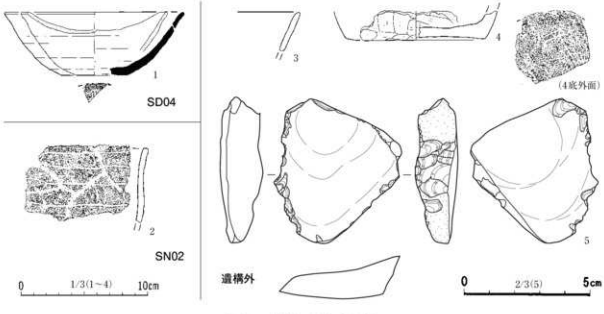


図76　農道１号出土遺物

３　遺物観察表

表16　農道１号出土土器類　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	部位	計測値（cm）			外面調整（文様）	内面調整（文様）	備考（底面調整、時期等）
							口径	底径	器高			
76	1	SD04	2層(火山灰土)	須恵器	坏	略完形	(14.2)	(5.2)	(5.0)	ロクロ	ロクロ	底面-ヘラナデ？ 刻書？
76	2	SN02	焼土層上面P1～3、覆土	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.9)	沈線	ナデ	後期・十腰内Ⅱ式
76	3	遺構外	I-20 風倒木	土師器	坏	口縁部	-	-	(3.0)	ロクロ	ロクロ	
76	4	遺構外	I-37 Ⅱ層	土師器	甕	底部	-	(11.0)	(2.3)	ヘラナデ	指ナデ	底面-ヘラケズリ。

表17　農道１号出土石器　観察表

図版番号	遺物番号	遺構名	出土位置・層位等	種類	器種	石質	計測（mm）			重さ（g）	備考
							長さ	幅	厚さ		
76	5	遺構外	I-13 Ⅰ層	石器	削器	頁岩	58	50	17	41.0	

第２節　農道25号

農道25号は、遺跡が所在する台地の頂部から南東側斜面上に位置する。道路関連工事予定地は、道路起点から終点まで全長189ｍであり、25－18・19グリッド付近で農道１号と直交する。今回は本調査の対象となった、農道部分25－14グリッドから25－35グリッドまでの長さ約100ｍ、幅約６ｍ、流末水路部分の25－35グリッド南から25－37グリッドまでの長さ8.8ｍ、幅約２～３ｍの、合計525㎡の調査を行った。調査前の標高は、北西端で35.7ｍ、農道１号との交差地点で35.2ｍ、中程の25－23グリッドで34.9ｍ、南東端の29.2ｍで、25－31グリッド付近で南東方向に急に傾斜している。農道１号以北の25－14から25－18グリッド付近は、耕作の影響による土地削平が著しく、SI01をはじめ、遺構の床面や底面部分がわずかに残存するような状況であった。また25－29から25－31グリッド付近も一部耕作土直下に第Ⅴ層が検出され、耕作による撹乱が窺われるものであった。一方、傾斜地である25－32グリッドから25－37グリッドの間は、第Ⅲ層が厚く堆積していた。

調査区内の土層については、隣接する農道１号の土層と同様のため、土層の詳細は県埋文報第490集図４に譲る。

農道25号で検出された遺構は竪穴住居跡５軒、土坑９基、溝跡２条、掘立柱建物跡１棟、ピット29基、性格不明遺構１基である。このうち、竪穴住居と掘立柱建物跡がセットと考えられる建物跡が１棟ある。この場合、検出遺構の構成は建物跡１棟、単独の竪穴住居跡４軒、土坑９基、溝跡２条、ピット25基、性格不明遺構１基である。これらは、多くが平安時代の遺構と思われ、遺構は25－15グリッド付近から25－30グリッドまでの、比較的平坦な箇所や緩斜面を中心に散在している。傾斜地である25－32グリッドから25－37グリッドの間は遺構検出を第Ⅲ層上層と第Ⅴ層上面で行ったが、遺構は検出できなかった。なお、整理段階で土層と写真から再検討した結果、SK07は自然土層、SK09は風倒木痕と判断したため欠番とした。

遺構内外からは、縄文・平安時代の土器類段ボール箱で５箱、縄文時代の石器十数点、平安時代・時期不明鉄製品10点が出土した。以下、検出した遺構種ごとに記述を行う。

１　検出遺構

(1) 建物跡・竪穴住居跡

掘立柱建物と竪穴住居がセットとなる建物跡は１棟（第４号建物跡）のみであり、他は単独の竪穴住居跡である。

第１号竪穴住居跡（SI01、図79）

[位置・確認] 調査区北寄り、25－16グリッドに位置し、標高は35.6ｍである。第Ⅴ層で確認したが、耕作による削平の影響で、床面は一部破壊されていた。SK03と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は方形である。壁長及び確認面から床面の深さは、北西壁は現存値で（1.9）ｍ・深さ９～12㎝、北東壁3.2ｍ・深さ６～13㎝、南東壁2.7ｍ・深さ12～16㎝を測る。いずれの壁も垂直に近い立ち上がりをみせるが、掘り込みが浅く、明瞭に判断できない箇所がある。住居の軸方向はN－45°－Wである。

[床面・壁溝] 確認されたところでは、床面は貼り床によって平坦に整えられている。壁溝は検出さ

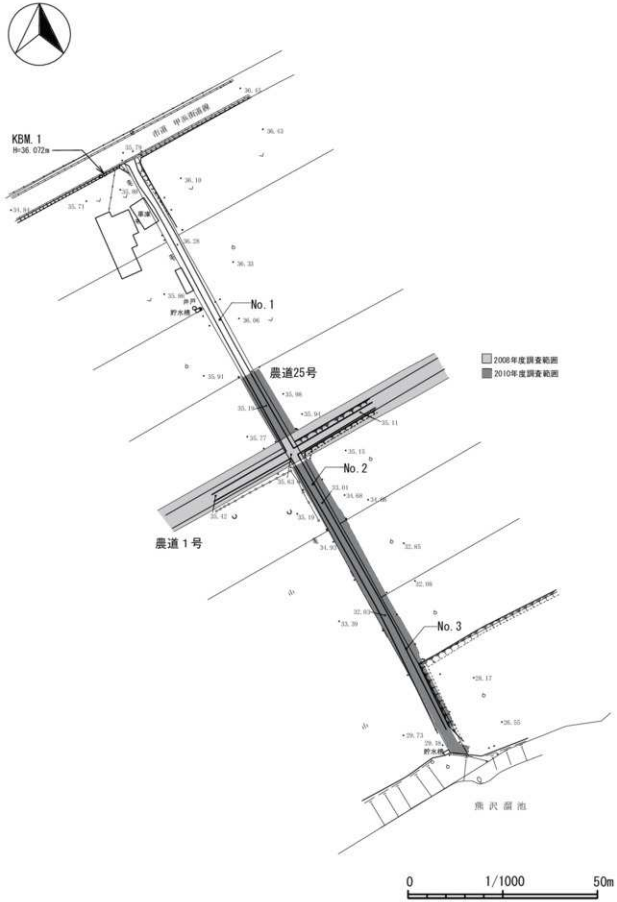


図77　農道25号地形図

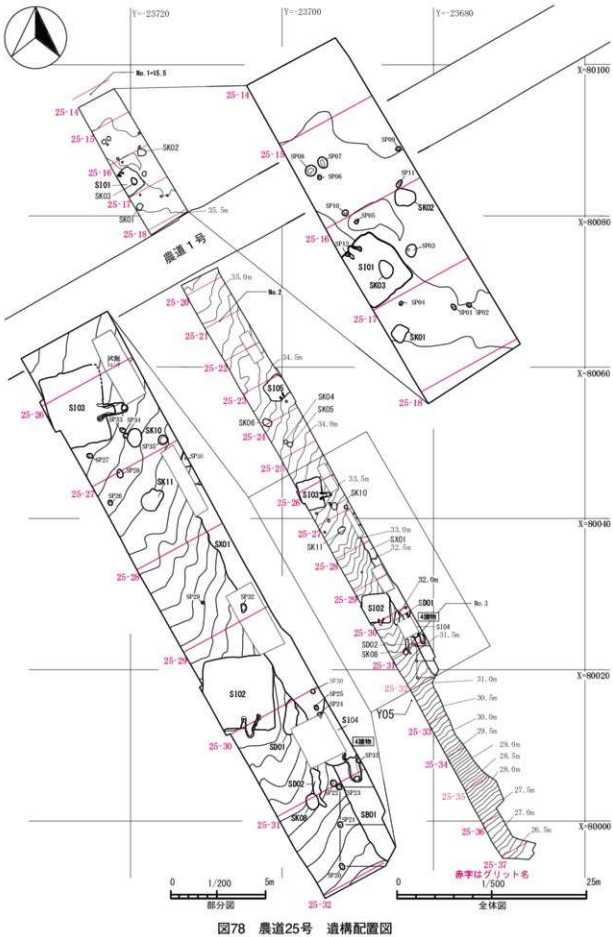
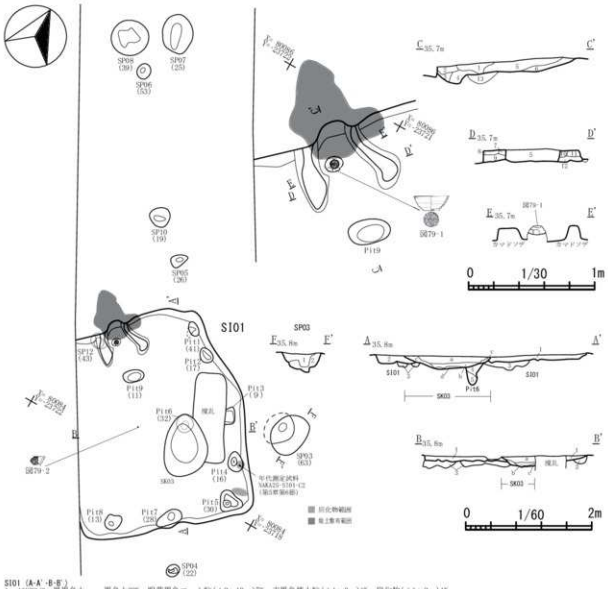


図78　農道25号　遺構配置図



SI01 (A-A'・B-B')

1	10YR2/3	黒褐色土
2	10YR3/4	暗褐色土
3	10YR5/6	黄褐色土
4	10YR5/6	黄褐色土
5	10YR2/2	黒褐色土

褐色土30%、明黄褐色ローム粒(φ2～10mm)7%、赤褐色焼土粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1～2mm)1%
褐色土30%、明黄褐色ローム粒(φ1～10mm)10%、明黄褐色ロームブロック(φ20mm)7%、炭化物(φ1～2mm)3%
崩り方、黒褐色土20%、明黄褐色ロームブロック(φ30～100mm)20%、浮石(φ5～20mm)3%、炭化物(φ1～3mm)1%、
P16覆土、にぶい褐色ロームブロック(φ30～50mm)20%、浮石(φ10～30mm)20%、黒褐色土10%、
P16覆土 褐色土10%、浮石(φ10～50mm)15%、

SK03 (A-A'・B'-B')

a	10YR3/3	暗褐色土
b	10YR3/4	暗褐色土
c	10YR5/8	黄褐色土
d	10YR5/6	黄褐色土

褐色土7%、明黄褐色ローム粒(φ1～5mm)7%、炭化物(φ1mm)3%、黄褐色浮石(φ1～5mm)1%、
黄褐色ローム粒(φ1～10mm)20%、炭化物(φ1mm)微量、
黄褐色浮石(φ1～2mm)3%、炭化物(φ2～5mm)1%、
浅黄褐色浮石(φ1mm)1%、

SI01カマド (C-C'・D-D')

1	7.5YR4/4	褐色土
2	10YR3/4	暗褐色土
3	10YR5/8	黄褐色土
4	10YR3/3	暗褐色土
5	7.5YR5/8	明褐色土
6	10YR5/6	黄褐色土
7	5YR3/6	赤褐焼土
8	10YR4/6	褐色土
9	10YR3/3	暗褐色土
10	10YR4/6	褐色土
11	10YR3/4	暗褐色土
12	10YR3/3	暗褐色土
13	10YR6/8	明黄褐色土

赤褐色焼土粒(φ1～5mm)7%、黄褐色ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1mm)1%、
褐色土20%、
明黄褐色土7%、
明黄褐色ローム粒(φ1～2mm)1%、
明黄褐色ローム粒(φ1～5mm)3%、
赤褐色焼土粒(φ1～5mm)20%、黄褐色ローム粒(φ1～5mm)10%、
黄褐色ローム粒(φ2mm)8%、
赤褐色焼土粒(φ1～3mm)3%、
明黄褐色土7%、暗褐色焼土粒(φ1mm以下)1%、炭化物(φ1mm)微量、
明黄褐色ローム粒(φ1mm)5%、
明黄褐色ローム粒(φ1mm)5%、被熱により一部赤褐色化、
明黄褐色ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1mm以下)1%、
明黄褐色ローム粒(φ1～3mm)5%、赤褐色焼土粒(φ1mm)1%、
褐色土20%、浅黄褐浮石(φ1mm)1%、

SP03 (F-F')

1	10YR5/3	黒褐色土
2	10YR5/6	黄褐色土

黒褐色土7%、明黄褐色ローム粒(φ1～3mm)5%、
明黄褐色ローム粒(φ2～5mm)3%、

SP04

1	10YR3/3	暗褐色土

明黄褐色土40%、明黄褐色ローム粒(φ1～2mm)1%、

SP05

1	10YR5/3	にぶい黄褐土

浮石(φ5mm～10mm)5%、

SP06

1	10YR5/2	黒褐色土

浮石(φ5mm)5%、

SP07

1	10YR5/1	黒褐色土

ロームブロック(φ10～15mm)10%、

SP08

1	10YR4/2	にぶい黄褐土

ロームブロック(φ15mm)5%、

SP10

1	10YR5/4	にぶい黄褐土

黒褐色土(φ5mm)微量、

SP12

1	10YR3/4	暗褐色土

ローム粒(φ1～5mm)5%、炭化物(φ1mm以下)1%、

図79　第1号竪穴住居跡と出土遺物

れなかった。

［柱穴］柱穴は９基検出され、Pit １・５・７が主柱穴、Pit ２・４・８が壁柱穴と考えられる。各Pitの規模は、Pit １が24×15㎝で深さ41㎝、Pit ２が26×19㎝で深さ17㎝、Pit ３が25×15㎝で深さ９㎝、Pit ４が32×24㎝で深さ16㎝、Pit ５が39×32㎝で深さ30㎝、Pit ６が30×27㎝で深さ32㎝、Pit ７が43×22㎝で深さ28㎝、Pit ８が29×25㎝で深さ13㎝、Pit ９が34×20㎝で深さ11㎝を測る。SP12はカマド下から検出されており、本遺構に伴う可能性がある。

［カマド］北西壁の中央付近に検出された。明確な火床面は確認できなかったが、燃焼部では土師器坏（図79－１）が倒立の状態で出土し、支脚に転用されていた。煙道は、耕作による破壊を受け確認できなかったが、焼土の分布を確認した。焚口部付近に検出されたPit ９は、土層や位置的にカマドに伴う遺構の可能性があるが、灰などは出土していない。

［堆積土］黒褐色土と、第Ⅴ層起源のロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。

［出土遺物］土師器が0.2kg出土し、土師器坏（１）・甕（２）を図示した。本遺構の全域が第Ⅰ層に大きく破壊されているため、遺物の出土量は比較的少ない。Pit ４堆積土から出土した炭化物NAKA25-SI01-C2は、放射性炭素年代測定を行っている（第５章第６節）。

［遺構の時期等］カマドの構築形態や出土遺物の属性から、平安時代の９世紀後半からB-Tm・To-a降下以前に廃絶し埋没したものと思われる。放射性炭素年代測定の結果は考古学的所見よりも古い年代が示されるが、理由として樹幹内部の試料を測定したことによる古木効果の可能性が考えられる。

北西壁方向に、SP05・SP10、やや離れてSP06・SP07・SP08が検出されている。これらのピットは掘立柱建物跡の一部を構成する可能性があるが、確証を得ることができなかった。

第２号竪穴住居跡（SI02、図80・81・82）

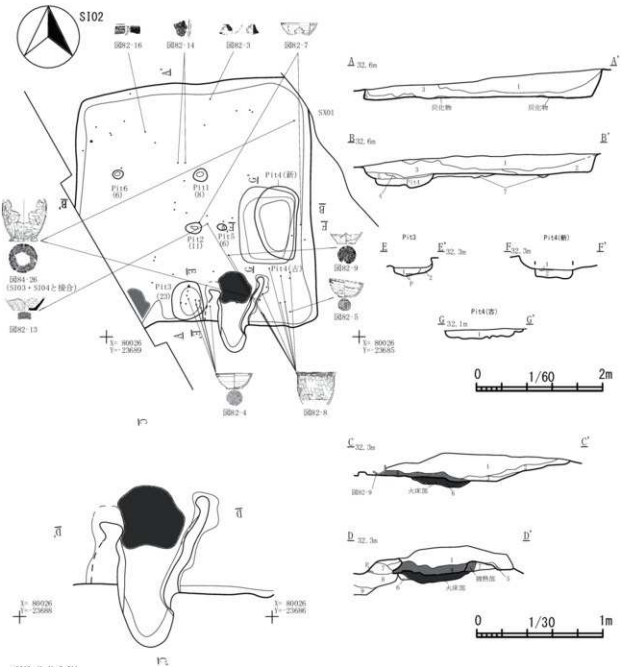
［位置・確認］調査区中央北寄り、25－29・30グリッドに位置し、標高は32.2～32.5ｍである。第Ⅴ層で確認した。SX01と重複し、本遺構が古い。

［平面形・規模］平面形は方形と推定される。壁長及び確認面から床面の深さは、現存部分で北壁（3.0）ｍ・深さ37～53㎝、東壁（3.3）ｍ・深さ15～20㎝、南壁（2.7）ｍ・深さ３～18㎝、西壁（1.6）ｍ・深さ38～47㎝を測る。いずれの壁も床からやや開いて立ち上がる。住居の軸方向はＮ－177°－Ｅである。

［床面・壁溝］床面は第Ⅴ層を掘り込み構築されており東側は一部貼り床を施している箇所もある。壁溝は検出されなかった。

［柱穴］柱穴は住居の中心付近に４基検出された。うち１基はカマド西側に隣接する。各Pitの規模は、Pit １が22×19㎝で深さ７㎝、Pit ２が25×15㎝で深さ11㎝、Pit ５が15×10㎝で深さ６㎝、Pit ６が17×14㎝で深さ６㎝を測る。いずれも小規模なものである。

［カマド］南壁の東寄りに検出された。煙道部や、住居南半の堆積土中に構築材の粘土が散在して検出され、本住居廃絶時に意図的に破壊されたことを窺わせるものである。56×56㎝の火床面が検出され、深さ７㎝まで被熱していた。煙道は住居外に約45㎝延び、煙出し部へ緩やかに立ち上がる。煙道の軸方向はＮ－179°－Ｅである。本住居跡の南西隅の床面が焼けており、調査区壁面にも焼土が検出されていることから、調査区外には、古い時期のカマドが存在していた可能性がある。



SI02 (A-A'-B-B')			
1	10YR3/3	暗褐色土	黒褐色土30%、褐色土20%、明黄褐色ローム粒(φ1～10mm)10%、明黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)5%、炭化物(φ1～2mm)3%、暗赤褐色焼土粒(φ1mm)1%、黄褐色浮石(φ1mm)1%。
2	10YR3/4	暗褐色土	明黄褐色ローム粒(φ1～2mm)7%、黒色土3%、にぶい黄褐色ローム粒(φ1～2mm)1%、炭化物(φ1mm)1%。
3	10YR5/8	黄褐色土	暗褐色土25%、明黄褐色ローム粒(φ1～8mm)20%、明黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)10%、黒褐色土3%。
4	10YR4/4	褐色土	にぶい褐色粘土(φ5～10mm)3%、炭化物(φ1～40mm)3%、褐灰色粘土(φ1～2mm)1%、灰白色浮石(φ1mm)1%。
5	10YR6/6	明黄褐色土	黒色土10%、明黄褐色ローム粒(φ1～3mm)5%、炭化物(φ1mm以下)1%。
6	10YR4/4	褐色土	黄褐色ローム粒(φ1～2mm)3%、黒褐色土1%、炭化物(φ1mm)1%。
7	10YR5/6	黄褐色土	にぶい褐色粘土ブロック(φ50mm)20%、赤褐色焼土粒(φ1mm)1%、灰白色浮石(φ1mm)1%、炭化物(φ1mm)1%。
			偏り方、にぶい黄褐色粘土ブロック(φ10～30mm)10%、炭化物(φ1～3mm)5%。
SI02カマド (C-C'-D-D')			
1	10YR4/4	褐色土	浮石(φ1～10mm)5%、炭化物(φ1～3mm)3%。
2	5YR4/8	赤褐色土	ローム粒(φ1～2mm)5%、炭化物(φ1mm以下)1%。
3	7.5YR4/6	褐色土	明黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)10%、炭化物(φ5～10mm)5%、明赤褐色焼土粒(φ1～10mm)3%。
4	5YR4/6	赤褐色土	褐色土30%、炭化物(φ5～10mm)3%、浮石(φ1～5mm)3%、小礫(φ1mm以下)1%。
5	10YR2/1	黒色土	炭化物40%。
6	5YR4/8	赤褐色土	明赤褐色土20%(6層土部中央)、粘土ブロック(φ10～30mm)3%。
7	10YR6/6	明黄褐色土	浮石(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1mm以下)1%。
8	10YR5/6	黄褐色土	しまりあり。
9	10YR3/4	暗褐色土	黄褐色ロームブロック(φ20～30mm)10%、炭化物(φ1mm以下)1%。
Pit3 (E-E')			
1	10YR4/6	褐色土	炭化物(φ1～2mm)3%、ローム粒(φ1～2mm)3%、浮石(φ1mm以下)1%、しまりあり。
2	10YR5/6	黄褐色土	褐色土15%、ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～3mm)3%、しまりあり。
Pit4(新) (F-F')			
1	10YR5/6	黄褐色土	暗褐色土10%、炭化物(φ1～2mm)3%、しまりあり。
2	10YR3/4	暗褐色土	明黄褐色ロームブロック(φ10～50mm)10%、黄褐色ロームブロック5%、ローム粒(φ1～2mm)3%、炭化物(φ1～2mm)3%、浮石(φ1mm以下)1%、しまりあり。
Pit4(古) (G-G')			
1	10YR3/4	暗褐色土	黄褐色ローム粒(φ1～5mm)15%、黄褐色ロームブロック(φ10～20mm)10%、炭化物(φ1～5mm)3%、褐灰色粘土ブロック(φ20mm)2%、褐色焼土粒(φ1mm)1%。

図80　第2号竪穴住居跡（1）